
魔法少女リリカルなのは一戦士の魂を受け継ぐ者一

紅の牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはー戦士の魂を受け継ぐ者ー

【Nコード】

N7684U

【作者名】

紅の牙

【あらすじ】

戦隊の力を得た主人公はリリカルなのはの世界で何をするのか？
今新たな風が吹く！因みハーレムです。

プロローグ

「ここどこだ？」

俺は不思議な空間にいた

「・・・確か俺は映画館に行こうとして家を出たとき、車に引かれそうになった女の子を庇って・・・ダメだ思い出せない。」

「あゝ。」

俺が記憶を思い出しているとき、後ろから声が聞こえた

「はい？」

俺が後ろを向くと純白の服を着た女性がいた

「どちら様でしょうか？」

俺が聞くと

「申し訳ありません！」

いきなり謝れた

「???? 何でいきなり謝るんですか？」

「実はあなたはまだ死ぬ予定ではなかったんですよ。本来なら病

院で意識を取り戻し今まで通り生活する予定だったのですか。」

「ですが？」

俺が質問すると

「神様が間違っただけであなただけの名前にお茶をこぼしてしまい・・・」

「死んでしまったと？」

「・・・はい。」

「・・・マジかよ」

俺は啞然としていた

「とりあえず私についてきてください。神様の部屋までご案内します。」

「はあ。」

俺は礼儀正しい女性の後についていき、ある部屋に着いた

「失礼します。神様彼をつれてきま・・・」

最後まで言おうとしたところで女性の言葉が途切れた。俺は不思議に思い部屋をのぞくと

『ケリをつけるぞ!!』

神様がとんでもない大きさのテレビでゴーカイジャーの映画を見
ていた

「何をしているんですか!!」

女性が神様に近づきドロップキックを繰り出した

「のおおおお」

神様を吹き飛び壁に激突した

「……」

俺は何も言わず映画を見ていた

「仕事中なのに何で映画を見ているんですか!!」

「そのーつい」

「つい、ではありません。」

遠くで何か言っているが、俺は気にしないで映画を見ていた。そ
して

「……神様」

俺は神様に話しかけた

「ん? なんじゃ?」

「これ、最初から見れる？」

「もちろん見れるぞ。」

「じゃあ、最初から見てもいい？話はその後で。」

俺は目をキラキラさせながら言った

「・・・そうじゃな。わしも最初から見たい気分じゃからな。」

俺と神様は最初からゴーカイジャーの映画を観賞した。なぜか俺をここまで連れてきた女性はあきれていた。なんでだろう？

　それから数時間後

「いやゝ、燃えたねゝ。」

「そうじゃのゝ。」

俺と神様は上機嫌でお茶を飲んでいる

「・・・さて話をしますか。」

「・・・すまんのおゝ、わしのミスでお主を死なせてしまつて。」

神様が俺に頭を下げた

「別に気にしてないよ。」

俺は至って普通に言った

「お詫びとしてお主を転生させようと思う。」

「転生って、あの転生？」

「うむりリカルなのはの世界にの。今回のことはわしのミスで起こしたものじゃからの。お主に好きな力を授けよう」

「いいの？」

「うむ。」

俺は少し考えると

「じゃあ、身体能力MAX、変換資質は炎熱、電気、疾風、凍結、水に魔力は最初はS+で成長するたびに上がって行く感じで。」

「ふむふむ。」

「あとアンサートーカー、超直感、デバイスは自分で作りたいからその材料、あとネギまに出てくるダイオラ魔法球中の環境はどんだけ居ても年を取らない設定、後これ重要！スーパー戦隊の武器と技全部！！」

「お主、戦隊者が好きなのか？」

「大好きだね、仮面ライダーと同じくらい。」

「まあいいじゃろう。二回目の人生楽しんでくると言い。達者での。おおそうじゃ！お主が次に目を覚ました時は赤ん坊じゃからの」

「あいよ。・・・って！？赤ん坊！？聞いて・・・」

最後まで言う前に俺は意識をなくした

第1話 デバイス完成＋修行開始

翔 side

転生してから5年後、俺は椎名^{しいな} 翔^{しょう}と言う名を両親からもらった。びっくりしたのが、両親のがハリケンジャーの椎名 鷹介と椎名（旧名野乃） 七海でしかも結婚していること。っえ？何でこの5年間の事を話さないかって？黒歴史を話す勇氣は俺には無い。

鷹..「それじゃあ翔。父さんと母さんは仕事に行ってくるな。」

翔..「うん。お土産よろしくね。」

七..「任せといて。」

父さんと母さんは昔、管理局で働いていたらしいが、俺が生まれたと同時に管理局を辞め、生まれ故郷である海鳴市に戻ってきたのである。因みに両親の仕事は父さんが派遣会社で、母さんが翠屋で働いている。そしてたまに二人で重要人物に護衛もしている。まあ管理局時代に使っていたデバイスを使っているので問題ない。それに強いしね

翔..「さて、別荘にでも行くか。」

俺は部屋に戻り神様からもらったダイオラマ魔法球に入った。因みに俺は二人に嘘はつきたくないなので自分の事を話したら。「そんなの関係ない、前世の記憶を持っていたとしてもお前は俺達の息子だ」と言われ、俺は涙を流した。

翔…「今日こそはデバイスを完成させるぞ!!」

俺は別荘の地下にある研究室に入りデバイスの開発に取り掛かった

（それから2時間後）

翔…「・・・あとは戦隊シリーズの武器をインストールしてつと・・・できたー。」

俺は大きく背伸びをした

翔…「さて、設定をするかね。」

俺は立ち上がり認証を始めた。すると俺の足元にベルカ式の魔法陣が展開された

翔…「マスター認証 椎名 翔。術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリット。正式名称はゼロ!」

ゼロ…「設定を完了しました。・・・お前が俺の主なんだな。」

翔…「ああ。宜しく頼むな相棒」

ゼロ…「こっちこそな。」

俺は待機状態のゼロを手を取った

翔..「行くぜ、ゼロ セットアップ!」

ゼロ..「Stand by Ready Set up」

俺はティアナの男版のバリアジャケットを纏い、両手にグローブを装備している。左手にダイノブレスを装備し、そして両足の腿にディーマグナムが入ったホルスターが装備されている

翔..「よし、イメージ通りだな。」

ゼロ..「こっちにも異常はない。」

翔..「うし。じゃあ訓練でも始めるか。ゴール・ルジュナ!!」

俺は草原エリアに瞬間移動した

翔..「やっぱりマジレンジャーの魔法は便利だよな。」

俺は感想を言った

翔..「さて、まずは5体からかな。」

俺はキーボードを打ち5体のゾビルを出した

翔..「まずは体術から始めるか。行くぜ!!」

俺は5体のゾビルに突っ込んだ

翔..「はあっ!」

1体のゾビルにとび蹴りを喰らわせ吹き飛ばすと、右手に魔力を纏わせた

翔..「ライティングフィスト!!」

そして近くに居た2体のゾルビに高速の連続パンチを喰らわせ倒した

翔..「おらあっ!」

更に後ろから攻撃しようとしてきた1体に回し蹴りを喰らわせ吹き飛ばし

翔..「輪輪拳!!」

魔力を右拳に纏わせアッパーカットをし車輪上の魔力刃を飛ばし両断した

翔..「次!」

俺は体を横回転しながら1体のゾルビに近づき

翔..「狼狼蹴!!」

回し蹴りを延髄に放ち倒した

翔..「これで、ラストだ!!」

俺は右手に魔力を纏わせた

翔..「厳厳拳!!」

右ストレートを繰り出すと、中くらいの魔力弾が拳から放たれ最初に吹き飛ばしたゾルビに当たり、爆発を起こした

翔..「うし。」

俺はガッツポーズをすると、10分間休み、また新たに5体のゾルビを出した

翔..「今度は銃で行くか!」

俺はホルスターから銃を拔出し構えた

翔..「一気に行くぜ!!」

俺はジャンプし前宇宙返りをしながらディーマグナムから無数の魔力弾を放った。5体のうち4体はそれを避けたが残りの1体に当たり集中砲火で倒した

俺が着地すると4体が俺に襲い掛かってきたが、俺は銃でその攻撃をブロックしたり、回し蹴りで対処した

翔..「はあっ!!」

俺は左手に持っている02から20発の魔力弾を放ち倒すと。右手に持っている01から小型の魔力砲を放ち倒した

翔..「そろそろ決めるぜ!」

俺は二丁のディーマグナムを連結させハイブリットマグナムにした。そして、残りの2体に向けた

翔..「マグナムエクスキュージョン!!」

引き金を引きハイブリットマグナムの銃口から紅い砲撃を放ち、倒した

俺は銃の連結を解き銃を回転させながら両足のホルスターにしまった

翔..「今日はこのぐらいにしとくか。」

その後、俺は別荘にある部屋で休み翌日、別荘からでた

翔..「さて、これからどうしようかな。」

時刻は午後5時、

翔..「夕飯は母さんが用意してくれたから。それをチンして食べればいいだろう。」

すると、ベルが鳴った

翔..「ん? 誰だろう、こんな時間に?」

俺は玄関に行きドアを開けた。そこにはなのはがいた

翔..「なのはちゃん? どうしたのこんな時間に?」

な..「泊まりに来たの。」

俺は苦笑いをした

翔..「泊まり来たって・・・。何で？」

な..「今日は翔君のお父さんとお母さんが仕事で帰ってこないってお母さんから聞いたの・・・」

翔..「・・・それで来たと？」

な..「うん。」

俺は少し悩んだが

翔..「いいよ。桃子さんから許可は貰ってるの？」

な..「うん。」

翔..「じゃあいよいよ。でも明日の朝には帰るんだよ。」

な..「解ったの。」

その後、なのはちゃんと遊んだ俺は一緒に夕飯を食べ、風呂に入ると寝た。翌日、恭弥さんが俺の家に来、俺を殺そうとしたのはお約束である。まあ返り討ちにしたけどね

第1話 デバイス完成＋修行開始（後書き）

第1話でした。次回は翔の設定を書きます。それにしても獣拳って反則に近いと思うのは俺だけでしょうか？

設定

名前 椎名しいな 翔しょう

容姿 魔法戦隊マジレンジャーの魁

魔力量 S+（今後も増える）

魔力光 紅

変換資質 炎熱 電気 疾風 凍結 水（正遺伝のためか炎熱の方が強い）

レアスキル アンサートーカー 超直感

バリアジャケット ティアナのバリアジャケットの男版、ズボンは長ズボン（色は黒）、両手にはグローブ（ハリケンジャーが使うもの）を装備しており、左手には起動したゼロが装備しており、両足の腿にはデューマグナムが入ったホルスターを装備している

デバイス

名前 ゼロ

性格 ボウケンジャーの明石みたいな性格

待機状態 龍の翼をもしたネックス

起動状態 ダイノブレス（顔はティラノ）

特殊機能 全戦隊ものの武器を入れており、翔の指示でそれを出すことができる

設定（後書き）

紅.. 「翔の設定でした」

翔.. 「俺はチートなのか？」

紅.. 「さあ？どうなんだろう。次回から無印編に入ります。」

翔.. 「派手に行くぜ！」

第2話無印編 「伝説の始まり」

翔 side

俺がゼロを完成させてから4年後。俺は小学3年になり、私立聖祥大附属小学校に通っている

鷹..「翔、そろそろ行かないと遅刻するぞ。」

俺は父さんに言われ時計を見るとA M 7..45と表示されていた

翔..「そうだね。じゃあ父さん、母さん行ってきます。」

鷹・七..「行ってらっしゃい。」

俺は家を出てなのはの家に向かった。家が隣なのでいつも一緒に通っている

翔..「おはようございます。なのはく行くぞ。」

俺は高町家のドアを開け叫んだ、すると

な..「おはよう翔君。」

なのはが走って玄関まで来た

翔..「おはよう。じゃあ行こうぜ。」

な..「うん。」

俺達と一緒にバス停に向かった。バス停に着き数分間待つとバスがきたので乗ると

「なのは、翔こっちよ。」

バスの後ろの席に座っている金髪少女アリサ・バニングスが声をかけた

な..「アリサちゃん、すずかちゃん、おはよう。」

す..「おはよう。なのはちゃん、翔君。」

アリサの隣に座っている濃い青髪少女月村すずかが俺達に挨拶した

翔..「うす。」

俺は右手を掲げて返事をした

す..「相変わらず二人は仲良しだね。」

翔..「幼馴染だからな。」

俺がそう言うバスに乗っている男子が殺気を放ち、俺を睨んだが

翔..「あっ?」

俺はそれ以上に殺気を放ち一瞬で黙らせた

ア..「相変わらずねアンタは。」

翔..「どういう意味だよ?」

そして普段通り話をしながら学校に向かった

く昼休みく

俺達が屋上で昼食を食べていると

な..「将来の夢かく」

先生の授業での思い出していた

な..「アリサちゃんとすずがちゃんは大体決まってるんだよね?」

ア..「私はいっぱい勉強してお父さんとお母さんの会社を受け付け次ぐつもりよ。」

す..「私は機械・・・工学系の専門職かな?お姉ちゃんと同じで。」

な..「二人とも凄いねく。」

なのはが感心していた

ア..「翔、アンタはどうなの?」

アリサが俺に聞いてきた

翔..「俺？俺は・・・トレジャーハンターかな。」

俺が言うと全員が驚いた

す..「どうして？」

翔..「どうしてって、冒険は男ロマンだぜ。俺は誰も行ったことの無い場所に行ってみたいんだよ。まあ宝探しはそのついでだけだな。」

ア..「あんたがロマンを語るなんてね。」

翔..「語っちゃ悪いのかよ。でも、どうするかはもう少ししてから考えるさ。俺達にはまだ時間があるんだからな。」

す..「そう言うのはちゃんは？」

な..「私は・・・／／／」

なのはが俺の方を見て赤くなった。何で？

その後、学校でも授業が終わり、俺は家に帰った。何でなのと一緒に帰らないかって？今日あいつは塾があるんだとさ。俺は言っていないけど。勉強なんてアンサートーカーの力で即答だもん

夕飯後、俺はリビングで何かを考えていた

翔..「なんか忘れているような。」

その時

『助けて』

念話が俺の頭に届いた

翔..「・・・ああゝゝ！今日はなのはがレイジングハートを手に入れる日じゃねえか！！」

俺は家を出て行こうとすると

鷹..「翔。」

父さんと母さんに止められた

翔..「父さん達も今の念話聞こえたんだろう？」

七..「ええ。」

洋..「行くのか？」

翔..「ああ。大丈夫だって。何せ」

俺は父さんと母さんの顔を見た

翔..「俺は父さんと母さんの息子だぜ。」

そう言う俺は家を出て、魔力の反応がする方に走った

翔 side end

なのは side

私は今、動物病院に向かって走っています。なぜなら、誰かが私に助けを求めているからです。きっと、あのフェレットは今朝の私夢に関係があると思ったからです。

な..「待ってて今すぐに行くからね。」

動物病院周辺

な..「多分...この辺だと思うの..」

病院について辺りを見回していると、何かが壊れる音がした

な..「!?!?何今の音!?!」

「うう・うう・・・」

な..「フェレットさん!?!」

「え? あ、本当に来てくれた!」

な..「うん、助けに来たの。」

「お願いします！力を貸してください！僕一人だけの力ではどうする事もできないんです。」

な..「うん。」

「ありがとうございます。僕の声が聞こえているのなら、間違いなくあなたには魔法の才能があります。」

な..「魔法!？」

「はい！その力でアレの封印の手助けをしてください。」

な..「アレ？」

そう言うとは私はフレットさんの指差す方向をみた。するとそこには巨大なお化けが、こっちを見ていた

な..「にゃー!!何アレ!？」

ガァ!!

「危ないよけて!!」

な..「え?・・・きゅあ!？」

お化けの体から触手のようなものが出てきた。そして、その触手に当たった所が、

な..「つつ...つらぬけてるの。」

「早く逃げて。」

私はフェレットさんを抱きかかえて、全速力で走り出しました。

な..「教えて!どうやったら魔法をつかえるの!?!」

「起動するには、一度呪文を唱えないといけないんです!でもこの状況じゃそんな余裕もないですし...」

な..「そんな!?!..きゃあ!?!」

私は石につまずいて転んでしまいました。

「大丈夫ですか!?!」

な..「なんとか...!?!」

気がついたら、あのお化けが直ぐ後ろに来ていました。私は怖くて動けませんでした。

「危ない!?!」

お化けが私に攻撃をしてき、私は目をつぶって「(もうだめだ)」と思いました。すると、紅い光がお化けに当たり、お化けがひるんだ。

私は光が飛んできた方向に向くと、誰かがゆっくりと歩いてきた

翔..「つたく、無茶品がつて。」

そこには右手に銃を握った翔君がいた

なのは side end

翔 side

ゼロ..「翔、急いだ方がいいぞ。」

翔..「そうだな、幸い誰もいなそうだし。」

俺は走りながら辺りを見、そして

翔..「ゼロ。セットアップ！」

ゼロ..「Set up」

俺はバリアジャケットを展開し、今以上のスピードで現場に向かった。現場に着くと、原作通りの化け物がなのはに攻撃しようとしていた

翔..「っち」

俺は右のホルスターからディーマグナム01を抜き、魔力弾を撃った。魔力弾が当たり化け物がひるんでいるとなのはがこっちの方を向いた

「たたく、無茶しやがって。」

俺はなのはに近づき、デコピンをした

「~~~~っ！！翔君、痛いのだ。」

なのはが涙目で俺に言った

「痛くしたんだ当たり前だろう。」

俺達がいとも通りに話していると

「があああああ」

化け物が俺達に襲いかかってきた

翔「……プロテクション！」

俺は左手を前に出し防御魔法を展開させ防ぐと

「話の邪魔をすんな！！」

右手に持っている銃のトリガーを引き少し大きめの魔力弾を撃ち、吹き飛ばした

「あ、あなたも魔道士なんですか!？」

なのはに抱えられているフェレットが俺に話しかけた

翔…「一応な。それよりどうすればあいつを倒せるんだ？」

俺は化け物に指をさしながら聞いた

「は、はい。これを使って封印すれば」

フェレットは首に掛けている紅い宝石を俺達に見せた

翔…「俺があいつを押さえておくから、その間にそいつを起動させろいいな。」

そう言う俺は化け物に向かっていった

「があああああ」

化け物は体から触手を伸ばして俺を攻撃してきたが

翔…「当たるかよ。」

俺はそれを避けながら近づき、左のホルスターからディーマグナム02を抜き、化け物に当てた

翔…「全弾持って行け！！」

俺はゼロ距離から20発の魔力弾を撃ち出し、攻撃した

「ぎゃあああああ」

ゼロ距離なので化け物は避けることが出来ず、攻撃をもろに受けひるんだ。俺はディーマグナム01を右のホルスターに戻し、そして

翔…「激技 厳厳拳！」

「魔力を纏った右正拳を放った

「がああああああ」

化け物は壁に吹き飛び埋もれた

その時、なのはのいる所から桜色の光がはしり、ピンク色のリボンが埋もれている化け物に絡みついた

な…「リリカル・マジカル！ジュエルシールド封印！！」

そして化け物が消滅し、青い宝石が残った

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

なのはが持っている杖で宝石に触りと

レ…「receipt number XXI」

宝石がなのはの持っている杖に入った

翔…「ふう、終わったか。」

「あ、あの。」

翔..「うん？」

フェレットが俺に何かを言おうとしていた

「助けていただきありがとうございます。」

翔..「気にするな。それよりここから離れるぞ。時期にパトカーが来るからな。」

そう言う俺は走り出した

な..「じゃあ！？翔君待ってよ！！」

なのは慌てて俺の後を追ってきたが

な..「あう」

こけてしまった

翔..「ったく、しょうがねえな。」

俺はなのはを抱っこしてその場を後にした。なのはが顔を赤くしていたが無視した

第2話無印編 「伝説の始まり」 (後書き)

紅.. 「第2話でした。」

翔.. 「ついに始まったな。」

紅.. 「まあ頑張れよ。」

翔.. 「おう。」

紅.. 「次回はユーノからの説明です。」

翔.. 「派手に行くぜ!!」

第3話 無印編 「説明」

翔 side

翔..「こちら辺でいいだろう。」

俺は抱いていたなのはを地面に降ろした

な..「.....／／／」

なのはの顔は真っ赤で頭から煙が出ているように見えた

翔..「起きろ!!」

俺はさっきと同じぐらいの強さでデコピンをした

な..「~~~~!!翔君痛いの!!」

翔..「だったらさっさと返事をしろ。」

なのはが俺に文句を言ってきたが、俺は無視した

な..「もう少し優しく起こしてほしいの。」

翔..「たとえば?」

な..「その、キスをして起こすとか／＼／」

なのはが顔を赤くしていった

翔..「却下!」

な..「なんで!？」

翔..「そう言うのは付き合ってるやつがやるもんだ。恭弥さんと忍さん見たいにな。」

俺はそう言いながらなのはの頭を撫でた

翔..「取りあえずこれで我慢しろ。無事で良かったよ。」

俺は笑いながら頭を撫でた

翔..「さて、話を聞こうか？」

俺はフェレットの方を向いた

「は、はい!まず僕の名前はユーノ、ユーノ・スクライアといいます。実は.....」

ユーノ説明中（原作道理）

ユ..「.....っと言うわけです。」

翔..「そうか。・・・なのは。」

な..「何、翔君？」

翔..「お前の事だ、どうせ手伝うつもりなんだろう？」

な..「う、うん。」

なのはが頷いた

翔..「お前に何かあったら、俺が恭弥さんに殺されるからな。手伝うよ。ただし無茶はするなよ」

な..「うん。」

ユ..「二人ともありがとうございます。」

翌日から俺達のジュエルシード探しが始まった

第3話 無印編 「説明」 (後書き)

紅.. 「第3話でした。」

翔.. 「今回はやけに短いな。」

紅.. 「説明だけだからな。」

翔.. 「次回は？」

紅.. 「夕日の誓いだ。」

翔.. 「それじゃ、次回も派手に行くぜ！」

第4話 無印編 「戦う意味」

翔 side

俺となのはがジュエルシード回収作業を開始して早1週間、ジュエルシードは順調に集まっている。その日の日曜日、俺はなのはの親父さん、士郎さんが監督を務めるサッカーチーム「翠屋FC」の試合を見に来ている

ア..「それにしても、翔が来るなんて珍しいわね。」

アリサが言った

翔..「そうか？」

す..「うん。私達がどんなに誘ってもいつも『用事があるからパス』だもん。」

翔..「そう言えばそうだな」（いつも別荘で修行しているからな）

な..「皆、そろそろ始まるよ。」

笛が鳴り試合が始まった。前半相手チームが果敢に攻めてき士郎さんのチームは防戦一方である。そして前半が終わり0-0で引き分けだ。その時士郎さんが俺達の所に来た

士..「翔君、試合に出てくれないか？」

翔..「俺がですか？」

士..「ああ、メンバーの一人が足を挫いてしまつて後半の試合は出れそうにないんだ。」

翔..「.....いいですよ。」

俺は了承して服を着替えた

翔..「士郎さん、俺のポジションは？」

士..「FWだ」

翔..「そんじゃあ行きますか。」

そして相手ボールで後編が始まつた

翔..「おら。」

俺は一瞬でボールを奪うと、ドリブルで相手ゴールに突っ込んだ。
相手チームは俺を止めようと追いかけてきたが

翔..「遅いんだよ。」

俺のスピードに追い付けずどんどん離されていった。俺はペナル
ティエリアまでドリブルで上がり強烈なシュートを放った

相手キーパーは一步も動けずボールがネットに突き刺さった

「ゴール!!」

その後、俺のゴールで活気が着いた『翠屋FC』は4-0で勝利を収めた。俺はハットトリックを決めた。因みに最後の一撃は稲妻イレブンの爆熱スクリューである。炎が出たからびっくりしたよ

現在は士郎さんが経営する「翠屋」で祝杯を挙げている

ア..「でも、改めて見るとユーノって本当にフェレットなのかしら?」

す「そうだね、先生も見たことがない種類だって言ってたし。」

な..「えーと、ユーノ君はフェレットの亜種なの。」

なのはが苦し紛れにとんでもないことを言った

翔..「(フェレットに亜種何ているのか?)」

ユ..「(さあ?)」

俺とユーノは念話で話した

翔..「俺はもう帰るぞ。」

な..「もう行っちゃうの?」

俺が席を立つとなのはが声を上げた

翔..「やることあるんでな。」

俺は翠屋を出て家に向かった。その途中

「うゝゝ」

翔..「うん？」

車いすに乗った女の子がいた

「あかん。完全に嵌まってもうた。」

翔..「どうしたんだ？」

俺はその女の子に声をかけた

「え？えゝとタイヤが溝に嵌まってしもうたんですよ。」

翔..「はあゝ、ちょっと待ってろ。」

俺は荷物を置き溝に嵌まってるタイヤを抜いた

翔..「これでもう大丈夫だろう。」

「あ、ありがとうございます。」

女の子が俺にお辞儀をした

翔..「気にするな。困ったときはお互い様さ。」

俺は荷物を取り家に帰ろうとした

「あ、あの。うち八神はやていいいます。名前を覚えてもらえますか？」

翔..「翔、椎名 翔だ。じゃあなはやて。」

そう言う俺は家に向かった

家に着き、別荘に行こうとしたときユーノから念話があった

ユ..「（翔、直ぐに街にきて。ジュエルシールドが発動したんだ。）

」

翔..「（解った）」

俺は家を出て、ゼロを起動させた

翔..「ゼロ、セットアップ！」

ゼロ..『S e t u p』

俺はバリアジャケットを展開させると

翔..「ゴール・ルジュナ！」

俺は街に瞬間移動した

翔..「なのは、ユーノ」

俺が街に着くとなのはとユーノがいた

な..「翔君!」

ユ..「随分早いね。まだ1分も経ってないよ。」

翔..「瞬間移動魔法を使ったからな。」

俺が辺りを見ると、巨大な木が街を覆っていた

翔..「滅茶苦茶だなーおい。」

ユ..「多分、ジュエルシードが人の願いを吸収したんだと思う。」

翔..「人間の欲望ってのは怖いな。」

俺が感想を言っていると、なのはの様子が少しおかしかった

翔..「どうしたんだなのは?」

な..「翔君、ユーノ君ごめんね。こうなったのは私のせいなの。」

なのはが俺とユーノに謝った

な..「私気が付いていたの、翠屋にいた男の子がジュエルシードを持っていたのを。でも気のせいだと思って。」

ユ..「なのは・・・」

翔..「N o b o d y s P e r f e c t」

な・ユ..「え？」

俺はある言葉を言った

翔..「誰も完全じゃない。誰だってミスはする。だが大事なのは
そのま立ち止まるか。それとも前に歩き出すかだ。なのはお前はど
うする？」

俺はなのはに聞いた

な..「・・・私は前に進む。」

翔..「それでこそなのはだ。」

俺はなのはの頭を撫でた

な..「でもどうすればいいんだろう？」

ユ..「うん、封印するにはまず接近しないとだめだ。その前に元
となってる場所を探さない。でも、こんなにも広範囲に広がっ
ちやうとどうやって探せばいいか。」

すると、木の根が襲い掛かってきた

翔..「俺がこいつらの相手をしている間に、なのはは場所を特定
しろいいな。」

な..「うん。」

翔..「さてと。ゼロ、シンケンマルセット！」

ゼロ..『了解、シンケンマルセット！』

俺の腰にシンケンジャーが装備しているベルトと刀がセットされた。俺はベルトの中央を開き黒いディスクを取り出すと左腰にある刀に入れ、刀を抜き、肩に担ぐように構えた

翔..「椎名 翔、参る！」

俺はシンケンマルを振るい木の根を切り裂いた。更に後ろからも襲い掛かってきたが

翔..「しゃらくせー！」

俺は下段の構えから袈裟斬りを繰り出し切り裂いた

翔..「相手が木なら此奴の出番だ！」

俺はベルトの中央から紅いディスクを取り出しシンケンマルに入れた。すると刀に炎が灯った

翔..「火炎の舞！！！」

俺は炎の斬撃を飛ばし、木の根を全て燃やした

ユ..「す、すごい。何て熱量なんだ」

な..「よし、私も。行くよ、レイジングハート。」

レ..『はい、マスター』

な..「リリカル・マジカル探して根源を！」

レ..『エリア・サーチ』

レイジングハートから桜色の球体が現れ、辺りを回った

な..「見つけた！」

レ..『カノン・モード!!』

レイジングハートが砲撃形態に変わった

ユ..「無茶だよなのは！近づかなきゃ封印できないよ!!」

翔..「やれるのか、なのは？」

俺はなのはに聞いた

な..「勿論。レイジングハート!!」

レ..『ディバインバスター!』

な..「ディバインバスター!!」

レイジングハートから桜色の魔力砲が放たれ、ジュエルシードに

当たった

な..「ジュエルシード シリアル? 封印」

レ..『シーリング!!』

ジュエルシードが封印され、巨大な木は消えた

翔..「これで一件落着だな。」

俺はシンケンマルを肩に担ぎながら言った

な..「・・・翔君、私決めた。」

翔..「何を？」

俺は聞いた

な..「私、今まではただ何となくでジュエルシードを集めてきたけど、これからは誰にも傷ついて欲しくないから自分の意思でジュエルシードを集めるって!」

翔..「そうか。頑張れよ。」

俺はなのはの頭を撫でた

な..「うん。」

なのはは笑顔で答えた。そして俺達は家に戻った

第4話 無印編 「戦う意味」 (後書き)

紅.. 「第4話でした。」

翔.. 「今日の武器はシンケンマルか。それにしても火炎の舞の威力高すぎないか？」

紅.. 「ディスクの力+お前の炎熱の変換で上がっているんだよ。」

翔.. 「成程な。」

紅.. 「次回はフェイトとのあいです。」

翔.. 「次回も派手に行くぜ!!」

第5話 無印編「もう一人の魔導師」

翔 side

なのはの決意から3日後、俺が筋トレをしていると玄関のベルが鳴った

翔..「誰だろう。」

俺は玄関に行き、ドアを開けるとなのはと恭弥さんがいた

翔..「なのはに恭弥さん。どうしたんですか？」

な..「これからすずかちゃんのお家に行くんだけど翔君もどうかな〜と思って。」

翔..「う〜ん」

俺が考えていると、殺気を感じた

恭..「.....」

恭弥さんが無言で殺気を放っているのである

翔..「いいぜ俺も行く。・・・それと恭弥さん、その殺気やめてもらえませんか？近所迷惑です。・・・まあ全然怖くないけど。」

俺がそう言うのと恭弥さんは殺気を収めた。その後、俺の準備が終わりすすかの家に向かった。因みに俺の服装は映画デジモンセイバーズ マサルの服装である

月村邸前

翔..「でかい家だよな（まあ、俺の別荘よりは小さいけど）」

な..「にゃははは」

そう言いながら門くぐり玄関の前に行くと一人のメイドさんがいた

「恭弥様、なのは様本日はお越しいただき誠にありがとうございます。ます。」

翔..「お久しぶりですね、ノエルさん。」

俺は二人に挨拶したメイドさん、ノエルさんに挨拶した

ノ..「あら、翔様。お久しぶりです。本日はどうしたのですか？」

翔..「なのはにいきなり誘われてな。聞いてないんですか？」

ノ..「はい。」

俺はなのはを睨んだ

翔..「まあ、いいや。」

ノ..「ではこちらにどうぞ、庭でお嬢様たちがお待ちです。」

俺達は庭に案内された。庭に着くとアリサ、すずかそしてすずかの姉さん忍さんがお茶を飲みながら話をしていた

恭..「すまない。遅くなった。」

忍..「いいわよ、恭弥。いらっしゃいなのはちゃん。」

な..「こんにちは忍さん。」

翔..「どうも。」

忍..「あら翔君じゃない。久しぶりね。」

翔..「そうっすね。」

ア..「何でアンタが此処にいるのよ？」

翔..「なのはに誘われたんだよ。」

アリサの質問に答えた

その後、俺達はお茶を飲んだのんびりしていた

そして、ジュエルシードの気配を感じた

ユ..「(翔、なのは)」

翔..「(ああ、解ってる。)」

すると、ユーノが森に入り、なのはが後を追って行った。それから少し時間が経ち

翔..「なのはの奴まだ戻ってこないのか。ちよっくら探してくる。」

す..「私達も一緒に・・・」

翔..「俺一人で充分だ。」

そう言い俺は森の中に入った。なのはの魔力を頼りに歩いていると、なのはがジュエルシードを封印しようとしていた。その時

な..「きゃあっ！」

金色の魔力弾がなのはに当たり、なのはは吹き飛び気を失った

翔..「なのは!？」

俺は魔力弾の飛んできた方向に振りむくと、そこには金髪の女の子がいた

翔..「魔道士・・・なのか？ユーノ、アレお前の知り合い？」

ユ..「知らない。」

金髪の女の子は俺の存在に気付いたのか、魔力弾を一つ形成し俺に放った

翔..「つく。」

俺は手を合わせ（ダイレンジャーの手の合わせ方）

翔..「気力！」

俺は気を使い魔力弾の軌道を変えた

「っ!？」

女の子は驚いていた

翔..「（今だ!）ゼロ！」

ゼロ..『S e t u p』

俺はバリアジャケットを展開した

「・・・」

女の子は持っているデバイスを大鎌に変えて俺に突っ込んできた

翔..「ダイレンロッド、セット！」

ゼロ…「ダイレンロッド セットアップ！」

俺の前に赤い棍棒が現れた。俺はそれを取り、構えた

女の子は一瞬消えると俺の背後に現れ、大鎌を振るった

翔…「っふ！」

俺はダイレンロッドでその攻撃を防いだ

翔…「はあっ！」

俺はダイレンロッドを双竜剣に変え、連続攻撃を仕掛けた

「・・・っく。」

女の子は空に飛び、俺の攻撃をかわした

翔…「逃がすか！天火星・稲妻炎上波！！！」

俺は双竜剣に炎を纏わせた

ゼロ…「ソニック・ムーブ！」

そして一瞬で女の子の背後に移動し

翔…「おらっ！」

剣を振り下ろした

「きゃあああ」

女の子は持っているデバイスで防御したが、あまりの威力に地面に吹き飛んだ

翔…「まっずい!!」

ゼロ…「ソニック・ムーブ!」

俺は高速移動魔法で女の子が落ちる場所に移動し、女の子を受け止めた

「・・・何で助けてくれたの?」

女の子が俺に質問した

翔…「理由はどうあれ、女の子を傷つける趣味は俺には無い。」

「・・・でも、私に攻撃し・・・」

翔…「あれは正当防衛だ。傷つけはしないが黙ってやられてやるほど俺は甘くない。」

そんなの事を話していると。ジュエルシードで巨大化した猫が起き、俺に襲い掛かってきた

翔…「っちい。」

俺は女の子を抱えたまま、空に飛び上がった

「がぁぁぁぁぁ」

巨大化した猫は背中から翼をはやし空に飛び上がってきた

翔…「おいおい。」

俺はそんなこと言いながら双竜剣を戻すと、空いている右腕で右足にあるホルスターからディーマグナム01を抜き、猫に向け、トリガーを引き、魔力弾を放ち猫を地面に吹き飛ばした

翔…「飛べるか？」

俺は抱えている女の子に聞いた

「……………（コク）」

女の子が頷いたので、俺は女の子を離した

翔…「一気に決めるか」

俺は左足にあるホルスターからディーマグナム02を抜き、右手に持っている01と連結させ、猫に向けた

翔…「マグナムエクスキューション！！」

ハイブリットマグナムの銃口から紅い砲撃が放たれ、巨大化した猫を包み込んだ。砲撃が止むと、巨大化した猫が倒れていた

翔…「さて、どうすようかね。」

俺が悩んでいると、金髪の女の子が猫に近づき、自分のデバイスを当て猫からジュエルシードを取り出し、封印した。そして俺の方を向き、お辞儀をするとどこかに飛んで行った

翔…「あの子は一体？」

俺はなのはを背中に背負い、すずか達のいる所に戻った

第5話 無印編「もう一人の魔導師」(後書き)

紅.. 「第5話でした。」

翔.. 「なあ、俺一応転生者だよな。」

紅.. 「うん。」

翔.. 「じゃあ、なんでフェイトのこと知らないんだ？」

紅.. 「つまんないじゃんそれじゃあ。」

翔.. 「それが理由!？」

紅.. 「Yes 次回は温泉へんです。」

翔.. 「次回も派手に行くぜ!」

第6話 無印編「温泉街での再会」

翔 side

月村邸でのお茶会から4日後、俺達は海鳴市にある温泉街に来ている。メンバーは高町家、月村家、アリサ、椎名家である

俺は車の中でゼロを使いイメージトレーニングをしていた。

く仮想データ内く

翔..「はあっ!」

俺は仮想データ内で次々と向かってくる魔力弾を破壊していた

翔..「次!」

俺は右拳に炎を纏わせた

翔..「炎一閃!!」

そして、そのまま正拳を放ち大きめの魔力弾を破壊した

翔..「名前は星獣剣を使っているときと被るけど、これが一番し

つくりくるからな。」

その時、後ろから複数の魔力弾が向かって来たが、俺は後ろにバク転し避けると、両手に魔力を纏わせた

翔…「はあああー。」

そして、次々と魔力弾を破壊していく

翔…「これで、ラストー!!!」

両手に纏っていた魔力を右拳に集中させ、最後の魔力弾を破壊しイメージトレーニングを終了した

止まる旅館に着くと、大人達がチェックインを済まし、今は部屋割りをしている

父さん、母さん、俺の家族組

士郎さん、桃子さんの大人組

恭弥さん、忍さんの恋人組

美由紀さん、ノエルさん、ファンリンさんの女性組

なのは、アリサ、すずかの子供組である

翔..「まあ、妥当だよな。」

俺が納得していると

な..「お父さん！何で翔君は私達と一緒にじゃないの！！」

なのはが士郎さんに質問した

士..「翔君がそれを拒否したからさ。」

士郎さんの話を聞くと、なのは達が俺に近づいてきた

な..「翔君！それはどういうことなの！」

ア..「そうよ。アンタ、私達と一緒にの部屋が嫌なの！」

翔..「うん、やだ。」

俺は即答した

す..「理由を教えて！」

一番冷静だったさすがが聞いてきた

翔..「俺の感がそう言ってるんだよ。お前たちと一緒にの部屋だと何かが起きるってな。」

す..「それだけ？」

翔..「それだけ。」

な..「納得できないの!!」

翔..「納得も何もそうなんだから仕方ないだろう?」

そう言うのと、俺は荷物を持って父さん達と一緒に部屋に向かった

翔..「うわぁ、いい眺めだな。」

部屋に着いた俺は窓から外の景色を見て感想を言った

翔..「少し、散歩でもしてくるか。」

俺は旅館を出ると、散歩コースに行き、辺りの景色を見ながら散歩を始めた

暫く歩いていると

「うゝゝん、見つからないな。」

翔..「うん?」

俺は林の中から声が聞こえたのでそっちに向くと、女の子が何かを探していた

翔..「探し物か?」

俺が声をかけると

「はい、青い宝石を探しているんです。」

女の子は立ち上がると、こっちを向いた

「こういうのを・・・っあ!!」

翔..「お前は、この間の!」

「っ!!」

女の子は俺と距離を取りデバイスを起動させた

翔..「やめとけ、お前じゃ俺には勝てない。それはお前が一番解っているんじゃないのか？」

「.....」

俺がそう言うとき女の子はデバイスをしまった

翔..「一つ聞いていいか？」

「?」

女の子は首を傾げた

翔..「何でジュエルシードを集めてるんだ?叶えたい願いでもあるのか？」

「.....」

俺の質問に女の子は答えなかった

翔..「・・・俺は椎名 翔って言うんだ。お前の名前は？」

「えっ!？」

翔..「いつまでもお前って言おうわけにもいかないだろう。」

「フェイト、フェイト・テストロッサ」

翔..「いい名前だな。」

フェ..「えっ? あ、ありがとう／＼／＼。」

ゼロ..『翔、そろそろ戻った方がいいんじゃないのか?』

待機状態のゼロが俺に言った

翔..「そうだな。じゃあなフェイト。」

俺は来た道に戻ろうとしたとき

フェ..「翔。」

翔..「うん？」

フェイトに話しかけられ俺は振り返った

フェ..「・・・また会えるかな？」

翔..「同じものを探してるんだ。どっかで会えるだろう」

俺はそう言うど旅館に戻った

俺は旅館に戻るとなのは達が温泉に入ろうとしていた

な..「翔君!」

なのはが俺の腕に抱きついてきた

ア..「アンタ、どこ行ってたのよ!」

翔..「何処って、散歩してたんだよ。湖まで。」

す..「そうだ、翔君も一緒に温泉に入ろう。」

その言葉を聞いた瞬間、俺の時間が止まった

翔..「一緒に入ろうだと!?俺は男湯に入るわ!!」

な..「でも..」

なのはは壁に貼ってあるビラを指差した。そこには『女湯への男児入浴は11歳以下のお子様のみでお願いします』と書かれていた

翔..「.....」

な..「翔君は9歳問題ないよね♪」

翔..「大有りだー!」

俺は思いつきり叫んだ

翔..「とにかく俺は男湯に入る。これは決定事項だ!!」

そう言う俺はなのはの肩に乗っているユーノを掴み男湯に入った

俺が男湯に入ると

ユ..「ありがとう翔。おかげで助かったよ。」

翔..「(気にするな。ところでお前ってオス、それともメス?)」

ユーノが念話でお礼をいてきたので、返事を返すと俺は今まで疑問に感じていたことを聞いた

ユ..「(僕は人間だよ。)」

翔..「(マジで!?!だってどう見たって動物じゃねえかよ!?!)」

ユ..「(この姿の方が魔力運用の効率がいいんだ。)」

ユーノが理由を言った

翔..「(取りあえず人間の姿に戻れ。)」

ユ..「(うん。)」

ユーノが俺の肩から降り、元の姿に戻った

ユ..「これで信じてくれた？」

翔..「ああ。じゃあ風呂にでも入るか。」

ユ..「そうだね。」

俺達は服を脱ぎ温泉に浸かった

その後、全員で夕食を食べ眠りについた

（深夜）

俺は眠れなかったので外に出て星を眺めていた

翔..「いつか、宇宙に行ってみたいもんだな。」

ゼロ..「宇宙から地球でも眺めたいのか？」

フェ..「それが、翔の願いなの？」

ゼロ以外の声が聞こえたので俺は振り向くとフェイトがいた

翔..「何やってんだ？フェイト。ジュエルシードを探さなくていいのか？」

フェ..「それならもう封印したよ。」

フェイトは俺にジュエルシードを見せた

翔…「早っ!!」

俺が驚いていると、

「フェイトから離れろ！」

上空から魔力弾の雨が降ってきた

翔…「ゼロ」

ゼロ…『Set up』

翔…「ジंगा・マジユナ!!」

俺はカーテン状のバリアを頭の上に展開し、魔力弾を防いだ

翔…「行き成りとは、随分な挨拶だな。」

俺は上空にいる紅い狼を見た

フェ…「ア、アルフ!? な、何で!？」

フェイトが狼に話しかけた

ア…「フェイトが心配だったに決まってるじゃないか!」

狼は俺とフェイトの間に降り、俺に威嚇した

な..「翔君!!」

その時、バリアジャケットを纏ったのはが飛んできた

翔..「なのは、寝てたんじゃないのか？」

な..「ジュエルシードと翔君以外の魔力を感じたから、心配できたの。」

翔..「そうか。」

ユ..「君はこの間の!？」

なのはの肩に乗っているユーノがフェイトを指差した

な..「ユーノ君、知ってるの？」

ユ..「この間、なのはを気絶させた子だよ。」

フェ..「君はこの間の白い子」

な..「教えて、何でジュエルシードを集めるの!」

フェ..「君には関係ない!」

フェイトはデバイスを構えた

フェ..「賭けて、お互いのジュエルシード1つを!」

な..「いいよ。私が勝ったらお話を聞かせてもらうの!」

そしてなのはとフェイトは戦い始めた

ア..「ふん、フェイトがあんな子に負けるはずがないね。」

翔..「まあ、そうだろうな。レベルが違うからな。」

ア..「それは、アンタもだよ!!」

そう言うのと、アルフが俺に襲い掛かってきた

翔..「.....」

俺は魔力を纏った左手でアルフを止めた

ア..「何だって!？」

翔..「せいっ!」

俺は膝蹴りをアルフに喰らわせ宙に浮かせた

ア..「がっ!!」

翔..「これで終わりじゃないぜ。マジ・マジ・マジカ!」

俺が呪文を唱えると脚に炎が纏った

翔..「レッドファイヤーシュート!!」

そしてとび回し蹴りを繰り出し、アルフを蹴り飛ばした

ア…「がはっ!!」

アルフは吹き飛ばされたが直ぐに体勢を整えた

ア…「(なんて一撃だ!? こいつ明らかにあたしより強い。うん、フェイトより強いかもしれない。)」

俺が拳を構え、動こうとしたとき、なのはとフェイトの勝負が終わった

翔…「なのはの負けか。・・・まあ当然と言えば当然だな。」

俺は構えを解き、二人の所に歩き出した

な…「・・・翔君、負けちゃったよ。」

なのはは落ち込んでいた

翔…「当然だ。相手はお前よりも前に魔法を使っている。魔法を使い始めて数週間のお前じゃ勝てねえよ。」

な…「うゝゝゝ。」

なのははふて腐れていた

翔…「特訓すればいいだけの話だ。ユーノにでも教えてもらえ。」

な…「翔君は教えてくれないの?」

なのはが俺に聞いてきた

翔..「俺は人に何かを教えるのは苦手なんだよ。旅館に戻るぞ。」

な..「翔君。・・・うん。」

なのはは元気になり俺の腕に抱きついた

翔..「抱きつくな!!」

俺が吠えていると

フェ..「.....」

フェイトが俺の空いている腕に抱きついてきた

翔..「フェイト!?!」

その後、なのはとフェイトの言い争いが終わるまで、俺は二人に抱きつかれていた

第6話 無印編「温泉街での再会」(後書き)

紅.. 「6話でした。」

翔.. 「なあ、紫電一閃でもよかったんじゃないのか？」

紅.. 「俺が言いにくいんだよ。」

翔.. 「おいおい。」

紅.. 「次回はジュエルシールドの暴走事件だぜ。」

翔.. 「次回も派手に行くぜ。」

第7話 無印編「2度目の戦い」

なのは side

な..「にゃあああああ!!」

翔..「避けてばっかじゃなく、攻撃してこい!!」

な..「無理なの〜。」

翔..「そこは根性だー!!」

今、私は翔君の別荘内で嵐のような魔力弾を避けている。

〜1時間前〜

な..「翔君!私を鍛えて。」

私は翔君に頼みごとをしている

翔..「なのは。俺言ったよな?魔法を教えて欲しいならユーノに頼めって。」

翔君がため息をつきながら言った

な..「勿論ユーノ君にも教わるの。」

翔..「はぁ？」

翔君が首を傾げたの

ユ..「つまり、魔法は僕に、そして戦闘は翔に教わるんだって。」

私の肩に乗っていたユーノ君が説明してくれた

翔..「成程。。。でもいいのか？俺の特訓は厳しいぞ。」

な..「大丈夫なの！」

私は元気よく言った

翔..「はぁ。なのは、3日分の着替えを持ってこい。」

な..「えっ？何で？」

翔..「いいから、もってこい。」

な..「う、うん。」

私は一度家に戻り、翔君の言う通り3日分の着替えを鞆に入れ、再び翔君の部屋に来た

翔..「来たか。そうじゃあ行くぞ！」

な..「行くってどこに？」

翔..「目の前にミニチュアがあるだろう？」

な..「うん。」

翔..「そのミニチュアに触れ。」

な..「解ったなの。」

私は翔君の言う通り、ミニチュアに触れると、どこかに移動した

な..「え？ここ何処——！？」

私が驚いていると

翔..「此処はミニチュアの中だ。」

な..「ここが！？」

ユ..「こんな魔法があったなんて。」

私とユーノ君はあまりの事に驚いている

翔..「ちなみに、此処での1日は外の時間で1時間だ。」

な..「????？」

私は翔君の説明が解らず首を傾げた

翔..「つまりここに何日居ても外では数時間しか経ってないってこと。」

な..「へえ〜。」

私はあまりの事にそんな風にしか言えなかった

翔..「じゃあ、予定を決めるぞ。午前はユーノとの訓練、午後は俺との戦闘訓練いな。」

な..「うん。」

そして午後になり、最初に戻る

翔..「なのは、避けてばっかじゃ勝てねえぞ！反撃をしろ、反撃を！..」

な..「そんなこと言っても。」

私は魔力弾の嵐をただ避けることしかできていなかった。その時タイマーが鳴り

翔..「・・・一旦終了。休憩するか。」

そう言うのと翔君は地面に降りた。私も地面に降り休憩を始めた

翔..「やっぱ、なのはには空戦の才能があるな。俺の魔力弾の嵐を避け続けるんだからな。」

な..「えへへへ。」

翔君が褒めてくれたので、私は嬉しくなった

翔..「次の訓練は少しハードだがお前なら出来るだろう。」

な..「どんな訓練をするの？」

私が聞くと、翔君はキーボードを叩き、空中に幾つもの的を展開した

翔..「これ訓練は飛行しながらターゲットを撃ち落とす訓練だ。」

飛行、射撃、砲撃の基礎を一気に叩き込ませる訓練だ。」

な..「これが基礎なの!？」

翔..「そうだ。いいか砲撃だけじゃなく、魔力弾も使うんだぞ。」

な..「うん。」

私は3日間翔君の別荘で特訓をした

なのは side end

翔 side

なのはの特訓を始めて2日後の夜、俺達は街に出、ジュエルシードを探していた

翔..「(なのは、そっちはどうだ?)」

俺は念話でなのはに聞いた

な..「(何もないの。)」

翔..「(そうか。せめて場所が解ればな)」

俺がそんなことを言った瞬間

翔「っ!何だこの魔力反応は!?!」

凄まじい魔力を感じた

翔「(ユーノ!一体どうなってんだ!?!)」

ユ..「(多分、あの子がジュエルシードを探すために魔力を流して、強制的にジュエルシードを発動させようとしているんだよ)」

翔..「(こんな街中かよ!?!)」

ユ..「(僕が結界を張るから、翔もこっちに来て。)」

翔…「（ああ。）」

俺はビルの中に入り、屋上に出るとゼロを起動させた

翔…「ゼロ、セットアップ！」

ゼロ…「S e t u p！」

バリアジャケットを纏い

翔…「ゴール・ルジュナ！」

移動魔法を使い、一瞬でなのは達にいる所に移動した

俺が着くと、桜色と金色の魔力砲がジュエルシールドに当たり、封印した

翔…「これで、ひとまず安心・・・って訳でもねえか。」

そう言う

ア…「はあああああ！」

人型形態のアルフが俺に襲い掛かってきた

翔…「はあゝ、奇襲をするなら声出すなよ。」

俺はため息をつきながら右腿のホルスターからディーマグナム01を抜き、魔力弾を撃った

ア..「つちい！」

アルフは空中に飛び魔力弾を避けた。が、

翔..「隙があり過ぎだぜ。」

俺はすでにアルフの後ろにいた

ア..「つな！？早い！？」

翔..「俺が早いんじゃない、お前が遅いんだよ。」

俺はすでにディーマグナム02を抜いており、銃口をアルフの体に当て

翔..「全弾持って行け。」

トリガーを引き20発の魔力弾を喰らわせ

ア..「ああああ！」

アルフを地面に吹き飛ばした

俺は地面におり

翔..「まだやるか？」

俺はアルフに聞いた

ア..「あ、当たり前だ。」

アルフは立ち上がるが、すでにボロボロである

翔…「はぁ、俺とお前じゃレベルが違い過ぎる、それでもやるのか？」

俺はオーラパワーを体に纏わせた

ア…「あたしは、何があってもフェイトを守ると誓ったんだ！こんなところで止まってなんかいられないんだよ！！」

俺はアルフの目を見た

翔…「いい目だな。」

俺はディーマグナムをホルスターにしまった

ア…「どういうつもりだい？」

翔…「別に。それよりなのはとフェイトの戦いを見ておこうぜ。」

そう言うのと、俺はビルに跳び上がり、空中でぶつかっている桜色の閃光と金色の閃光の戦いを見始めた

空中ではフェイトの魔力弾をなのはが避け、後ろに回り4つの魔力弾を形成しフェイトに放った。フェイトはそれを避ける接近しようとするが、なのははすでに砲撃体制に入っており、フェイトに砲撃を放った。フェイトはバリアを張ってそれを防ぐと、バルディッシュを構えた

ア…「あの子、フェイトと互角に戦ってる。」

俺の隣にいたアルフが驚いていた

翔…「なのはは頑張ってるからな。」

俺達が話していると

な…「フェイトちゃん!!」

フェ…「っ!？」

なのはに突然呼ばれ、フェイトは驚いていた

な…「目的があるなら・・・、ぶつかり合ったり競い合うことなるのは・・・仕方がないかもしれない。だけど・・・何も解らないままぶちかりあうのは嫌だ!」

フェ…「……………」

な…「私も言うよ・・・だから教えて・・・、どうしてジュエルシードが必要なのか。」

フェ…「……………私は」

フェイトが言おうとした瞬間、ジュエルシードから魔力を感じ、なのはとフェイトは同時にジュエルシードに向かった。二人のデバイスが同時にジュエルシードに触れた瞬間、ジュエルシードからとてつもない魔力が流れた

な..「うつ、うつ・・・」

フェ..「くっ・・・」

そして二人のデバイスにひびが入り、ジュエルシードからものすごい衝撃波がはしった

な..「きゃあああああっ！」

フェ..「くっ、うああ。」

翔..「っち、なんて衝撃だ！此処まで来るなんて！」

なのははその衝撃で吹き飛ばされ、フェイトは吹き飛ばされたが何とか体制を立て直した

フェ..「ハア、ハア、ハア。。」

フェイトはバルディッシュを見

フェ..「ごめん。戻って、バルディッシュ。」

バル..『Yes Sir』

フェイトはバルディッシュを待機状態に戻すと、ジュエルシードを睨んだ

翔..「あいつ、まさか!?!」

俺は超直感でフェイトがこれからしようとする事が解った

フェイトはスピードをつけてジュエルシールドに近づき、ジュエルシールドを素手でつかんだ

ア..「フェイト!?!」

フェイトは素手でジュエルシールドを襲えこもうとしていた

ア..「フェイト、だめだ、危ない!!」

フェイトは魔法陣を展開した

フェ..「止まれ、止まれ、止まれ!」

瞬間、フェイトの手から血が流れ出した

翔..「っち、あのバカ。」

俺はビルから跳び上がり、フェイトの所に向かった。フェイトのいる所に着くと、手を無理やりジュエルシールドから離さした

フェ..「っえ!?!翔。」

翔..「無茶しやがって。此处は俺に任せろ。」

俺はフェイトを抱えて後ろに下がると、ベルトの後ろから新たに装着させたSPDライセンスを抜いた

翔..「SPD!スワットモード!」

俺はSPDライセンスを上に掲げスイッチを押すと、バリアジャケットのベストが消えスワットベスト、レググアーマー、そして感知システムを搭載したバイザー（Vividでアインハルトが使うもの）、SPインカムを頭部左側に装備し、専用武器デューリボルバーを右手に握った

フェー…「バリアジャケットが変わった!？」

俺はデューマグナムをジュエルシールドに向けた

翔…「ゼロ、魔力調整、更に圧縮は任せたぜ！」

ゼロ…『了解した。』

俺はSPDライセンスをデューマグナムにセットしファイナルモードにし、魔力を込めた。すると銃口に紅い魔力球が形成された

ゼロ…『魔力圧縮率120%!!翔!行けるぞ!!!』

翔…「ターゲットロック!!」

俺はジュエルシールドをロックした

ゼロ…『ファイナルバスター』

翔…「貫けーっ!!」

俺はデューマグナムからデューバインバスター以上の砲撃をジュエルシールドに放った

砲撃はジュエルシードに当たり、ジュエルシードから魔力反応が途絶えた

翔..「ふう、やったか。」

俺はスワットモードを解除し、ジュエルシードに近づき手に取った

翔..「ユーノの言った通りだな。」

俺はジュエルシードをしまうとフェイトに近づいた

翔..「・・・手、見せてみる。」

フェ..「っえ!?!っで、でも。」

翔..「見せろ。」

俺がそう言うと、フェイトは俺に手を見せた

翔..「ったく、勇気と無謀は違うんだぞ。」

俺はポケットから薬を取り出し、フェイトの手に塗った、すると、フェイトの他の傷がたちまちよくなった

翔..「これでいいだろう。」

俺は後ろに振り返り、なのはの所に向かおうとしたとき

フェ..「翔。」

翔..「うん？」

俺はフェイトに呼ばれ、振り返った

フェ..「・・・どうして、助けてくれたの？」

翔..「・・・友達だからな。」

俺はそう言うのと、さっき回収したジュエルシードをフェイトに投げた

フェ..「きゃあ。」

フェイトは慌ててそれをキャッチした

翔..「それはやるよ。その代り約束しろ、もう無茶はしないってな。」

フェ..「・・・・・・・・うん。」

俺はフェイトの返事を確認した後、なのはの所に向かった

第7話 無印編「2度目の戦い」(後書き)

紅.. 「第7話でした。」

翔.. 「スワットモードか。」

紅.. 「他の奴も考えたんだけど、これが一番しつくりきた。」

翔.. 「次回は？」

紅.. 「プレシアとの会話と、KYとの戦闘だ。それではまた次回。」

翔.. 「次回も派手に行くぜ!!」

第8話 無印編「雷速」

翔 side

俺はフェイトにジュエルシードを渡した後、なのはに近づいた

翔..「大丈夫か？なのは。」

俺が聞くと

な..「大丈夫じゃないの。」

翔..「ほら。」

俺は飲み菓をなのはに渡した

な..「何これ？」

翔..「怪我を治す薬だ。飲め。」

俺が言うとなのはは俺を見た

な..「口移しで飲ませてなの／＼／」

なのはが顔を赤くして言った

翔..「そう言うのは、自分の好きな相手に言え。」

俺はそう言うと

な..「ぶうゝゝ。」

なのはは頬を膨らませた

翔..「早く飲め。」

俺に言われなのはは洪々と薬を飲んだ

な..「・・・あれ？この薬苦くない。」

翔..「俺特製の飲み薬だからな。さてと、」

俺はなのはを抱えた

な..「にゃ！？翔君！？／＼／＼」

なのはは顔を赤くした

翔..「瞬間移動で家に向かう。しっかり掴まってるよ。」

な..「う、うん／＼／」

翔..「ゴール・ルーマ・ルジュナ！」

俺が呪文を唱えると、俺、なのは、ユーノは俺の部屋に瞬間移動

した

その後、俺はなのはを家に送りった。その時、なぜか恭也さんに木刀で叩かれそうになったが、回し蹴りを放ち気絶させた

〵翌日〵

翔…「さて、プレシア・テストロッサの所に行きますか。」

俺が呪文を唱えようとする

ゼロ…「場所は知っているのか？」

ゼロに聞かれた

翔…「フェイトの発信機を付けたからな。大丈夫だ。ゴール・ルジュナ!!」

俺はプレシアのいる城に飛んだ

（時の楽園）

翔.. 「此処が時の楽園。フェイトの家か・・・。」

俺は時の楽園着いた

翔.. 「見た目からして、此処は中庭か？」

俺は道なり進んでいると大きな扉を見つけた

翔.. 「多分ここだな。」

俺は扉を開け、部屋の中に入ると、椅子に座った女性を見つけた

「誰？どうやって此処まで来たの？」

翔.. 「大魔道士プレシア・テストロッサさんですね。俺は名は椎名 翔。貴方の娘、フェイト・テストロッサの友達さ。」

プ.. 「それで、私に何の用かしら？」

翔.. 「貴方と話をしに来た。」

俺がそう言うと

プ.. 「貴方と話すことなんてないわ、帰りなさい。」

翔.. 「俺にはあるんだよ。」

プ.. 「帰らないなら、死になさい。」

プレシアは俺に紫色の雷を放った

翔..「あらよ。」

俺はそれをバックステップでかわした

翔..「こんなことをして、貴方の娘、アリシアが喜ぶのか？」

プ..「っ!？なんであなたがアリシアの事を知っているの!？」

翔..「さぁ？何でだろうな？」

プ..「答えなさい。」

プレシアは更に雷を俺に放ってきたが、

翔..「当たんねえよ。」

俺はそれを避けて、アリシアがいる部屋に入った

プ..「あなた、なぜ此処を知っているの？」

翔..「企業秘密だ。」

俺はアリシアの入ったポッドを見た

翔..「・・・聞いていいか？」

俺は振り返って聞いた

翔..「あなたにとってフェイトはどんな存在なんだ？」

俺が聞くと

プ..「・・・ただの人形よ。」

翔..「・・・もしアリシアがそれを聞いたら、きっと悲しむぜ。」

プ..「・・・」

翔..「貴方は解っているはずだ。死んだ人間はもう二度と蘇らないことを。」

プ..「黙りなさい。」

翔..「どんなに似ていようがフェイトとアリシアは違うということ。」

プ..「黙りなさい。」

プレシアは俺のさっきより大きめの雷を放った

翔..「はあっ!!」

俺は左腕を横に振るい、その雷を破壊した

プ..「貴方に言われなくても解っているわよ!あの子とアリシアは違うと言うことは。でも、それでも私はアリシアにもう一度会いたい!!あの子の笑顔をもう一度見たいの!!」

プレシアは涙を流しながら言った

翔…「……これを。」

俺は一枚のカードをプレシアに渡した

プ…「……これは？」

翔…「落ち着いたら、そのカードを持って『ルーマ・ゴールド』と唱えろ。探している答えが見つかるかも知れないぜ。」

俺はそう言っていると、部屋を出て言った

プ…「……私の探している答え……。」

最後にプレシアが言った呟きは俺には聞こえなかった

（海鳴市）

ゼロ…「あれで、良かったのか？」

海鳴市に戻って来ると、ゼロが俺に聞いた

翔…「さあな。」

俺はそう言いながら家に向かった。その途中、ジュエルシードの

反応をキャッチした

翔..「少しは休みたいんだけどな。」

そう言いながら、俺はジュエルシールドの反応がある場所に向かった
俺が現場に着くと、そこには大量の木の怪物と巨大な木の怪物が
いた

翔..「随分と多いな。」

俺は拳を構えた

翔..「まあ、量が多けりゃいいってもんじゃないけどな!」

俺は地面を蹴り、怪物に突っ込んだ

翔..「はあああああっ!!」

俺は正拳、裏拳、回し蹴り、手刀等を放ち木の怪物を粉碎した

翔..「まだ、まだー!!」

俺の勢いは止まらず、そのまま大量の怪物を粉碎していった。怪物
物が後ろから俺を襲おうとしたとき、金色の魔力弾が怪物は倒した

翔..「うん?」

俺は魔力弾の飛んできた方向を見ると、フェイトとアルフがいた

フェ..「翔、大丈夫？」

翔..「ああ。」

フェイトが俺に聞いてきた

ア..「それにしても、たった一人でこれだけの怪物を倒したのかい？」

周りには大量の木の怪物が倒れて（粉碎されて）いた

翔..「まあな。」

その時

な..「翔君、フェイトちゃん。」

なのはがこっちに飛んできた

フェ..「っ！！」

フェイトはデバイスを構えたが

翔..「やめておけ、今はジュエルシードを封印する方が先だ。」

フェ..「.....」

俺の言葉に納得したのかフェイトは構えを解いた

その後、俺達は協力して木の怪物を倒していき、残りは巨大な木

の怪物だけが残っていた

翔..「こいつで最後か。」

な..「私に任せて。」

なのはは魔力弾を4つ形成し

な..「シュートッ！」

巨大な怪物に放った。だが、怪物はバリアを張り、魔力弾を打ち消した

な..「っえ!?!」

ア..「バリアを張るんかい。生意気だね。」

翔..「(あのバリアかなり強度だな。俺の炎一閃でも防がれるな。
...なら!)」

俺は右拳を上にあげた

翔..「ゴットハンド!!」

俺は紅と金色が混ざった魔力を右拳に纏わせた

翔..「はあああああ!!」

俺はそのまま巨大な怪物に近づき、右拳を繰り出した。怪物はバリアを展開させたが、俺の拳は一瞬でバリアを砕き、怪物の体を貫

抜き、巨大な穴を開けさせた

翔…「なのは、フェイト、今だ!!」

俺は拳を抜き、後ろに下がるとなのはとフェイトに封印を任せた

な…「ディバイン―バスター!!」

フェ…「サンダースマツシャー!!」

桜色と金色の砲撃が怪物を包み込み、怪物を倒した。そして、その場にはジュエルシードが残った

な…「……」

フェ…「……」

なのはとフェイトはジュエルシードを挟んで互いを見ていた

な…「私はフェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど…」

フェ…「ジュエルシードは…譲れないから…」

な…「私も譲れない。」

二人はデバイスを構えた

な…「理由を聞きたいから。フェイトちゃんが何でジュエルシード集めてるのか。……どうしてそんなに寂しそうな目をしているのか。」

フェ..「っ!？」

な..「私が勝ったら・・・お話聞かせてくれる？」

辺りがしずかになった

二人は同時に動き出した、そして二人のデバイスがぶつかろうとした瞬間

水色の光が二人の間に落ちた

「そこまでだ・・・」

そこには黒いバリアジャケットを着た少年がいた

翔 s i d e e n d

3人称 s i d e

「時空管理局執務管 クロノ・ハラオウンだ。」

クロノが証明書を見せた

ユ..「っえ!？」

ア…「管理局!？」

ク…「さて、事情を聞かせてもらおうか。」

クロノが翔たちを見回した

その時、魔力弾がクロノに飛んできた

ク…「っ!! っく!」

クロノはシールドを展開してその魔力弾を防いだ

ア…「フェイト! 撤退するよ!!」

アルフが魔力球を展開していた

ク…「っ!!」

クロノはデバイスをアルフに向けたが後ろになのはがおり、バリ
アを張ってアルフの魔力弾を防いだ

翔…「・・・あいつ、強いな。」

翔は離れた場所で見っていた。アルフの魔力弾が地面に当たり、土
煙をまった

フェ…「っ!!」

ア…「フェイト!？」

フェイトはその隙にジュエルシードを回収しようとしたが

煙から水色の魔力弾が放たれ、フェイトに当たりそうになった。
その時、紅い魔力弾が水色の魔力弾を打ち消した

フェ…「っえ!？」

フェイト魔力弾の飛んできた方向を見ると、翔が銃を抜いていた

翔…「(フェイト、取りあえず今は此処から逃げろ。)」

翔はフェイトに念話を送った

フェ…「(っでも。)」

翔…「(捕まるわけにはいかないんだろう? 行け!!)」

フェイトは迷っていたが、翔の言葉に納得してその場を離れた

ク…「どういうつもりだ!!！」

翔…「うん？」

クロノが翔を睨んでいた

ク…「君は自分が何をやったのか解っているのか!!！」

翔…「友達を助けたただけだけど？」

ク…「屁理屈を!!！」

翔..「それにあの時はああするしかなかったしな。」

ク..「何っ!？」

翔..「女の子の肌は髪の毛の次に大切なんだぜ。それ傷つけてお前、責任とれるの? あんな正確な射撃できるんだから、魔力弾使わないでバインド使えばよかっただろう。」

ク..「.....」

翔..「理解したか？」

翔がそう言うと、

ク..「.....なら、僕は君を公務執行妨害で逮捕させてもらう!」

翔..「いや、何で？」

ク..「君が僕の邪魔をしたからだ！」

翔..「そんな理由!？」

そう言うと、クロノは翔に魔力弾を放った

翔..「おっと。」

翔はその魔力弾を避けた

翔..「そんじゃあ、一気に行くぜ!!」

翔はクロノに突っ込んだ

ク…「隙だらけだ！」

クロノが砲撃を放った。しかしそれが翔に当たる瞬間

ゼロ…『ライティングムーブ』

翔は文字通り消えた

ク…「っな！？消えた！？どこだ！！」

翔…「俺は此処だぜ？」

翔はクロノの後ろにいた

ク…「……いつの間に」

ゼロ…『ライティングアーム』

翔は両腕に雷を纏った

翔…「知ってるか？雷ってのは音よりも早いんだぜ？」

翔は両拳を腰に構え

翔…「真・ライティングフィスト！」

超高速のラッシュを放った

ク..「がつ、あつ、うわあつ」

翔..「まだまだー!!」

ク..「うわあっ」

クロノは吹き飛んでしまった

ク..「くっ、なんてスピードだ。拳が全く見えなかった」

翔..「当たり前だ。雷の初速は150 km/s（ネギま参照）人の感知できるレベルじゃないんだよ。」

ク..「・・・身体能力を上げても、そんな速さで動けば君の肉体だって持たないんだぞ!？」

翔..「残念だが俺の身体能力は異常でな、問題ないんだな〜これが。」

翔は普通に言った

翔..「そろそろ、終わらせてもらうぜ。」

ゼロ..『ライトニングムーブ』

翔は雷のごとくクロノに近づき

翔..「おらあっ!」

超高速のアップーを繰り出し、クロノを空に吹き飛ばした

翔..「決めるぜ！」

翔は両腕に纏っていた雷を右拳に集中させ、空中に飛ばしたクロノに一瞬で近づき

翔..「雷一掃！！」

雷を纏った右拳を繰り出し、クロノを地面に叩き落とした

ク..「うわあああああっ！！」

巨大なクレーターができ、クロノはその中心で倒れていた

翔..「.....ちょっとやり過ぎたか？」

翔はあたりを見回した

翔..「まっ、いいか。結界張ってあることだし。」

その時

『ちよつと、よろしいかしら？』

空中にディスプレイが展開し、そこに一人の女性が写っていた

翔..「誰？」

『私はリンディ・ハラウン。あなたが吹っ飛ばした執務管の上

司であり、母親です。』

女性が自己紹介をした

翔..「つで、俺になんかようっすか？」

リ..『少しお話をしたいの、そこにいる女の子と一緒にこちらに来てもらえないかしら？』

翔..「.....」

翔は少し考えた

翔..「いいぜ。」

リ..『ありがとう。今からあなた達をこっちに転送させるわね。』

翔..「解った。」

すると魔法陣が展開され、翔、なのは、ユーノはどこかに転移した

第8話 無印編「雷速」(後書き)

紅.. 「第8話でした。」

翔.. 「ゴットハンドは誰の技なんだ?」

紅.. 「光戦隊マスクマンのレッドマスクの技だ。」

翔.. 「ライトニングムーブはオリジナルなのか?」

紅.. 「っそ、ネギまの雷速瞬動を参考にさせてもらった。次回は管理局との会話です。」

翔.. 「次も派手に行くぜ!」

紅.. 「・・・話だけだから派手に行かないだろう。」

第9話 無印編「対話」

翔 side

あの後、俺達は時空管理局の船に転送された。現在は俺がボコした執務管の補佐の人に案内されている

な..「ユーノ君、此処って・・・」

ユ..「(管理局の時空船だよ)」

翔..「(つまり、管理局はこの船を使って違う世界に行き来しているわけだ。)」

俺達が念話で会話をしていると

「そう言えば、自己紹介がまだだったね。」

補佐の女性が俺達に振り返り、自己紹介をした

「私はエイミィ・リミエッタ。クロノ君の補佐であり、この艦の艦船通信主任だよ。」

翔..「俺は椎名 翔。よろしく。」

な..「高町 なのはです。よろしくお願いします。」

俺となのはの自己紹介が終わると

ク..「うゝゝん。」

俺が肩に担いでいる、執務管が起きた

エ..「クロノ君、目が覚めた？」

ク..「エイミィ？君が居るってことは、此処はアースラの中か？
・って！？何で僕は君に担がれているんだ！？」

翔..「人の耳もとでぎゃあ、ぎゃあ騒ぐな。」

俺はクロノを投げた

ク..「いたっ！いきなり投げるな！！」

翔..「うるせえ、此処まで担いできてやったんだぞ。礼は言われ
ても、文句を言われる筋合いが無い。」

その後、俺は執務管にボディীবローをかまし黙らせると、再び
担ぎ、エイミィさんの後ろに着いて行った

リ..「いらっしやい。」

俺達が案内された部屋に入ると、さっきモニター越しで話してい
た女性がいた

リ..「どうぞ、お掛けになって。」

俺、なのは、ユーノは座敷に座った。ユーノはすでに元の姿に戻っている

ユーノはこれまでの事を話した

リ..「成程、ジュエルシードを見つけたのはあなたなんですね。」

ユ..「はい。それで回収を。」

リ..「素晴らしいわ。」

ク..「だが、同時に無謀ともいえる。」

いつの間にか起きたクロノが言った

翔..「ユーノは対応の遅かった管理局に変わって少しでも被害を抑えようとしたんだ。もう少し労いの言葉を言ってもいいと思うんだが?」

ク..「っう・・・」

俺の言葉にクロノは苦虫を潰したような顔になった

な..「あの、ロストロギアってなんですか?」

リ..「ロストロギアというのはね・・・・・・（説明中）そういうものの分かっていただけたかしら。」

な..「は、はい。」

リ..「だから、これからジュエルシードの回収は、私達が担当します。」

な・ユ..「!？」

翔..「.....」

ク..「君たちは、今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻るといい。」

な..「でも。」

リ..「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。
・今夜一晩・・・3人で話し合って、それから改めてお話をしましょう。」

翔..「いや、その必要はない。俺達はこのことを忘れよう。」

な..「翔君!？」

リ..「いくらなんでも決めるのが早すぎないかしら。」

翔..「本当の事を言わない人に、どうこう言われる筋合いは無いぜ。」

リ..「っ!？何の事かしら？」

リンディさんは一瞬驚いたが直ぐに俺に聞いた

翔..「この船には魔力を測る機械があるんだろう？そして測った結果、俺達の魔力はとんでもないくらい高いと解り、そっちの戦力にしようとした。違うか？」

リ..「.....」

翔..「俺には超直感がある、この力は相手の思考を読むことが出来る。つまり、俺に嘘はつけないってことだ。」

リ..「.....負けたわ。確かに私はあなた達をこっちの戦力にしようと思いました。でも、この事件を早く解決したい気持ちに嘘は無いわ。」

翔..「.....なのは、お前はどうするんだ？」

俺がなのはに聞くと

な..「.....私は手伝うの。まだフェイトちゃんとお話もしてないし。」

翔..「お前らしいな。俺も手伝わせてもらう。ただし、条件付きでな。」

リ..「条件は何？」

翔..「簡単な事だ。緊急時の場合、俺を自己の判断で行動していること。これが条件だ。」

ク..「何を勝手なことを。」

翔..「負け犬は黙ってろ！」

俺に負け犬と呼ばれ、クロノは床にのの字を書き始めた

リ..「解ったわ。」

翔..「取りあえず今日は帰らせてもらう。」

リ..「ええ。エイミィ、3人を元の場所に転送してあげて。」

エ..「はい。」

その後、俺達は元いた公園に転送され、家に戻り親に話した

翔..「つと、言うわけで。これから少し家を留守にするから。」

鷹..「翔。」

七..「大丈夫なの？」

翔..「多分ね。」

鷹..「・・・この性格は誰に似たんだか」

七..「鷹介じゃない？」

鷹..「いや、七海だろう。」

翔..「俺は二人に似たんだと思うんだが？」

俺がそう言うのと

鷹・七..「確かに。」

見事にハモって言った

鷹..「所で翔。お前が手伝う管理局員の名前は？」

父さんが聞いてきた

翔..「確か、リンディ・ハラオウンって言ってたはずだけど。何で？」

鷹..「・・・そうか。」

そう言うのと父さん立ち上がり、棚にあるCDを取り、俺に渡した

翔..「これは？」

鷹..「何かあったときにそれを渡せ。それと、渡した時にこう言え、『これで貸し一つ追加だ。』とな。」

翔..「解った。」

その後、俺は準備をし、翌日なのはと共にアースラに乗り込んだ

第9話 無印編「対話」(後書き)

紅.. 「第9話でした。」

翔.. 「あの内容はなんだったんだ？」

紅.. 「どうしたんだ？」

翔.. 「いや、父さんが言った内容が気になってな」

紅.. 「それは進むにつれわかるだろう。」

翔.. 「そうだな。」

紅.. 「次回は海上でのジュエルシード封印です。」

翔.. 「次回も派手に行くぜ。」

第10話 無印編「共闘」

翔 side

翔..「おらあああ」

俺は今結界の中でジュエルシードの力で巨大化した鳥2体と戦っている

翔..「せいっ!、せいっ!」

俺は鳥の一体に正拳を2発繰り出し吹き飛ばした

翔..「ティラノロッド、セット」

ゼロ..『ティラノロッド、セットアップ』

俺はアバレッドが使う武器を呼び構えた

ゼロ..『ライトニングムーブ』

超高速のスピードで鳥の後ろに移動し

翔..「はあっ!、せいっ!おらあっ!」

ロッドで袈裟斬り、横一闪、袈裟上げ斬りを繰り出した

「ぎゃあああああ」

後ろからもう一体の鳥が襲いかかてきたが

翔…「あらよつと。」

空を蹴りジャンプして避け、更に後頭部をロッドで攻撃してもう一体のいる方に吹き飛ばした

翔…「これで終わりだ!」

俺はロッドを垂直に構え、大きな円を描くように回し、魔力球を形成した

翔…「喰らえ、サークルムーン!!」

そして、ロッドを右肩に担ぐように構え、横に振り回し魔力球を2体の鳥に放った

「がああああああ」

鳥は魔力球に当たると地面に落ちた、俺はロッドを2体に向けジュエルシードを取り出した

翔…「封印はなのはに任せるか。」

ジュエルシードを回収すると、俺は別の場所で戦っているのはの所に向かった

翔.. 「そっちも終わったみたいだな。」

な.. 「っあ、翔君。そっちも終わったの？」

翔.. 「ああ。なのはジュエルシードの封印を頼む。」

俺はさっき回収したジュエルシードをなのはに渡した

な.. 「うん。リリカル・マジカル、ジュエルシード封印」

レ.. 『シーリング』

ジュエルシードが封印されレイジングハートの中に入った

翔.. 「さて、戻るか。」

な.. 「うん！」

俺はアースラに通信を入れ、転送してもらった

翔 side end

3人称 side

リ…「3人共とても優秀ね。」

リンディはモニターで翔たちの戦闘を見ていた

ク…「そうですね。特に翔の方は異常です。一人で2体を相手するなんて。」

クロノは翔の戦闘映像を見ながら言った

エ…「調べた結果、なのはちゃんの魔力量はA A A。ランクで言えば空戦A A A。黒い魔道士フェイトちゃんの魔力量はA A A。ランクは空戦A A A。翔君の魔力量はS+。ランクは空戦S+だからね。」

エイミィは苦笑いで言った

ク…「それだけじゃない。彼は拳、銃、剣、棒全ての武器を使いこなしている。まったくあれだけの武器をどこに閉まっているんだ？」

エ…「それは解らないよ。でも翔君の技の攻撃ランクは全てS以上だからね。」

ク…「……僕はそんな威力の拳を何発も喰らったのか。」

クロノは額に冷や汗を流した

エ..「更に翔君は炎熱、電気、凍結、疾風、水の五つ変換資質を持っているし。レアスキル『超直感』、『アンサートーカー』も持っているしね。」

ク..「・・・僕は彼に一生勝てる気がしない。」

エ..「そうだね。」

リ..「それで、彼女の動きは掴めたのかしら？」

リンディがエイミィに聞いた

エ..「それが、中々見つからないんです。」

ク..「向こうも中々優秀だ。」

エ..「おかげであれから二つも、こっちが発見したジュエルシードを奪われちゃってるしね。」

リ..「手強いわね。」

それから10日後

リ..「残りの七つ見つからないわね。」

ク..「搜索範囲を地上以外まで広げています。」

〈食堂〉

翔..「はぁ、母さんの回鍋肉が食いたい。」

な..「大丈夫、翔君？」

翔..「何とか。」

翔たちが食堂で食事をしていると

「エマージェンシー！搜索区域の海上にて大型の魔力反応を感知
！」

〈海上〉

フェイトは魔力陣を展開し、周りにはいくつもの魔力弾が展開していた

ア..「（ジュエルシールドは多分この辺の海の中）」

フェ..「（正確な位置は解らないから、海に魔力流を撃ちこんで、強制発動させて捕まえる・・・）」

魔力弾から電気が走り、周りは嵐のような天気になっている

ア..「(でも、フェイト・・・!)」

フェ..「はああああああ!!」

フェイトはバルディッシュを掲げて海に魔力流を撃ちこんだ

そして、ジュエルシールドが強制発動した

フェ..「はあ、はあ、はあ・・・見つけた。残り・・・七つ!」

アルフは拳を構えた

フェ..「行こう、バルディッシュ!」

バル..『Yes, Sir』

くアースラブリッジく

リンディ達はモニターでその光景を見ていた

リ..「何とも無茶する子ね。」

な..「フェイトちゃん!」

翔、なのは、ユーノがブリッジに入ってきた

な.. 「あの、私急いで現場に・・・」

ク.. 「その必要はない。放っておけば、あの子は自滅する。」

な.. 「っえ!？」

ク.. 「自滅しなかったら、力を使い果たしたところで叩く。・・・
・捕獲の準備を!」

「了解!」

な.. 「でも・・・!」

なのはは納得しなかった

モニターでは、魔力を使い果たしつかれているフェイトが写っていた

リ.. 「残酷に見えるかもしれないけど、これが最善・・・。」

な.. 「でも・・・」

なのはは顔を沈ませた

翔.. 「そんじゃあ、俺は行かせてもらうぜ。」

翔がそう言った

ク..「君は聞こえていなかったのか？僕たちは此処で待機だ。」

翔..「それは、あんた達の意味だろう？俺には関係ないね。」

ク..「何を勝手な。」

翔..「・・・条件を忘れたのか？緊急時の場合、俺は自己の判断で動いていい事を？」

ク..「それは、僕たちの行動に危機があった場合だろう。」

翔は目を閉じ

翔..「誰がてめえらの危機にあった時だと言った！」

翔は殺気を全開にしてクロノ達を睨んだ

リ・ク..「っ!？」

リンディ、クロノ、なのはは翔の尋常じゃない殺気に驚いている

翔..「なら聞くが。クロノお前はアレを一瞬で封印できるのか？」

ク..「そ、それは・・・」

翔..「つまり、それがお前の答えだ。あのまま放って置けばジュエルシードは暴走して時限震をおこし、地球は滅ぶ。そんなの納得できるわけねえだろう！」

翔は後ろを向いた

翔…「それに、助けられる命を助けなかったら・・・俺に力を貸してくれる戦士達に申し訳がたたねえ！・・・ゼロ！！」

ゼロ…『S e t u p』

翔はバリアジャケットを展開した

ク…「・・・だが、君がどう思おうとこっちの意思は変わらない。
そして転送ポートも使わなせい！」

クロノは勝ち誇った風に言った

翔…「別にお前たちの力を使わなくても、あそこに行けるから問題ない。」

ク…「え？」

翔…「ゴール・ルジュナ！」

翔が呪文を言った瞬間、翔の姿が消えた

ク…「っな！？消えた！？」

クロノが驚いていると

エ…『クロノ君！結界にないに翔君の魔力反応が現れたよ！』

ク…「何だって！？」

～空中～

翔は結界の内に瞬間移動すると、そこは空中だった

翔..「来い！サイバースライダー！！」

翔が叫ぶと、紅いサーフボードが飛んできた。翔はそれに乗るり、フェイトのいる場所に向かった

～海上～

フェイトはジュエルシードが作った水に掴まっていた

ア..「フェイト、フェイトー。」

アルフはフェイトに近づこうとしたが、自身も水に掴まっており動けずにいた。その時竜巻がフェイトに襲い掛かった

フェ..「.....ごめんなさい。」

フェイトは目を閉じ母に謝った

翔..「謝んなら最初からこんな事するんじゃないやねえよ！」

フェイトの目の前にサイバースライダーに乗った翔が現れ

翔..「せいやー！！」

呼び出していたドリルセイバーで竜巻を切り裂いた

フェ…「しよ、翔？」

翔はフェイトに振り返った

翔…「まったく、約束しただろう？無茶するなって。」

フェ…「ご、ごめんなさい。」

フェイトは翔に謝った

翔…「・・・まあ、お前が無茶する奴だったのは最初にあった時に解ってたから別にいいんだけどよ。」

翔はドリルセイバーを右肩に担いだ

その時、空に桜色に光った

な…「フェイトちゃん！！」

なのはがこっちに飛んできた

翔…「お前どうやって此处に。」

な…「ユーノ君が転送してくれたの。」

そんな話をしていると

ア…「フェイトの邪魔はさせないよ。」

アルフが水を引きちぎって翔たちに襲い掛かった

ユ..「違う！僕たちは君たちと戦いに来たわけじゃない！」

翔..「そうだ！まずはアレを封印する。話はその後だ。」

翔はジュエルシードを睨んだ。そして

翔..「フェイト、今は俺達を、..俺を信じてくれ！」

な..「フェイトちゃん、手伝ってジュエルシードを止めよう。」

なのははレイジングハートをフェイトに向けた

レイ..『Divide energy』

レイジングハートからフェイトになのはの魔力が渡された

な..「二人できっちり、半分こ！」

翔..「っふ。なのは、フェイト俺があの子を打ち消す。そして封印しろ。」

な..「うん。」

フェ..「.....うん。」

翔は二人の返事を聞くと竜巻の方を向いた

翔…「ゼロ、メガスナイパー、ダブルトップセット！」

ゼロ…『Set up』

翔の左手にメガスナイパー現れ、ドリルセイバーの先端にダブルトップがセットされた。翔はメガスナイパーとドリルセイバーを合体させた

翔…「ドリルスナイパーカスタム！！！」

翔は銃を竜巻に向けた

翔…「喰らえ、ハイパーメガニックバスター！！！」

ドリルスナイパーカスタムから竜巻のような砲撃が放たれ、竜巻を全て打ち消した

翔…「今だ！」

な…「行くよ、フェイトちゃん！」

なのははフェイトの方を向いて行った

な…「デイベインーバスターー！！！」

フェ…「サンダーレイーージ！！！」

桜色と金色の魔力がジュエルシードを一瞬で封印した

くアースラ内く

エ..『すごい、7個一発で完全封印。』

ク..「こんな、出鱈目な!？」

リ..「でも、凄いわ。」

（海上）

なのはとフェイトは互いを見ていた

な..「フェイトちゃんに言いたいこと、やっと纏まったんだ。私はフェイトちゃんと色んなことを話し合って、伝え合いたい。」

なのはは笑顔で

な..「友達に...なりたいたんだ。」

フェ..「っ!？」

翔達は離れた所でその光景を見ていた

翔..「それが、なのはの答え...か。」

俺が見ていると、上空からとてつもない魔力反応を感知した

翔..「（この反応...まさか!?!）」

翔は急いでなのは達の所に飛んだ

翔..「間に合え!!」

翔がなのは達の所に着くと、紫色の巨大な雷が落ちてきた

翔..「炎一閃!!」

翔は炎の纏った右拳を雷に放った

翔..「おおおおお!!」

力は均衡しているが、雷の威力が増し、翔は雷に飲み込まれた

な..「翔君!!」

フェ..「翔!!」

翔の意識はそこで途絶えた

第10話 無印編「共闘」(後書き)

紅.. 「第10話でした。」

翔.. 「俺の炎一閃が負けた。」

紅.. 「安心しろ、秘策は用意してある。」

翔.. 「まじ!?!」

紅.. 「ああ。」

翔.. 「よっしゃー! 次回も派手に行くぜ!」

第11話 無印編「さらなる高みを目指して」

翔 side

目が覚めると、俺はアースラの病室にいた

翔..「いてて、あの雷かなりの威力だったな。」

俺は今だ震えている右手を見て喋った

翔..「・・・くそ。」

俺は自分の修行不足に嘆いた

翔..「やっぱ、魔力だけじゃだめだな。他の力も使うか、・・・
だけどそれを使用している間は他の力を使えないからなくどうしよう?」

俺が悩んでいると

ゼロ..「だったら、過激気を使えばいいんじゃないのか?」

翔..「それだ!」

俺はゼロの提案に納得した

翔..「気の中でも、過激気は最強の気それを常に纏っていれば・・・」

俺はぶつぶつと呟き始めた

な..「翔君!!」

病室のドアが開き、なのはがありえないぐらいのスピードで俺に抱きついてきた

翔..「なのは、傷に響くんだが。」

な..「え?ご、ごめん。」

なのはは謝りながら俺から離れた

ク..「本当に君の体は凄いな。」

すると、クロノが病室に入ってきた

翔..「よう。」

ク..「普通の魔道士なら、あの雷を喰らった時点で全治2か月だというのに..」

翔..「鍛え方が違うんだよ!」

俺は笑いながら言った

ク..「.....そう言うことにしておこう。それと今後の予定だが、君となのはは一度地球に戻ってもらう。」

翔..「何でだ？」

ク..「母さ、艦長が一度帰ってゆっくりして来たらと言ったいた。」

翔..「ふん。そんなじゃあそうさせて貰うわ。あっちでやっておきたいことがあるからな。」

くその翌日く

俺は家に戻ってくると、直ぐに別荘に入った

翔..「さてと始めますか。」

俺は左手の平と右拳を合わせた

翔..「はあっ!!」

俺が力を入れると、体から過激気が流れた（色はスーパーゲキレ
ンジャーの色）

翔..「あとわ、これを常に纏っておけるようにすれば・・・」

しかし、俺の過激気があまりに凄まじいためか、爆発してしまった

翔..「・・・・・・」

俺は黒こげになり地面に倒れた

翔…「……けほ。まさかここまで難しいとは。」

俺は少し休憩した後、修行を再開した

それから五日後（別荘の時間帯で）

翔…「はあああああ!!」

俺はようやく膨大な過激気をコントロールすることが出来た

翔…「やっとできた。」

俺はあまりの嬉しさに涙を流した。何故ならこの五日間、翔はいつも黒こげだったからである

翔…「さて、腕試しでもするか。」

俺はボードを展開して相手を選択している

翔…「誰にしようかな。……よしこいつにするか。」

俺が相手を決め、決定ボタンを押すと、ゲキレンジャーの大地の拳魔マクが現れた

翔…「行くぜ。」

俺は地面を蹴りマクに近づいた

翔..「はぁっ！」

右拳を繰り出しマクを吹き飛ばした

翔..「・・・やっぱ、過激気は凄いな。しかも何故か獣力開花してるし。」

俺が驚いていると、マクが怒臨気弾を俺に飛ばしてきた

翔..「ふんっ!!」

俺は左拳でその怒臨気弾を打ち消した

翔..「この状態でも魔力を使えるが、今日の気分はこれだ!!」

俺は過激気を右手の平に集めた

翔..「激獣ライオン拳、激技 超咆咆弾!!」

俺が右手を前に出すと、激気でできた紅い獅子が現れ（見た目はガオリオン）、マクに突撃しマクを倒した

翔..「うゝゝん、この力最高だぜ!!」

俺は更に強くなったことに喜んだ

その翌日、俺となのは久しぶりに学校に行った

す..「なのはちゃん、翔君!! 久しぶり。」

な..「すずかちゃん、アリサちゃん元気だった?」

ア..「当たり前でしょ。私を誰だと思ってるのよ。」

翔..「うるせえな。少しは静かにしろ。」

ア..「アンタに言われたくないわよ!!」

す..「アリサちゃん抑えて。」

俺に殴りかかろうとしたアリサをすずかが止めた

ア..「はあ、はあ。それより今日家に遊びに来ない。昨日大けがした犬を見つけたのよ。」

な..「犬?」

ア..「そう、額に宝石を付けた犬。」

アリサが額に指を当てて言った

な..「(翔君、それってもしかして。)」

翔..「(多分、アルフじゃないのか? まあ、取りあえず行ってみようぜ)」

な..「(うん。)」

その日の午後、俺達はアリサの家に寄った

ア..「この子よ。」

アリサが俺達に檻に入った犬を見せてくれた

な..「（やっぱり、アルフさん。）」

なのはが念話でアルフに話しかけた

翔..「（なのは、此処は俺に任せてアリサ達と遊んで来い。）」

な..「（うん。）」

俺はなのは達を家の中に入らせ、アルフと話し始めた

翔「（んで？その怪我はどうしたんだ？）」

ア..「（・・・ちょっとね。それよりアンタが此処にいるってことは連中も見てるってことだね。）」

翔..「（まあな。クロノ！こそこそ見てないで、話しかけたらどうなんだ？）」

俺がそう言うと、クロノから返事が来た

ク..『別にこそこそ見ていたわけじゃ・・・』

エ..『クロノ君は少し黙ってようね。話が進まないから。』

エイミィさんに注意されクロノはいじけてしまった

翔..「(アルフ、話してくれ。何があったのかを)」

ア..「(ああ、全部話すよ。)」

アルフはこれまでの事を全部話した

クロノはジュエルシードの回収から、事件の黒幕であるプレシアの逮捕へと切り替えた

ク..『なのは、君はどうするんだ?』

な..「(私はフェイトちゃんを助きたい。まだあの時いった返事をもらっていないから。)」

ク..『解った。』

ア..「(なのはって言ったかい?頼めた義理じゃないけど、お願いフェイトを助けておくれ)」

な..「(うん。まかせて!)」

ア..「(それと、翔。アンタにもお礼を言っておくよ。あの時フェイトを助けてくれてありがとう。)」

翔..「(いいって事よ。)」

こうして今後の俺達の予定が決まった。因みにアルフは俺が引き取った

第11話 無印編「さらなる高みを目指して」(後書き)

紅.. 「第11話でした。」

翔.. 「ついに俺は人間を超えたのか？」

紅.. 「みたいだな。何せ最強の拳魔を一人で倒したんだからな。」

翔.. 「・・・」

紅.. 「次回はなのは対フェイトです。」

翔.. 「次回も派手に行くぜ!!」

紅.. 「・・・お前は戦わないだろうが。」

第12話 無印編「全てを撃ち抜く星の光」

3人称 side

なのはとフェイトが戦うと決まってから2日後、翔たちはエイミイさんが作ったバトルフィールドにいた

な..「.....ここならいいよね。出てきてフェイトちゃん。」

なのはがそう言うと、フェイトが現れた

フェ..「.....」

ア..「(フェイト、もうやめようよ!これ以上あの女に協力していたら...)」

フェ..「(.....それでも、私はあの人の娘だから。)」

アルフが念話でフェイトを説得しようとしたが、フェイトは聞かなかった

な..「フェイトちゃんはどう、後には退けないし、私はフェイトちゃんに止まって欲しい。」

なのはは待機状態のレイジングハートに触れた

な..「きっかけはジュエルシード..」

レイ..『リリース、オールジュエルシード』

なのはがレイジングハートを構えると、今まで集めた全てのジュエルシードが出てきた

な..「だから、賭けよう..お互いが持っている全てのジュエルシードを。...それからだよ、全部..それから。私達の全てはまだ始まってもない..だから、本当の自分を始めるために。」

フェ..「.....」

な..「始めよう!..最初で最後の本気の勝負!..」

その言葉が合図になり、なのはとフェイトは戦いだした

くアースラく

エ..「戦闘開始かな...」

ク..「ああ。」

クロノとエイミィはアースラからなのはとフェイトの戦闘を見ていた

ク..「戦闘空間の固定は大丈夫か?」

エ…「うん。上空まで伸ばした2重結界に、戦闘訓練用のレイヤ―建造物。誰にも見つからないし、どんだけ壊してもだいじょ―ぶ！」

ク…「うん。」

クロノは笑って答えた

エ…「しかし、ちょっと珍しいね。クロノ君がこういうギャンブルを許可するなんて。」

ク…「なのはが勝つに越したことはないけど、勝敗はどう転んでも関係ないしね。」

エ…「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれてる間にフェイトちゃんの帰還先追跡の準備…と」

エイミィはキーボードを叩いて準備を始めた

ク…「頼りにしてるんだ。逃がさないでくれよ。」

エ…「了解！」

エイミィは笑顔で答えた

エ…「…でも、なのはちゃん達に伝えなくてよかったの？プレシア・テストロッサの家族と、…あの事故の事」

エイミィが暗い顔で言った

ク…「……勝ってくれるの越したことはないんだ。今は、なのは迷わせたくない。それに……」

エ…「それに？」

ク…「これは僕の予想だが、……恐らく翔はそのことを知っているかもしれない。」

エ…「翔君が！？……もしそうだとしたら、翔君は優しいんだね。」

ク…「ああ。」

そう言うときクロノはモニターを見た

（観戦側）

ユ…「……翔。翔の予想ではどっちが勝つと思う？」

翔…「解らない。二人の力はほぼ互角、勝敗を握るのは戦術だろうな。」

ア…「それにしても、なのは凄いな。魔道士になってまだ数か月しか経ってないんだろう？それなのにフェイトと互角に戦ってるなんて。」

アルフは驚いた風に言った

翔…「俺が教えたからな、主に戦闘訓練だけだ。」

ア…「成程ね。」

翔の返事にアルフは納得した

翔…「だけど、綺麗な光だよな。まるで空で踊っているみたいだ。」

翔は空中で激突している桜色の閃光と金色の閃光をみて言った（戦闘の光景は映画そのものです。B y 作者）

（時の楽園）

プ…「辛い目に合わせてしまったけど、あなたは今も世界中の誰よりも大切な…私の宝物」

プレシアはモニターから机にある写真を見て思った、そして机の上に1枚のカードに気が付いた

プ…「（これは、翔とかいう魔道士がくれたカード）」

プレシアはそのカードを手に取り、翔が言っていたことを思い出していた

翔…『落ち着いたらそのカードを持って（ルーマ・ゴールド）と唱えろ。探している答えが見つかるかもしれないぜ』

プ…「……ルーマ・ゴールド」

プレシアが呪文を唱えると、カードが光り出した

プ…「っ！？これは一体！？」

あまりのまぶしさにプレシアは目を瞑った。そして目を開けるとある光景を見ていた

プ…「この光景は……」

それは自分の本当の娘アリシアとピクニックをしている光景だった

プ…『アリシア、今度のお誕生日のプレゼント、何か欲しいものある？』

ア…『んーとねー……！あつ、私、妹が欲しい！』

プ…『あつ、え？』

ア…『だって、妹が居たらお留守番も寂しくないし、ママのお手伝いもいっぱいできるよ。』

プ…『そ、それはそうなんだけど。』

ア…『妹がいいー。ママ、約束』

そこで、プレシアの意識は戻った

プ…「……いつもそうね。いつも私は気づくのが遅すぎる。」

プレシアは涙を流しながら喋った

プ…「でも、此処であの子を受け入れたら、あの子は私と同じ罪を背負ってしまう。せめてあの子にだけは幸せに生きて欲しい。」

そう言いながら、プレシアは戦闘光景を再び見だした

く海上上空く

フェ…「はあっ！」

な…「ううっ！」

フェイトはバルディッシュを槍状に変え、なのはに攻撃をしたが、なのははシールドを展開してそれを防いだ。フェイトはなのはと一定の距離を置くと

フェ…「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今

導きの元撃ちかかれ、バルエル・ザルエル・ブラウゼル。」

呪文を唱え、大量の魔力球を形成した

な…「っ！！、っ！？」

なのは動こうとしたが、フェイトの設置したバインドで両手をとらえられてしまった

フェ…「フアランクス…撃ち砕けー！！」

フェイトの合図と共に大量の魔力弾がなのはに発射された

な…「ううっ」

なのははシールドを展開してその攻撃を防いでいる。フェイトは魔力球一つにして、なのはに向かって投げた

フェ…「スパーク、エンド！」

凄まじい轟音が辺りに響いた

フェ…「はあ、はあ、はあ。」

フェイトは一呼吸着くと、なのはの方を見た。そして驚愕した、なぜならなのはが立っているからである

フェ…「うう、うあゝ」

フェイトが魔力を放出してなのはに接近しようとしたが、右手、

両足にバインドが掛けられていた

フェ…「バインド……、いつ？」

な…「ディバイーン…バスター!!」

なのはは桜色の砲撃をフェイトに放った

フェ…「う、あああ……」

フェイトは空いている左手でシールドを張り、なのはの砲撃を防いだ

フェ…「あの子だって、もう限界のはず。これを……耐えきれば!」

そしてなのはの砲撃が止み、フェイトは一安心した。しかし、あ
ることに気が付いた、桜色の光が上空に集まっているからだ。フェ
イトが上を見ると、なのはが上空におり、巨大な魔力球を形成して
いた

レイ…『スターライトブレイカー』

な…「(使えきれずに、ばらまいちゃった魔力を、もう一度自分
の所に集める。)」

フェ…「収束、砲撃」

な…「(レイジングハートと考えた知恵と戦術、最後の切り札!)」

なのははレイジングハートを上に掲げた

な..「受けてみて、これが私の全力全開!!」

フェ..「っ!!」

な..「スターライト・ブレイカー——!!」

（観測地帯）

翔..「おいおい、いくらなんでもやり過ぎだろう。」

ユ..「ははは、確かに。」

ア..「フェイトー!？」

翔達はあまりの威力に笑うしかなかった

すると、気絶したフェイトが海に落ちて行った

翔..「フェイトっ!!」

翔はバリアジャケットを展開し

ゼロ…『ライトニングムーブ』

超高速でフェイトの所に移動し、フェイトを受け止めた

翔…「ギリギリ、セーフだな。」

な…「翔君！！何でフェイトちゃんをお姫様抱っこしてるんの！？」

なのはが大声で言った

翔…「うるせえ、この方が楽なんだよ。」

言い争っている

フェ…「……う……ん」

フェイトが目を覚ました

翔…「よう、気分はどうだ、フェイト？」

フェ…「翔？……そうか、私負けたんだね。」

翔…「……ああ。だけどいい試合だったぞ。」

翔は笑った

フェ…「／／／」

翔…「どうしたんだ？急に顔を赤くして？」

「フェ..「何でもないよ（翔の笑顔に見とれていたなんて言えない）」

すると、辺りが曇りだした

翔..「きたか。」

ゼロ..『そのようだな』

すると、翔達に向けて雷が落ちてきた

翔..「（今度は負けねえ!!）真・炎一閃!!」

翔は炎に過激気の力を加えた正拳を繰り出し雷を打ち消した

翔..「取りあえず、アースラに向かうぞ。ゴール・ルーマ・ルジュナ!!」

翔はこの場に居る全員をアースラに瞬間移動させた

第12話 無印編「全てを撃ち抜く星の光」(後書き)

紅..「第12話でした。」

翔..「ようやく無印も終わりに近づいてきたな。」

紅..「ああ。」

翔..「どうしたんだ・元気がないぞ。」

紅..「実はさ、なのは以外の小説も書こうか考え中なんだよ。」

翔..「へへへ。つで、今考えている作品はなんだ？」

紅..「バカテスで。シンケンジャーの要素でも加えようかな〜と考えているんだ。」

翔..「・・・いや、無理があるだろう年齢的に。」

紅..「そこは考えている。まあ、それより次回はフェイトの真実です。」

翔..「次回も派手に行くぜ!!」

紅..「いや、次回はシリアスな話なんだけど。」

第13話 無印編「涙」

翔 side

俺達はアースラに瞬間移動すると、ブリッジに移動した

リ…「お疲れさま。」

リンディさんが俺達に近づいてきた

リ…「あなたがフェイトさんね。初めまして。」

リンディさんは笑顔でフェイトに話しかけた

『総員王座に到着、目標を発見しました!』

俺がモニターを見ると、局員がプレシアを取り囲んでいた

『プレシア・テストロッサ。時空管理違反の容疑で逮捕します』

プレシアは名にくわん顔で玉座に座っていたが、数名の局員が部屋の後ろに移動したとき、その局員を睨みつけた

翔…「（これは、やばいな。）」

俺はこれから起きることに気が付きフェイトを移動させようとし

たが

局員が部屋の隠し扉を見つけてしまった

翔…「映像を切れ!!」

俺は叫んだが、既に遅かった

全員…「!!??」

そこにはアリシアが入ったカプセルが映されていた

フェ・な…「……」

『ぐあああああ』

カプセルの近くにいた局員が吹き飛ばされた

プ…『私のアリシアに近づかないで!』

プレシアが局員に魔力弾を放った

『う、撃てっ!!』

局員がプレシアに攻撃したが、プレシアの張った障壁に全て防がれてしまった

プ…『うるさいわね…』

プレシアは手を前に出した

リ…「っ！行けない、防御して。」

リンディさんの一言は無駄に終わり、玉座の間にいた局員全員に雷が落ちた

『ぐわああああ』

リ…「いけない、全員を送還して！」

リンディさんの命令で局員がアースラに転移された

フェ…「アリ…シア？」

プ…『たった9個のジュエルシードでは、たどり着けるかどうかは解らないけど、もういいわ、終わりにする。』

プレシアは誰かに言うように喋り出した

プ…『聞いている、フェイト。貴方は私の本当の娘じゃないわ。あなたはアリシアのクローンなのよ。』

フェ…「っ！？」

エ…「……最初の事故のときにね、プレシアは実の娘、……アリシア・テストロッサを亡くしているの。安全管理不良で起きた、魔動炉の暴走事故。……アリシアはそれに巻き込まれて。……その後、プレシアがおこなっていた研究は、使い魔を超えた人造魔道士の生成、そして死者蘇生の技術。」

エイミーさんが沈んだ声で話した

ク…「記憶転写型特殊クローン技術『プロジェクト・フェイト』」

プ…『そうよ、その通りよ。・・・フェイト、私は貴方を創り出した時、貴方をアリシアの替わりにしか見ていなかった。・・・でも、ある少年のおかげで私は大切なことを思い出せたの、・・・アリシアとの約束を。』

プレシアは顔を俺達の方に向けた

プ…『その約束を思い出した時、私は気づいたのアリシアの記憶を上げても、貴方はアリシアじゃない、貴方はフェイトだもの。貴方を私の娘、アリシアの妹と見たとき私の思いは変わったわ。・・・フェイト、今更誤って済む事じゃないけど、これだけは言わせて。私は貴方の事が大好きよ。』

プレシアは優しい顔で笑ってフェイトの言った

フェ…「・・・っ!!」

それを聞いたときフェイトは涙を流した

プ…『アルフ、これからもフェイトを支えてあげて。私の代わりに。』

ア…「プレシア・・・」

プ…『それから、椎名 翔、貴方もそこに居るんでしょう？貴方のおかげで答えが見つかったわ、ありがとう。』

そして、プレシアがどこから杖を取り出し、杖の柄で地面を叩くと、大量の魔法陣が出現した

エ…「ちょ、大変見て下さい！屋敷内に魔力反応多数！」

「魔力反応、いずれもAクラス！」

「総数、60、80…どんどん増えてきます！」

リ…「プレシア・テストロッサ、一体何をするつもり！？」

リンディさんがプレシアに聞いた

プ…『私達は、旅立つの。永遠の都、アルハザードへ！』

（その後展開はアニメ、又は映画通り by 作者）

ア…「翔、あんた知っていたのかい？」

アルフが俺に聞いてきた

翔…「……ああ。」

俺は少しの沈黙の、答えた

ア…「何で、何で言ってくれなかったのさ！！」

翔…「……言ったら、お前はどうか答えた？」

ア…「あたしの答えは決まってる！クローンだろうと、フェイトはあたしの最高のご主人だ！！」

翔…「そうか。・・・フェイト、ごめんな」

俺は泣いているフェイトに近づき、誤った

フェ…「ううん、翔は何も悪くないよ」

翔…「・・・フェイト、お前の母さんはアルハザードに行こうとしている。本当にあるかどうか解らない所に。・・・このままだと、お前の母さんはお前の手の届かない場所に行っちまう。」

俺は立ち上がり、バリアジャケットを纏った

翔…「此処で、泣いているか、それとも前に進むか。それはお前自身が決めろ！」

俺はリンディさんに近づいた

翔…「リンディさん、悪いが俺は先に行かせてもらう。」

リ…「ええ、構わないわ。直ぐにクロノもそっちに向かせるわ。」

翔…「なのは、もし来るなら、クロノと一緒にこい。いいな。」

な…「うん。」

俺はなのはの返事を聞くと、真剣な目になり

翔..「ゴール・ルジュナ!!」

時の楽園に瞬間移動した。悲しい運命を断ち切るために

第13話 無印編「涙」(後書き)

紅.. 「第13話でした。」

翔.. 「今回は決戦か。」

紅.. 「ああ。お前が暴れるぜ！」

翔.. 「マジかよ。俺はアバレンジャーじゃないんだがな。」

紅.. 「気にしない、気にしない！」

翔.. 「・・・それもそうだな。次回も派手に行くぜ!!」

第14話 無印編「時の楽園での戦い」

翔 side

俺が時の楽園に瞬間移動すると、大量の傀儡兵が待ち構えていた

翔..「随分と手荒い歓迎だなーおい。」

俺は傀儡兵の数を数えた

翔..「ざっと、30体ってところか。」

俺は両足のホルスターからディーマグナムを抜いた

翔..「さてと。・・・一気に行くぜ!!」

俺は地面を蹴り傀儡兵に向かって走り出した。俺の存在に気付いた傀儡兵は俺に向かってビームを放ってきたが

翔..「そんなのに当たるかよ!!」

俺は体を少しだけ動かしビームの嵐を避けながら近づいた

翔..「ゼロ、スフィア展開!」

ゼロ…『ああ。』

俺は10個のスフィアを展開し、

ゼロ…『ライティングムーブ』

そして、一瞬で傀儡兵の中心に移動し

翔…「乱れ撃つぜー!!」

ディーマグナムと、スフィアから魔力弾を一気に撃ち出し、30体の傀儡兵をハチの巣にした

翔 side end

なのは side

私はアースラのモニターで翔君の戦いを見ていた

ユ…「す、すごい。」

ア…「30体の傀儡兵を一瞬で倒した。」

ク…「な、なんて出鱈目な戦闘力だ。」

ユーノ君、アルフさん、クロノ君が翔君の戦いを見てそう言ったな..「やっぱり、翔君は凄いの。」

私は翔君の戦いを見て、そう思った。そして

な..「(いつか、私も翔君みたいになりたい)」

フェ..「...アルフ、私達も行こう。」

ア..「フェイト!?!」

フェイトちゃんの言った事にアルフさんが驚いた

フェ..「さっき、母さんは私に笑ってくれた。だけど凄い悲しい笑顔だった。私は母さんの本当の笑顔が見たい!だから、...私は母さんを助けに行く。」

ア..「フェイト...。私はフェイトの使い魔だ、ご主人さまの頼みならどこにだって行くよ!」

フェ..「ありがとう、アルフ。」

リ..「決まりね。」

リンディさんがクロノ君の方を向いた

リ..「クロノ執務管、フェイトさん達を連れて直ちに時の楽園に向かってください。」

ク…「はい、艦長。」

そう言うときクロノ君はブリッジを出ていた。私達は慌ててクロノ君の後を追ってブリッジを出た

なのは side end

翔 side

俺は入口にいた傀儡兵を全て倒した後、広間に向かった。俺が広間に着くとそこには入口と同じように大量の傀儡兵がいた

翔…「またかよ。」

俺はため息をついた。そしてディーマグナムをホルスターにしまい

翔…「ゼロ、シンケンマル セット」

ゼロ…『Set up』

腰に巻いているベルトが変わり、左腰にはシンケンマルが装備されていた。俺はバックリを開き黒いディスクを取り出し、シンケンマルにセットし、剣を抜くと右肩に担ぐように構えた

翔..「椎名 翔、参る！」

俺は傀儡兵に突っ込み、袈裟斬り、横一閃、斬り上げ・・・様々な斬撃を繰り出し傀儡兵を倒していった

翔..「面倒だ」

俺はシンケンマルにセットしたディスクを回し、

翔..「烈火大斬刀!!」

シンケンマルを巨大な刀に変え、獅子ディスクをセットした

翔..「はあっ!!」

俺は刀を横に振りまし、周りにいた傀儡兵を斬り倒した

翔..「これで終わりだ！」

俺は烈火大斬刀に炎を纏わせた

翔..「百火繚乱!!」

刀を振り降ろし巨大な炎を斬撃を飛ばし、残りの傀儡兵全てを倒した

翔..「ゼロ、駆動路の位置は解るか？」

ゼロ..『今、検索中だもう少し待ってくれ。』

翔…「了解！」

その時、後ろの扉が開き、なのは達が入ってきた

翔…「随分と遅かったな。」

俺は後ろを振り向きそう言った

な…「翔君!!」

フェ…「翔!!」

俺が振り向くと、なのはとフェイトが俺に抱き着いてきた

翔…「行き成り、抱きつくな!!」

俺が怒鳴っていると

ク…「君は、これだけの量の傀儡兵を一人で倒したのか!? しかも、一撃も喰らわずに!?!」

クロノが周りにある残骸を見て俺に聞いてきた

翔…「まあな。俺にとっちゃこれぐらい朝飯前だ!」

俺はなのは達をどかして、烈火大斬刀を右肩に担いだ

ア…「翔、それ重くないのかい?」

アルフが刀に指をさして聞いてきた

翔…「実際は重いんだけど、なれたら軽いぞ。」

俺がアルフの質問に答えると

ク…「よし、じゃあここで二手に分かれよう。僕はプレシア・テスタロッサに確保に向かう、フェイトとアルフは僕についてきてくれ。翔、なのは、ユーノは駆動路の封印を頼む。」

クロノがそう言う

ゼロ…『翔、検索が完了した。駆動路の位置は此处から12時の方向、角度60度、距離は三千だ!』

翔…「サンキュー、ゼロ。お前等少し離れてろ。」

ク…「君は一体何をする気だ!？」

翔…「見てれば解る!いいから離れてろ。」

俺はバックルを開き虎の絵が描かれたディスクを取り出し、烈火大斬刀にセットした。そして、刀を振り回し、

翔…「烈火大斬刀、大筒モード!!」

刀を砲台モードに変え、五枚のディスクをセットした。そして、ゼロが教えてくれた場所に構えた

翔…「虎・五輪弾! 成敗!!」

虎を模した砲撃を放ち駆動路を一瞬で封印（破壊）した

ク..「な、な。」

翔..「ほら、さっさと行くぞ！」

俺は烈火大斬刀をシンケンマルに戻し先に進もうとしたら

ク..「翔、それをこちらに渡せ！それは明らかにロストログアだ
！！」

翔..「ああん！！」

俺はクロノに殺気を飛ばした

ク..「っひ」

翔..「これは俺のものだ。それにこれからロストログアの反応でも出たのか？」

ク..「そ、それは。」

エ..『クロノ君、その刀からはロストログアの反応は出なかったよ。』

ク..「そんな、馬鹿な！？」

エイミィさんからの回答でクロノは驚いていた

翔..「とっとうと行くぞ！」

俺達は先を急いだ。その途中大型の傀儡が出現したが、火炎の舞を繰り出し一撃で両断した

翔 s i d e e n d

3人称 s i d e

時の楽園の最下層

プ…「誰かがきたみたいね。」

プレシアはモニターで駆動路が封印されたことを知った

プ…「私は、もう長くは生きられない。」

プレシアはアリシアの入ったポッドに触れた

プ…「ごめんねアリシア。こんなことになって。」

プレシアは涙を流しながらアリシアに謝った

プ…「フェイト、・・・貴方だけでも幸せになってね」

その時、扉が派手に爆発した

翔..「そう思うなら、最初からこんなことすんなよな。」

プレシアが振り返るとそこには翔がいた

プ..「椎名 翔。」

翔..「よう、あんたに会いたって奴を連れてきたぜ。」

翔が横に移動すると、そこにはフェイトがいた

フェ..「母さん。」

プ..「フェイト・・・如何してきたの。」

プレシアがフェイトを睨んだ

フェ..「私は、母さんを助けに来ました。」

プ..「っ!..!」

フェ..「さっき、母さんは私に笑ってくれた。だけど、私が見たかったのはあんな悲しい笑顔じゃない! 私は本当の母さんの笑顔が見たい!」

プ..「.....」

フェ..「だから、母さん一緒に帰ろう。」

フェイトはプレシアに手を差し出した

プ・・・・・フェイト、ありがとう。・・・でも、ごめんね。」

プレシアは杖を地面に叩こうとしたが

翔・・「おっと。」

いつの間にか翔がプレシアの傍におり、杖を掴んでいた

プ・・「あなた、いつの間に!？」

翔・・「逃げるなよ。」

プ・・「え？」

翔・・「生きる方が戦いだ! アリシアも、あんたのもう一人の娘も
そう思っているはずだぜ。」

翔の言葉にプレシアは涙を流した

その後、翔たちはプレシアとポッドに入ったアリシアを連れてア
ースラに戻った

第14話 無印編「時の楽園での戦い」(後書き)

紅.. 「第14話でした。」

翔.. 「なんでガンダムのセリフが出てるんだ？」

紅.. 「いやー、その方がいいかなーっと思って。」

翔.. 「まあ、いいか。」

紅.. 「次回で無印編は終了です。」

翔.. 「次回はそれなりに派手に行くぜ！」

第15話 無印編「また会うまで」

3人称 side

翔達がプレシアとアリシアをアースラに連れてきた後、プレシアとフェイトはリンディに連れられて、会議室でこれからの事を話していた

リ..「では、これからの事をお話します。フェイトさんはこの事件の重要参考人なので、暫くの間、事情聴取を受けてもらいます。」

フェ..「・・・母さんはどうなるんですか？」

ク..「プレシアさんは次元震を引き起こそうとした張本人、僕たちも目を瞑ることはできないんだ。」

フェ..「母さん。」

フェイトは寂しそうな目でプレシアの方を見た

プ..「いいのよフェイト。母さんは大丈夫だから。」

その時

翔..「お邪魔しま〜す。」

翔が会議室に入ってきた

ク..「翔、悪いが出て行ってくれないか。今大事な話をしているんだ。」

クロノが翔に言った

翔..「そう言うわけにもいかないんだよ。リンディさん、どうにかできないんですか？例えば書類を偽造するとか、嘘の報告を書くとか」

ク..「そんなこと出来るかー!!」

翔..「あつそ。。。じゃあ、こっちも切り札を切らせてもらう。」

翔は懷からCDディスクを取り出し、リンディさんに渡した

リ..「翔君、これは？」

翔..「俺の父さんから渡されました。何かあった時にリンディさんに渡せって。」

リ..「貴方のお父さんに？悪いけど、中身を見させてもらうわね。」

リンディさんはCDを機械に入れ、中に入っていたデータをモニターに映した

リ..「こ、これは!？」

モニターに表示されたデータを見てリンディさんは驚いていた

ク..「艦長、どうしたんですか？ってこのデータは！？」

そこにはプレシア・テストロッサが起こしたと思われる事件の真犯人と証拠、そして管理局員の犯罪データと証拠が入っていた

リ..「翔君、貴方のお父さんのお名前は？」

翔..「鷹介、椎名 鷹介です。」

リ..「じゃあ、貴方は鷹介さんと七海さんの息子！？」

リンディさんが更に驚愕している

ク..「艦長、知り合いなんですか！？」

リ..「ええ、鷹介さんと七海さんは管理局にある特殊部隊ファイヤースクワットの魔道士なの元だけどね。私もよく二人に協力してもらっていたわ。」

ク..「ファイヤースクワットって、あのファイヤースクワットですか！？隊員一人一人が執務管と捜査官の権利があり、管理局最強の部隊！！」

リ..「ええ、そうよ。」

ク..「じゃあ、このデータは・・・」

リ..「本物でしょうね。」

翔..「後、父さんから伝言があります。『これで貸しました一つ』
だそうです。」

リ..「・・・解りました。クロノ、報告書にはプレシア・テスト
ロッサは危険なジュエルシードを回収するために動いていたと書い
と書いて、後、次元震についてはプレシアさんが回収したジュエル
シードが暴走したと書いて書いて。」

ク..「か、母さん!？」

リ..「申し訳ないんだけど、私も鷹介さんと七海さんの二人には
かなわないのよ。それに二人には借りがいっぱいあるのよ。」

ク..「わ、解りました。」

クロノは納得がいかなかったが自分の母親の頼みなので渋々引き
受けた

プ..「・・・っは、あの、私はどうなるんですか？」

リ..「フェイトさんと同じで暫くの間事情聴取を受けてもらいま
す。」

プ..「でも、私は前に事件を・・・」

リ..「それなら問題はありません、此処にあの時の事件の真相と
真犯人、証拠もありますから。」

リンディはデータの入ったCDを見せた

プ..「あ、ありがとうございます。」

リ..「お礼なら私ではなく、翔君に言ってください。」

プレシアとフェイトは翔の方を向いた

プ..「翔、本当にありがとう。」

フェ..「ありがとう、翔。」

翔..「お礼はまだ言わないでくれ、まだ終わってないからな。」

フェ..「?どういうこと?」

翔..「直ぐに解る。その前に、プレシアさんこれを飲んでください。」

翔はプレシアに飲み薬を渡した

プ..「これは?」

翔..「貴方の病を治す薬だ。取りあえず飲んでくれ。」

プ..「え、ええ。」

プレシアは蓋を開けて薬を飲んだ。すると

プ..「・・・体が軽い、それに今まで感じていたものが無い。本

当に治ったわ！」

翔..「まず一つはクリアっと。リンディさん、かの艦に広い場所
ってありますか？」

リ..「あるけど、何をするの？」

翔..「これから言うこと、起こることは他言無用でお願いします。
」

翔がそう言うと、3人が頷いた

翔..「今から、アリシアを生き返らせる。」

3人..「ええええええー！？」

プ..「本当に、本当にアリシアを生き返らせてくれるの！」

翔..「ええ。だけど、死者蘇生は何回もしませんよ、それは命を
軽く見ることにつながりますから。」

プ..「・・・ええ、解ったわ。」

翔..「そんじゃあ、行きましようか。」

翔達は会議室を出て、訓練場に向かった

訓練室

翔.. 「何で、全員が此処に居るんだ？」

そこにはなのは、クロノ、アルフ、ユーノ、エイミィさんもいたな.. 「どうやるか気になるの。」

ク.. 「生き返るとは思わないが、一応な。」

翔.. 「はあゝ。」

翔はため息をついた

翔.. 「見るのはいいが、他言無用だからな。特にクロノお前はな
!!」

ク.. 「何で僕だけなんだ!？」

翔.. 「.....お前が一番口が軽そうだから。もし言ったら、俺のサンドバックになってもらうからな。」

ク.. 「.....解った。」

クロノは少し想像してしまう、顔が青くなった

翔.. 「さてと、プレシアさん。アリシアをポッドから出してください。それと服も着させてやってくれ。」

プ..「解ったわ。」

そう言う、プレシアはポッドからアリシアをだし、服を着させた

翔..「後は、これを飲ませるだけなんだけど、どうすればいいかな。」

翔が考えていると

ア..; 「口移しで飲ませればいいんじゃないか。」

アルフがそう言う

な・フェ..「それはダメー!!」

なのはとフェイトが大声を上げた

翔..「しかし、それしか方法が無いんだよな。」

フェ..「だったら、私が飲ませる。」

フェイトが手を挙げて言った

翔..「あゝ、それ無理。作った本人が飲ませないと効果が発動しないんだよ。」

フェ・な..「そんな〜。」

翔..「・・・まあ、冗談はここまでにしてっ。」

全..「冗談だったの!？」

翔..「まあな、さてと。」

翔は懷から注射器を取り出した

翔..「まずは、これをアリシアに注入して。」

翔は注射器をアリシアに刺し、中に入っていた薬を注入した

翔..「・・・よし、心臓が動き出したな。後はこの薬を飲まして
つと。」

翔は薬をアリシアの口に入れ、暫くすると

ア..「うゝゝん。」

アリシアが目を覚ました

プ..「アリシア！」

プレシアは涙を流してアリシアに抱きついた

ア..「ママ？何で泣いてるの？」

翔..「さて、邪魔者は退散しますか。」

翔はなのはたちを連れて、訓練室を出た。家族水入らずにする為に

それから数日後、翔達は海鳴市に戻り、いつも通りに生活していた。そんなある日

な..「翔君！」

なのはが翔の部屋に入ってきた

翔..「何だよこんな朝っぱらから、もう少し寝かせてくれよ。」

な..「聞いて、さっきリンディさんから連絡が入って、一度だけフェイトちゃん達と会えるって。」

翔..「そうか、それはよかったな。じゃあ、お休み。」

翔は再び寝ようとしたが

な..「翔君も一緒に行くの!!」

翔..「解った、解った、行くから、耳もとでぎゃあ、ぎゃあ騒ぐな。」

海鳴市公園

な..「フェイトちゃん、アリシアちゃん。」

フェ..「っあ。」

ア..「やっときた。」

翔..「そんなに急ぐと、こけるぞ。」

ク..「僕たちはあっちに行ってる、ゆっくり話すといい。」

翔..「俺もそっちに行く。」

翔と、クロノはプレシア達の所に向かった

な..「何でだろう、会ったらいっぱいお話ししようと思っていたんだけどなんていえないのか、解らない。」

フェ..「うん、私も。・・・今日はね返事をしようと思って。」

な..「返事？」

フェ..「そう、あの時、君は『友達になりたいんだ』って言うてくれた返事」

な..「うん」

フェ..「でも、何て答えたらいいいのか、解らないんだ。」

な..「簡単だよ、ただね名前を呼ぶの。ただそれだけ。」

フェ..「名前を呼ぶ。翔が言ったことと同じだね。」

な..「うん、そうだよ。私はなのは、高町なのはだよ。」

フェ..「な・・・のは。」

な..「うん」

フェ..「なのは。」

な..「うん、うんうん。」

ア..「勿論、私も友達だよね、なのはちゃん。」

な..「うん、勿論なの。」

プ..「良かったわね、フェイト、アリシア。」

翔達は遠くからなのは達の様子を見ていた

翔..「プレシアさんはこれからどうするんだ？」

プ..「リンディさんのから本局で働いてみないかって、誘われてるわ。」

翔..「そっか。」

プ..「翔、本当にありがとう。アリシアを生き返らせてくれて、そして私の過ちを正してくれて。」

翔..「気にしないでくれ。その代りフェイトを大切にしろよ。」

プ..「ええ、勿論よ。」

すると、クロノが3人の方に行き

ク..「すまないが、そろそろ時間だ。」

フェイト達は転移魔法陣に乗った

な..「フェイトちゃん、アリシアちゃんまたね。」

フェ..「うん、また。」

ア..「またね、なのはちゃん、翔君。」

翔..「ああ。」

そして、フェイト達はアースラに転移した。こうして俺達の最初の戦いは幕を閉じた

第15話 無印編「また会うまで」(後書き)

紅.. 「第15話でした。」

翔.. 「タイトルがドラゴンボールみたいだな。」

紅.. 「それは言わないでくれ。」

翔.. 「それしか思いつかなかったのか？」

紅.. 「……まあな。」

翔.. 「ドンマイ。」

紅.. 「ありがとよ。次回は別荘での話です。」

翔.. 「次回も派手に行くぜ！」

第15話 「翔の休日」

翔 side

フェイト達との再会から2日後の休日、俺はゼロの整備と修行をするために別荘に入った。そこで、俺は信じられないものを見た

「……………」

翔..「……………何でここにユニゴルオンがいるんだ？」

ユ..「ヒヒッーン」

翔..「うん？手紙？一体誰から。」

俺はユニゴルオンについていた手紙を取り、読み始めた

『久しぶりじゃのう、翔。わしじゃ神じゃ。この手紙を読んでい
るということは無事にユニゴルオンと会えたようじゃの。そのユニ
ゴルオンはわしからお主へのプレゼントじゃ、大事に育てるのじゃ
ぞ。それとお主の整備室に戦隊の変身できるアイテムを送っておい
たのじゃ、有効活用するように。ではさらばじゃ。』

神より

翔..「マジで？」

俺は急いで整備室に向かった。部屋に入ると、大量の変身アイテムがあり、俺は頭痛を起こした

翔..「こんだけのアイテムをどう使えって言うんだよ？」

ユ..「ブルルル」

俺が悩んでいると、ユニゴルオンが整備室に入ってきた

翔..「あ、ごめんな。無視しちゃって。改めてよろしくなユニゴルオン。」

俺はユニゴルオンを撫でた

ユ..「ブルル」

翔..「さて、ゼロの調整でもするか。」

俺は待機状態のゼロを機械に入れて、調整を始めた

翔..「いやゝ自動って楽だねゝ。・・・バリアジャケットのイメージ変えようかな。このままだと、ティアナと被るからな。でも、どうしようかなゝ。・・・（ちゝん）うん、これでいいかな。」

新しいバリアジャケットのイメージが出来た俺は、機械からゼロを取り出し、設定の変更を始めた

翔..「よし、ゼロ、セットアップ！」

ゼロ…『S e t u p』

俺はゼロを起動して、新たなバリアジャケットを纏った。俺の新たなバリアジャケットは白いベストが赤（イメージはシンケンジャーで丈瑠がよく来ているもの）に変わり、ベルトがシンケンジャーのバックル（シンケンマル無し）に変わった

翔…「よし、こんなもんだろう。」

俺は服を確認して一つ思った

翔…「俺の元いた世界のアニメデジモンセイバーズのマサルそっくりの服装だがまあ、いいか。」

俺はバリアジャケットを解除した

翔…「取りあえず、飯にでもするか。修行はその後だな。」

俺はキッチンに向かい昼食を作り食べた。勿論ユニゴルオンと一緒に食べたぜ、あいつは草を食べたけどな

翔…「さて、始めますか。」

俺はバリアジャケットを展開し、更に3拳魔の全員を出した

翔..「つふ。」

俺は拳を構えた。辺り一帯が静寂になった

翔..「行くぜ!!」

俺は地面を蹴り3拳魔に突撃した

翔..「はあ!、せい!」

俺は正拳、回し蹴りを繰り出し攻撃したが、ことごとく避けられた

翔..「このー」

後ろ回し蹴りを繰り出したが、マクに止められ、俺はカタとラゲ
クに攻撃され体勢を崩した

翔..「があっ!」

マク..「ふん!」

その一瞬の隙にマクの攻撃を受け俺は吹き飛んだ

翔..「やっぱ、3拳魔を同時に相手をするのは無理があったか?・
・だけど、これを持ち越えたとき、俺は更なる高みに上れるはずだ
!」

俺は立ち上がり3人を睨んだ

翔..「まずは、やっかいな鷹からだな。」

俺は指で空中に『縛』の文字を書きマクとラグナの動きを封じた
翔…「『縛』の文字からに俺の魔力を加えた強化版だ。そう簡単
には抜けられないぜ！」

俺は空にいるカタを睨んだ

翔…「シンケンマル、セット」

ゼロ…『Set u』

俺の右手にシンケンマルが現れた

翔…「参る!!」

俺は地面を蹴り、空中に飛ぶと、更に空気を蹴り、カタの背後に
移動した

翔…「はあっ！」

俺はシンケンマルを振りおろしカタに攻撃した。カタはそれを避
けると、羽の形をした短刀を複数だし、俺に投げてきた

翔…「っち。」

俺はシンケンマルを振るいその短刀を全て撃ち落とした

翔…「これならどうだ！」

俺は左腿のホルスターからディーマグナム02を抜き、カタに向かつて魔力弾を放った。カタはそれを巧みに避けたが

翔…「隙あり！」

俺はディーマグナムをしまうと左手でシンケンマルを持ち、右手に炎を纏わせた

翔…「真・炎一閃！！」

そして、そのまま正拳を放ち、カタを地面に吹き飛ばした

翔…「まずは一人！」

そう言うと、俺はラグナとマクの方を見た。二人は俺の『縛』をほども俺に近づいていた

翔…「っふ」

俺はシンケンマルで二人の攻撃を防ぐと、回し蹴りを繰り出しマクを吹き飛ばした

翔…「はあっ！！」

更にラグナに向かって刀を振り下ろしたが、ラグナは体をジェリィのようにして、俺の斬撃を受け流した

翔…「やっかいな、能力だな。ならこれでどうだ！！」

俺はバックルから獅子ディスクを取り出し、シンケンマルにセッ

トし、ディスクを回転させ刀に炎を纏わせた

翔..「シンケンマル・火炎の舞!!」

そして、袈裟切り、横一閃を放ちラグナにダメージを与えた

翔..「これで、終わりだ! マージ・ゴル・マジカ!!」

呪文を唱えシンケンマルを上に掲げると、さっきとは比べ物にならないぐらいの炎が灯った

翔..「ブレイジングストーーーーム!!」

剣を振り下ろすと、巨大な炎の竜巻が起こり、ラグナを包み込んだ

翔..「チェックメイト」

俺が後ろを向き、そう言うのと爆発が起こった

翔..「後、一人!!」

俺はマクに向かって走りだした

マクは怒臨気で出来た気弾を飛ばしてきたが

翔..「はあああああ!!」

俺はシンケンマルでそれを斬りながらマクに近づいた

翔..「シンケンマル、解除」

ゼロ…『リリース』

俺はシンケンマルを消すと、地面を力いっぱい蹴り、一瞬でマクの目の前に移動した

翔…「おらあああああ」

俺はラッシュを繰り出し、マクに攻撃した

翔…「これで止めた！一撃必殺！真・ゴットハンド！！」

魔力と過激気を纏わせた拳を放ち、マクの体を打ち抜いた

俺は拳を抜き、少し離れ、

翔…「俺の・・・勝ちだ！！」

そう言うと、マクが爆発した

翔…「はあ、はあ・・・。か、勝った。」

俺は地面に倒れた

翔…「やっぱ、三拳魔は強いわ。・・・もっと強くないとな。大事なものを守り通すために。」

こうして、俺の休日が終わった

第15話 「翔の休日」 (後書き)

紅.. 「第15話でした。」

翔.. 「ZZZZZ」

紅.. 「どうやら、翔は疲れて眠っているようだな。・・・次回からA、S編です。こういう風な展開にしようか迷っていますが。頑張って書こうと思います。」

翔.. 「次回も派手に行くぜ!!」

紅.. 「起きた!」

翔.. 「ZZZZZZ」

紅.. 「寝言か——!!」

第17話 A・S編「新たな戦いの始まり」

翔 side

プレシアさんの事件から数か月、俺は別荘でゴーカイジャーの変身アイテムモバイレーツとレンジャーキーを作成しながら生活していた。勿論日々のトレーニングも忘れてはいない。そんなある日、俺は母さんに頼まれて隣町に買い物に来ている

翔..「つたく、何で隣町のスーパーまで行かせるかねー母さんは。

俺が文句を言っていると

ゼロ..『仕方あるまい、七海は別のスーパーの特売セールに行ったんだからな。』

待機状態のゼロが念話で俺に話しかけてきた

翔..「(それでも、こんな時間帯に子供一人で行かせるか普通?)

ゼロ..『(お前なら問題ないだろう? 絡まれても相手を瞬殺で倒せるんだから)』

翔..「(確かにそうだけだよ)」

その時、

は..「あのく、ちょっとええですか？」

誰かに声を掛けられた

翔..「うん？」

俺は声のする方に振る向くと、車いすに座っている、女の子がいた

は..「ちょっと、名前を確認させてもらってもええですか？」

翔..「俺の名前？俺は椎名 翔だけど。それがどうかしたのか？」

は..「やっぱり、翔君や♪久ぶりやな。」

女の子が笑顔で言った

翔..「どこかで会ったか？」

は..「えええ！？忘れてもうたんか！？以前、私の車いすのタイヤが溝に嵌まってた時、助けてくれたやないか。」

ゼロ..『（翔、あの時の子じゃないか？4月の時の）』

翔..「ああ。あの時の！」

ゼロに言われ、俺は思い出した

は..「思い出してくれたんか！」

翔..「ああ。元気そうだな。っで、隣の人は誰なんだ？はやての母親か？」

は..「違うで。彼女はわたしの遠い親戚の人や。」

「初めまして、シャマルです。」

翔..「椎名 翔です。よろしく。」

は..「翔君、今時間あらへんか？あの時のお礼がしたいやけど。」

翔..「悪い、今お使いの最中なんだよ。また今度な。」

は..「そっか、ならしゃあないな。」

はやての顔が少し暗くなった

翔..「.....」

俺はポケットから紙を取り出し、もっていたペンで番号を書いた

翔..「ほれ。」

そして、それをはやてに渡した

は..「これは？」

翔..「俺の携帯の番号だ。いつでも電話して来い、話し相手になつてやるよ。」

は..「ありがとうな。」

はやてがものすごい笑顔で俺にお礼言った

翔..「気にすんな。じゃあな。」

そう言うのと、その場を離れた

それから、数時間後

翔..「すっかり、遅くなっちゃったな。」

俺は家に向かって歩いてしていると

翔..「うん？」

俺は魔力を感じて歩くのを止めた、すると

翔..「結界か。」

結界が張られた。そして、紅いゴスロリの服を着た女の子、騎士のような恰好をした女性、そしてアルフに似た雰囲気を持つ男性が俺の前に現れた

翔..「・・・あんた達がこの結界を張ったのか？」

「そうだ。」

騎士の恰好をした女性が答えた

「・・・此奴の魔力、さっき蒐集した奴より大きい。」

「少年、悪いがお前の魔力を貰うぞ。」

翔..「はぁ？言ってる意味が解らないんだが。」

「とにかく、てめえは私達に魔力を渡せばいいんだよ！」

ゴスロリの女の子が俺に言った

「・・・シグナム、ヴィータ、此処は俺がやろう。お前たちの武器ではあの子が死ぬかもしれないからな。」

翔..「はぁ？お前何言って!!！」

「・・・許してくれ」

男性が俺の前に来、俺を思いっきり殴り飛ばした

翔..「おあああああ!!！」

俺はそのまま壁に衝突してしまった

翔 side end

3人称 side

「……………」

男性は吹き飛んだ翔の場所を見ていた。

シ…「ザファイラ、いくらなんでもやり過ぎだ。」

シグナムがザファイラに近寄りそう言った

ザ…「…………俺も今そう思った。」

ヴィ…「取りあえず、魔力を蒐集しようぜ。」

ヴィータがそう言った瞬間、煙の中から大量の魔力弾が飛んできた

ザ…「っ!!！」

シ…「何!？」

ヴィ…「この!!！」

3人はバリアを展開し、その魔力弾を防いだ

翔…「あゝ、死ぬかと思った。」

煙の中からバリアジャケットを展開し、両手にディーマグナムを
持った翔が出てきた

シ..「つな！？無傷だと。それにあればバリジャケットとデバイス、貴様、魔道士だったのか！！」

翔..「まあな。さて、続きと行こうか！！」

翔はディーマグナムを3人に向けた

翔..「シュート！！」

そして、引き金を引き魔力弾をザフィーラに乱射した

ザ..「ぐうおっ！」

全ての魔力弾が当たり、ザフィーラが爆煙に包まれた

シ..「はあああああ！！」

ヴィ..「おらああああ！！」

その時、横からシグナムとヴィータが接近し武器を翔に振り降ろした

翔..「甘い！！」

翔はその攻撃を両手に持ったディーマグナムで受け止めた

ヴィ..「そんな！？」

シ..「我々の攻撃を受け止めただ！？」

翔…「……驚いている暇あるのか？隙だらけだぞ。」

翔は腕をクロスさせ（SEED DESTINYのストライクフリーダム用に）魔力弾をヴィータとシグナムに放った

ヴィ…「うわぁー！！」

シ…「くううう！！」

翔…「……」

翔はそのままシグナムに接近し2丁のディーマグナムを腹に叩き込んだ

シ…「があっ！！」

翔…「全弾持つて行け！！」

ゼロ距離で大量の魔力弾をシグナムに撃ち込んだ

シ…「ぐうああああ」

ゼロ距離で魔力弾を喰らったシグナムは吹き飛び、そしてゆっくりと地面に倒れ込んだ

ヴィ…「シグナム！！この野郎——！！」

ヴィータは翔に突っ込んできたが

翔…「っふ！」

翔は回し蹴りを繰り出し、ヴィータを元いた場所に吹き飛ばし、ディーマグナム01を向けた

翔…「レールガンって知ってるか？」

翔はヴィータに言った

翔…「レールガンは物体を電磁誘導によってより加速して撃ち出すんだ。……こんな風になー！」

翔のディーマグナム01に電気が灯った

翔…「シュートー！」

ディーマグナム01から電磁誘導によって、より速くなった魔力弾がヴィータに放たれ、ヴィータに当たり、吹き飛ばした

ヴィ…「うわああああー」

ヴィータはそのまま壁に激突して意識を無くした

ザ…「ヴィータ！シグナムー！」

ザファイラがシグナムとヴィータを回収しようとしていた

翔…「……あれだけの魔力弾を喰らって無傷とは。驚いたぜ。」

ザ…「我は盾の守護獣、あれぐらいの攻撃では倒れん。」

翔..「盾ってことは防御には自信があるって事か。」

ザ..「そうだ。」

翔..「・・・っで、どうするんだ？まだ俺と戦う気か？」

ザ..「・・・本来ならそうするところだが、此処は引かせてもらう。」

翔..「俺が逃がすと思ってるのか？」

翔はディーマグナムをザファイーラに向けた

ザ..「・・・頼む。」

ザファイーラがそう言うのと、転移魔法陣が展開された

翔..「っ！もう一人仲間がいたのか！？」

翔が引き金を引こうとした瞬間、ザファイーラ達は転移した

翔..「っち、逃がしたか。」

翔はディーマグナムをホルスターに閉まった

翔..「だけど、気になるな。あの子が言っていたこと。俺と戦う前に誰かと戦っていたのか？でも一体誰と？」

ゼロ..『翔、そんなことより早く帰った方がいいんじゃないか？』

翔..「しまった!?!このままだと母さんに殺される。」

翔は買い物袋を持つ急いで家に帰った

第17話 A's編「新たな戦いの始まり」(後書き)

紅.. 「第17話でした。」

翔.. 「今回は銃だけかよ。」

紅.. 「たまにはいいんじゃないのか。」

翔.. 「そうだけどよ、俺の真必殺パンチを使ったかったんだよ。」

紅.. 「その名前は？」

翔.. 「その名も・・・」

紅.. 「喰らえ、ペガサス流星拳！！」

翔.. 「があああああ。」

紅.. 「っふ、悪は滅びた。」

翔.. 「勝手に悪役にするな、喰らえ、流星拳」

紅.. 「なんの。」

翔.. 「次回も派手に行くからな！！」

紅.. 「隙あり、ペガサス彗星拳！！」

翔.. 「うわあああああー」

第18話 A's編「翔は超人！？いや、ただの人間だ」

翔 side

襲撃後、俺は急いで家に向かった。現在は家の玄関前で立っている

翔..「.....」

ゼロ..『どうした？入らないのか？』

翔..「入りたいんだが、家の中からもない威圧感と魔力を感じるんだ。」

俺は冷や汗を大量に流している

ゼロ..『翔、死ぬなよ』

翔..「ああ。」

俺は玄関のドアを開けた

翔..「た、ただいま。」

俺がドアを開けると

七..「.....(ぎゅぎゅぎゅぎゅ)」

スーパーサイヤ七海がいた

翔..「えーと、遅くなってごめんなさい。」

俺は取りあえず、誤った

七..「何でこんなに遅くなったの？」

翔..「実は家に向かつてる途中で魔道士3人に襲われまして。」

七..「っで、それを相手していたら遅くなったと？」

翔..「はい。」

七..「・・・まあ、許してあげるわ。あんな時間帯にお使いを頼んだ私にも責任があるしね。」

翔..「母さん。」

七..「取りあえず、お風呂に入りなさい。寒かったでしょう？夕飯はその後でね。」

翔..「・・・おう」

俺は元気よく答えた

その後、風呂に入り、夕飯を食べ、部屋でゴロゴロしていると、魔法陣が展開され、ユーノが現れた

翔..「ユーノ？戻ってきてたのか？っか何で俺の部屋に轉移し

てきたんだ？」

ユ…「話は後、取りあえずついてきて。」

翔…「何処に？」

ユ…「時空管理局の本局だよ。」

ユーノは俺の手を掴むと、転移魔法陣を展開した

翔…「おい、まだ行くなんて言っていないぞ！」

俺の言葉を見殺してユーノと俺は本局に転移した

〈本局・デバイスルーム〉

ユ…「皆、お待たせ。」

ユーノはデバイスルームにいた全員に挨拶をした

翔…「まったく、人の話は最後まで聞けっの。」

俺はユーノに文句を言った

フェ・ア…「翔！！」

すると、フェイトとアリシアが俺の腕に抱きついた

翔..「久しぶりだな、フェイト、アリシア元気にしてたか？」

フェ..「うん。」

ア..「勿論。」

な..「翔君、私は？」

翔..「お前はいつもあってるだろうが。・・・それにしても、なのは、フェイト、お前等何でそんなに怪我してるんだ？」

フェ..「そ、それは・・・」

ク..「二人は所属不明の魔道士と交戦して怪我を負ったんだ。」

クロノが二人の代わりに答えた

翔..「成程。これで、あの3人が言った事が解った。俺と戦う前はなのは達と戦っていたってことか。」

ク..「俺とって!?!翔、君も襲撃されたのか!?!」

翔..「ああ、買い物帰りにな。まあ、逆に追いついたけどな。」

フェ..「3人で事は、一人で戦ったの!?!」

翔..「おう。戦闘記録を取ってある。見るか?」

ク..「頼む!」

翔…「了解、ゼロ！」

ゼロ…『了解した。』

ゼロから俺の戦闘映像が映された、俺の戦闘を見て、なのは達は

ク…「ゼロ距離からあれだけの魔力弾を喰らわせるとは・・・」

アル…「あたしもアレ一度喰らったことあるけど、死ぬかと思ったよ。」

ア…「すごい、銃でハンマーと剣を受けとめてる。」

フェ…「一人捕まえるのあんなに苦労したのに。それを一瞬で倒すなんて」

な…「なんか、特訓の事思い出しちゃった。」

ユ…「あれは地獄だったよね。」

それぞれが、感想をいい一つの結論に至った

全…「翔（君）は本当に人間？」

翔…「人間だ！・・・それより、二人のデバイスは随分とボロボロだな。」

俺は待機状態のレイジングハートとバルディッシュを見てそう言
った

翔..「・・・それにしても、何だこの無茶苦茶なデータは？これじゃ、修復するのに時間が掛かり過ぎるだろうが。」

俺はキーを叩き、新しいプログラムを構築した

翔..「これでいいだろう。」

ク..「翔、君はプログラミングもできるのか!？」

翔..「出来るのも何も、デバイス作るのに比べれば、楽なもんだぜ。」

ク..「デバイスを作るよりもって、まるでデバイスを作れるように聞こえるんだが。」

翔..「作れるぜ。だって、ゼロを作ったのは俺なんだから。」

全..「ええええええー!？」

全員が大声で叫んだ。その時

プ..「どうしたの皆？そんあ大声出して？」

プレシアさんがデバイスルームに入ってきた

フェ..「母さん、翔は自分でデバイスを作ったんだよ!？驚くに決まってるよ!!!」

プ..「あら、それは凄いわね。」

プレシアさんはそんなに驚いていなかった

ア..「ママ、驚いていないね。」

プ..「だって、アリシアを生き返らせてくれたのよ。それだけの力があるならデバイスも作れるのは当たり前だと思ってね。」

フェ..「確かに、そうかもしれないね。」

プ..「それより翔、このデータを見てくれないかしら？」

プレシアさんはデータをディスプレイに表示した

翔..「これは、デバイスの設計図？」

プ..「ええ、アリシアのデバイスを作ってあげようと思って。」

翔..「形状はバルディッシュと同じ、違うところは接近用のフォームが鎌じゃなく槍って所か。」

プ..「そうよ。」

翔..「でも、未完成なんだろう？」

プ..「そうなのよ。アリシアが『形状はフェイトとは違うものがない』って言うものだから。」

俺達が話していると、

ク..「プレシアさん、フェイトそろそろ時間だ。」

プ..「解ったわ。」

フェ..「うん。」

翔..「どっか行くのか？」

ク..「これから、ある提督と面会の予定なんだ。そうだ、君たちも来るといい。」

翔..「パス。」

ク..「即答だな。」

（それから30分後）

クロノ達が戻ってくると、俺達は本局の一室で今後の予定を決めていた

リ..「さて、アーススタッフの皆。私たちの任務はロストログア閨の書の搜索、および魔導師襲撃事件の捜査です。しかし、アースは今整備中なので動かせません。そこで事件の中心地なのはさん達の世界に臨時の本部を置きます。・・・ちなみに、場所はなのはさんの家の近くね。」

な..「ええええええー!？」

はあ、またやつかいなことになってきたな

第18話 A S編「翔は超人!? いや、ただの人間だ」(後書き)

紅.. 「第18話でした。」

翔.. 「それにしても、母さんは怖かった。」

紅.. 「スーパーサイヤ人になってたもんな。」

翔.. 「アレに勝てるのはこの世には存在しないと思うな。」

紅.. 「……同感だ。」

第19話 A' S編「新しい牙」

翔 side

後日、フェイト達は海鳴市に引っ越してきた。今日は引っ越しの日なのだが、俺は別荘におり、悩んでいた

ゼロ..『どうしたんだ、翔？今朝から悩みっ放しだが。』

翔..「実は、新しい武器を作ろうかなと思ってな。」

ゼロ..『どんな武器なんだ？』

翔..「俺の戦闘スタイルは基本的に、銃、剣、拳だろう？銃と拳は問題ないんだけどよ、剣に問題があるんだよ。」

ゼロ..『どんな問題だ？』

翔..「基本的にその剣の技しか使えないという問題だ！」

ゼロ..『...それは仕方が無いんじゃないのか。』

翔..「そうなんだけどよ。できれば剣は剣で一つに纏めたいんだよ。」

俺がどうしようかと考えていると

ゼロ…『なら、お前専用の剣を作ればいいんじゃないのか?』

翔…「俺、専用の?」

ゼロ…『そうだ。お前が剣を作り、その剣に技のデータを入れる』

翔…「・・・成程、それはいい案だな。・・・じゃあ早速、剣の設計に取り掛かるか。」

俺はディスプレイを展開し、設計を始めた

翔…「形状はやっぱ、日本刀がいいよね。・・・だとしたら、BLEACHの天鎖斬月をモデルにして。・・・後、烈火大斬刀と恐竜丸に変化するシステムも取り入れて。・・・よし、設計図はこれで完成だ。」

俺は設計図を見て頷いた

翔…「我ながら、いい出来だと思うよ。さてと、作りますか!」

俺は制作作業を開始した

（それから3日後）

翔…「出来た。」

俺は待機状態のデバイスを機械から取り出した

ゼロ…『待機状態はブレスレットか。』

翔…「ああ。この方が便利だからな。特に拳での格闘戦をしているときに。」

俺はブレスレットを右手首に装着した（形状は家庭教師ヒットマンの雲のブレスレットVer.X）

ゼロ…『見た所、自己AIは搭載してないようだな』

翔…「俺の相棒はお前一人で充分だからな。」

俺はゼロにそう言った

翔…「さてと、俺の新しい牙『獅子王丸』の性能でも確かめるか。
ゴール・ルジュナ」

俺はデバイスルームから草原に瞬間移動した

ユニ…「ヒヒッッン」

俺が草原に移動すると、ユニゴルオンが近づいてきた

翔…「元気にしてたか、ユニゴルオン。」

俺はユニゴルオンを撫でながら聞いた

ユニ…「ブルル」

翔..「そんじゃあ、始めますか。獅子王丸、セツトア・・」

翔..「翔く〜ん」

俺が獅子王丸を起動させようとしたとき、なのは、フェイト、アリシアがこっちにやってきた

翔 side end

なのは side

フェイトちゃん達の引越しが終わった後、私達は『翠屋』に向かった

七..「あら、なのはちゃんいらっしやい。引越しはもう終わったの？」

私がお店に入ると、七海さんがこっちに来てくれたの

な..「はい。七海さん、紹介しますね。この子がフェイトちゃん
で、隣の子がアリシアちゃんです。」

フェ..「初めまして、フェイト・テストロッサです。」

ア..「アリシア・テストロッサです。初めまして。」

七..「初めまして、アリシアちゃん、フェイトちゃん。私は椎名七海。翔の母親よ。」

フェ..「翔のお母さん!？」

ア..「わ、若い!？」

七..「あら、ありがとう♪」

リ..「七海さん!」

すると、リンディさんが七海さんに声をかけた

七..「あら。リンディ、久しぶりね。」

リ..「はい、お久しぶりです。元気そうで安心しました。」

その後、私たちはお茶をしていると

フェ..「そう言えば、翔はどうしたんですか？」

フェイトちゃんが七海さんに聞いた

七..「翔なら、今日はすることがあるって言って、家（別荘）にこもってるわよ。」

フェ..「家ですか？（なのは別荘ってなに?）」

七海さんの返答を聞きながらフェイトちゃんが念話で聞いてきた

な…「（翔君は家に別荘を持っているの。そこは此処とは時間の流れが違いうらしくて、そこで1日過ごしても、こっちでは1時間しか経っていないんだって）」

フェ…「（そんなもの聞いたことが無いよ。）」

な…「（うーん、だったら実際に見た方が早いの）七海さん、家（別荘）に上がってもいいですか？」

私が聞くと

七…「構わないわよ。はい、これうちの鍵。」

七海さんは私に鍵を渡してくれました

な…「ありがとうございます。行こう、フェイトちゃん。」

フェ…「う、うん。」

ア…「っあ、私も行く。」

私達は翠屋を出ると、翔君の家に向かった。家に着くと、ドアを開けて、中に入った後玄関の鍵を閉めてから、翔君の部屋に行った

フェ…「此処が翔の部屋。」

ア…「ねえ、あの大きいフラスコ？は何？」

アリシアちゃんが聞いてきた

な..「これが、翔君の別荘だよ。」

フェ..「これが!?!でも、どうやって入るの?」

な..「簡単だよ。その魔法陣の上に乗ればいいの。」

そう言うと、私は魔法陣の上に乗る、別荘に入った

く別荘内く

フェ..「これが、さっき見たミニチュアの中!?!」

ア..「凄い、まるで南の島にきたみたい」

そして、暫く進んでいると、翔君を見つけたの

な..「翔くくん。」

なのは side end

翔 side

俺が獅子王丸を起動させようとしたらなのは達がこっちにやってきた

翔..「なのは、フェイト、アリシア？どうしてお前等が此処にいるんだ？」

フェ..「翔が何をしてるのか気になって。」

ア..「うん、うん。」

翔..「何してるかって、・・・もう終わったぞ。」

フェ..「そうなの!？」

翔..「ああ。」

俺はそう言い、3人にブレスレットを見せた

な..「翔君、そのブレスレット何？」

翔..「俺の新しい牙、『獅子王丸』だ。」

ア..「でも、翔はゼロを持っているよね？」

翔..「ゼロは俺の相棒だからな。この獅子王丸は俺のもう一つの武器だ。」

俺は3人から少し距離を取った

翔…「改めて行きますか。獅子王丸、セットアップ！」

俺は獅子王丸を起動させた。因みにゼロはすでにセットアップしている

フェ…「…………綺麗」

フェイトが獅子王丸を見てそう言った

獅子王丸の形状は天鎖斬月で色は全体が黒ではなく赤である

翔…「……………」

俺は刀に炎を纏わせた

翔…「火炎の舞」

そして、刀を振るい炎の斬撃を飛ばした

翔…「次！」

俺は刀に炎を竜巻のように纏わせた

翔…「セイバースラッシュ！」

そして、袈裟切りを繰り返し、近くにあった岩を斬り碎いた

翔..「結構いい出来だな。獅子王丸リリース」

俺は獅子王丸を待機状態に戻した

な..「翔君、凄いの。」

フェ..「うん。」

ア..「ほんと、ほんと。っあ、そうだ!」

アリシアが俺に近づいてきた

ア..「翔、頼みごとがあるんだけどいいかな?」

翔..「何だ?」

俺が聞くと

ア..「私のデバイスを作って。」

翔..「はあっ? お前のは今プレシアさんが作成中だろうが。」

ア..「それは、そうなんだけど。中々完成しないから。」

翔..「それは、お前が『フェイトと同じ形状はやだ』って言ったからだろう?」

ア..「ううううう」

翔..「・・・はあゝ。」

俺はため息をついた

翔..「じゃあ、形状は俺が決めてやるよ。っでそれをプレシアさんに作ってもらえ。」

ア..「うん。」

俺がそう言うと、アリシアは嬉しそうな顔で答えた

な..「アリシアちゃん、ズルいの。」

フェ..「そうだよ、姉さん。」

ア..「だったら二人も翔にデバイスを頼めばいいんじゃないの？」

な..「だけど、私にはレイジングハートが・・」

フェ..「私もバルディッシュがあるし。」

ア..「だったらしょうがないよね。」

翔..「っで、アリシア。どんな形状がいいんだ？」

俺がアリシアに聞くと

ア..「うーん、形状は杖で、接近戦の時槍の形態になれるようなデバイスがいいな。」

翔..「うーん……。ならこれならどうだ？ゼロ、ボウケン

ボー、セット」

ゼロ…『S e t u p』

俺の右手にボウケンボーが現れ、それをアリシアに見せた

翔…「普段はこの形状で、先端が開くと刀身が出てくるんだ」

ア…「……いいかも、形状もなんかっこいいし。うん、これにする。」

翔…「じゃあ、プレシアさんにこのロッドのデータを渡す。後は、まあ気長に待て。」

ア…「うん♪」

その後、俺はプレシアさんにボウケンボーのデータを渡し、プレシアさんはアリシアのデバイス作成に入ったとき

第19話 A's編「新しい牙」(後書き)

紅.. 「第19話でした」

翔.. 「アリシアのデバイスはボウケンレッドの専用武器なのか。」

紅.. 「これは最初から考えていたんだよ。」

翔.. 「ふん。っで、次回は？」

紅.. 「ヴィータ達との2回目の戦闘だ。」

翔.. 「次回も派手に行くぜ!!」

第20話 A' S編「侍？対騎士」

翔 side

フェイト達が引っ越してきてから、一週間が過ぎた

翔..「はあゝ。」

ゼロ..『どうしたんだ、ため息なんてついて。』

翔..「いや、この一週間色々なことあってな、疲れた。」

そう、フェイト達が引っ越してきた次の日、フェイトとアリシアが俺達の学校に転校してきたこと、フェイトが俺の事好きだと言い、更になのはも俺の事好きだと言って、学年の男子に毎日のように追われたこと

ゼロ..『随分とハードだったんだな。』

翔..「まあな。・・取りあえず寝よう。」

家に着くと、俺は自分の部屋に入ると、着替え、昼寝を始めた

それから数時間後

ゼロ…『起きろ翔、通信が入ってるぞ』

翔…「ったく、誰だよ、人が気持ちよく寝てる時に。」

俺は起き上がり、モニターを開いた

翔…「はい、もしもし?」

エ…『翔君! 例の襲撃犯の二人を見つけたの、今すぐ現場に向かってくれる・・・って、随分と機嫌が悪そうだね』

翔…「今まで寝ていたもんで・・・今、向かいます。」

エ…『なのはちゃん達も今そっちに向かってるから。』

翔…「了解。」

俺は通信を切ると、窓を開けて外に出ると、屋根に上った

翔…「ゼロ、セットアップ!」

ゼロ…『S e t u p』

俺はバリアジャケットを展開した

翔…「行きますか、ゴール・ルジュナ!」

俺は現場に瞬間移動した。っが

翔..「しまった、間違って結界の外に移動しちゃった。」

俺が頭を掻いていると、

シ..「はぁぁぁぁあ!！」

上空からシグナムが俺に向かって、剣を振り降ろしてきた

翔..「おっと。」

俺は魔力を右腕に纏わせその斬撃を防いだ

翔..「・・・奇襲をするなら、気配を消すことだな。」

シ..「つく!！」

俺は腕を横に振るいシグナムを弾き飛ばした

翔..「確かシグナムって言ったっけ? 何で魔力を集めてるんだ?」

シ..「・・・貴様には関係ない。」

翔..「あっそ。じゃあ、お前を倒して聞かせてもらおうとしますか。」

」

俺は拳を構えた

シ..「・・・銃は使わないのか?」

翔..「・・・抜かせてしろよ。」

シ..「なら、拳では剣には勝てないことを教えてやろう!」

シグナムは空気を蹴ると一瞬で俺の目の前に移動し

シ..「はあっ!!」

剣を振り下ろした

翔..「・・・・・・・・」

俺の腕とシグナムの剣がぶつかり、激しい衝撃が辺りを走った

シ..「っ!?! な、何だと!?!」

翔..「・・・・・・・・さっき、なんて言った? 拳では剣に勝てないだろ? なら俺も言っておこう、お前の剣じゃ俺に傷一つもつけることはできない!!」

俺はシグナムを睨み

翔..「炎、一閃!!」

炎を纏った拳をシグナムに叩きつけた

シ..「があっ!!」

シグナムはそれをまともに喰らい吹き飛んだ

翔..「さっきまでに威勢はどこに行ったんだ？」

シ..「つく。防御魔法も使っていないのに、何で防げたんだ？」

シグナムは体勢立て直した後、俺に聞いてきた

翔..「・・・俺は、常に魔力を腕に纏わせているんだよ。」

俺は腕に纏わせている魔力をシグナムに見せた

翔..「この魔力は盾であり、矛。つまり攻防一体なんだよ。」

俺は両拳を腰の位置までさげ構えた

翔..「双拳乱撃!!」

俺は拳から無数の魔力弾をシグナムに放った

シ..「つち。」

シグナムは回避しようとするが魔力弾の数が多いためか、全てを避けられないでいる

シ..「仕方ない、レヴァンテイン！」

レ..『イクスプロージョン』

シグナムは剣を連結刃に変え、魔力弾を叩き斬った

翔..「厄介な能力だな。・・・仕方ねえ、獅子王丸、セツトア

ツプ」

俺は獅子王丸を起動させた

シ..「ほう、貴様も剣を使うのか。」

翔..「まあ、な!！」

俺はライトニングムーブでシグナムの後ろに移動すると、剣を振るった

シ..「っ!！」

シグナムは咄嗟に鞘で攻撃を防いだ

翔..「・・・まさか、俺の動きを見切るとはな。」

シ..「(何だ今の速さは!？まったく反応できなかった)」

翔..「こっちも急出るんでな、決めさせてもらうぜ。マジ・ゴル・ジー・マジカ」

俺が呪文を唱えると周りに炎が出現し、俺が剣を上にあげると、炎が剣の集まった

翔..「ブレイジングストームスラッシュ!！」

そして剣を振りおろし、炎の一太刀を繰り出した

シ..「っぐうあああ」

シグナムは剣と鞘をクロスさせて防いだが、俺はその防御ごとシグナムを吹き飛ばした。っが、勢いをつけすぎたせいか、クロノ達が張った結界を壊してしまった

翔..「っあ。」

その瞬間、3つの閃光が結界内を飛び出し、そのうちに一つがシグナムを回収してどこかに飛んで行った

翔..「.....やっちゃまった。」

第20話 A S編「侍？対騎士」（後書き）

紅..「第20話でした。」

翔..「さすが天空聖者ブレイジエルの技だな。クロノ達の張った結界を壊すとは。」

紅..「これぞ本当の必殺技だよな。」

翔..「それより、マジレンジャー関係が多いような気がするんだが？」

紅..「俺がマジレンジャー好きだからいいんだよ。」

第21話 A's編「出会い、そして変身」

翔 side

翔達がシグナム達を逃がしてから数時間後、俺達はクロノ達が臨時拠点で住んでいるアパートで話をしている

ク..「翔、何か言うことは無いか？」

クロノが額に怒りマークを出しながら俺に聞いてきた

翔..「無い。」

ク..「ふざけるなー!!」

クロノがデバイスを起動させ俺に向けた

ク..「お前のせいで、僕たちは襲撃犯を逃がしたんだぞ！」

翔..「だったら、もっと強固な結界を張って置けよ。」

ク..「そんな出鱈目なことを。」

翔..「それに、俺は襲撃犯の一人と戦っていたんだぞ？まあ、最後に放った一撃が結界を壊すとは俺も予想できなかったけどな。」

ク..「だからと言って・・・」

リ..「クロノ、そこまでよ。」

ク..「しかし、」

リ..「貴方は襲撃犯の一人を一人で倒すことが出来る？できないでしょ？」

ク..「っう。」

クロノがリンディさんに事実を言われ、へこんでしまった。クロノがへこんでいる間、なのは、フェイトはエイミィさんから新しくなったレイジングハートとバルディッシュの説明を受けていた

その時

プ..「アリシア、ちょっとこっちに来てくれる。」

ア..「どうしたのママ？」

プ..「はい、約束の物よ。」

プレシアさんはアリシアにバルディッシュの待機状態に似た青いアクセサリーを渡した

ア..「ママ、これって。」

プ..「貴方のデバイスよ。やっと完成したの。」

ア..「やったー！ママ、ありがとう。」

プ…「どういたしまして。その子の名前はブリュナークよ、大事に使うのよ。」

ア…「うん。これからよろしくね、ブリュナーク。」

ブ…『はい、マスター。』

その後、俺達は今回のロストログア『闇の書』について説明された。っといっても、俺は知っているからあまり関係ないんだけどな。

翔…「(さて、どうやってリインフォースを助けようかね、プログラムを再構築する、・・・だめだな、いくら俺にアンサートーカーの能力があってもすべてを構築できない。)」

俺が話を聞きながら考えていた

翔…「(はあ、せめて『夜天の書』の作られた当時のデータがあればいいんだけどな。)」

俺がそんなことを思っていると、モバイルーツ(携帯)が鳴った

翔…「(メール? 誰からだ?)」

俺は携帯を開け、今送られてきたメールを開いた。そこには、神よりと書いてあった

翔…「(何で俺のメールアドレス知ってんだ!?)」

そんなこと思いながらメールを読むと

『翔よ、おそらくお主は夜天の書の管制人格を助ける為に色々悩んでいるはずじゃ。そこで、特別に『夜天の書』の作られた当時のデータを送る。まあ、これで助かるわけじゃないがの、後はお主の頑張りしだいじゃ！頑張るのじゃぞ』

神より
』

翔…「……………」

俺は空いた口が塞がらなかった

翔…「（タイミング良すぎだろう）」

そんなことを思いながらも、添付されてきたデータを開いた

翔…「（全部ベルカ語だけど、アンサーターカーの力で楽勝だな）」

その後、家に帰った俺は、別荘に行き、添付されてきたデータを別荘の大型のパソコンに入れ、『夜天の書』の修復プログラムを構築した

（翌日）

学校が終わると、俺は図書館に来ていた。理由は暇なので本でも読もうかと思ったからである

翔..「これにするか。」

俺は読む本を選ぶと、近くにあった椅子に座り、読み始めた。すると

は..「翔君やないか。」

はやてが声をかけてきた

翔..「よう、はやて。元気そうだな。」

は..「当たり前や。それより、翔君は何でここにおるん？」

翔..「暇だから、本を読みに来たんだよ。」

俺は読んでいた本を閉じると、はやてと色々な話をした。そして

シャ..「はやてちゃん。」

は..「シャマル、迎えに来てくれたんか？」

シャ..「はい。」

翔..「俺もそろそろ帰るわ。じゃあな、はやて。」

は..「うん。またな。」

翔..「シャマルさんも。」

シャ…「え、ええ。」

俺は立ち上がりはやく達に別れの挨拶し、シャルさんの横を通り過ぎた。その時

翔…「今日の夜9時に他の守護騎士たちと一緒に海鳴公園にきな。ヴォルケインリッター、湖の騎士シャル」

俺は呟くように言うと、図書館から出た

（夜）

俺が公園で守護騎士たちを待っていると、空から4人が降りてきた

翔…「時間通りか。もう少し、遅く来るかと思っていたんだけどな。」

シ…「・・・我らに何の用だ？」

シグナムが俺に聞いてきた

翔…「話がしたかっただけだ。」

ヴィ…「嘘つくんじゃないっ！」

ザ…「管理局に協力している奴の言葉を信じろと？」

翔..「それも、そうか。なら」

俺は待機状態のゼロと獅子王丸を外した

翔..「ほれ。」

シャルさんに向かって投げた

シャ..「っえ!？」

翔..「これで、信じてもらえるか？俺は戦いにきたんじゃないってことが。」

シ..「我々が襲い掛かかるとは思わないのか？」

翔..「別に、デバイスが無くても勝てるし。問題ないよ」

俺の言葉に全員が驚いていた

ヴィ..「てめえ、本気で言っているのか？」

翔..「本気も本気。だったら、試してみるか？」

ヴィ..「上等だ!」

ヴィータが俺に接近してきた

ヴィ..「ぶち抜けー」

ヴィータは俺に向かってハンマーを振り降ろしてきた

翔…「っふ!!」

しかし、俺はその攻撃を左腕一本で受け止めた

ヴィ…「っな!?! 嘘だろう!?!」

翔…「人の体にはな、未知なる可能性が秘められている。そして、鍛えれば鍛えるほど、人は無限の力を発揮するんだよ。」

俺は左手を前に突きだし、ヴィータを元の場所まで吹き飛ばした

翔…「これで、解ったか？」

シ…「解った。出来れば今、この間の借りを返したいところだが、今はお前の話を聞こう。」

翔…「サンキュー。・・・それと、隠れている奴出てこい。」

俺がそう言うと、仮面の男が二人現れた

「いつから気づいていた？」

翔…「最初からだ。うまく気配を消したつもりだろうが、俺の超直感からは逃げられないんだよ。」

「……………」

翔…「俺を排除するつもりか？止めておけ。お前等じゃ俺には勝

てない。早く戻ってお前等の主に伝えろ、この件から手を引けつてな。」

「っ！！なら、なおさら貴様を生かしておくわけにはいかない。」

そう言うのと、仮面の男たちは魔力弾を形成した

翔..「あまり使いたくはないんだが、仕方ない。」

俺はポケットからモバイレーツを取り出した

翔..「見せてやるよ、伝説の戦士の力を！ゴーカイチェーンジ！！」

第21話 A's編「出会い、そして変身」(後書き)

紅.. 「第21話でした。」

翔.. 「ここで終わりかよ、ずいぶんと中途半端だな!」

紅.. 「自分でもそう思う。」

翔.. 「なら、何に変身する書けよ!」

紅.. 「それは次回のお楽しみだ!!」

翔.. 「ええ、いい、次回も派手に行くぜ!!」

第22話 A' S編「暴れる龍」

翔 side

翔..「豪快チェンジ!!」

『ゴーオカイジャー!!』

俺はレンジャーキーを使いゴーカイレッドのスーツを着た

「なんだ、あのバリアジャケットは!？」

「解らん、初めて見るタイプのものだ。」

仮面の男たちは俺の姿に驚いていた

翔..「っふ。」

俺は右手にゴーカイスーベル、左手にゴーカイガンを持ち、銃を
仮面の男たちに向けた

翔..「派手に行くぜ!!」

俺は銃弾（魔力弾）を二人に放ちながら走り出した

「っく。」

「っちい。」

二人はそれぞれ別方向に動いてそれを避けた

翔…「逃がすかよ!」

俺は仮面の男の一人に近づき、剣を横に振るって攻撃した

「っ!!」

仮面の男は障壁を展開してそれを防いだ

翔…「見た所、お前は近距離の戦闘が苦手のようだな!!」

俺は袈裟切り、横一閃、縦一閃など、様々な斬撃を放ち、仮面の男!を追いつめて行った

「私を忘れてもらっては困るな!」

その時、仮面の男2が背後から襲い掛かってきた

翔…「っは!」

俺はサーベルについているロープを使い、剣を振り回し、二人を同時に攻撃した

「があっ!!」

「っ!!」

翔…「特別大サービスだ！」

俺はベルトのスイッチを押し、レンジャーキーを取り出した

翔…「暴れるぜ！豪快チェンジ！！」

『アゝバレンジャー！！』

翔…「元気莫大！アバレッド！！」

「ジャケットが変わった！？」

「あの鍵のようなもののせいか！？」

翔…「力の差ってのを教えてやるよ！うおおおおおー！！」

俺は感情を昂ぶらせ、ダイノガッツを増幅させ、アバレモードになった

「何だあの姿は！？」

翔…「あああああ！！」

俺は雄叫びを上げながら、仮面の男たちに近づいた

「く、来るなー」

男1が俺に魔力弾を撃ってきたが、俺はそれを無視して近づいて行く

「き、効いていないのか!？」

翔..「おおお!!」

俺は男1を掴みそのまま前進しながら進んだ

「は、離せ!!」

男1が離せと言ったので、俺は服を離し、足を掴んだ。そして

翔..「おらああああ!!」

男1を地面に何回も叩きつけ、そして、

翔..「そらああああ!!」

ジャイアントスイングの要領で男2の方にぶん投げた

「大丈夫か!？」

男2は男1をキャッチしあんぴを聞いた

「か、体中が痛い。」

翔..「これで終わりだ。ティラノロッド!!」

俺はティラノロッドをだし、円を描くように回し、球状のエネルギーを形成した

翔..「サークルムーン!!」

そして、ロッドを横に振るい、エネルギーを男二人にぶつけた

「があああああ!!」

そして、男二人は倒れた

翔..「お前等の主人に伝えておけ、闇は俺が夜天にかえす。そして、これ以上邪魔をするなとな。もし、邪魔をしたらボコボコにするってな」

そう言うと、俺はシグナム達の所に向かった

翔..「待たせたな。さて、話といこうか。」

シ..「.....あの力は何だ?」

翔..「俺のレアスキル?の一つだ。安心しろ、これをお前たちに使うつもりは無い。そんなことしたら、あの人たちに申し訳がないからな。」

シ..「.....その話の内容はなんだ?」

翔..「はやてについてだ。・・・お前等の目的は『闇の書』を完成させて、はやてを救うことなんだろう?」

シ…「・・・そうだ、主はやての病気は『闇の書』との深く結びついている。そして、主はやてのリンカーコアはまだ完全に出来ていない、そこに浸食され、現在に至っている。」

シャ…「私達ははやてちゃんを助ける為に、はやてちゃんとの約束を破って行動しているの。」

翔…「・・・そのこと、はやては知っているのか？」

シャ…「いいえ、はやてちゃんは知らないわ。」

翔…「・・・このまま、お前たちが魔力を蒐集し、『闇の書』を完成させたら、はやては死ぬ！」

全…「っ!？」

ヴィ…「そんな話信じられるか!!」

翔…「信じる、信じないは自由だが、これは紛れもない事実だ。『闇の書』が完成すれば、本ははやてを取り込み暴走する。」

シ…「だが、闇の書が完成すれば、主に巨大な力を与える。」

翔…「お前等は『闇の書』が完成した後の記憶があるのか?・・・ないだろう?つまりそれが答えだ。」

ヴィ…「そ、そんな。」

シャ…「じゃあ、私達は自分達の手ではやてちゃんを殺そうとし

ていたの。」

ザ…「……………」

翔…「……はやてを救う方法が一つだけある。」

ヴィ…「本当か！」

ヴィータが俺の服を掴んで聞いてきた

翔…「ああ。だが、かなり危険な賭けになるけどな。」

シ…「教えてくれ。」

翔…「まずは、『闇の書』、いや『夜天の書』を完成させる。」

シ…「『夜天の書』だと？」

翔…「それが本来の名前だ。」

ヴィ…「ちょっと待て、本を完成させたらはやてが死んじゃうじやねえか!!」

翔…「完成しても本は直ぐには暴走しない。そして、その間に本にある暴走プログラムを取り除くんだ。」

シャ…「でも、本は主以外の物が使用すると、主を取り込んで転生するわ。一体誰がそれを……、っ!!まさか!？」

シャマルさんが俺の考えを理解し、驚愕の表情をした

翔..「そうだ、はやてがやるんだ。」

シ..「何だと、正気か!？」

翔..「それしか方法が無いんだ。・・・俺はある人から作られた当時の夜天の書データを持っているが、さすがにバグを消すことはできないんだ。」

シャ..「でも、どうやって暴走プログラムを取り除くんですか？はやてちゃんは意識を無くしているのよ。」

翔..「・・・内側からだめなら、外側から起こすまでだ。」

ザ..「外側から？」

翔..「管理人格に外側から強い衝撃を与えて無理やり中で眠っているはやてを起こす。」

シ..「だが、その役は誰がやるんだ？」

翔..「俺がやる。」

俺がそう言うと、全員が驚いた表情をした

ヴィ..「無理だ、あいつの強さは尋常じゃないんだぞ。」

翔..「・・・それでもやるしかないんだ。なのは達の実力じゃあ、きついからな。」

シ..「テストロッサ達も手伝わせるのか？」

翔..「ああ。暴走プログラムを破壊するときにな。」

シ..「・・・解った。お前の案を受けよう。」

ヴィ..「シグナム！本気か！？」

シ..「現状ではそれしか手が無いのだ。なら、椎名に全てを任せようと思う。」

シャ..「・・・そうね。それしか方法が無いものね。」

ヴィ..「シャマル、お前まで。」

ザ..「ヴィータ、我らの願いを忘れたのか？我らの願いは主はやてを救うことだ。わずかな光明だが、俺はその小さな光明にかける。」

ヴィ..「ザフィーラ、お前。・・・解ったよ、あたしもその小さな光明に賭けるよ。翔って言ったけ？絶対にはやてを助けるよ！」

翔..「言われるまでもない。」

シ..「それで、いつ決行するんだ？」

翔..「一週間後だ。それまでに俺も準備を整える。」

シ..「解った、では一週間後にまた会おう。」

翔..「明後日、はやての家に行く。説明もかねてな、それとこれをはやてに飲ませろ。」

俺は飲み菓をシグナムに渡した

シ..「これは？」

翔..「浸食を抑える薬だ。俺の手作りだ。」

シ..「感謝する。」

シャ..「じゃあ、これはお返ししますね。」

シャマルさんは俺にゼロと獅子王丸を渡してくれた

翔..「じゃあ、明後日ははやての家で会おう。」

シ..「ああ。」

そう言うのと、シグナム達は帰って行った

翔..「.....見ているんだろ？ギル・グレアムさん。」

俺がそう言うのと、モニターが展開された

ギ..「よく気が付いたね。」

翔..「まあな.....それより今の話聞いていたんだろ?」

ギ..「うむ。」

翔..「そう言うわけだ、手を出すんじゃないぞ。」

ギ..『本当に彼女を救えるのかい?』

翔..「やってみなくちゃ解らねえ。でも、やるからには必ず救い出す。」

ギ..『解った、私も君に賭けてみよう。』

そう言うのと、モニターが消えた

翔..「さて、なのは達に説明しなくちゃな」

どう説明しようか考えながら、俺は家に向かった

第22話 A' S編「暴れる龍」(後書き)

紅.. 「第22話でした。」

翔.. 「見事な暴れぶりだな。」

紅.. 「はあ。」

翔.. 「どうしたんだ？ため息なんてついて。」

紅.. 「あとがき書くのやめようかな。」

翔.. 「いきなり何言ってるんだ？」

紅.. 「お前には解らねえよ。」

翔.. 「よく解らんが、次回も派手に行くぜ!!」

第23話 A' S編「対策」

翔 side

シグナム達との対話を終えた俺は、翌日、なのは達にシグナム達の事情を伝えた。なのは達は守護騎士たちの事情が解り、はやてを助けたいと言ってきたので、協力させることにした。案の定クロノはやて達を捕まえに行こうとしたが、リンディさん、グレアムさん、エイミィさんの3人から説教を受けて渋々了承した

その日の夕方

翔…「……………これで完成だな。」

俺は別荘にある整備室で神様から貰った作られた当時の夜天の書データをインストールし終えた

翔…「これで、ファイナルフェイズはクリアだな。セカンドフェイズは何とかなるとして、問題はファーストフェイズだな。」

俺は管理人格との戦闘方法を考えていた

翔…「夜天の書の中にある魔法はどれも強力な物ばかりだ、更にリンカーコアから得た魔法も使えるから、たちが悪いんだよね。……………今の所はなのはの魔法が使えるんだよね……………スタ

ーライトブレイカー使われたらどうしよう。」

俺は更に悩んだ

翔…「あれは、防御ごと撃ち抜くからな、妥当なのは避ける、相殺する、逆に撃ち抜くのだね。……戦隊系の技だと相殺するのは無理だな、他に何か無いかね。」

俺が考えていると、

ゼロ…『それ以上の威力を持つ技を創り出すしかないだろう。』

翔…「それ以上の技か、作れるかね俺に。」

ゼロ…『お前なら余裕で出来そうな気がするんだがな。』

翔…「……そう言われてもな」

ゼロ…『試しにやってみたらどうだ？』

翔…「それもそうだな。何事もチャレンジだな。」

俺は整備室を出て、いつも訓練するときに使っている部屋に入った

翔…「まずはどんな魔法にするか決めないとな。」

俺は腕を組んで考え始めた

翔…「うーん、砲撃にするか、それとも巨大な魔力弾にするか、悩むな。」

ゼロ…『いっそのこと、両方作ればいいんじゃないか。』

翔…「両方か……。それいいかもな。じゃあ、魔力弾の方は火球にして、砲撃は直射型のにするか。」

ゼロ…『じゃあ、早速構築にかかる。』

翔…「おう、頼むわ。」

それから15分後

ゼロ…『完了した』

翔…「よし、早速使ってみるか。」

ゼロ…『その前に名前を決めろ。』

翔…「うーん、じゃあ、魔力弾はグロリアスバーストで砲撃はフレイムバスターでいいかな。」

ゼロ…『…言い忘れてたが、その二つの技は銃を使っていると
きでも使用可能にしておいたからな。』

翔…「サンキュー」

俺はゼロに礼を言うと、バリアジャケットを展開した

翔…「まずは、グロリアスバーストの方から試すか。」

俺は両手の平を向い合せ、その中央に魔力を集中させ、火球を形成し、

翔…「行けえー！！」

そして、両手を前に突きだし火球を飛ばした

火球は壁に当たると爆発した、煙が晴れると、当たった部分に穴が開いており、周りには焦げ跡が残っていた

翔…「力の加減が難しいな。まあそこらへんは慣れるしかねえか。次に行くか。」

俺は右拳に魔力を集中させた

翔…「フレイムバスター！！」

そして、拳を前に繰り出し、砲撃を放った

翔…「なのはのディバインバスターに似てるけど問題ないな。」

俺はバリアジャケットを解除した

翔…「後は、約束に日までに技の練度を上げることに集中するか。」

その後、俺はゼロを整備して寝た

第24話 A's編「誓い」

翔 side

シグナム達との会話の2日後、俺ははやての家を訪れていた

は.. 「まさか、翔君がシグナム達と同じ魔法使いやとは驚いたで
し。」

翔.. 「それは俺の台詞だ。まさか、はやてが夜天の書の主だとは
な。」

は.. 「夜天の書？闇の書じゃないんか？」

翔.. 「夜天の書、それが本来の名前なんだよ。」

は.. 「へー、闇の書よりええ名前やわー。」

翔.. 「それじゃあ、本題に入ろうか。」

俺は真剣な表情ではやての方を見た

翔.. 「はやての足が治らないのは夜天の書にあるバグのせいだ。
そのバグがはやてのリンカーコアを浸食してはやてを苦しめている、
此処まではシグナム達に聞いたな？」

は..「うん。」

翔..「そこで、俺達は本を完成さえて、内側からバグを取り外すことにしたんだ。」

は..「内側から？」

翔..「そうだ。その本は主しかアクセスできない。だから、はやてが内側からバグを取り外すんだ。」

は..「そんな無理に決まっとるやろうが！」

翔..「無理でもなんでも、やるしかないんだ。それにはやて一人がそれをやるわけじゃない、その本の管理人格と一緒にやるんだ。」

は..「この子と一緒に？」

翔..「そうだ。力を貸してくれるはずだ。」

は..「でも、外の方はどないするん？」

翔..「俺が一人で抑えておく予定だけど？」

は..「翔君、一人で！？いくらなんでも無茶や！？」

翔..「仕方ないだろう？暴走を抑えられる可能性があるのは俺一人だけなんだからな。」

は..「でも。」

はやてが悲しい顔で俺の顔を見た

翔..「心配すんな。俺はそう簡単には死なねえよ。」

俺ははやての頭に手を置き笑顔で言った

は..「うゝゝ、（そんな顔でそんなこと言われたら、何も言い返せへんやんかゝ）／／／」

翔..「顔が赤いけど、どうかしたのか？」

は..「何でもない（この鈍感）／／／」

翔..「？」

その時、

シ..「主ははやて、ただいま戻りました。」

シグナムが家に戻ってきた

は..「シグナムお帰り。」

翔..「よう、邪魔してるぜ。」

シ..「翔、お前が来ているということは、主に話したのか？」

翔..「ああ。」

俺はテーブルにあるお茶を飲みながら答えた

翔..「.....それじゃあ、俺は帰るぜ。これから特訓しないと
いけないからな。」

俺はそう言い席を立った

シ..「翔、何故お前は様々な武器を使うんだ？」

翔..「.....臨機応用だ。その場に合わせて、ベストな武器を
選び、使うそれだけだ。まあ、基本は剣と銃を使ったオールマイテ
ィスタイルだけだな。」

シ..「それを直すつもりは無いのか？」

翔..「無いな。俺はこのスタイルが気に入ってるんだ。誰になん
と言われよが治すつもりはねえよ。」

シ..「そうか。」

俺はシグナムの返答を聞くとはやての家を出て、家に向かって歩
き出した

（別荘・整備室）

翔…「これで、よし。……気分はどうだ、ゼロ？」

俺は待機状態のゼロに聞いた

ゼロ…『問題ない。寧ろいい方だ。』

翔…「そうか。」

俺は待機状態のゼロを首にかけた。っえ？俺が何をしていたって？獅子王丸のコアをゼロに移していたんだよ

ゼロ…『まさか、俺と獅子王丸を一つにするとわな』

翔…「一つにした方がコンパクトでいいからな。それと、お前の起動状態のフォームを獅子王丸にセットしたからな。」

ゼロ…『つまり、これから俺はお前の刃になるわけか。』

翔…「そう言うことだ。更に槍にもハンマーになる機能も付けた。それと、バリアジャケットも変えたからな。」

ゼロ…『また、変えたのか。優柔不断な奴だな。』

翔…「うるせえ。……だけど、もう変えるつもりはねえよ。」

ゼロ…『そうか。』

翔…「じゃあ、早速着てみますか。ゼロ、セットアップ！」

ゼロ…『S e t u p』

俺はバリアジャケットを展開し（新しいバリアジャケットは紅いシャツに黒いズボンをき、上に紅い羽織ハイパーシンケンレッドのを着ている）、起動状態のゼロを右手に持ち、左手にはデューマグナム改を握っている

翔…「・・・どうだ、ゼロ？」

ゼロ…『いいんじゃないか。』

翔…「・・・ゼロ。」

ゼロ…『うん？』

翔…「5日後の決戦、必ず勝つぞ！」

ゼロ…『当然だ。』

俺は5日後の決戦に勝つことを改めて誓った

第24話 A's編「誓い」（後書き）

紅..「第24話だったぜ。」

翔..「なあ、ディーマグナム改ってなんだよ？」

紅..「ディーマグナム改はディーマグナム01と02の能力を合わせた銃だ。まあ、ぶっちゃけオリジナルだけだな。」

翔..「二つの能力を合わせた銃か」

紅..「因みに、その状態でマグナムエクスキュージョンも撃てるぞ。」

翔..「どんだけ、高性能なんだよ。」

設定？

翔の設定2

バリアジャケット 紅いシャツに黒いズボンをはき、上に紅い羽織（ハイパーシンケンレッドの物）を羽織っている、ズボンの左腿にはデューマグナム改が入ったホルスターが装備されている

デバイス ゼロ

前に開発したストレンジデバイス『獅子王丸』と一体化したことにより起動状態は刀になった

待機状態は龍の翼を模したネクレスで、起動状態は炎神剣（炎神大將軍が使う物の縮小版）、普段は刀だが、槍、ハンマーに変わる

戦闘スタイル 基本は右手に刀、左手に銃を持ち、近、中、遠全ての距離に対応できるオールラウンド。状況に応じて槍、ハンマー、拳を使った戦闘方法に変わる。拳での戦闘時、ゼロは待機状態に戻る

使用魔法

スーパー戦隊の技を使用する。主に使うのはマジレンジャー。ブリーチの月牙天衝も使う

オリジナル

炎牙天衝 月牙天衝の炎版。他に雷牙天衝、水牙天衝等がある

雷吼拳 拳に圧縮した雷を纏い殴る、『爆』の合図で圧縮した雷を解放し更にダメージを与えることが出来る

第25話 A、S編「訓練」

翔 side

翔..「っと、言うわけで、お前等を鍛えることにした。」

全..「いや、どういうわけで!?!」

俺は別荘内なのは、フェイト、アリシアにそう言った

翔..「訳?それは、お前等が弱いからだ。」

な..「でも、私とフェイトちゃんはこの間、ヴィータちゃん達と互角に戦えたよ。」

翔..「それは、カートリッジシステムのお蔭だろう。それが無ければ、お前等はまた負けてたんだぞ。」

な・フェ..「っう。」

翔..「修行を始める前に、なのは、フェイト、レイジングハートとバルディッシュを俺に貸せ。」

フェ..「え?どうして?」

翔..「いいから。」

俺がそう言う、なのはとフェイトは待機状態のデバイスを俺に渡した。俺は二人のデバイスを受け取ると、ディスプレイとボードを展開し、あるプログラムをインストールした

レ・バ…『complete』

翔…「完了つと、ほら。」

俺はデバイスをそれぞれにかえした

な…「翔君、一体何を入れたの？」

翔…「カートリッジシステムで起きる使用者への負担を軽くするシステムを入れたんだよ。」

フェ…「でも、母さんからはそんな聞いたことないよ。」

翔…「当然だ、俺が作ったプログラムだからな。」

な…「翔君が作ったの!？」

翔…「ああ。そのプロいグラムのお蔭で、使用者における負担はほぼゼロだ。…だけど、あまり使うなよ。…特になのははな。」

な…「どうして、私を見てそう言うの!？」

翔…「この中で、お前が一番無茶をしそうだからだよ。いいか、俺達はまだ完全に体が出来ていないんだ、その状態で体に負担のかかるカートリッジシステムを何百回使ったら体が壊れちまう、最悪

もう二度と体を動かすことも、魔法を使うこと出来なくなるだろうな。」

な.. 「そこまでなの!？」

翔.. 「そうだ。だから、あまり使用しないいな。」

な・フェ.. 「うん。」

翔.. 「じゃあ、修行を始めるぞ。」

俺がそう言っていると、なのはが逃げ出した

翔.. 「はあゝ、バインドショット」

俺はディーマグナム改を抜き、なのはにバインド弾の撃ち、捕まえた

な.. 「はゝなゝしゝてゝなゝのゝ」

翔.. 「また逃げ出そうとするから却下。」

な.. 「もう、あの訓練はいやなのゝ!」

なのははバインドを掛けられてるのにもかかわらず逃げようとしていた

翔.. 「安心しろ、今回の訓練の相手は俺じゃない。」

な.. 「本当。」

俺がそう言うのと、なのはが明るい顔になった

翔..「ああ。だけど、俺より強い相手だからな。」

な..「尚更、安心できないの。」

翔..「はぁ、しょうがない。もし、この訓練相手を倒せることが出来たなら、お前の願いを一つ叶えてやるよ。」

な..「翔君！直ぐに相手をだして！！」

なのはは俄然やる気を出した

フェ..「翔、私も訓練相手を倒したら、願い叶えてくれる？」

翔..「ああ、別にいいぞ。まあ、倒せたらだけだな。」

俺はフェイトにそう言うのと、トランペットと数個のレンジャーキーを取り出した

翔..「この3人がお前等の訓練相手だ。」

俺はレンジャーキーをトランペットにある鍵穴に入れ、吹いた。すると、トランペットから3つの光の球体が出てき、マジシャイン、ボウケンレッド、ゴーオンシルバーに変わった

翔..「この3人が、なのは達の訓練相手だ。」

ア..「かっこいいー。」

な..「私達のバリアジャケットと違うね。」

フェ..「うん。それに魔力も感じない。」

翔..「この人たちは魔力を持っていない。それと、ハッキリ言っておくがこの3人の強さは魔道士ランクでS+はある。」

全..「っ!？」

翔..「魔力が無いから余裕だと思っていると、すぐやられるぜ。」

俺がそう言うのと、なのはたちの表情が変わった

翔..「いい目をしてやがる。さて、訓練相手を言うぞ、なのはの相手はマジシャイン、アリシアの相手はボウケンレッド、フェイトの相手はゴーオンシルバード。」

俺がそう言うのと、3人はなのは達に近づいた

翔..「それじゃあ、頑張れよう。」

翔 s i d e e n d

なのは side

私は翔君が用意してくれた訓練相手と一緒に、少し離れた場所に来た

な..「それじゃあ、よろしくお願いします、マジシャインさん。」

シャ..「.....」

私は挨拶をしたがマジシャインさんは何も言わなかった。その時

翔..「あゝ、聞こえるか？」

翔君から念話が届いた

翔..「(一つ言い忘れていた、その3人は喋らないからな。そう言うことで、頑張れよ。)」

翔君の念話が途切れると、私はレイジングハートを構えた。マジシャインさんもランプのような形をした銃をどこから取り出し、私に向けた

な..「(先手必勝)アクセルシューター、シュート!!」

私はレイジングハートから12個の魔力弾を撃ち出した

シャ..「.....」

マジシャインさんも銃から魔力弾を発射した。私達の魔力弾がそれぞれぶつかろうとした瞬間、マジシャインさんの魔力弾が不規則

に曲がり、私の方に飛んできた

な..「弾が曲がった!？」

レ..『p r o t e c t i o n』

レイジングハートが咄嗟に障壁を展開し、私はその弾を防いだ。
弾が当たる前に見た光景はマジシャインさんが華麗に私の魔力弾を
避けている光景だった

な..「ありがとう、レイジングハート。」

煙が晴れると、私はレイジングハートにお礼を言った

レ..『気にしないでください。っ!! マスター!!!』

レイジングハートがそう言うのと、マジシャインさんが私の目の前
にいた

な..「にゃっ!？」

マジシャインさんは私にキックを繰り出してきた

レ..『f l a s h m o v e』

私はぎりぎりでその攻撃を避けて、マジシャインさんの後ろに回
り込んだ

な..「デイベイン...」

私は砲撃の体制に入ったが、

シャ…「……………」

マジシャインさん銃を上に向け、魔力弾を撃つと、その魔力弾が私にいる方に飛んできた

な…「そんなっ!？」

私は反応が遅れ、その魔力弾に当たってしまった

な…「きゃあああああ」

レ…『マスター、大丈夫ですか』

な…「う、うん、何とか。」

私は立ち上がり杖を構えた

レ…『それにしても、あの人のコントロールは勉強になりますね。あそこまで、完璧な魔法のコントロールは初めて見ました。』

な…「私もそう思う。私だと、コントロールするのにかんりの集中力が必要だもん。」

レ…『翔さんが、マスターの訓練相手にこの人を選んだ理由がわかりますね。』

な…「うん。自然に魔力をコントロールするやり方を学ばせるためだね。」

レ..『ですが、いくらなんでもやり過ぎだと思うんですが。』

な..「しょうがないよ、翔君は不器用だもん。」

レ..『それもそうですね。』

レイジングハートとの会話を終えると、私はマジシャインさんに再び魔力弾を放ち攻撃し始めた

なのは side end

フェイト side

私は翔が訓練相手に出してくれた、ゴーオンシルバーと戦っている

フェ..「はあああああ!!」

GS..「.....」

私の魔力刃とゴーオンシルバー短剣がぶつかり火花が起こる

GS..「.....」

フェ..「つく。」

私は短剣をさばいて、空中に飛んだ

フェ…「はあ、はあ（相手は空を飛べない。ヒットアンドウェイで攻めて行けば勝てる）」

GS…「……」

ゴーオンシルバーは短剣についている3つの紅いボタンを同時に押した

『mission6』

フェ…「なに？この電子音は？」

すると、ゴーオンシルバーの短剣の柄からロケットが噴射して、空に跳び上がった

フェ…「飛んだ!？」

私が驚いていると、ゴーオンシルバーが私の目の前まで来ていた

フェ…「速い。」

ゴーオンシルバーはすれ違いざまに私を斬りつけた

フェ…「きゃあああああ」

私はそのまま地面に落ちた、だけど、ギリギリの所で体制を立て直し、地面に着地した

フェ…「(翔の言った通りだ。この人は強い、私よりも確実に)」

私はゴーオンシルバーを見てそう思った

バ…『サー、このままでは負けます。パワー、スピード、そのどちらも今のサーよりも上です。』

フェ…「うん。でも、諦めるつもりは無いよ。」

バ…『ですが、どうするのですか?』

フェ…「……」

私が考えていると

『mission2』

GS…「……」

私が考えていると、ゴーオンシルバーが短剣に冷気を纏わせ、私に攻撃してきた

バ…『sonic move』

私は高速移動魔法でその攻撃を避けて距離を取った

フェ…「(ソニックムーブを使って背後に移動しても、きっと防がれる。どうすれば)」

バ…『サー、翔殿の技を使ってみてはどうでしょう？』

フェ…「翔の技？」

バ…『はい。翔殿が使うライトニングムーブを使ってみるんです。』

フェ…「無理だよ。あれは翔だから出来る技法なんだよ。私じゃできないよ。」

バ…『お言葉ですがサー、サーはいつか翔殿の隣に立って戦いたいのではないのですか？』

フェ…「それは、そうだけど。」

バ…『なら、此处で歩みを止めてしまっってはダメです。此处で立ち止まってしまうては翔殿の領域には決して届きはしません。』

フェ…「・・・そうだよ。失敗したって、何度でも挑戦すればいいんだよね。」

私は翔の技を使うことを決心し、ゴーオンシルバーの方を向いた

フェ…「行くよ、バルディッシュュ!!」

バ…『get set』

フェイト side end

アリシア side

ア..「ええええい。」

BR..「.....」

私はブリュナークを振るって、ボウケンレッドに攻撃しているが、ことごとく防がれてしまっている

ア..「フォトンランサー、シュート!!」

私は槍状の青い魔力弾を形成して放った

BR..「.....」

ボウケンレッドは腰についてある銃を抜き、私の魔力弾を全て撃ち落とした

ア..「これならどう!フォトンバースト!!」

私は蒼い魔力砲を放った、ボウケンレッドはそれを避けようとしたが、私はその魔力砲を爆発させた

ア..「いくらなんでも、これならやつけたよね？」

私が爆煙の方を見ていると、煙が何かに吹き飛ばれた

ア..「あれは、私と同じ？」

そこには、私のデバイスと同じ献上をした紅い槍を持ったボウケンレッドがいた

ア..「ブリュナーク、ジャベリンモード！」

ブ..『はい』

私は杖の先端を展開し中央から魔力刃を展開させた

ブ..『s o n i c m o v e』

私はフェイト以上のスピードでボウケンレッドの前に移動した

ア..「えええええい」

そして、ブリュナークを袈裟切りの要領で振るったが、ボウケンレッドはそれを持っている槍で止めた

ア..「嘘!？」

B R ..「.....」

そして、私の槍を弾き飛ばし、私に攻撃してきた

ア..「つく。」

私は咄嗟に防御したが、あまりの力に吹き飛ばされてしまった

ア..「（パワー違い過ぎる、こうなったらあれ使うしかない!）」

私はブリュナークを構えて魔力を切っ先に集中させた

ア..「フォトンセイバー!!!」

ブリュナークを突き、先端の魔力刃を飛ばした

BR..「.....」

だけど、ボウケンレッドは槍を振るい、私の魔力刃を破壊した

ア..「そんな、これも効かないの。」

ブ..『マスター、落ち着いてください。あの者の強さはS十、マスターの技が通用しなくてもおかしくありません。それに、槍の使い方もかなりの物です。』

ア..「うん.....もしかして、翔君がこの人を私の訓練相手を選んだ理由って」

ブ..『恐らく、マスターの槍の使い方を上げるためだと思います。』

ア..「.....だったら、頑張らないとね。」

ブ..『はい。』

アリシア s i d e e n d

翔 s i d e

俺はモニターでなのは達の訓練の様子を見ていた

翔..「どうやら、あいつ等気が付いたみたいだな。」

ゼロ..『そのようだな。ところで、お前は訓練をしなくていいのか?』

翔..「勿論するさ。」

そう言うのと、俺はデカマスターとシンケンレッドのレンジャーキ―を取り出し、ランプに入れ、実体化させた

翔..「さて、派手に行こうか!!」

そう言うのと、俺は二人に向かって走り出した

第26話 A、S編「翔対管理人格」

翔 side

翔..「今日が運命の日か・・・。」

俺は部屋で準備をしながら呟いた

ゼロ..『緊張でもしているのか?』

翔..「俺がそんなたまに見えるか?」

ゼロ..『見えないな。』

準備を終えると、俺は約束の場所である、海鳴公園に向かった

（海鳴公園）

俺が公園に着くと、既にはやて達が居た

翔..「俺が最後か。」

な..「翔君、おはよう。」

フェ..「おはよう、翔。」

ア..「おはよう、翔」

は..「おはようや、翔君。」

翔..「おはよう。」

俺は4人に挨拶をした

翔..「時間が勿体ないからな、行くぞ。」

俺がアースラに連絡を入れようとした瞬間

ア..「翔、なのは、フェイト、アリシア何してんのよ?」

アリサとすずかがこっちにやってきた

な..「アリサちゃん、すずちゃん!?!? どうしたのこんなところで!?!?」

ア..「私は朝の散歩にきたのよ。」

す..「私はアリサちゃんに誘われて。」

翔..「(今、アースラに連絡するのはまずいな)」

俺がそう思っていると、

ク..『翔。』

空中にモニターが展開され、クロノが写っていた

翔..「このバカ、何勝手に連絡を入れてんだよ!?!」

ク..『馬鹿とは何だ!?! 連絡が遅いから態々通信を送ってやって
いるというのに!?!』

翔..「少しは空気を読め!?!」

ア..「ねえ、私の気のせいじゃないなら空中にディスプレイ
があるんだけど」

す..「気のせいじゃないと思うよアリサちゃん。私も見えるし。」

な..「・・・翔君、どうしよう。」

なのはが俺に聞いてきた

翔..「どうしようって、連れて行くしかないだろう? 俺が管理者
と戦っている間に今までの事説明しておけ。」

フェ..「信じてくれるかな?」

翔..「信じるんじゃないか、二人なら。」

俺がそう言うと、なのは、フェイト、アリシアの3人苦笑いをし
ていた

翔..「取りあえず、クロノ。俺、はやて、ヴォルケインリッター以外の全員をアースラに転送してくれ。こっちは俺の魔法でポイントに行く。」

ク..『解った。』

翔..「それと、お前は後でお仕置きな。」

ク..『勝手に決めるな。』

リ..『許可します。』

ク..『かあさ・・艦長!?!』

クロノが驚いた表情でリンディさんの方を見た

翔..「リンディさんの許可も得たことだし、戦いの後が楽しみだな。」

俺はいい笑顔で笑った

翔..「そんじゃあ、行くか。」

俺ははやて達の方を向きそう言った

は..「うん。」

翔..「ゴール・ルーマ・ルジュナ!！」

俺は呪文を唱え、全員を無人世界に移動させた

〈第78世界〉

翔.. 「さて、始めるか。心の準備はいいか、はやて？」

俺ははやてに聞いた、シグナム達はすでに本に戻っている

は.. 「ええよ。」

翔.. 「そう、そう夜天の書の管理人格には名前が無いから考えておけ。」

は.. 「実は、もう決めてるんや。」

翔.. 「速いな、後で聞かせてくれよ。」

は.. 「勿論や。」

はやての返事を聞くと、俺は両手を向かい合わせた

翔.. 「荒ぶれ、俺のダイノガッツ！！」

すると、中央にダイノガッツが現れた

翔.. 「はやて、本を。」

は..「うん。」

はやてが本をだし、俺は本にダイノガッツを入れた。すると、本から眩い光がはしり、光が収まると、銀髪の女性が立っていた

翔..「お前が管理人格か？」

「ああ。話は全て聞いていた、本当に出来るのか？」

翔..「俺に二言は無い。やると言ったら、必ずやる。」

「なら、主と、我らの運命をお前に託す。」

翔..「ああ。行くぞ、ゼロ!!」

ゼロ..『Set up』

俺はゼロを起動させ、管理人格に戦いを挑んだ

翔 side end

3人称 side

くアースラ・ブリッジく

なのは達はアリサとすずかにこれまでの事を話した後、ブリッジにき、翔と管理人格の戦いを見ていた

翔…『はあああああ!!』

翔が右手に持った刀で管理人格に斬り掛かっていた

『……』

管理人格はそれを避けて、翔の上を取った

『刃以て、血に染めよ、穿て、ブラッディダガー!!』

管理人格が真紅のナイフを形成して、翔に放った

翔…『当たるかよ。』

翔は左手に握った銃で、ナイフを撃ち落とし、落とせなかったものは刀で切り裂いた

ク…「エイミィ、管理人格の魔道士ランクは約どれくらいなんだ?」

エ…「データ状だとSS+はいつてるよ。」

ア…「SS+!? そんなに凄いの!?!」

アリシアが驚き声を上げた

フェ..「翔、大丈夫かな。」

『咎人達に、滅びの光を。星を集え、全てを撃ち抜く光となれ』

フェ..「っ!!この呪文は!?!」

な..「スターライトブレイカー!?!」

3人称 side end

翔 side

翔..「やっぱ、一筋縄じゃ行かないな。」

ゼロ..『当然だな。』

俺がゼロと話していると

「咎人達に、滅びの光を。星を集え、全てを撃ち抜く光となれ」

翔..「おい、おいスターライトブレイカー撃つ気なのか?」

俺は正直驚いていた

翔…「ゼロ、ハンマーモード!!」

ゼロ…『了解』

ゼロが刀からハンマーに変わった（見た目はハリケンジャーのハンマー、色は赤）

翔…「はあああ」

俺は銃をホルスターに戻すと、左手で野球ボール並みの魔力弾を形成した

「貫け、閃光」

俺は魔力弾を上にあげると、ハンマーを両手で持った

「スターライトブレイカー」

管理人格が俺にスターライトブレイカーを放ったと同時に

翔…「超忍法869号!」

俺は一本足打法で魔力弾を全力で打ち、スターライトブレイカーにぶつけさせた、誰もが負けると思っていたが、俺の魔力弾はスターライトブレイカーを押し返していた

翔…「（魔力を圧縮して作った魔力弾だ。その威力はスターライトブレイカーと同等、更にハンマーで打たれたことにより、パワーはスターライトブレイカーを超えている）」

そして、魔力弾はスターライトブレイカーを打消し、そのまま管理人格に当たり、爆煙が辺りを覆った

翔…「これで、はやてが起きてくれたら楽なんだけどな。」

俺はハンマーを刀に戻し、肩に担ぎながらそう言った。だが、

翔…「やっぱ、無理だよな。」

煙が晴れると、そこには無傷の管理人格がいた

翔…「もう少し頑張るしかないか。」

俺は刀と銃を構えた

「マージ・ゴル・マジカ」

管理人格が聞きなれた呪文を唱えた

翔…「……あの呪文はまさか」

管理人格が手を上にあげると、炎の竜巻が形成された

翔…「ブレイジングストームだと、何でだ！？俺は魔力を蒐集されてないのに……っ！まさか！？」

俺は一つの結論に至った

翔…「（書を完成させるときに渡したダイノガッツに俺の魔力の一部が混ざったのか。）っち、間に合ってくれよ！」

俺は銃を管理人格に向け、銃口に魔力球を形成し始めた

「ブレイジングストーム」

管理人格が手を下して俺に攻撃しようとした瞬間

「……」

管理人格の動きが止まった。そして、

は..『翔君、聞こえるか?』

はやての声が聞こえた

翔..「ああ。その様子だと、成功したみたいだな。」

は..『うん。翔君もう一発でかいの打ち込んでくれるか? そうすれば、後はうちらがやるさかい。』

翔..「オーケー。」

俺は銃口に魔力を更に込め、中位の魔力球を形成した

翔..「行くぜ、Strike shot!!」

トリガーを引き、紅い砲撃を管理人格に打ち込んだ。砲撃は管理人格に当たると爆発し、管理人格がいた場所に大きい黒いドームが展開された

翔 side end

はやて side

は..「行けそうか？」

私は本の中で管理人格に話しかけた

「はい。」

は..「そんなら、切り離し開始や。」

「はい。防衛プログラム切り離します。・・・切り離し完了しました。」

は..「ほな、皆の所にいこっか。」

「はい。」

私達の目の前に光の道ができ、私達はそこに向かった

は..「そうや、大事な事言うの忘れとった！」

私は管理人格の方をみてそう言った

「大事なことですか？」

は..「そや、貴方の名前や。」

「私の名前」

は..「翔君に聞いたで、名前が無いんやろ？」

「・・・はい。」

は..「だから、ずっと考えていたんや。」

私は管理人格の頬に触った

は..「夜天の主の名において、汝に新たな名前を送る。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール・・・リインフォース。それが貴方の新しい名前や。」

リ..「ありがとうございます。主はやて。」

リインフォースが泣きながら私に言った

は..「ほな、行こうか。皆の所へ。私達の闇を打ち消すために。」

リ..「はい！」

第27話 A、S編「光の魔神現れる」

翔 side

黒いドームが出てきたことにより、俺はファーストフェイズが完了したことを悟った

翔..「セカンドフェイズが始まるな。・・・ゼロ、アースラになのは達をこっちに來るように伝えろ。」

ゼロ..『もう連絡してある。あと少しで着くだろう。』

翔..「そうか。」

そう言うと、ドームの近くに銀色の球体が現れ、その周りにシグナム達が居た

シ..「我ら、夜天の主の元に集いし騎士」

シャ..「主あるかぎり、我らの魂尽きることなし」

ザ..「この身命ある限り、我らは御身の元にあり」

ヴィ…「我らが主、夜天の王。八神はやての名の下に」

すると、銀色の球体のはじけ、夜天の書を抱えたはやてがいた

は…「夜天の光よ！我が手に集え！祝福の風、リインフォース。
セエトツ…：アップ！！」

はやてが叫ぶとシュベルト・クロイツから放たれた光に当てられたはやてはその身に、騎士と墮天使がモチーフとなったバリアジャケット、騎士甲冑を纏った

俺ははやての所に行こうとしたが、ヴィータが泣きながらはやてに抱きついたので、そこで止まり、黒いドームの方を見た

翔…「回復薬飲んどいたほうがいいな。」

俺が懷から薬を出そうとしたとき

な…「翔くゝん。」

フェ…「翔く。」

なのは、フェイト、アリシア、ユーノ、アルフ、クロノがこっちにやってきた

な…「翔君、怪我はない。」

翔…「俺をあると思うか？体力と魔力を使い過ぎたが、問題ねえよ。」

フェ..「良かった。」

なのは達が安心してしていると

は..「翔君。」

はやて達がこっちにきた

な..「はやてちゃん、大丈夫？」

は..「ちょっと頭がくらくらするけど、大丈夫や。」

リ..『椎名 翔、世話をかけたな。』

はやてから、別の声が聞こえた

翔..「別に、それより名前つけてもらったのか？」

俺が聞くと

リ..『ああ、祝福の風、リインフォースと言う名前を貰った。』

翔..「祝福の風つか、いい名前だな。」

は..「せやろ。」

ク..「話の途中悪いんだが、あれを先にかたずけた方がいいんじゃないか？」

クロノが黒いドームを指差しながら言った

翔.. 「それもそうだな？ リインフォース、奴の詳細を教えてください。」

リ.. 『あの暴走体は、50の障壁を持っている、暴走体に直接ダメージを与えるにはその障壁全てを破壊しない限り無理だろう。』

な.. 「そんなに多いんですか？」

フェ.. 「こっちの攻撃班は7人、数が足りない。」

翔.. 「45までなら、俺が破壊できる。」

は.. 「大丈夫なんか、翔君？」

翔.. 「ああ、本気を出すからな。」

な.. 「翔君の本気、初めて見るかも。」

翔.. 「そんじゃあ、派手に行こうぜ！！」

ドシュ！ドシュ！

闇の柱が何本も上がった

ク..「始める。」

は..「夜天の魔道書、呪われた魔道書と呼ばせたプログラム、闇の書の闇。」

ユーノ・アルフ・ザファイラ..「はあああああ!!!!!!!」

3人がそれぞれ魔力の鎖を作り出し攻撃してこようとする暴走体の動きを封じる

翔..「ゼロ!!」

ゼロ..『Full Drive start』

俺の魔力が一気に上がった

翔..「椎名翔と」

ゼロ..『無限の可能性、ゼロ』

翔・ゼロ..「おして参る!!」

俺はゼロを上に掲げ、魔力を込めた

翔..「炎牙天衝!!」

剣を振りおろし、炎を纏った紅い斬撃を飛ばした

斬撃は暴走体のバリアに当たると、一気に45層の障壁を破壊した

は..「ホンマに破壊したで、しかも一撃で。」

翔..「後はお前等の任せる。」

ヴィ..「ちゃんと合わせろよ、高町なのは！」

な..「ヴィータちゃんもね!!」

ヴィ..「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

グ..『G i g a n t f o r m』

ヴィータの掛け声でグラーフアイゼンがカートリッジをロードし
巨大なハンマーに変形した

ヴィ..「轟天爆碎!!!! ギガント・シュラーーークッ!!!!」

ハンマーが暴走体に振り下ろされバリアに接触する

ハンマーが当たると46個目のバリアが破壊された

な..「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン行きます！
」

レ..『Load cartridge』

レイジングハートがカートリッジを4発ロードし先に桜色の羽が
2対現れ暴走体に向かって不可視のバインドが向かいその衝撃でバ
リアが少し歪む

な..「エクセリオン……………バスター！！」

矛先から4つの砲撃が放たれバリアに命中する

な..「ブレイク……………」

4つの砲撃は1つに集まり威力を増大させ

な..「シューーーー！！！」

47個目のバリアを砕いた

シャ…「次、シグナムとテストロッサちゃん。」

シ…「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン。刃と連結刃に続くもう1つの姿……」

レ…『Bogen form』

レヴァンティンがカートリッジをロードし柄と鞘がくつつき1つの弓に変わった

シ…「駆ける隼!!」

レ…『Sturm Falken.』

魔力が一本の矢となってバリアに放たれ

48個のバリアを破壊した

フ…「フェイト・テストロッサとバルディッシュ・ザンバー、行きます!!」

バ…『Load cartridge』

バルディッシュがリボルバー式のカートリッジを3発ロードした

フ…「はあ!!」

フェイトがバルディッシュを一振りするとなのはと同じく不可視のバインドが向かっていきバリアに命中する

フ…「打ち抜け!雷神!!」

バ…『J e t z a m b e r』

魔力刃が長く伸び、最後のバリアごとバグの体を切り裂く

バグ…「グアアアアアアア!!!!!!」

暴走体はこちらに攻撃しようとし新たに触手を作り出すが

ザ…「盾の守護獣ザフィーラ、砲撃なんぞ撃たせん!!」

ザファイラが放った魔法により触手は根こそぎ消え去る

シャ…「アリシアちゃん、はやてちゃん」

ア…「アリシア・テストロッサとブリュナーク、行くよ！」

アリシアはブリュナークをジャベリンモードに変えると、左手で魔力球を形成した

ア…「撃ち抜け、雷槍！ライトニングランス！！」

ブリュナークで魔力球を突き、槍の形状をした雷砲撃を放ち、最後のバリアを破壊した

は…「リインフォース、行くで！！」

リ…『はい、我が主。』

は…「彼方より来たれ……宿り木の枝、銀月の槍となりて撃ち抜け！！」

はやてが呪文を詠唱すると、周りに白銀の光が現れた

は…「石化の槍！ミストルティン！！」

いくつもの魔力槍が暴走体に放たれた当たった部分から急速に石化が進行し全体が石化した。しかし、

バグ「グオオオオオオオオ！！！！！！」

石化した部分を破り新たな体が再生し続ける

ア..「うわぁ」

シャ..「なんだかすごい事に。」

エ..『やっぱり、並みの攻撃じゃ通じない。ダメージを与えたそばから再生されちゃう。』

ク..「だか、ダメージは通っている、プラン変更は無しだ。」

クロノが新しい杖を構えた

ク..「行くぞ、デュランダル！」

デュ..『OK Boos』

ク「悠久なる凍土、凍てつく棺の内に永遠の眠りを与えよ！」

クロノが唱えると同時に海の表面がどんどんと氷結していく

ク..「凍てつけ!!」

デュ..『E t e r n a l c o f f i n』

バグを全て凍らせ動きを封じた

翔..「なのは、フェイト、はやて、止めと行くぜ！」

な・フェ・は..「うん。」

翔..「ディーマグナム、ファイナルモード!!」

俺はディーマグナムの銃身をオープンさせ、ファイナルモードに変えた (見た目はSRW無限のフロンティア、ハーケンのクロンダイクモード)

レ..『S t a r l i g h t b r e a k e r』

な..「全力全開!! スターライト!!」

なのはの足元に巨大なミッド式の魔法陣が展開し、レイジングハートの矛先に桜色の魔力が収束を始める

フ..「雷光一閃!! プラズマザンバー!!」

フェイトは足元にミッド式の魔法陣を展開しバルディッシュを掲げると上空から雷が魔力刃に落ちフェイトの目の前に金色の魔力が

収束する

は..「ごめんな.....おやすみな.....」

はやては悲しい顔をしてベルカ式の魔法陣を展開し

は..「響け！終演の笛、ラグナロク.....」

はやての目の前に白銀の魔力が収束し始めた

翔..「眠れ、永遠にな。」

俺はブレイクオープンした銃の銃口に魔力を収束させ、更にその魔力を圧縮させた

な・フェ・は..「ブレイカー！！」

翔..「ファイナルストライクショット！！」

4人同時に最大級の砲撃を放ち、暴走体を打ち消した。だが、

エ..『そんな、また再生し始めた！？』

ク..「何だと！？」

な..「だったら、もう一度。」

なのは達がもう一発砲撃を放とうとしたが

翔..「やめておけ、体が壊れるぞ。」

な..「でも。」

翔..「.....使いたくなかったんだけど、仕方ないか。」

俺はゼロを待機状態に戻し、モバイレーツとレンジャーキーを取り出した

シ..「それは!？」

シグナム達は俺が何をするのか気が付いた

翔..「暴走体、お前に見せてやるよ、俺の切り札をな!!豪快チエンジ!!」

『ゴゥカイジャー!!』

俺はゴゥカイレッドに変身した

な..「翔君のバリアジャケットが変わった!？」

翔(GR)..「マジで行かせてもらうぜ。」

俺はバックルからマジレッドのレンジャーキーを取り出した

翔(GR)..「豪快チエンジ!!」

『マゝジレンジャー!!!』

俺はマジレッドの姿に変わった

翔(MR) .. 「燃える炎のエLEMENT、赤の魔法使い、マジレッド!!!!」

ヴィ.. 「あの時と姿が違う!?!」

翔(MR) .. 「ユニゴルオン!」

俺が叫ぶと、天空聖者の魔法陣が展開され、そこからユニゴルオンが出てきた

ア.. 「ユニちゃん!?!」

アリシアがユニゴルオンの出現に驚いていた

俺はユニゴルオンにまたがり、暴走体に向かって空を掛けた

フェ.. 「翔、無茶だよ!」

しかし、途中天空界の魔法陣が現れ、そこを通り過ぎると、俺とユニゴルオンは巨大化した

は.. 「また姿が変わった!?!?とゆうか、ロボ!?!」

ユ.. 「ヒヒゝゝン」

翔(MF) ..「ああ、行くぞユニゴルオン！マジ・マジ・ジルマ・ジンガー！！」

『マジ・マジ・ジルマ・ジンガ』

翔(MF) ..「光と炎が一つとなりて、聖なる魔神、今現れる！」

俺とユニゴルオンが一つとなった

翔(SK) ..「天空合体、セイントカイザー！！」

ここに聖なる魔神が降臨した

ク..「なんなんだ、あの姿は・・」

エ..『そんな。翔君からロストログアの反応が出てるよ！！』

ク..「何だって！？」

翔(SK) ..「はあああああ！！」

俺は暴走体に向かって走り出した

翔(SK) ..「ホーンランサー」

手に持っている槍で暴走体の体を突いた

「ぎゃあああああ」

俺は槍を抜き、跳び上がり、体を回転させながら暴走体に向かっ

て落下した

翔（S K）・・「セイントスピッキング！！」

暴走体の頭を思いっきり蹴り飛ばし、更にその頭を踏み台にして、更に高く跳び上がった

翔（S K）・・「これで、終わりだ！！」

俺は槍を前に構え、聖なるエネルギーを槍に集めながら降下した

翔（S K）・・「セイントホーンフィニッシュ！！」

聖なる槍が暴走体の体に突き刺さり、エネルギーが暴走体の中に走った

翔（S K）・・「はあ！！」

俺は槍を抜き、回転しながら後ろ向きで海面に着地した

翔（S K）・・「チェックメイト！！」

槍を後ろに引き、決め台詞を言うと、暴走体が爆発し、そこには何も残らなかった

翔・・「セカンドフェイズ終了」

俺は合体を解除して元の姿に戻った、勿論ユニゴルオンには乗っている

ク..「翔、その馬と、さっきだしたものをこちらに寄せ!」

近づいてくるなり、クロノがそう言った

翔..「やだね、これは俺のものだ。お前等管理局にやる義理は無い!」

ク..「だが、それは・・・」

翔..「お前にとっては過ぎた力かもしれないが、俺にとっては大事な物なんだよ。それを奪う権利はお前には無い。」

リ..「そのとおりね。』

通信が開き、リンディさんが現れた

ク..「しかし、艦長!」

リ..『クロノ執務管、あれは翔君にとって大事なものの、私達は彼に大きな借りがあるのよ。そのことを忘れないで。』

ク..「・・・はい。」

翔..「それより、はやて達を連れて行っていいか?これから、最終フェイズに入らなきゃいけないからな。」

リ..『「・・・私達も着いて行っていいなら、許可します。』

翔..「ああ。じゃあ、地球に転送してくれ。」

こうして、暴走体との戦いが終わった

第28話 A S編「新たな命」

翔 side

俺達は今、俺の家に向かって歩いている。理由は、リインフォースの中にある、バグを完全に消去するためだ

は..「翔君、どこに向かっておるん？」

翔..「俺の家だ。そこで、リインフォースの中にあるバグを完全に亡くす。」

リ..「そんなことが出来るのか!？」

はやてを抱えている、リインフォースが驚いた表情で聞いてきた

翔..「ああ。俺には作られた当時の夜天の書のデータがあるからな。余裕だ。」

そんなことを話しているうちに家に着いた

は..「ここが、翔君の家。」

翔..「行くぞ。」

俺はドアを開けて家の中に入った、他の奴らは俺の後を慌てて追

ってきた。俺の部屋に入ると、俺は別荘の中に入った

（別荘内）

は.. 「何や此処は！？外は真冬なのにここは常夏やないか！？」

翔.. 「まあ、そういう風に設定したからな。」

はやてが驚いていたので、説明した。リンディさん、クロノ、エイミィさんも同様に驚いていた

翔.. 「リインフォース、本に入ってくれ。」

リ.. 「あ、ああ。」

リインフォースが本に入った

翔.. 「じゃあ、はやて。リインフォースを少し預かるぜ。」

は.. 「うん。よろしくな、翔君。」

翔.. 「おう。時間かかるからな、ゆっくりしてるといいぜ。じゃあ、また後でな。ゴール・ルジュナ。」

俺は呪文を唱え、整備室に移動した

（整備室）

翔..「早速はじめますか。」

俺は本を機械に入れ、データを表示した

翔..「後は、当時のデータを入れてっと。」

俺は持っていた夜天の書のデータを今の書にインストールさせた

翔..「後は、自動でいいな。」

俺は自動更新に変え、のんびりと待った。その途中、

翔..「うん？」

本から、三つの光の球体が飛び出た

翔..「なんだ!？」

俺が驚いていると、三つの光の球体が輝き、人間の姿に変わった

翔..「おい、おい。（なんでマテリアルが出てくるんだ!？登場はもう少し後だろう!？）」

星光…「外の光を浴びるのは久しぶりですね。」

雷刃…「うん、うん。」

闇の王…「まったくだ。」

俺はバリアジャケットを展開して、ゼロをマテリアルに向けた

翔…「何故お前等が此処にいる？闇の書のマテリアル」

俺は真剣な表情で聞いた。すると

星光…「私達に戦いの意思はありません。ですので、デバイスを
しまってくださいか。」

翔…「……………」

俺はゼロを待機状態に戻した。まあ、バリアジャケットは来てる
けどな

星光…「ありがとうございます。」

翔…「それで、なんでお前たちが此処にいるんだ？」

俺が聞くと

雷刃…「僕たちは本来なら消えるはずだったんだけど。」

闇の王…「闇の中で、変わった服を着た老人にあってな。『お主

らに新たな命を授ける。その命で闇の書を蘇らせるか、それともしないかはお主たちが決めよ』そう言われたのだ。」

翔…「変わった服を着た老人？」

星光…「はい。それで、椎名 翔という少年にあったら、この手紙を渡せと言われました。」

翔…「椎名 翔は俺の名前だけど。」

俺がそう言っていると、星光の殲滅者は俺に手紙を渡した。俺は手紙を開け、読み始めた

『翔よ、わしじゃ、神じゃ。闇の書のマテリアル達に新しい命を与えたから、面倒を見てやってくれ。因みにその3人は守護騎士たちとは違って、人間じゃからな。まあ、よろしく頼む。』

神より』

翔…「なんじゃそりゃー!!！」

俺は大声で叫んだ

（それから10分後）

翔…「っで、お前たちは一体どうするつもりなんだ？闇の書を復活させるのか？」

落ち着いた俺は3人に聞いた

星光…「いいえ、そのつもりはありません。」

翔…「なんでだ？」

雷刃…「本の中で、僕たちは暖かい光に包まれたんだ。」

闇の王…「その光に包まれたら、闇の書を復活させる気もなくなってしまうた。」

翔…「光ねえ。」

俺は少し考えた

星光…「あの、それと一つお願いがあるんですが。」

翔…「お願い？俺に？」

星光…「はい。その、私達を貴方の家に住まわせて下さい。」

翔…「はああああ！？なんで！？」

闇の王…「お前から、我らが浴びた光と同じものを感じるのだ。」

翔…「俺から？」

星光…「はい。」

雷刃…「それに、お前と一緒にいると、なんか心が落ち着くんだよね。」

翔..「そう言われてもな。」

俺が悩んでいると

七..「翔ちゃん。」

母さんが整備室に入ってきた

翔..「母さん。」

七..「やつほー。って、その子たちは誰？それと、何でなのはちやん達に似ているの？」

翔..「実は……」

俺は母さんに、今あった話をした

七..「ふうん。私はいいと思うよ。家族が増えるのはいいことだしね」

翔..「だけど、父さんの返事を聞かなくてもいいかよ？」

七..「鷹介なら、きっと『いいぞ』って言うと思うよ。」

翔..「さいですか。」

星光..「では。」

翔..「ああ、いいぞ。この家に住んでも。」

雷刃…「やったー」

そう言うのと、雷刃が俺に抱きついた

翔…「だ、抱きつくな／＼／＼（此奴、フェイト、アリシアと同じ顔だけど性格が全然違う）」

七…「翔ちゃん、もしかして照れてるの？」

母さんがいい笑顔で俺に聞いてきた

翔…「照れてない！！それより、此奴らの名前はどーするんだよ？」

七…「そうね、翔ちゃんが決めたら？」

翔…「俺！？」

母さんの発言に俺は驚いた

翔…「普通は、親が決めるもんだろ。」

俺がそう言うのと

星光…「あの。」

翔…「うん？」

星光…「私もできればあなたに付けてもらいたいんですが。」

雷刃…「僕も。」

闇の王…「我もだ。」

七…「だってさ。」

翔…「はあ」

俺はため息をついて、3人の名前を考え始めた

翔…「まず、星光の名前は星華^{せい}だ。」

星光…「星華ですか？」

翔…「そ、星の華っていいんだ。つで、雷刃の名前は雷華^{らい}」

雷刃…「雷華か……。うん、解った。」

翔…「最後に、王の名前は空だ。」

闇の王…「空……。中々いい名前だな。」

3人は俺の考えた名前を気に入ったようだ

七…「翔ちゃんにしてはいい名前を付けたわね。」

翔…「っへ。」

そんなやり取りをしている間に、データのインストールが終わり、俺達はなのは達の所に行った。3人にあった時、なのは達は驚いて

いたが、直ぐに仲良くなった。因みに3人が俺の家に住むと言った時、

3人..「ずるいー(の)!!」

っと言っていたが、取りあえず俺は無視した。こうして闇の書事件は幕を閉じた

その後のクロノ

翔..「さて、覚悟はできてるなクロノ？」

俺はバインドでクロノを捕獲して、訓練室に連れてきた

ク..「一体僕に何をさせるつもりだ!？」

翔..「何、偉大な英雄を馬鹿にしたからな。ちよっときつめのO☆H A☆N A☆S Iをするだけだ。」

そう言うと、俺はレンジャーキーと、トランペットを取り出し、

ゴーオンジャーと、アバレンジャーを召喚した

翔..「じゃあ、頑張って生き残れよ！」

そう言うのと、俺は訓練室を出て行った

翔..「っあ！そうそう、この人たちの強さは全員S+だから。」

その後、訓練室でクロノの叫び声が聞こえたが、無視した

第29話 外伝編「試験」

翔 side

闇の書事件が幕を閉じてから、数か月後、俺達は普段の生活に戻っていた。元闇の書のマテリアル達は俺の家族になり、椎名星華、椎名雷華、椎名空として生きている。3人共予想よりいい子なので、問題ないのだが、なぜか朝、俺が起きるといつもベッドにもぐりこんできている

翔..「はあ、またか。」

今朝も同様だ

星華..「すう、すう。」

雷華..「うーん、それは僕のケーキ、むにゃ、むにゃ。」

空..「zzzzz」

翔..「何でいつもいるのかね？鍵はいつも掛けているはずなんだが？」

俺は3人を起こさないようにベッドから降りると、着替えてリビングに向かった

七..「あら、翔ちゃん、おはよう。」

鷹..「おはよう、翔。いい夢は見れたか？」

俺がリビングに入ると、父さんと母さんがいた

翔..「おはよう。」

鷹..「それにしても、今日は早いな。休日はいつも、遅くまで寝ているはずだが。」

翔..「今日は嘱託魔導師試験を受けに行くからね。」

七..「そう言えば、今日だったわね、試験。まあ、翔ちゃんなら余裕で合格すると思うんだけどね。」

翔..「だといいけど。」

俺が席に着くと、星華達が起きてきた

星華..「おはようございます、父様、母様。」

雷華..「おはよう、お父さん、お母さん。」

空..「おはようなのじゃ、父上、母上。」

鷹・七..「おはよう。」

七..「じゃあ、朝ご飯にしようか。」

全員が席に着き、俺達は朝ご飯を取った

翔..「じゃあ、行ってくるね。」

朝食後、俺は待ち合わせの場所に向かおうと家を出た。勿論星華達も一緒だ

な..「翔君、星華ちゃん、雷華ちゃん、空ちゃん、おはよう。」

待ち合わせの場所である、フェイトの住んでいるマンションに着くと、なのはがこっちに向かって来た

翔..「おはよう。」

な..「それと、星華ちゃん、雷華ちゃん！翔君の腕から離れるの！！」

そう、俺の両腕には星華と雷華が抱きついていたのである

星華..「いやです。」

雷華..「やだね。」

な..「ううううう。」

翔..「はあ、さっさと行くぞ。」

俺は星華と雷華のホールドを抜けて、フェイトの家に向かった
フェイトの家に上がると、準備されていた魔法陣に入り、本局に

転移した

ク..「やっと、来たか。」

俺達が本局の転送ポートに着くと、クロノが待っていた

翔..「ちょっとな。」

ク..「まあ、いい。では、行こう。」

俺達はクロノの後に続いて歩いた

な..「~~~~~♪」

まあ、なのはが俺の腕に抱きついているのは知らないが、って、
いつ俺の腕に抱きついたんだ!?

ク..「翔、君の筆記試験は免除された。だから、なのはたちの前
に君の試験を始める。」

翔..「あいよ。」

俺はなのは達と別れ、試験会場に向かった

く試験場く

エ…『それじゃあ、これから椎名翔の囑託魔導師試験をはじめます。準備はいいですか?』

翔…「うす。」

エ…『筆記試験は無いので、詠唱、又はターゲットの撃破の試験ですので、好きな方を選んでください。』

翔…「ふむ。（ここでユニゴルオンを出すわけにはいかないからな。それに、俺の詠唱魔法は威力高いのばっかだからな）ターゲット撃破をお願いします。」

エ…『では、15分以内でターゲットを破壊してください。』

俺の前にターゲットが出現した

翔…「ゼロ!」

ゼロ…『S e t u p』

俺はバリアジャケットを纏い、炎神剣とディーマグナム改を手にした

ゼロ…『っで、どうするんだ?』

翔…「強度はA A Aランクって所か、斬撃で充分だろう。」

俺は炎神剣に炎を纏わせ、上に掲げた

翔…「炎牙大天衝!!」

俺は巨大な炎の斬撃を飛ばした

斬撃はターゲットに当たり、跡形もなく破壊した

エ..『.....っは!!ターゲットの破壊を確認しました。
続けて模擬戦を開始しますがいいでしょうか?』

翔..「はい。」

エ..『では、担当の魔道士がそちらに行くまで休んでいてください。』

翔 s i d e e n d

3人称 s i d e

リ..「あら、あら、まさか一撃で破壊するとは。」

レ..「とんでもないわね、彼。・・・あの盾はA A Aランク並の
強度があるのに。」

リンディとレティが驚いていると

エ..「今の斬撃はS S +並みの威力があると解りました。」

エイミーが信じられない表情で言った。すると、

「ほう、中々いい目をした少年だな」

管理局員とは少し違う制服を着た男性が管制室に入ってきた

リ..「あら、勇さん。お久しぶりです。」

リンディが挨拶をした

勇..「ああ。あの少年、家の息子と同じ年だというのに、かなり実践を積んできたようだな。」

勇は翔を見ながらそう言った

リ..「ええ。それより、勇さん。彼、誰かに似ていると思いませんか?」

リンディが面白そうに聞いた

勇..「そうだな、・・・鷹介と七海に似ているな、彼は。彼のデータを見せてもらえないか?」

エ..「は、はい。」

エイミーは翔のデータを勇に見せた

勇..「名前は椎名翔。椎名?・・・まさか!彼は鷹介と七海の息子なのか!?」

リ..「はい♪」

リンディはどこか楽しそう言った

勇..「そうか、彼が、あの二人の息子なのか。道理でいい目をしているわけだ。」

ウル..『そうだな。』

勇のデバイスウルザードも納得がいったような返事をした

3人称 side end

翔 side

翔..「うん？」

担当の魔道士を待っている間、俺は何か聞こえたような気がした

ゼロ..『どうした？』

翔..「いや、誰かに噂をされたような気がしてな。」

ゼロ…『気のせいじゃないのか』

翔…「……だと、いいんだけどな。」

「待たせたな。」

声ができる方向くと、二人の魔道士がこっちにやってきた

ゼ…「君の試験相手のゼスト・グライガイツだ。」

ティ…「同じく、ティード・ランスター執務管だ。よろしくな。」

翔…「どうも、椎名翔です。今日はよろしくお願いします。」

俺は二人に挨拶をした

翔…「それにしても、二人が俺の相手なんですか？」

ゼ…「うむ、最初はティード執務管だけの予定だったんだが。急に俺も呼ばれてな。」

翔…「はあ。」

エ…『3人共、準備はよろしいでしょうか？』

エイミイさんの声が聞こえたので、俺は構えを取った

翔…「はい。」

ゼ…「俺も構わん。」

ティ…「こっちもだぜ。」

ゼストさんとティーダさんもそれぞれ槍と銃を構えた

エ…『では、試験開始!』

翔…「派手に行くぜ!!」

開始の合図と同時に俺は魔力弾を二人に放った

二人はそれぞれ避けた

ゼロ…『Lightning Move』

俺は一瞬でゼストさんの前に移動した

ゼ…「っ!!」

翔…「はぁ!!」

俺は肩に担いでいた炎神剣を振りおろした

ゼストさんは槍でその攻撃を防いだ

ゼ…「・・・いい攻撃だ。」

翔…「それは、どうも!!」

俺は剣を振り抜き、ゼストさんを弾き飛ばした。そして、魔力弾

を放とうとしたとき、後ろから、魔力弾が向かって来た

翔…「ちい。」

俺は銃口から魔力刃を形成して、体を左に回転させながら、その魔力弾を切り裂いた

ティ…「へー、その銃は魔力刃も出せるのか。」

魔力弾を放ったティードさんが驚いていた

翔…「…ついでに、もう一つ驚いてみますか？」

ティ…「?」

俺は銃口に展開している魔力刃に電気を纏わせた

翔…「ライティングブレード、シュート!!」

引き金を引き、魔力刃を撃ちだした

ティ…「つなに!？」

ティードさんはバリアでそれを防いだ。だが、

翔…「……解放!」

俺の合図で、魔力刃に蓄積されていた雷を解放さえ、巨大な雷を降らせた

翔…「…………よく、避けられましたね。」

俺はティードさんがいた場所とは違う場所の見た

ティ…「まあな。」

翔…「……いや、避けたんじゃないくて、始めからいなかった方が正解かな。」

ティ…「っ！！よく気が付いたな、あれが俺の作った幻影だと。」

翔…「何となくですよ。さっきのバリアはそこから出したんでしよ？」

ティ…「正解。それにしても、あんな技があるとわな、恐ろしや、恐ろしや。」

ゼ…「はああああ」

翔…「っ！！」

背後から、ゼストさんが襲い掛かってきたので、俺は炎神剣で受けとめた

翔…「こん、の！！」

俺は脚に魔力を纏わせ、ゼストさんに回し蹴りを放った

ゼ…「ぐうお！！」

俺は剣に炎を纏わせた

翔…「はぁっ!!」

そして、ゼストさんに斬り掛かった

ゼ…「ふん。」

槍で防御されたが、俺には関係なかった

翔…「炎牙大天衝!!」

そして、ゼロ距離から炎の斬撃を繰り出し、ゼストさんを包み込ませ、気絶させた

翔…「後は、貴方だけだ。」

俺はティーダさんを見てそう言った

ティ…「こいつは驚いた、まさかゼストさんに勝つとわな。」

ティーダさんが俺に銃を向けたので、俺も銃を向けた

ティ…「銃では俺には勝てないぜ。」

翔…「さあ、それはどうですかね。」

俺達は同時に動き、魔力弾を撃ちだした

ティ…「クロスファイヤー、シュート!!」

40個の魔力弾が俺に向かって放たれた

翔…「はあっ!!」

俺は炎神剣を袈裟切りの要領で振り上げ斬撃を飛ばし全てを打ち消した

翔…「そろそろ、終わりと行きましようか! ディーマグナムファイナルモード!!」

銃身がオープンし銃口に魔力が集まり、圧縮されていった

ティ…「(あれはまずいな)」

ティーダも銃口に魔力を集束させた

翔…「ブラストショット!!」

ティ…「ファントムブレイザー!!」

赤の魔力弾とオレンジ色の魔力砲がぶつかった

翔…「これで、終わりだ!!」

俺は斬撃を自分の魔力弾に飛ばし、威力とスピードを上げ、魔力砲を打ち破った

ティ…「おい、おい、そんなのありかよ。」

魔力弾はティードに当たり、壁まで吹き飛ばした

エ…『試験管の戦闘続行不能を確認。試験を終了します。受験者は結果が出るまで、待機してください。』

こうして、俺の嘱託魔導師試験は終わった

第30話 外伝編「結果」(前書き)

今回は短めです

第30話 外伝編「結果」

翔 side

模擬戦後、俺は試験結果が出るまで、暇なので、医務室にいるゼストさんとティードさんの見舞いに行った

翔..「大丈夫ですか、二人とも？」

ティ..「これをやった本人がそんなこと聞くか？」

翔..「あははは。」

俺は苦笑いをした

ゼ..「しかし、君は強いな。二人相手に一步も引かないとわ。」

翔..「まぐれですよ。」

まあ、本当は勝てるんだけどね。いつも1対多の戦闘訓練してるから

ティ..「それにしても、お前器用だよな、剣と銃、両方をいっぺんに使うなんて。普通はできないぞ。」

翔..「そうかもしれませぬね。」

ゼ…「それにしても、君みたいな小さな子供を戦場に出すようなことになるとはな。管理局は一体何を考えているんだ？」

ゼストさんがそう言うのと、

エ…「失礼します。」

エイミイさんが医務室に入ってきた

翔…「エイミイさん。あれ、クロノはどうしたんですか？」

エ…「クロノ君はなのはちゃん達の試験管だからね。そっちに行つたよ。じゃあ結果を教えるね。」

翔…「はい。」

エ…「学力は元から問題無し。戦闘試験も問題ないから、無事に合格だよ。」

翔…「うし。」

俺はガッツポーズをした

エ…「それと、これが翔君の魔道士ランクだよ。」

エイミイさんは俺にランクを見せてくれた

魔力量 S＋

魔道士ランク 総合S＋

翔…「S＋ランクか。」

ゼ…「ほう、俺と同じか。」

ティ…「負けちゃったー。」

ゼストさんとティーダさんは俺のランクをみてそれぞれ感想を言った

翔…「ははは。それと、ゼストさん、ティーダさんこれからよろしくお願いします。」

俺は二人にお辞儀をした

ゼ…「ああ。」

ティ…「おう。」

すると、

勇…「失礼する。」

小津勇が医務室に入ってきた

ティ…「勇さん!？」

ぜ..「勇一佐! ? 何故ここに! ?」

ゼストさんとティーダさんが驚いていた。ってゆうか、マジレンジャーの勇さんに瓜二つだな

勇..「この子に用があつてな。」

そう言いながら、俺の方を向いた

勇..「初めまして、椎名翔君。俺は小津勇、ファイヤースクワットの部隊長であり、元君の両親の上司だ。」

翔..「父さんと母さんの。」

勇..「二人は元気か?」

翔..「はい。」

勇..「そうか、安心した。・・・この手紙を二人に渡しておいてくれないか。」

勇さんは俺に手紙を差し出した

翔..「解りました。」

勇..「それじゃ、俺はこれで失礼する。君とまた会える日を楽しみにしているよ。」

そう言うと、勇さんは医務室から出て行った

翔..「.....（あの人、かなり強い。）」

エ..「翔君？」

翔..「はい？」

エイミィさんに声を掛けられ、俺は我に返った

エ..「そろそろ、なのはちゃん達の試験が終わるはずだから、見に行こうか。」

翔..「はい。それじゃあ、ゼストさん、ティーダさん俺はこれで。」

ゼ..「うむ。」

ティ..「またな。」

俺は二人にお辞儀をして、医務室をでた

その後、なのは達と合流した俺は、試験の結果が出るまで、のんびりとしていた

ク..「高町なのは、八神はやて、椎名星華、椎名雷華、椎名空5人共嘱託魔道士試験合格だ、おめでとう。それと、これが君たちの

「魔道士ランクだ」

高町　なのは

魔力量　A A A +

「魔道士ランク　空戦A A A +

八神　はやて

魔力量　S +

魔道士ランク　総合S -

椎名　星華

魔力量　A A A +

魔道士ランク　空戦A A A +

椎名　雷華

魔力量　A A A +

「魔道士ランク　空戦A A A +

椎名　空

魔力量　S +

魔道士ランク 総合Sー

翔..「俺も含めて、全員がチート並みの力を持っているよな。」

ク..「一番のチートは君だろうな、確実に。」

翔..「なにを言ってるんだよ、クロノ。（お前、またあの地獄を見たいのか？）」

念話でそう言うと、クロノ顔が青白くなった

第31話 外伝編「転校生は転生者で元恋人!？」

翔 side

俺達が管理局に入ってから1年後、俺達は小学5年になった。そんなある日

「皆にお知らせがあります。今日は私達のクラスに転校生が来ます。」

「先生、その子は男の子ですか？それとも女の子ですか？」

一人の男子が質問した

「女の子です。」

先生の返事を聞くと、クラスの男子全員が雄叫びを上げた

翔..「うるせえな。」

な..「うん、うん。」

は..「1年前を思い出すわ。」

フェ..「あの時もすごかったよね。」

ア..「私達の時でしょう、フェイト」

ア…「まあ、二人とも女子だったからね。」

す…「でも、その後の翔君もすごかったよね。」

星華…「私達の時もこんな感じでしたよね。」

雷華…「そうだったけ？」

空…「雷華、せめて1年前の記憶ぐらい覚えていたらどうだ？」

雷華…「嫌なことを覚えていたって特になんないもん。」

男子が騒いでいる中で俺達は1年前の事を話していた。つと、ゆうか何で全員が同じクラスなんだ？

「じゃあ、入ってきて。」

先生がそう言うと、ドアが開き、転校生が入ってきた

まい…「紫乃宮 まいです。よろしくお願いします。」

「席は椎名君の隣が開いているのでそこにしましょう。」

先生の話聞き、転校生が俺の隣にきた

まい…「よろしく。」

翔…「ああ、よろしくな。（この子の雰囲気、どこかアイツに似てるな。）」

俺がそんなことを考えていると

まい…「(昼休み、屋上で少しお話をしましょう。転生者さん)」

そう言う、念話が俺に送られてきた

翔…「っ!!」

俺は顔には出さなかったが、驚いた

翔…「(何で俺が転生者だと知っている!?!こいつ一体何者だ!?)」

〵昼休み〵

翔…「さて、行くか。」

昼休みになったので、俺は紫乃宮まいとの約束の場所に行こうと立ち上がった

な…「翔君、お昼一緒に食べよう。」

なのは達が俺の席にきた

翔…「悪いな、ちょっと用事があるんだ。」

そう言い、俺は屋上に向かった

俺が屋上に着くと、紫乃宮まいが既にいた。俺は指を鳴らし、結界を張った

まい…「結界まで張るなんて、用心深いわね。」

翔…「ふん、用心に越したことはないからな。」

俺は紫乃宮まいを睨んでいった

翔…「何故、俺が転生者だと知っている。お前は一体何者だ、そして、何が目的だ!!」

俺は過激気を解放して聞いた

紫乃宮まいは俺の過激気など気にしないで俺に近づいてきた。そして、俺との距離が近くなると、その場で一旦止まり、いきなり俺に抱きついてきた

翔…「っな!？」

まい…「・・・会いたかったよ、翔。」

翔…「はぁ!？」

まい…「幼馴染で恋人だった私のこと、忘れちゃったの?」

幼馴染で恋人?・・・俺の記憶が正しければ、俺の恋人はあいっただけ。・・・まさか!？」

翔..「まい……なの……か？」

まい..「……うん。」

翔..「なんで、お前がここ……ん!？」

最後まで言おうとしたら、突然まいにキスをされた

まい..「ん／＼。……これで、あの時の事はやらにしてあげる。」

翔..「お前なあ／＼」

俺達が顔を紅くしていると、後ろから何かの気配を感じて後ろを向くと、桜色の砲撃が向かって来た

翔 side end

なのは side

私達は翔君と一緒にお昼を食べようと誘ったんだけど、断られてしまった

フェ..「ねえ、翔の様子なんかへんじゃない?」

アリサ…「そうね。」

アリシア…「何かあったのかな？」

は…「追いかけてようつか。」

私達は翔君の後を追って屋上にきた。すると、翔君が指を鳴らすと、結界が張られた

な…「指を鳴らしただけで、結界を張った。」

フェ…「この結界、かなり高等だよ。」

は…「一体、なんの話をするんや？」

まい…『結界まで張るなんて、用心深いわね。』

す…「紫乃宮さん？」

な…「なんで、屋上にいるの？」

フェ…「もしかして、翔の用事って紫乃宮さんと話をする事。」

翔…『何故、俺が転生者だと知っている。お前は一体何者だ、そして、何が目的だ!!』

な…「転生者？」

私は頭にはてなマークを浮かせた

すると、紫乃宮さんが翔君に近づいてき、そして抱きついた

その瞬間、私達全員黒いオーラを纏った

な..「ねえ、あの子にデイベインバスターを撃ってもいいよね？」

星華..「いいえ、此処は私達全員の砲撃を撃つべきです。」

そして、紫乃宮さんが翔君にキスをした

全..「ブチっ!!」

な..「レイジングハート、セットアップ」

私はレイジングハートを起動させ、

な..「デイベインバスター!!」

後ろから砲撃を二人に放った

なのは side end

翔 side

何かの気配がするから、気になって後ろを向くと桜色の砲撃が俺とまいに向かって来た

翔..「!!」

俺はまいを抱っこ（お姫様）してその場を離れた

翔..「何なんだ一体!？」

俺が驚いていると、

フェ..「動かないで。」

フェイト、アリシア、雷華がデバイスを起動させ、俺達に魔力刃を向けていた

翔..「何でお前等が此処にいるんだ？そして、これは一体どういうつもりだ？」

雷華..「翔、その子を離して。そうすれば、翔には手を出さないから。」

翔..「そんなことを言われて、俺がまいを離すと思ってるのか？」

アリシア..「じゃあ、翔ごとその子を倒すからいいや。」

3人がデバイスで俺達に攻撃しようとした瞬間

紫色の弾丸が3人にヒットした

3人..「きゃああ!!」

弾丸が飛んできた方を見ると、まいが両手に銃を握っていた

翔..「それ、もしかしてお前のデバイスか？」

まい..「そうよ。」

俺はまいを地面におろし、フェイト達のいる方を見た。そこには、
なのはたちもいた

翔..「なのは、はやて、アリサ、すずか、星華、空お前たちもいたのか。」

な..「翔君、覚悟はいいよね？オハナシの時間だよ。」

は..「せや。」

翔..「はあ、取りあえず、デバイスをしまえ。」

星華..「それは聞けませんね。」

空..「その通りだ。」

翔..「.....しまえ!!」

俺はなのは達全員に尋常じゃない殺気を飛ばした

全..「っ!?!?」

翔..「まいについては後で説明する。まい、お前もそれでいいよな。」

まい..「うん。」

昼休みを終えるチャイムが鳴ったので、俺達は教室に戻り、放課後まで静かに授業を受けた

そして、放課後

翔..「.....」

俺はなのは達にまいとの関係を話そうと思ったが場所が問題だった

翔..「何ですずかの家で話さないといけないんだ？」

す..「なのはちゃんの家だと全員入れないでしょ？」

翔..「.....まあいいか。」

フェ..「それで、二人はどういう関係なの？」

フェイトがストレートに聞いてきた

翔..「その話をする前に、お前等、俺達の話をごここまで聞いていた？」

は..「最初から最後まで。」

翔..「はあゝ。お前達は転生って聞いたことあるか？」

な..「ないの。」

は..「わたしはあるで、本を一杯読んでいたから。」

翔..「俺とまいは前世の記憶、つまり前生きていた時の記憶があるんだよ。」

星華..「成程。」

翔..「前世では俺とまいは幼馴染で恋人だったんだよ。」

全..「ええ〜〜〜!?!」

俺がそう言うのと、まいを除いた全員が驚いた

翔..「恋人って言っても、前世だから今は関係ないけど。」

そう言うのと

まい..「私は今でも翔の事が好きなんだけど。」

まいがそう言った

翔..「／／／／／」

正直に言われたので、俺は顔を紅くして目をそらした

な..「でも、それは前の翔君でしょ、今の翔君は貴方の知らない翔君だよ。」

なのはがそう言った

まい…「翔はあの頃と何も変わっていないもの、優しいのに不器用で自分の気持ちを正直に言えない所もあの時と全然変わってない。」

翔…「悪かったな、不器用で。」

その後は、全員でお茶をしてお開きになった、帰り際にはたちが『負けないからね』と言ってたけど、何に対して宣言だったのか、俺は知らない

翔…「つで、なんでお前は俺の家に行きたいなんて言い出したんだ？」

俺は星華、雷華、空、まいと一緒に家に向かっている

まい…「時期に解るよ♪」

翔…「？」

俺は疑問に思いながらも家に向かった

全…「ただいまー。」

翔…「うん？なんでまいがただいまって言うんだ？」

疑問に思ったのでまいに聞くと

まい…「それは。」

七…「皆お帰り。それと、まいちゃん久しぶりね。元気にしてた？」

母さんが普通に声をかけた

まい…「はい、七海おばさまお久しぶりです。」

翔…「ちょっと、待て。母さん、まいのことしてるの!?!」

七…「うん、まいちゃんのお母さんと私は幼馴染でね。よくあつてるよ。それに…」

翔…「それに?」

七…「まいちゃんは翔ちゃんの許嫁だからね♪」

翔…「……はあああああ!?!」

俺は雄叫びを上げた

星華…「母様、そんなの私初めて聞きましたけど!?!」

七…「だって、言ってなかったもん。因みにまいちゃんの部屋は翔ちゃんと一緒だからね。」

全…「なに~~~~~!?!」

まい…「そう言うことだから、よろしくね翔♪」

俺は頭が痛くなった

翔の部屋

俺が部屋に入ると、俺が使うベットの他に違うベッドがあり、机も二つに増えていた

翔..「何で、こうなったんだ」

まい..「気にしない、きにしない。」

翔..「普通は気にするだろうが。」

俺はため息をつく、まいに聞いた

翔..「っで、お前は爺さん（神）から、何の力を貰ったんだ？」

まい..「デバイスと、ワンピースに出てくる武装色の覇気、それと召喚獣」

翔..「ふん。」

まい..「それと、神様から翔の願いを叶えてやってくれって言われた。」

翔..「俺の願い？」

まい..「うん。新たに二つの願いを叶えてあげるって。理由は解らないけど。」

翔..「そうか、じゃあ、アクセルテクターと召喚獣で」

まい..「はい、はい。」

まいが手を振ると、俺の体が光、願いが叶えられた

翔..「取りあえず、もう寝るか。色々あって疲れた」

そう言い、俺は寝た

第32話 外伝編「女の戦い」

翔 side

朝になり、俺は体を起こそうとしたが、右腕が動かないことに気が付いた

翔…「うん？」

俺は気になり腕を見ると

まい…「すう、すう・・・」

まいが俺の腕を枕にして寝ていた

翔…「こいつ、いつの間に！？・・・でも、まいの寝顔久しぶりにみるな。」

転生前、俺とまいは一緒に住んでおり、朝起きると、まいはいつも俺の腕で寝ていた

翔…「・・・変わらないな、お前は」

俺は空いている方の手で、まいの髪を触った

その後、俺はまいが起きるまで、まいの寝顔をずっと見ていた

翔..「さて、別荘で訓練でもするか。」

朝食後、俺は部屋に戻り、別荘に行こうとした。その時、ドアが突然開いた

翔..「何だぁ!?!」

後ろを向くと、黒いオーラを纏ったのは達が居た

翔..「.....如何したんだお前等?」

俺が聞くと

な..「.....翔君、.....まいちゃんが翔君の婚約者って話、本当なの?」

翔..「ああ。知らない間に決められた。」

なのはの質問に答えると、全員のオーラが更にました

翔..「(この俺が、恐怖しているだと。)」

俺が冷や汗を流していると

まい..「皆、どうしたの?」

まいが部屋に戻ってき、何くわん顔をしてベッドに座った

フェ…「……まい？何であなたが翔の部屋に居るの？」

まい…「だって、此処は私の部屋でもあるんだもん。」

全…「ブチイっ!!」

その言葉に全員が切れた

な…「まいちゃん、勝負なの！」

まい…「いいよ。」

まいは普通にその勝負を引き受けた。だが、

まい…「ただし、私一人対全員でね。そうじゃないと、勝負にならないから。」

翔…「大丈夫なのか？こいつ等、それなりに強いぞ？」

まい…「大丈夫。」

俺はそれを確認すると

翔…「戦うなら、俺の別荘でやれいいな？」

全…「うん。」

俺の言葉に全員が頷いた

翔 side end

まい side

翔..『全員準備はいいな?』

モニターから翔の声が聞こえ、私は頷いた

翔..『ルールは、相手に魔力ダメージを与え戦闘不能にしたら終了だ。何か質問はあるか?』

全..『無い。』

翔..『全員、デバイスを起動させろ』

な..『レイジングハート・エクセリオン!』

フェ..『バルディッシュ・アサルト!』

は..『シュベルトクロイツ!』

星華..『ルシフェリオン!』

雷華…「バルフィニカス！」

空…「エルシニアクロイツ！」

全…「セート、アップ！！」

なのはちゃん達がデバイスを起動さえバリアジャケットを纏った

まい…「私達も行こうか、ソフィア」

ソ…『yes master Set up』

私はパートナーであるソフィアを起動させ、バリアジャケットを纏い右手に黒い装飾銃ハーデスを持った

まい…「ソフィア、モードツインガン！！」

ソ…『了解、モードツインガン！』

銃が光、左手にもう一丁のハーデスが現れ、私はそれを握った

翔…『バトルスタート！！』

な…「アクセルシューター！！」

星華…「パイロンシューター！！」

開始そうそう、なのはちゃんと星華ちゃんが大量の魔力弾を撃ってきた

まい…「はあ」

私は目にも止まらない早撃ちで、魔力弾全てを撃ち落とした
な…「嘘!？」

星華…「一瞬で全てを撃ち落とすなんて。」

二人が驚いていると

フェ・雷華…「はあああああ!！」

後ろから、フェイトちゃんと雷華ちゃんが襲い掛かってきた

まい…「甘いよ。」

私は銃を肩に担ぐように構え、二人に魔力弾を放った

フェ…「っ!？」

雷華…「うわあっ!？」

二人は、私が後ろに振り向かないで銃を撃ったことに驚きながらも、それを避けた

ソ…『S o n i c m o v e』

私はその間に、二人に近づいた。そして

まい…「はあっ!」

脚に魔力を纏わせ、回し蹴りで二人を吹き飛ばした

フェ・雷華…「あああああ」

まい…「私は翔と同じでオールランドよ。デバイスの形状だけで私の戦闘スタイルを判断すると痛い目を見るわよ。」

な…「ディバインバスター!!!」

星華…「ブラストファイヤー!!!」

二つの桜色の砲撃が私に放たれた

まい…「よっと。」

私はそれを避けると、2丁の銃を二人に向け、そして、銃口に魔力球を形成した

まい…「サウザンドレイン!!!」

私は魔力球から大量の魔力弾を撃ちだした

な…「ええっ!?!」

星華…「…………これを捌くのは無理ですね。」

打ち消すのが不可能だと見た二人は回避運動に入ったが

星華…「これは、自動追尾。」

な..「無茶苦茶なの」

回避もむなしく、全ての魔力弾が二人に当たった

は..「なのはちゃん、星華ちゃん!」

空..「はやて、長期戦は無理だ、一気に決めるぞ!」

は..「オーケーや。」

空..「アロンドイト!」

は..「ブリュナーク!」

白銀の砲撃が放たれたが、私はそれをよけて

まい..「ソフィア、モードランチャー!」

ソ..『了解、モードランチャー』

左手に持っていた銃が亡くなり、右手に持っていた銃がスナイパーライフルに変わった（形状はヴァイスリッターのオクスタランチャー）

まい..「シュート!」

私は左手を銃に添え、ノーチャージで砲撃を放った

は..「ノーチャージで砲撃!」

空..「出鱈目な力だ」

まい..「つむ!!」

空ちゃんの言葉を聞いて私は怒った

まい..「そんなことを言う子には、お仕置きだよ」

私は銃身をオープンさせ、最大出力モードにした

まい..「ファイナルストライク!!」

は..「きゃあああああ」

空..「うわあああああ」

私の撃った砲撃に二人が包まれた

まい side end

翔 side

翔..「まいの奴、容赦ねえな。」

俺はモニターでまい達の模擬戦?を見ていた

翔..「ジュークンドーを使ったオールマイティな戦闘方法か。」

アリシア…「フェイト達大丈夫かな。」

翔…「うん？アリシア！？お前模擬戦に参加しなかったのか？」

アリシア…「うん。私はまだ弱いからね、もう少し強くなってからまいと戦うつもりだよ。」

翔…「賢明な判断だな。まいは俺の次に強いからな。」

アリシア…「その言葉を聞くと、まいより強いみたいに聞こえるよ。」

翔…「・・・実際、俺はまいより強い。」

こうして、第一回『女の戦い』はまいの完全勝利で幕を下ろした

設定？ 紫乃宮まい

名前 紫乃宮まい

容姿 バトルスピリッツ少年撃破の紫乃宮まい S T S 編の容姿
はバトルスピリッツブレイブの容姿

魔力量 S+

魔力光 紫

変換資質 電気

レアスキル 武装色の覇気

バリアジャケット ネギまの明石侑奈みたいな服装 肌の露出を
無くすために黒いシャツを着ている

翔の前世での幼馴染であり恋人。翔の突然の死によりかなりのダメージを受けたが何とか回復し、いつもと変わらない生活を送っていたが、車に引かれそうになった少年をかばい死んでしまった。そこで、翔がであった神に会い、リリカルなのはの世界に転生してきた。なお、まいの母親と翔の母七海は知り合いで、翔の知らない間に許嫁にされた。当初まいは驚いていたが、前世で翔と結婚の約束をしていたので直ぐに収まった

デバイス設定

名前 ソファイア インテリジェンドデバイスAIは女性

待機状態 ブレスレット

起動状態 黒い装飾銃 （イメージはブラックキャットのハーデス）

ツインガンモード ティアナのような感じ

ランチャーモード オクスタンランチャーの形をしており、魔力弾、砲撃を放つことが出来る。なお砲撃のチャージ時間はゼロ

前世で翔がまいにプレゼントしたものを、神様に頼んでデバイス化してもらった。翔の事をマイスターと呼んでいる

翔のNEWバリアジャケット設定

紅いシャツに黒いズボンを穿き、前に羽織っていた紅い羽織の代わりにアクセルテクターを装着している。アクセルテクター軽いが、強度はなのは達のトリプルブレイカーを受けても壊れない。そして、傷がついても次の日には元通りになる （神がそう設定した）

第33話 外伝編「戦闘機人」

翔 side

まいが俺の家に來てから、数か月がたった。俺は正式に管理局に入り、ファイヤースクワットの部隊長小津勇さんにスカウトされファイヤースクワットに配属された。更に、ファイヤースクワットのメンバーは仕事を手伝う補佐を選ぶことが出来るので、俺はまいを選んだ。まあ、他のメンバーが黒いオーラを纏っていたが、俺の一言で鎮圧した

翔…「それにしてもファイヤースクワットのメンバーには驚いたよな。」

ファイヤースクワットにいるメンバーは、獅子走、補佐に大河冴、伯亜凌駕、補佐に樹らんる、赤座伴番、補佐にマリー、小津魁、補佐に小津麗、明石暁、補佐に西堀さくら、漢堂ジャン、補佐に宇崎ラン、江角走輔、補佐に須藤美羽、志葉丈瑠、補佐に白石茉莉、アラタ、補佐にエリ

翔…「・・・まさか、メンバー全員が戦隊だったのにはびっくりしたよ。」

俺は苦笑いをしながら言った

まい…「翔、ボスが話があるから部屋に來てくれだって。」

翔…「解った。」

まいに言われ、俺はボスの部屋に向かった

翔..「ボス、翔です。」

勇..『入れ。』

翔..「失礼します。」

俺はドアを開け、部屋に入った

勇..「すまん、忙しいところを呼んでしまって。」

翔..「いいえ、殆ど終わっていたので問題ありません。それで、話ってなんですか？」

勇..「うむ、まずはこれを見てくれ。」

ボスが俺にファイルを渡した。俺はそのファイルのタイトルに目が釘付けになった

翔..「戦闘機人に関する資料？ボス、戦闘機人ってなんですか？」

勇..「戦闘機人とは、人間の筋肉などを機械に変え、驚異的な力を発揮する者の事だ」

翔..「・・・ふざけてますね。」

勇..「ああ。ミッドのある部隊が戦闘機人の製場工場を破壊している。」

翔..「・・・俺を呼んだ理由が良く解らないんですが。」

勇..「お前にはバンが見つけた工場に行つて貰いたい。作戦の内容は施設の破壊とその工場にいる人の救助だ。」

翔..「ロジャー！」

俺はボスに敬礼をし、部屋を出ると、まいを呼び、任務の話をした

「違法研究所近くの森」

翔..「準備はいいな？」

まい..「ええ。」

俺達はすでにバリアジャケットの展開しており、デバイスも起動させていた

翔..「ミッション、スタート！」

俺達は研究所の中に入った。そこで、あることに気付いた

翔..「警備ロボットが破壊されている。他に誰かがいるのか？」

まい…「……翔どうするの？」

翔…「……二手に分かれる方がいいだろう。……まい、油断するなよ。」

まい…「了解」

まいと別れ、俺は道なりに進んでいた

翔…「破壊されてからそんなに時間は立ってないな。」

俺は近くにあった機械を見てそう呟いた。その時、遠くから爆発音が聞こえた

翔…「誰かが戦ってるのか？……嫌な予感がするし行ってみるか！」

俺は爆発音がした場所に向かって走り出した

ゼ…「があっ！！」

俺が爆発音の聞こえた部屋に着くと、男性が壁に衝突した

翔…「ゼストさん！？」

ゼ…「翔！？なぜ此処いるんだ！？」

翔…「任務で来たんですよ。」

俺達が話をしていると

「随分とまあ、可愛いネズミが来ましたね。」

俺は声のする方を向くと、3人の女性がいた、そしてその周りには多くの魔道士が倒れていた

翔…「お前等がこれをやったのか？」

「……そうですよ。……本当はやりたくなかったんですが」

メガネを掛けた女性がそう言った

翔…「……そうか。」

俺は炎神剣を肩に担ぎ、ディーマグナム改を3人の女性に向けた

翔…「撃っているのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ。お前等を逮捕する。」

翔 s i d e e n d

3人称 s i d e

翔…「お前等を逮捕する。」

翔がそう言う

「……貴方一人で私達3人を倒せると思ってるんですか？」

翔…「ああ。」

翔は真剣な目でそう言った

「……………」

銀髪の少女が動こうとしたが

「待って、チンクちゃん。此処はドクターの作ったおもちゃに任せましょう。」

チ…「……………解った。」

メガネを掛けた女性がディスプレイを展開し、キーを叩くと、カプセル菓の形をしたロボットが10体出てきた

翔…「……………」

「ガジェットちゃん、攻撃目標はあの子よ。さあ、行きなさい♪」

メガネの女性の合図でロボットが動き出し、翔にビームを撃ちだした

翔…「……………」

翔は何もせず、黙ってその攻撃を受けた。翔の周りに爆煙が舞った

「ふふ、あんな大口をたたいた癖に何もできずに終わるなんて、大したこと無いわね。」

チ…「クアットロ、油断をするな。」

チンクがクアットロにそう言った

ク…「大丈夫よチンクちゃん。あの子はもう死んだんだから。」

クアットロがそう言うのと、爆煙から魔力弾が放たれ、ロボット1体を貫き破壊した

ク…「っ!?!?」

クアットロが爆煙の方を慌ててみると、そこには、無傷の翔が立っていた

翔…「そんなに不思議か？俺が無傷で立っていることに。」

ク…「確かに全部当たったはずなのに何で!?!」

翔…「っふ。」

翔はアクセルテクターで防御力が上がっており、更に魔力で作った鎧（シグナムが魔力で作った甲冑みたいなもの）を纏っている

翔…「今度はこっちの番だ!」

翔は地面を蹴り、一瞬でロボットに接近し

翔…「はあっ!!」

魔力を纏った炎神剣を横に振るい、残りのロボット全てを叩き斬った

翔…「次はお前等の番だ!」

俺は銃を向けてそう言った

ク…「つく。」

「クアットロ、離れてろ。」

短髪の女性が前にでて、腕に装備している、ブレードに魔力を纏わせた

「ISランドインパルス!!」

女性がそう叫ぶと、その場から消えた

翔…「……………」

俺は体を動かさずに銃を持っている左腕を後ろに向け、魔力弾を撃ちだした。すると、

「があっ!」

その魔力弾はさっき消えた女性に当たった。そして

ゼロ..『S o n i c m o v e』

一瞬で女性の前に移動した

「っ！速い！？」

翔..「・・・違う、お前が遅いんだよ。」

そう言うのと、翔は炎神剣で十字の斬撃を女性に繰り出した。女性は腕をクロスさせて斬撃を受け止めたが、防ぎきれず壁に吹き飛んだ

ク..「まさか、トーレ姉様を倒すなんて。」

チ..「クアットロ、転送の準備をしておけ。」

チンクがナイフを形成して前に出た

ク..「その必要はないわよ、チンクちゃん。僕、これ以上私達に抵抗すると、その男の仲間二人を殺すわよ。」

クアットロはそう言うのと、ディスプレイを展開して翔に見せた。だが、直ぐに驚きが変わった。何故なら、男の仲間を包囲していた、ガジェットが全部破壊されていたからである

ク..「どうして！？あの二人は既にボロボロ、なのに何で！？」

翔..「・・・俺が一人でここに来たとでも思ってたのか？」

ク..「まさか！？貴方の仲間が！？」

翔..「そう言うことだ。」

チ..「はぁ!！」

翔とクアットロの話が終わった瞬間、チンクがナイフを翔に向かって投げた

翔..「っふ!」

翔はそのナイフを炎神剣で切り裂いた

翔..「こんなじゃ、俺は倒せないぜ!」

チ..「・・・なら、これでどうだ!！」

チンクは翔の周りに大量のナイフを生成した

翔..「数を増やしたところで、何も変わりはないぜ。」

チ..「・・・それはどうかな? I S ランブルデトネイター!！」

チンクが叫ぶと、翔の周りに生成されていた、ナイフ全てが爆発した

チ..「クアットロ、転送の準備を!」

ク..「その必要はないと思うわよ。あの爆発で生きているとは思えないもの。」

翔..「・・・まったく、他の人がこの爆破を受けたら、即死決

定だな。」

翔はそんなことを言いながら爆煙の中から歩いて出てきた

チ..「やはり、あの程度の力では傷一つつけられないか。」

翔..「お前の能力は金属を爆発させるってどこか？」

チ..「教える義理は無いな。」

ク..「チンクちゃん、転送の準備が整ったわ。」

翔..「俺が黙って行かせるとでも思ってるのか？」

チ..「行かせてもらうさ。」

チンクはナイフを地面に投げると

チ..「ISランブルデトネイター！」

ナイフを爆発させ、土煙を起こした

翔..「つち、目くらましか。はあっ!!！」

翔は炎神剣で煙を薙ぎ払った

翔..「逃げたか、それにしても随分とでかいものを残して行ってくれたな。」

翔の目の前には巨大なロボット3体がいた

翔…「……取りあえず、派手に行くぜ!!」

俺がディーマグナム改から魔力弾を撃ち出し、でかぶつに攻撃したが、魔力弾は相手に当たる前に塵になってしまった

翔…「どうなってんだ？」

ゼロ…『翔、どうやら奴らは魔力を無効化する装置を搭載しているようだ。』

翔…「ああ、STS編に出てくる、AMFってやつか。……一体、一体斬り壊すことはできるけど、面倒だから一気に片付けるか!!」

翔はモバイルーツとレンジャーキーを取り出した

翔…「豪快チェンジ!!」

『ゴゥカイジャー!!』

翔…「過激気に行くぜ!! 豪快チェンジ!!」

『ゲゥキレンジャー!!』

翔…「スーパージェキクロー! スーパービースト、オン!!」

翔はスーパージェキレッドになった

翔…「ゲキセイバー! 双剣合身!!」

翔はゲキセイバーに過激気を込めた

翔…「ゲキセイバー、激気技！スーパー波波斬！！」

翔はゲキセイバーに水流刃により生じた波のパワーをプラスし、3体の巨大ロボを横一閃に斬りつけた

翔…「さて、取りあえず生存者の治療をした方がいいな。」

そう言うのと、翔は変身を解き、ゼストさんを肩を担いで部屋を出た

↓ファイヤースクワット・医務室↓

ゼ…「助けていただきありがとうございます。」

ベッドに横になっているゼストが医師でありボス補佐役の美雪にお礼を言った

美雪…「気にしないで、それにお礼なら翔君とまいちゃんに言うてください。」

ゼ…「それで、クイントとメガーヌの容態はどうですか？」

美雪…「二人とも軽いけがだから問題ないわ。」

ゼ..「そうですか。」

ゼストは美雪の話を聞き一安心した

翔..「失礼します。」

医務室のドアが開き翔が中に入ってきた

翔..「ゼストさん、怪我は大丈夫ですか？」

ゼ..「ああ。」

翔..「良かった。」

翔が安心すると、まいが慌てて医務室に入ってきた

まい..「大変よ、翔。」

翔..「どうしたんだ？そんなに慌てて。」

まい..「これを見て。」

翔はまいの持っているデータを見ると、驚いた

翔..「おい、おい、まじかよ。」

そう言うと、翔はゼストの方を向いた

翔..「ゼストさん、信じられないかもしれませんが、ゼスト隊の全員が死亡したと公表されました。」

ゼ..「何だと!?! 一体誰が!?!」

勇..「管路局上層部の物の仕業だろうな。」

勇が医務室に入ってきた

翔..「ボス。」

ゼ..「勇さん、俺をレジアスの所連れて行ってください。話がしたいんです。」

勇..「・・・それは無理だ。」

ゼ..「何故です!?!」

勇..「お前たちは死亡したと扱われている。もしお前が帰れば確実に殺される、そして、お前たちの家族もな。」

ゼ..「つく。」

翔..「ボス、これからどうするんですか? いくら俺達でも、かばうには限界があります。」

勇..「・・・ゼスト、クイント、メガーヌの3人には97世界地球に行ってもらおう。そして、上層部を無くしたら再びミッドに戻ってもらう。」

ゼ..「・・・解りました。」

翔…「メガーヌさんの娘さんは俺達が保護した後、連れて行きますので、安心してください。」

「どこかの研究所」

「……これは」

科学者があるデータを見ていた

「私の作ったガジェットをこうもあっさりと倒したことに驚いたが、この映像はそれ以上だ！」

そこには、ゲキレッドに変身した翔がゼキセイバーでガジェットを一刀両断にした映像だった

「……彼なら、管理局の上層部を倒し、この世界を救えるかもしれない。」

第33話 外伝編「戦闘機人」(後書き)

いきなりですが、皆さんの好きな戦隊の曲なんですか？ちなみに俺が好きな曲は、

- 1、特捜戦隊デカレンジャーOP
- 2、魔法戦隊マジレンジャーOP
- 3、轟轟戦隊ボウケンジャーED
- 4、百獣戦隊ガオレンジャーED
- 5、高速戦隊ターボレンジャーOP

以上です。

第34話 外伝編「悲しみ、そして決意」

翔 side

ゼストさん達が海鳴市に来てから2年がたった。3人は現在俺が作った、魔力を消すブレスレットをつけており、管理局にはばれていない。勿論リンディさんにも。3人はそれぞれ、仕事を見つけて生活している。・・・たまにクイントさんが俺の別荘に来て、飯をたらふく食いに来るが。この2年で、俺は新たな発見を別荘でした。1つ目はなぜか別荘の上空に天空島アニマリウムがあり、そこにパワーアニマルたちがいたこと。2つ目炎神キャストと炎神ソウルであった。3つ目、漫画トリコの食材があったこと、しかもご丁寧に亡くなった次の日には食材全部が戻っていた、・・・ついかどうという原理だよ

そんなある日、

翔..「今日の授業もつまんなかったな。」

俺達は中学生になった。まあ、管理局の仕事も続けているけどな

ゼロ..『翔、通信が入ってるぞ。』

翔..「誰からだ？」

ゼロ..『ティーダからだ。』

翔…「ティーダさんから？繋いでくれ。」

ティ…『聞こえるか、翔？』

翔…「ええ、どうしたんですか？」

ティ…『・・・翔、お前に頼みがある。』

翔…「頼み？また、何かあったんですか？」

ティーダさんはたまに俺に仕事の補佐を頼んでくる

ティ…『・・・俺の妹、ティアナを頼む。』

翔…「はあ？頼むって、一体どうしたんですか？」

ティ…『後は、頼んだぜ。』

そう言うのと、ティーダさんは通信を切った

翔…「ちょっと、ティーダさん！？・・・一体何だってんだ？」

俺はティーダからの頼みごとに疑問を感じながら家に帰った

（その翌日）

翔…「……これで、この管理局員の悪事の証拠は全部だな。」

俺はファイヤースクワットの隊員室で、ある管理局員の不正に関する資料を纏めていた

翔…「後は、この資料をライセンスに入れて、奴を逮捕すれば今日の仕事は終わりだ。」

俺はファイヤースクワットの隊員が持っているSPDライセンスにデータを入れ、席を立とうとしたとき

バン…「翔。」

翔…「どうしたんですか、バン先輩？そんなに慌てて。」

バン…「翔、落ち着いて聞けよ。……ティード・ランスター執務管が亡くなった。」

翔…「……は？」

バン…「亡くなった原因は、追っていた犯罪者の攻撃を受けてたそうさ。葬儀は、午後から行われる。」

翔…「……昨日の通信はそう言う意味だったのかよ。」

俺は昨日の通信の意味が解った

翔…「先輩、ファイヤースクワットの代表として、俺に行かせてください。」

バン…「……ボスもそう言っていた。行って来い。」

翔…「ありがとうございます。」

俺は席を立ち、まいを連れて葬儀の場所に向かった

翔 s i d e e n d

3人称 s i d e

葬儀が終わり、ティーダの親しかった局員が帰ろうとしていた

「まったく、なんて失態だ。執務管の名が聞いてあきれる。」

「死んでも任務を完遂させるべきなのに。無能な奴だ。」

二人の提督がそう言う

ティ…「兄さんは無能なんかじゃない！」

ティーダの妹、ティアナ・ランスターが大声で叫んだ

「いいや、お前の兄は無能だ。なにせ任務を失敗したんだからな。」

「そうだ、無能をなんと言おうが我々の自由だ。」

ティ…「兄さんは無能なんかじゃ…」

ティアナがもう一度言おうとしたとき、二人の提督が吹き飛んだ

ティ…「え？」

そこには、黒い服をきた、翔がいた

翔…「誰が、無能だって？もう一度言ってみろよ。」

「貴様、誰に向かって手を出したか解っているのか！！」

翔…「ああ、解ってるぜ。何の役にも立たない屑な提督さん達を殴ったんだよ。」

「貴様、我々を屑呼ばわりするのか！！」

翔…「屑を屑と言って何が悪い。……丁度いい、てめえら二人を此処で逮捕させてもらうぜ。」

翔は服からSPDライセンスを取り出した

「それは、ファイヤースクワットの！？」

翔…「ロストログアの密輸、および無断使用で、ジャッジメント
！！」

『ジャッジメント、タイム！！』

S P Dライセンスに丸とバツの印が点滅し始めた。そして

『×』

翔..「デリート許可！貴様らを逮捕する。」

「我々がロストログアを密輸した証拠がどこにある。」

「その通りだ。」

翔..「・・・証拠ならあるぜ、此処にな。」

翔はライセンスから二人の提督がロストログアを犯罪者に渡す写真などの映像があった

「っな!？」

翔..「まだ言い逃れするか？」

「っくそ！」

二人の提督が翔に襲い掛かってきたが

翔..「遅いんだよ」

二人は翔の拳を喰らい気絶した。翔は二人を待機させていた局員に渡すと、ティアナの所に向かった。そこにはまいの腕の中で泣いているティアナの姿があった

3人称 side end

翔 side

屑の提督二人を逮捕した後、俺とまいはティアナの家に向かった

翔..「取りあえず、自己紹介しておくか。俺は椎名翔、ファイヤースクワットの隊員でこっちは俺の補佐の」

まい..「紫乃宮まいよ、よろしくね。」

ティ..「ティアナ・ランスターです。あの兄さんとはどんな関係なんですか？」

翔..「友人さ。」

俺はティアナにそう言った

翔..「・・・そして、あいつと最後に話した相手だ。・・・ティアナちゃん、俺達と一緒に暮らさないか？」

ティ..「え？」

まい..「一人じゃ人は生きていけないからね」

翔..「俺はティードに君の事を頼むと言われたんだ。・・・勿論無理にとは言わない、だけど、君が独り立ちできるまでは、生活を支援してあげるよ。」

ティ..「・・・・椎名さん。」

翔..「翔でいい。」

ティ..「翔さん。私、翔さんと一緒に暮らします。そして、お願いがあるんです」

翔..「言ってみな。」

ティ..「私、兄さん見たいな執務管になりたいんです。・・・だから、その、私を鍛えてください。」

翔..「・・・いいぜ。だけど、俺がいないときは自主練をあまりしないこと、それが条件だ。」

ティ..「はい。」

翔..「いい返事だ。」

俺は笑いながらティアナの頭を撫でた

ティ..「あ／／／」

翔..「うん？どうかしたか？」

ティ…「何でもないです。」

翔…「そうか。取りあえず、此処に一人で住まわせることはさせたくないから、引っ越しの準備をするか。」

ティ…「引っ越しですか？」

翔…「ああ。俺はミッドに住んでいないからな。まだ、学生だからな。3、4年たったら、ミッドに引っ越してくる予定だから。それまでは、俺の故郷で暮らす。」

ティ…「は、はい。」

まい…「それじゃあ、始めましょう。」

こうして、家に新たな家族が増えた。まあ、母さんと父さんは普通にティアナを受け入れた。勿論、星華、雷華、空も

第35話 外伝編「成長」(前書き)

今回もかなりとびます、面倒だからじゃないですよ。内容が思いつかないからです

第35話 外伝編「成長」

翔 side

ティアナが俺達の家に移越してきてから、数か月がたった。ティアナもこっちでの生活に慣れてきた。そんなある日

翔..「ティアナ、ちょっとこっちに来てくれ。」

ティ..「どうしたの兄さん？」

ティアナは俺の事を兄と呼ぶようになった、理由は俺がティーダと似ているからだそうだ

翔..「これから訓練を始める。」

ティ..「本当!!」

翔..「ああ。心にも余裕が出来てきたからな。」

俺はティアナを連れて部屋に向かった

翔..「ティアナ、そこにある魔法陣に入りな。」

ティ..「? う、うん。」

ティアナが魔法陣の上に立つと、別荘に転送された

翔…「……今頃あいつ、驚いてるだろうな。」

そんなことを言いながら、俺も別荘に転移した

（別荘内）

ティ…「兄さん、此处どこ!？」

俺が別荘に転移すると、ティアナが俺に聞いてきた

翔…「俺の部屋に大きなフラスコのミニチュアがあっただろう？
ここはその中さ。」

ティ…「す、すごい。」

翔…「ボーっとしてると置いてくぞ。」

ティ…「!待って。」

俺がそう言うと、ティアナが慌てながらついてきた

暫く、歩いていると

ス…『ドル、ドル。来てたのかよ、翔。』

スピードルが俺の所に来た（大きさはソウルを入れた状態）

翔..「ああ。他の皆はどこだ？」

ス..『あいつ等なら、天空島に行ってるぜ。』

翔..「そうか。」

ティ..「兄さん、これなに？」

俺がスピードルと話していると、ティアナが聞いてきた

翔..「こいつは、スピードル。俺のゼロと同じで俺の相棒さ。」

ス..『よろしくな、ドル、ドル。』

ティ..「えっと、その、よろしくお願いします。」

ティアナは少し戸惑いながらもお辞儀をした

翔..「さってと、訓練を始める前に。ティアナの戦闘スタイルを決めるか。」

ティ..「スタイル？」

翔..「っそ、人にはそれぞれのスタイルがあるからな。因みに俺は右手に刀と左手に銃を持った戦闘スタイルだ。」

ティ..「.....ティード兄さんのスタイルは何だったんですか？」

翔…「ティーダさん？あの人のスタイルは銃と幻術を使ったスタイルだったな。」

ティ…「まいさんはどんなスタイルなんですか？」

翔…「まいはジュウクンドーの使い手だ。」

ティ…「ジュウクンドー？」

翔…「そ、別名銃拳法。射撃は当たり前だが、そのほかに銃を使った打撃、蹴りを使った、オールラウンドなスタイルだ。因みに俺もジュウクンドーを使える。」

ティ…「じゃあ、私はジュウクンドーを習いたいです。それと、幻術も。」

翔…「ジュウクンドーに幻術をプラスしたスタイルか、・・・面白そうだな。」

俺は笑いながら、そう言った

翔…「それじゃあ、まずは基礎から始めるか。」

ティ…「はい。よろしくお願いします。」

それから、2年後

ティ…『はっ！えい！』

俺、まい、星華、雷華、空はモニターでティアナの訓練を見ている。相手はリンシー10体だ

翔…「子供の成長は早いって言うが、本当だな。」

まい…「言葉が爺くさいよ、翔。」

星華…「それにしても、わずか2年で此処まで成長するなんて。」

空…「教えているのが我らなんだ、当然だろう。」

雷華…「そう、そう。」

ティ…『はあっ！』

ティアナは両手に持っている銃に魔力を纏わせて、リンシーに攻撃した

ティ…『ええいっ！』

更に、足に魔力を纏わせて、リンシーを蹴り飛ばした。ティアナはリンシーと距離を取ると

ティ…『クロスファイヤー、シュート！！』

ティアナは魔力弾を20個生成し、それをリンシーに放った

リンシー全員に魔力弾が当たり、消えた

翔…「リンシーの強さは約B＋、それを一人で倒せるようになる
とわな。……。そろそろ、ティアナのデバイスを作ってやった
方がいいかな。」

俺はそう言いながら、ティアナの所に向かった

翔…「これで、今日の訓練は終わりだ。」

ティ…「ありがとうございました。」

翔…「それにしても、強くなったな。」

俺はティアナの頭を撫でながらそう言った

ティ…「えへへ／＼／＼」

雷華…「ティアナばかりズルい！翔、私の頭も撫でてよ！！」

空…「そうだ。私の頭も撫でろ！！」

翔…「お前等は子供か。」

まい…「それより、翔。もうすぐ卒業だけど、私達の家は見つ
かったの？」

翔…「ああ。ボスがいい物件を見つけてくれたからな。かなり広

いからな、余裕で住める。」

星華…「なら、安心ですね。」

翔…「さて、今日はバーベキューにでもするか。」

雷華…「やったー。」

雷華がジャンプし喜んだ。その時、成長した胸が揺れたのはお約束

星華…「・・・なんで、雷華ばかり成長するんですかね。」

空…「確かに。私も少しは育ってほしいものだ。」

まい…「まあ、まあ。」

星華…「まいさんはいいですね。成長しているんだから。」

まい…「あははは。」

女子がそんな話をしていたが、俺は何も聞いていない、聞いていないと言ったら聞いてない

第36話 外伝編（前書き）

タイトルが思いつかなかったので、今回はタイトルなしにしました。最後の部分は書いている小説の部分を使いました。それしか文が思いつかなかったので

第36話 外伝編

翔 side

中学を卒業した俺達はミッドに引越してきた。星華達は卒業と同時に管理局、いやファイヤースクワットに入り、まいと同じく俺の補佐となった。ティアナは順調に強くなってきており、来年には訓練学校に通う予定だ

翔..「じゃあ、ティアナ。留守番よろしくな。」

ティ..「はい。兄さんたちも楽しんできてね。」

翔..「おう。スピードル、ティアナの事頼んだぞ。」

ス..『任せとけ、ドル、ドル!』

今日、俺達は久しぶりなのは、フェイト、アリシア、はやてと会う約束をしている。俺達は約束の場所に向かうと、なのは、フェイト、アリシアがナンパされていた

翔..「はあ、シャアねえな。」

俺はナンパ野郎に近づき回し蹴りを繰り返した

「ぐうあ!?!」

翔…「人の連れに何手を出してるんだよ?・・・さっさと消えろ、そして二度と俺達の前に顔を出すな。出したら、それ以上の怪我になるぜ」

俺は殺気を送り、ナンパしていた奴らを脅した

「は、はいいいいいい」

「ば、化けもんだー」

翔…「ったく、大丈夫か?なのは、フェイト、アリシア?」

な…「うん。」

フェ…「大丈夫だよ。」

アリシア…「そう、そう。」

翔…「そうか。じゃあ、行くか。」

俺達ははやてとの待ち合わせ場所のホテルに向かった

（ホテル・ロビー）

は…「翔君、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、

まいちゃん、星華ちゃん、雷華ちゃん、空ちゃん、こっちや。」

俺達がロビーに入ると、はやてが声を掛けてくれた

翔…「悪い、少し待たせたか？」

は…「ううん、私の今日の研修もさっき終わった所、今ロビーに来た所や。」

翔…「じゃあ、今日は派手に遊ぶか!!」

全…「イエーイ!!」

ホテルから出た俺達は、アクセサリーショップ、ゲーセン等の場所に行き、思いっきり遊んだ。今はゴンドラの中にいる

は…「それにしても、いまだに信じられんわ。管理局最強の部隊、ファイヤースクワットの隊員が目の前にいるのに。」

翔…「そうか？」

な…「そうだよ。ファイヤースクワットに入りたい局員は一杯いるのに、あそこは滅多に人を配属させないからね。」

フェ…「うん。それに執務管と捜査官の両方の仕事もこなす職だから、隊員もかなり必要なはずなのにね。」

翔…「まあ、基本ファイヤースクワットは少数精鋭が基本だからな。1対多の長けているメンバーがほとんどだよ。」

アリシア…「私達もそれなりに1対多でも戦えるよ？」

翔…「俺達の仕事は普通の仕事と違うからな、最低ランクの仕事でもAAAクラスだからな。」

は…「・・・こちらにとっては最高クラスの任務やわ。」

その時、俺のSPDライセンスに通信が入った

翔…「うん？」

俺はポケットからSPDライセンスを取り出した

翔…「こちら、翔」

俺が通信を開くと

勇…『翔、緊急事態だミッド北部の空港で火災が発生した。休暇の所悪いが至急向かってくれ！』

翔…「ロジャー！」

俺は通信を切ると、バリアジャケットを展開した

翔…「というわけだ、空港に向かう。まい、星華、雷華、空、行くぞ！！」

まい…「ええ。」

星華…「はい。」

雷華…「うん。」

空…「うむ。」

4人も立ち上がりバリアジャケットを展開した

は…「翔君、私も行くで！」

な…「私も。」

フェ…「私も行くよ。」

アリシア…「勿論あたしも。」

翔…「解った。空港に一気に飛ぶ。ゴール・ルーマ・ルジュナ！
！」

俺は全員を空港に瞬間移動させた

空港に着くと、かなりの被害だった

翔…「こいつはひどいな。」

俺がそう言っていると、

「坊主じゃねえか。」

陸士108部隊のゲンヤさんがこっちにきた

翔..「とつつぁん。久しぶりだな。」

ゲ..「そうだな。」

は..「ゲンヤさん、状況はどうなっていますか」

はやてがゲンヤに聞いた

ゲ..「嬢ちゃんもいたのか。かなりの人がまだ中にいる。」

翔..「とにかく、救助活動を始めろぞ。」

俺はそう言っていると、空港内部に入って行った

翔 s i d e e n d

3人称 s i d e

「お父さん、お姉ちゃん」

一人の少女が炎の中を歩いていた。柱が崩れ、その衝撃で少女は吹き飛ばされてしまった

「痛いよ、熱いよ、こんなの嫌だよ。・・・帰りたいよ。・・・助けて、誰か助けて」

その時、少女の後ろにあった石像が崩れて、倒れてきた

「っ!？」

少女は目を瞑った

『Lightning move』

紅い稲妻が少女を助けた

翔..「ふう、大丈夫か？」

翔は腕に抱えている少女に聞いた

「え? う、うん。」

翔..「そうか、よく頑張ったな。」

翔は少女の頭を撫でながらそう言った

ゼロ..『翔、後ろを見ろ』

ゼロに言われ、翔は後ろ向いた、そこには

翔..「なんで、イービ共が此処にいるんだ?」

俺の後ろには大量のイービとパチャカマツカ12世がいた

翔..「.....」

翔は少女を地面に降ろし、頑丈な障壁を周りに張った

翔..「此处で待ってろ。」

翔はゼロを起動させ、炎神剣を肩に担ぎ、ディーマグナム改をイービ達に向けた

翔..「派手に行くぜ!!」

魔力弾を撃ちながら、翔はイービ達に向かって走り出した

翔..「はぁっ!おら!!」

炎神剣でイービ達を斬り、離れている相手には魔力弾を撃ちこみ、
どんだん数を減らしていった

翔..「残るは、てめえだけだ!!」

翔は炎神剣をパチャカマツカに向けそう言った

パ..「ふん、宇宙拳法の恐ろしさを味あわせてやろう!」

パチャカマツカは肩にある拳を伸ばして翔に攻撃を仕掛けてきた。
翔は炎神剣でそれを受け止め、弾き返すと

翔..「はぁっ!せい!」

炎神剣を振り、そのアームを両断した

パ..「何だと!？」

翔..「隙だらけなんだよ!!」

翔はディーマグナム改から魔力弾を撃った

パ..「ぐうお」

翔..「おらあっ!!」

翔はパチャカマツカに近づき、袈裟斬り、横一闪、振り上げの3連切りを繰り出した

翔..「はあっ!!」

そして、止めの縦一闪を繰り出したが

翔..「何!？」

パチャカマツカの障壁により防がれてしまった

翔..「っち。」

翔は素早くパチャカマツカと距離を取った

翔..「まさか、障壁を張るとわな。・・だったら、その障壁ごと断った斬ってやる!激気研鑽!!」

翔は炎神剣に激気を込めた

ゼロ…『激技、鋭鋭刀』
えいえいとう

翔…「チェストー!!!」

炎神剣を振りおろし、激気で出来た刃を繰り出した。パチャカマツカは障壁を張ったが、翔の刃は障壁ごと、パチャカマツカを両断した

翔の目の前にはパチャカマツカまでの斬撃の跡が残っていた

翔…「ゴツチュウ！」

「………凄い。」

翔の戦いを見ていた少女はそう呟いた。その時、

な…「翔君！」

なのはがこっちにやってきた

翔…「なのは。」

な…「こっちで大きな音がしたからきたの。……って、その跡はなに!？」

なのはは翔の前にある跡を指差して聞いた

翔…「ちょっとな。それより、その子を頼む。」

翔は少女の事をなのはに任せた

な..「うん。」

翔は女の子をなのはに渡すと、再び救助活動に入った

ゼロ..『翔、その先に三つの生命反応があるぞ。』

翔..「了解。」

翔はゼロの表示した、エリアに入ると、3人の救助者を見つけた

翔..「大丈夫か？」

翔は瓦礫をどけて聞いた

「君は？」

翔..「管理局のものです。すぐに安全な所に連れていきます。」

「いや、いい。自分の体は自分が良く解っている、俺はもうすぐ死ぬ。それより妻と娘を頼む。」

翔..「あきらめるな！」

翔が言う

「そうね。私も同じよ。」

女性も同じことを言った

「・・・君に頼みたいことがある。」

男性は翔に話しかけた

翔・・「頼みたいこと？」

「ああ、私たちの娘。リオを育ててくれ。」

翔・・「なに!？」

「お願い私たちの代わりにこの子を守ってください。お願いします。」

女性の声は震えていた、良く見ると涙を流していた

翔・・「・・・解りました。」

翔が赤ん坊を引き取ると、二人は息を引き取った

翔はその二人も連れて地上に転移した

翔が家に帰ると、まい、星華、雷華、空、ティアナに赤ん坊の事を聞かれ、この子の両親に頼まれたといい。リオの父になり、育てると言った

第37話 外伝編(前書き)

今回も思いつかなかったのでタイトルはなしにしました

第37話 外伝編

翔 side

空港火災から1年後、俺はリオを正式に引き取り育てている。正直、最初は大変だったが、今ではなれた。現在、俺は別荘でリオを片手で抱えながらまいとティアナの模擬戦を見ている

まい…『それ!!』

ティ…『くうっ!』

まいの鋭い蹴りをティアナはぎりぎりでかわし、反撃に移ろうとしたが

まい…『遅い!!』

まいは手に握っているハーデスに魔力を纏わせ、横に一閃した

ティ…『きゃあ!!』

ティアナはガードが間に合わず、それを喰らい吹き飛んだが、直ぐに体勢を立て直し、

ティ…『クロスファイヤー・・・シュート!!』

数個の魔力弾を生成し、まいに放った

まい…『はっ！！』

まいは両手に持ったハーデスで魔力弾を的確に撃ち落とした

ティ…『はあああ！！』

まいが魔力弾を撃ち落としている間にティアナはまいに近づき、魔力を纏った足で回し蹴りを繰り出した

まいはそれをしゃがんで避け、サマーソルトの要領でティアナを蹴り飛ばした

ティ…『くう！！』

ティアナはそれを喰らい地面に倒れた、急いで立ち上がろうとしたが

まい…『これで、チェックよ。』

顔の前にまいのハーデスがあった

ティ…『ま、まいりました。』

ティアナは両手を上げて、降参した

翔…『戦闘時間30分って所か、持った方だな。』

俺がそう言うと

ジェ…『ギーン、ティアナは訓練を頑張っているからな。』

俺と一緒に模擬戦を見ていたジェットラスがそう言った

翔…「そうだな。・・・そろそろ、これを渡した方がいいかな。」

俺はカードを見ながらそう言った

ティ…「また、負けちゃった。」

まい…「そう簡単には勝たせないわよ。」

翔…「でも、30分も持つなんてすごい。」

俺はティアナの頭を撫でながら言った

ティ…「兄さん、その／＼／＼」

翔…「うん？ああ、悪い、悪い、昔の癖で撫でちゃったな。いや
だったか？」

ティ…「ううん／＼／＼」

翔…「それと、ほれ。」

俺はさっき持っていたカードをティアナに渡した

ティ…「・・・兄さん、これは？」

翔…「お前のデバイスだ。俺達からの訓練学校入学祝いのプレゼントだ。使い勝手は今使っている奴となんら変わらないはずだ。」

ティ…「あ、ありがとう兄さん、皆」

翔…「どういたしまして。そいつの名前はクロスミラージュだ。起動してみな。」

ティ…「うん。・・・クロスミラージュ、セットアップ」

ティアナがそう言うと、バリアジャケットが展開され、両手に銃になったクロスミラージュがあった（クロスミラージュの形はS TSサンドステージに出てくるモード3です。バリアジャケットは変わりません）

ク…『これからよろしくお願いします。サー』

ティ…「こっちこそよろしくね。」

翔…「話している所悪いんだが、クロスミラージュのAIを一旦凍結させるぜ。」

ティ…「どうして!？」

翔…「訓練校にAIの搭載したデバイスがある、先生がうるさいからな。凍結させるのはAIのみだ、卒業したら解除するから安心しろ。」

ティ…「う、うん。」

ク…『サー、元気を出してください。サーと共に戦える日を私は待っています。』

ティ…「クロスミラージュ。・・・うん」

翔…「・・・悪いなクロスミラージュ、起動したばかりなのに、凍結させることになって。」

俺はクロスミラージュに謝った

ク…『気にしないでください、マイスター。マイスターがサーことを大切に思っていることは知っていますので。』

翔…「っふ、サンキュー。」

その翌日、ティアナは訓練学校に行った

（それから3年後）

翔…「・・・良し。これで、この間の事件の報告書は完成つと。」

俺はデータを保存して、机にあるお茶を飲んでいると

リオ…「お父さ〜ん」

リオが俺の方に走ってきた

翔…「リオ？こっちに来たら駄目だって言っただろう。」

そう言いながらも、俺をリオを抱きしめた

リオ…「だって、詰まらなかったんだもん。」

翔…「ったくも〜。」

俺はすでにリオに『俺は本当のお前の父親じゃないんだ』って言い
っており、昔の事を話した。その時リオは『お兄さんは私の本当の
お父さんじゃないかもしれない。でも、私にとってはお兄ちゃんが
リオのお父さんだよ。』って言うてくれた。あの時は感度して泣い
たな〜

まい…「・・・何感傷に浸ってるのよ。」

俺が昔に事を思い出していると、まいが俺に声を掛けた

翔…「うるせえ。」

まい…「翔、仕事はもう終わったの？」

翔…「ああ。たった今な。」

まい…「だったら、魔道士試験を見に行かない？」

翔…「試験？誰の。」

俺が質問すると

まい…「ティアナのよ。」

翔…「・・・あいつめ、また黙ってやがったな。」

リオ…「ティアナお姉ちゃんがどうかしたの？」

翔…「今から、ティアナの試験を見に行くけど、リオも来るか？」

リオ…「うん。」

翔…「じゃあ、行くか!!」

俺は試験会場に向かった

第37話 外伝編（後書き）

次回からSTS編に入ります、ティアナのデバイスの形の理由ですが、そっちの方がジュウクンドーで戦うのに最適だと思ったからです。ちなみにティアナのスタイルですが、VIVIDに出てくる並です。理由はトリコの食材です

第38話 STS編「試験」

ティアナ side

私は魔道士試験ランクBを受ける為に、相方と一緒にビルの屋上にいる

ティ…「スバル、これから試験なんだ程々にしなさいよ、途中で壊れるかもしれないでしょ。」

私は相方のスバル・ナカジマにそう言った

ス…「酷いよ、ティア。・・・ティアのデバイスはいいいねー高性能で」

ティ…「兄さんが作ってくれたんだもの、当然よ。」

私は笑顔でそう言った

ス…「でも、ティアのお兄さんって、もう・・・」

ティ…「・・・亡くなったわ。でも、私にはもう一人の兄さんがいるの。強くて、優しい兄さんが。」

ス…「ふーん、今度合わせてね。」

ティ…「いいわよ。」

私達がそんなことを話していると

ツ…『おはようございます。さて魔道師試験の受験者2名。そろってますか』

モニターが展開されて、試験管の姿が見えた

ティ・ス…『はい』

ツ…『かくにんしますね。時空管理局陸士386部隊に所属のスバル・ナカジマ二等陸士と』

ス…『はい』

ツ…『ティアナ・ランスター二等陸士』

ティ…『はい』

ツ…『所有している魔道師ランクは陸戦Cランク。本日受験するのは陸戦魔道師Bランク昇格試験で間違いないですね？』

ティ・ス『はい、間違いありません』

ツ…『はい、本日の試験官を勤めますのは、わたくしリインフォース？（ツヴァイ）曹長です。よろしくですよ』

ティ・ス…『よろしくお願いします。』

絶対に試験に合格して、私の夢をかなえる

ティアナ s i d e e n d

3人称 s i d e

あるへりの中で3人の女性が魔道士試験を見ていた

は..「お、早速はじまってるな。ツヴァイもしっかり試験管してる。」

アリシア..「そうだね。」

フェ..「それより、はやて。ドアを開けたままだと危ないよ。モニターでも見られるんだから。」

は..「はい。」

現在へりの中にいるのは、八神はやて二佐、フェイト・テストロツサ執務管、アリシア・テストロツサ執務管補佐である

フェ..「つで、この二人がはやてがフォワードにしようって言うている子達なんだよね?」

アリシア..「今日の試験の様子を確認して、行けそうなら正式に引き抜くの?」

は…「直接の判断はなのはちゃんに任せてある。部隊に入ったらなのはちゃんの直接の部下で教え子になるわけやから。」

フェ…「そうだね。」

所変わって、違うビルの上

翔…「随分と気合入ってるな、ティアナの奴。」

翔は自分で作ったサーチャーを展開してティアナの様子を見ていた

まい…「今のティアナの強さは知らないけど、Bランク程度なら余裕で受かるでしょうね。」

リオ…「ティアナお姉ちゃん頑張れー。」

翔…「それにしても、この子、どこかで見たことあるんだよね、どこだっけ？」

翔は目を瞑りスバルの事を思い出そうとしていた

ゼロ…『4年前の空港火災の時に、助けた女の子だと思うぞ。』

翔…「ああー、あの時の子か。」

翔は手を叩いて、あの時の事を思い出した

翔…「いやー、大きくなったねー。」

まい…「だから、爺くさいってば。」

また変わって、ティアナ達の

ツ…『それでは、始めます。ゴール地点で会いましょう。』

『ready・・・go!!』

電子音が鳴った瞬間、スバルとティアナは地面を蹴ってスタートした

は…「始まった。」

フェ…「お手並み拝見」

翔…「何処まで、強くなったか見せてもらうぜ、ティアナ。」

まい…「そうね。」

ティアナ達は順調にターゲットを破壊していった（原作通り）

現在は、ティアナがフェイトシルエットを使い巨大なターゲットの位置を探しながら、スバルの一撃を待っている

ス…「ウイングロード!!」

スバルはビルの上から翼の道を生成し、巨大ターゲットのいるビ

ルに突っ込んでいった

ス..「うおおおおお!!」

スバルは魔力で強化した拳を繰り出すが、ターゲットの張った障壁に防がれてしまった

ス..「だったら。」

スバルはカートリッジを3つロードして、魔力を右拳に集中させた

は..「何をするつもりや?」

ヘリで試験を見ていたはやてはスバルの行動に疑問を持った

ス..「激気研鑽!!」

スバルは右拳を手刀にし、上に振りかぶった

翔..「あれは、まさか!?!」

違うビルで、その様子を見ていた翔はスバルの言動で何をするのか解り驚いていた

ス..「鋭鋭刀!!」

スバルは手刀を振りおろし、巨大ターゲットに蒼い魔力刃を放ち、障壁ごとターゲットを両断した

ス..「やったー。」

へりの中

は…「障壁ごと……」

フェ…「断った斬った……」

アリシア…「翔以外にあんなことできる人初めて見た。」

はやて達はスバルが障壁ごとターゲットを斬ったことに驚いていた

ビルの屋上

まい…「翔、アレって。」

翔…「ああ、俺の鋭鋭刀だ。・俺があの子に見せたのはあの時だけだ。まさか、独学で習得したとわな、驚いたぜ。」

まい…「嬉しそうね。」

翔…「ああ。……だけど、まだ未完成みたいだな。」

まい…「どうして？」

翔…「斬撃の跡が残ってない、それが証拠だ。」

その後、ティアナ達は無事にゴールした。そして、へりが降りてきて、そこから、はやて、フェイト、アリシア、そして空から、バリアジャケットを着たなのはがスバル達に歩いて行った。スバルはなのはに再開でき涙を流していた

翔..「さて、俺達も帰るか。」

リオ..「お父さん、私にティアナお姉ちゃんと話がしたい。」

翔..「解った。じゃあ、ティアナの所に行くか。」

この男、かなりの親ばかである

リオ..「うん。」

第39話 STS編「結果」

ティアナ side

試験の後、私とスバルは八神二佐、フェイト・テストロッサ執務管、アリシア・テストロッサ執務管補佐の過去話を聞いていた

フェ…「とまあ、そんな経緯があって八神二佐は、新部隊設立のために奔走」

は…「4年ほどかかってやっとそのスタートを切れた、というわけや」

アリシア…「部隊名は時空管理局本局遺失物管理部 機動六課」

話の流れが全く分からない、隣を見ると、スバルも解らない顔をしていた

は…「登録は陸士部隊。フォワード陣は陸戦魔道師が主体で特定遺失物の保守管理が主な任務や」

ティ…「遺失物、……ロストログアですよね？」

フェ…「そう。」

アリシア…「でも、広域捜査は一課から五課までが担当するから
うちは、対策専門」

ティ…「そうですか。」

私が話の内容を確認していると、スバルから念話で『ロストログアって何?』って聞かれてきたが、後で教えると言って念話を終了した

は…「で、スバル・ナカジマ二等陸士　ティアナ・ランスター二等陸士」

ス・ティ…「は、はい」

は…「あたしは、3人を機動六課のフォワードとして迎え入れた
いって考えてる。」

ス・ティ…「え!？」

は…「厳しい仕事にはなるんやけど濃い経験は積めると思うし、
昇進機会も多くなる。どないやる?」

ス…「え〜と。」

ティ…「その…」

フェ…「スバルは高町教導官に魔法戦を教われるし、執務官志望
のティアナ私でなければアドバイスもできると思うんだ。」

ス・ティ…「はあ。」

私達が返答に困っていると、高町一等空尉がリインフォース曹長

と一緒に、試験の結果を教えてくれた。それにしても、なのはさん、フェイトさん、はやてさんは星華さん、雷華さん、空さんに似てるな

ク…『サー。』

そんなことを考えていると、クロスミラージュが私に声を掛けた

ティ…「ちょっと、すいません。どうしたの、クロスミラージュ？」

私が聞き返すと

ク…『その、頑張ってください。』

ティ…「は？」

私が不思議に思っていると

リオ…「ティアナお姉ちゃん。」

遠くから、あの子の声が聞こえてきた。私が声のする方に振り向くと

ティ…「リオ!？」

リオが私に向かってき、抱きついてきた

ティ…「な、何でリオが此処にいるの!？」

私が聞くと

翔..「俺達と一緒に前回の試験を見てたからさ。」

聞きなれた声のする方を見ると、兄さんとまいさんがいた

ティアナ s i d e e n d

翔 s i d e

俺がティアナに声を掛けると、ティアナは俺が此処にいることに驚いていた

な・フェ・ア・は..「翔(君)、まいちゃん。」

翔..「久しぶりだな、なのは、フェイト、アリシア、はやて。」

まい..「久しぶり。」

俺とまいはなのは達に挨拶した

翔..「それと、ティアナ。」

ティ..「は、はい。」

翔..「試験を受けるときは、俺に連絡しろっていつも言ってるだろう。クロスミラージュの点検してやるからって。」

ティ…「その、ごめんなさい。」

ティアナは俺の誤った

翔…「まあ、いいけどよ。それより、試験合格おめでとう。」

俺はティアナの頭なでながらそう言った

まい…「おめでとう、ティア。」

リオ…「おめでとう、ティアナお姉ちゃん。」

ティ…「あ、ありがとう、兄さん、まいさん、リオ／／／」

嬉しかったのか、ティアナは顔を紅くしていた。すると、

ス…「翔さん？」

スバルが俺に気づき、俺の名を呼んだ

翔…「うん？」

ス…「いえ、椎名二佐。」

スバルが敬礼してきた

翔…「翔さんでいい。・・・4年ぶりだな、スバル。大きくなっ
たな。」

俺はスバルの頭を撫でながら言った

ス..「っあ。」

翔..「激気研鑽にはびっくりしたぜ。まさか、独学で会得するとはな。」

ス..「その、すいません。」

翔..「別に怒ってないぜ、寧ろ嬉しいかな。俺の技の一つ受け継ぐことが出来る奴に会えたことにな。」

俺はスバルの目を見て

翔..「強くなったな、スバル。」

ス..「っ!!!」

俺の言葉を聞くと、スバルは涙を流した

リオ..「お父さんが、女の人を泣かした。」

ティアナに抱きかかえられたリオが俺にそう言った

な・フェ・ア・は..「お父さん!?!」

リオの言葉を聞くと、なのは達はそれぞれ、デバイスを起動させたな..「どういことかな、翔君。」

フェ…「誰との子供なの？もしかしてまい？」

アリシア…「そう言えば、ティアナが翔の事、『兄さん』って言うってたね？」

は…「全部吐いてもらおうか。」

なのは達は俺にデバイスを向けてそう言った

翔…「俺はティアナの義理の兄だ。リオは俺の子供だ、養子だけどな。」

「ええええええ！？」

4人が驚いていた

翔…「さて、ティアナ。今日は家に帰ってこい、試験合格の祝いだ。それと、クロスミラージュを貸せ、整備してやるから。」

ティ…「うん。」

まい…「スバルちゃんもおいで、一緒にお祝いしてあげる。」

ス…「いいんですか！ありがとうございます。」

俺達が帰ろうとしたとき、

は…「ちょっと、待ったー！！！」

はやてが俺の腕を掴んだ

翔..「どうした？はやて。」

は..「翔君に折り入ってお願いがあるんや。」

翔..「どうせ、はやてが立ち上げた部隊に俺たちも来てくれって事だろう？」

は..「なんで解ったんや！？」

翔..「話の流れで解る。俺は別に構わないが、俺のボスに言え。ボスの許可が下りない限り、俺は手伝うことはできん。」

は..「解った。」

翔..「じゃあな。」

俺はそう言っていると、家に帰ってティアナ達の合格パーティーを始めた。一つ言えたことは、スバルの食べた量はクイントさん並みだった。あの量はどこに行くんだ？雷華と同じで胸に行くのか？

第40話 STS編「始動」

翔 side

ティアナの試験が終わった後日、はやては俺を機動六課に1年間所属させて欲しいとボスに頼みに来た。ボスは有事の際にはファイヤースクワットとして動いてもらうという条件ならいいといった。はやてはそれを承諾し、俺、まい、星華、雷華、空の3人は1年間機動六課で働く事になった

翔..「準備も出来たし、そろそろ行くか。」

俺は家で準備を済ませ、他の4人に声をかけた

まい..「そうね。それにしても、部隊のメンバーの殆どが知り合
いって凄いわね。」

星華..「そうですね。」

空..「調べた所、バックには聖王教会、3提督、リンディ統括官、
クロノ提督が居るらしいぞ。」

翔..「聖王協会ねえ、俺のあいつの事苦手なんだよな。」

雷華..「アイツって、騎士カリムのこと?」

雷華が俺に聞いてきた

翔…「ああ。会ったんびに、『是非、教会の騎士になってください』だぜ？しつこいっただらありやしないぜ。俺は騎士になるつもりは微塵も無いのに。」

まい…「確かにあの人はしつこいわね。」

リオ…「お父さん早く行こうよ。」

翔…「おっと、そうだな。」

リオに言われ、俺達は家を出て、機動六課に向かった

翔 side end

3人称 side

は…「~~~~♪」

はやては部隊長の部屋で機嫌よく鼻歌を歌っていた

ア…「随分と上機嫌ですね、主はやて。」

部屋に居た、リインフォース・アインがはやてに質問した

は..「当たり前や!なんたって、皆が同じ部隊やし、それに私の夢がかなったんやからな。」

ア..「そうですね。」

その時、ドアがノックされなのはとフェイトが部隊長室に入ってきた

な..「失礼します。」

は..「いらっしゃい。二人とも、似合っとるで。まあ、普段のはちゃんは動きやすい教導隊の服やけど。」

な..「公式の間ではこっちを着ないとね。」

フェ..「姉さんもそうだけど、4人が同じ服を着るのは中学のとき以来だね。」

なのは達が話をしていると

翔..「失礼するぜ。」

翔、まい、星華、雷華、空が部隊長室に入ってきた

は..「翔君、まいちゃん、星華ちゃん、雷華ちゃん、空ちゃん。って、なんで、翔君は陸士の服を着てないんや!?!」

翔..「俺はこっちのほうが着慣れてるんだよ。」

翔の服はファイヤースクワットの隊員服なのである

は..「まあ、ええわ。..それより。」

はやては星華、雷華、空のほうを見た

は..「なんで、3人はそんなに成長してるんや!!」

はやては3人のある部分をみて叫んだ

星華..「何でと言われましても。」

雷華..「うん、うん。」

空..「返答に困るぞ。」

は..「雷華ちゃんは解るで、フェイトちゃんと同じ容姿をしとるさかい。だけど、なんで、星華ちゃんと空ちゃんは私達より成長してるんや!?!」

はやてがもの凄い表情で2人に近づいた。なのはもである

星華..「.....食材のおかげかも知れませんね。」

星華たちは普段、別荘にある食料を持ってき、それを調理している

空..「あれは、栄養が豊富だからな。」

は..「3人ともずるいで!その食材、私にも食べさせてや!!」

な…「私も。」

そんな事を、グリフィスが来るまで話し合っていた

ロビーではやての話が終わると、全員が仕事に入った、FW陣は訓練場でなのはの指導の下、訓練をしている

翔はというと

リオ…「えい！やあ！」

リオと軽い組み手をしている

翔…「いいぞ、リオ。よくなってきた」

実は翔が別荘で獣拳を練習しているとき、その場にリオもい、リオが見よう見真似で真似をしたら、激気を放ったのである

リオ…「やっぱり、まだお父さん見たいに激気を自由に使えないな。」

翔…「当たり前だ、今は護身用に武術を教えているだけだからな。本格的な訓練はもう少し大きくなってからな。」

リオ…「はい。」

そんなやり取りをしていると、

な…「翔君も訓練やる？」

なのはが俺に声をかけてきた

翔.. 「FWの訓練は終わったのか？」

な.. 「今、休憩させているところだよ。」

翔.. 「そうか。だったらやるかな。」

そういうと、翔はリオ、なのはと一緒に訓練場に向かった

第41話 STS編「訓練と模擬戦」

3人称 side

な..「これから、翔君がさつき皆がやったのと同じ訓練をするから、よく見てね。」

FW陣..「はい。」

なのはのいったことに全員が元気よく答えた

ス..「ティア、翔さんってどんな戦い方するの？」

スバルがティアナに聞いた

ティ..「兄さんは、剣、拳、銃、槍、ハンマーなどを使うわ。普段は右手に剣、左手に銃を持って、オールマイティに戦ってるけどね。」

キャロ..「随分と器用なんですね。」

ティアナの回答にキャロが驚いていた

エ..「（槍の使い方教えてもらおうかな。）」

エリオが1人、違う事を考えていた事は、誰も気づかなかった

3人称 side end

翔 side

俺は訓練場にたって、準備をしていた

ゼロ..『今日はどうするんだ?』

翔..「久しぶりに拳でやろうと思う。」

ゼロ..『そうか、じゃあ、俺はサポートに専念する。』

翔..「頼む。」

すると、モニターが展開し、なのはが映った

な..『翔君、準備はいい?』

翔..「ああ。初めてくれ。」

な..『うん。』

訓練場にガジェット1型が15機出現した

な..『制限時間は20分。レディー.....ゴー!!!』

なのはの合図とともに俺は宙に飛び上がり、右手に魔力を集中さ

せた

翔..「波動龍神撃!!」

拳を繰り出し、螺旋状に回転した砲撃を放ち、1型5機を破壊した

ゼロ..『Lightning move』

俺は一瞬で1型の中心に潜り込むと、螺旋状に回転した魔力を脚に纏わせた

翔..「旋風回転脚!!」

そして、回し蹴りを繰り出し、残りの1型を一気に破壊した

翔..「物足りないな。」

俺がそう呟くと

シ..「なら、今度は私が相手になろう。」

声のするほうに振り向くと、シグナムが騎士甲冑を纏って宙にいた

シ..「お前の戦いを見ていたら、久しぶりに戦いたと思ったの
でな」

そう言いながら、シグナムはレヴァンティンを鞘から抜いた

ゼロ..『（どうするんだ、翔？俺を使うか？）』

翔…「（いや、拳のままでやる、スバルにアレを見せてやろうと思っただけ）」

ゼロ…『（そうか。）』

俺達が念話で話をしていると

シ…「剣を使わないのか？」

翔…「・・・抜かしてみろよ。」

シ…「っふ、面白い！」

そういうと、シグナムは俺に接近し、レヴァンティンを振り下ろした

翔…「はあっ！！」

俺は左腕に魔力を纏わせ、その斬撃を受け止め、すかさず右手に雷に変換した魔力を纏わせ

翔…「雷吼拳！！」

無防備のシグナムに雷拳を放った

シ…「っぐ。」

シグナムは鞘で俺の拳を防いだ。っが、威力を軽減する事ができず、吹き飛んだ

翔..「やるじゃねえか。まさか、あの無防備の状態から防御するなんて。」

シ..「強くなっているのは、お前だけでは無いという証拠だ。・・・だが、防御してなおこの威力とはな。」

翔..「なら、これは防げるかな？サンダーウィップ！！」

俺は手に纏った雷を鞭のようにし、シグナムに放った

鞭はシグナムに絡みついた

シ..「こんなもの。・・・何！？外せ無いだ！？？」

シグナムは体に入力を入れて鞭をほどこうとしたが、ほどけなかった

翔..「ふんっ！！」

俺は腕を後ろに引き、シグナムを俺の間合いに引き寄せた

翔..「雷吼脚！！」

雷を纏った飛び後ろ回し蹴りをシグナムに繰り出し、シグナムを蹴り飛ばした

シ..「ああああああ」

シグナムはビルに激突し、土煙が舞った

翔..「（スバル、聞こえるか？）」

俺は模擬戦を見ているであろうスバルに念話を送った

ス..「(っえ?は、はい。)」

翔..「(今から、お前に本当の鋭鋭刀を見せてやる。その目にしつかりと、刻み込んでおけ!)」

ス..「(っ!はい!!)」

スバルとの念話が終わると

シ..「飛竜一閃!!」

土煙から、炎を纏った連結刃が俺に襲い掛かってきた

翔..「ファイヤーウォール!!」

俺は炎の障壁を展開させ、連結刃を防いだ

翔..「シグナム、うまくよけろよ!! 激気研鑽!!」

俺はシグナムにそう言い、右手に激気を集中させた

翔..「はぁあああ・・・」

拳を手刀に変え、上に振り上げた

翔..「チェストーー!!」

手刀を振り下ろし、激気で作った刃をシグナムに放った

シ..「くうっ。」

シグナムは横に移動し、鋭鋭刀をよけた。土煙が舞い、その煙が止むと、真っ二つになったビルと斬撃の跡が地面に残っていた

シ..「.....さすがにアレは防ぎきれないな。」

シグナムはその光景をみて、そう呟いた

翔..「.....驚いている所悪いが、これで終わりだ。」

俺は鋭鋭刀を放った後、直ぐにシグナムの前に移動した。俺は掌低をシグナムに放ち、宙に浮かばせると

翔..「輝炎拳!!」

炎を纏った拳を地面に叩きつけるようにシグナムに繰り出した

シ..「があっ!!」

シグナムは地面に倒れたが、何とか立ち上がろうとしていた

翔..「.....俺の勝ちだ。」

俺は拳をシグナムの顔に前に向けそういった

シ..「そのようだな。」

こうして、俺とシグナムの模擬戦は終わった

第42話 STS編「アラート」

翔 side

な..『じゃあラスト1本。皆、まだ頑張れる?』

FW陣..『はい。』

翔..「朝っぱらからよくやるよ。」

俺はモニターでFW陣の練習を見ている

翔..「シュートイベーションか。・・・さて、なのはに一撃を入れられるかな?」

俺がそういうと

ゼロ..『翔、そろそろリオが目覚ます時間だぞ。』

翔..「もうそんな時間か。FW達の練習を最後まで見ていきたいが、ティアナがいるから問題なくクリアできるだろう。」

俺はモニターを消し、部屋に向かった

俺が部屋に着くと、ちょうどよくリオが起き上がり、リオを着替えさせ、朝食を取るために食堂に向かった。途中でまい、星華、雷

華、空と会い、一緒に食堂に向かった

リオ…「ティアナお姉ちゃん。」

食堂に入ると、リオはティアナを直ぐに見つけ、胸に飛び込んだ
ティ…「リオ、いつも言ってるけど、飛び込んで来ないの。危ないでしょう。」

ティアナはリオに注意をしているが、

リオ…「まいお姉ちゃんはそんな事言わないもん。」

ティ…「まいさん。」

ティアナはため息をついた

翔…「よう、お前らも朝食か？」

俺はFW達に声をかけた

ス…「翔さん、おはようございます。」

エ…「おはようございます、翔さん。」

キャ…「おはようございます。」

フ…「きゅー。」

3人が俺に挨拶をし、フリードは俺の肩に乗った

キャ…「フリード！すいません、翔さん。」

キャロが俺に謝った

翔…「いいよ、別に。フリードは俺のここが気に入ったんだもんな。」

フ…「きゆく。」

フリードは頭を振って答えた

翔…「それにしても、お前ら随分と機嫌が良さそうだな。何か良い事でもあったのか？」

俺が聞くと

ス…「実は私達に新しいデバイスが渡されるんです。」

翔…「へえ〜。」

ティ…「私は兄さんがくれたクロスミラージュがあるから貰わないけどね。」

そんなことを話しながら俺達は朝食を取った

翔 side end

3人称 side

聖王協会・カリムの部屋

朝、FW達との話を終えたはやては、聖王教会に来ていた

は..「これは！」

カ..「それが今日ははやてを呼んだ理由。昨日、ミッドに運び込まれた不審物よ。」

は..「これは、レリックやね。」

カ..「その可能性が高いわね。ガジェット2型と3型が見つかったのも昨日だから。」

は..「レリックが発見される時間は？」

カ..「・・・早ければ、今日明日よ。」

はやてはその報告を聞いて、疑問を思った

は..「それにしても、レリックが出てくるのがちょっと早い気がするわ。」

カ..「だから、会って話がしたかったの。どう判断するべきか。」

は…「・・・大丈夫や。即戦力の隊長たちはもちろん、新人フォワードたちも実戦可能、それに切り札もあるんやから。」

カ…「その切り札っていうのは、椎名さん達のことよね？」

は…「せや。って、なんでカリムが翔君達のこと知ってるん!？」

カ…「前に一度会った事があるの。確か、去年だったかしら？私の護衛をしてくれたの。その時、彼の強さを見た時、『教会専属の騎士になって下さいって』、お願いしたけど断られたわ。」

は…「まあ、翔君はファイヤースクワットである事に誇りを持ってるさかいな、当然といったら当然やな。」

はやてとカリムが話をしている頃、機動六課ではFW達がデバイスルームに集まっていた

ス…「これが・・・」

キャ…「私達のデバイスですか。」

スバル、エリオ、キャロの前には待機状態のデバイスが浮いていた（形状は原作と同じ）

シャーリー…「そーです。設計主任はあたし、協力、なのはさ

ん、フェイトさん、レイジングハートさんとリインフォース・ツヴァイ曹長！」

エ…「はあ。」

シャーリー…「でも、ティアナのデバイスは本当に高性能だよ。AMF無効化システムに魔力増強システム。その二つを調べようとしたけど、強固なプログラムで厳重にブロックされてるし、ブロックス化されてるから、ぜんぜん調べられなかったよ。」

シャーリーは疲れた顔をしていた

ティ…「まあ、兄さんが作ったデバイスですからね。まいさん、星華さん、雷華さん、空さん、そして兄さんのデバイスにも搭載されているみたいですから。」

ティアナが説明をした

シャーリー…「デバイスマスターとしては、そのシステムを見せたい所なんだけど。」

ティ「それは無理だと思いますよ。」

それから、なのは達はスバル、エリオ、キャロにデバイスの性能を話していった。そして、隊長陣のリミッターのことも説明した

エ…「そう言えば、翔さん達にもリミッターがついているんですか？」

エリオがなのはに聞いた

な…「翔君たちにはリミッターはついていないよ。なんでも、『なんで、態々リミッターをつけなくちゃいけないんだ?』っていたし、ファイヤースクワットのメンバー全員がリミッターをつけていないってまいちゃんも言ってたしね。」

キャ…「凄いですね。」

ツ…「ファイヤースクワットは管理局最強の部隊ですし、成果も高いですから、地上、本局も何も言えないんです。」

な…「午後の訓練はデバイスの調整を含めてるからね。」

その時、アラームが鳴った

ス…「このアラームって・・・」

ティ…「一級警戒態勢!?!」

な…「グリフィス君!?!」

なのははグリフィスとの回線を開いた

グ…『なのはさん、教会本部からの要請です。』

は…『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君、翔君、こちらはやて』

翔…『はやて、状況は!?!』

は..『教会騎士団の調査部で追ってた、レリックらしきものが見つかった。場所はエイリム山岳丘陵地区。対象は山岳リニアレール、移動中』

フェ..『移動中って!?!』

な..「まさか!?!」

は..『そのまさかや...。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。リニアレール車内のガジェットは最低でも30体。大型や飛行型の未確認タイプも出てるかもしれへん。いきなりハードな初出動や。なのはちゃん、フェイトちゃん、行けるか?』

フェ..『私はいつでも。』

な..「私も。」

翔..『俺には聞かないのかよ。』

は..『翔君はいつでも戦闘体勢やから、聞くだけ無駄や。』

翔..『...俺はいつ戦闘況になったんだよ。』

は..『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。みんなもオツケーか?』

FW陣..「はい!!」

翔..『無視かよ。』

は..『よし、いい返事や。シフトはAの3、グリフィス君は隊舎での指揮。ツヴァイは現場観戦。星華ちゃん、雷華ちゃん、空ちゃんは隊舎待機。でも、何かあったとき、直ぐに出撃できるようにし
といてや。』

ツ..「はいです。」

星華..「解りました。」

雷華..「解ったよ。」

空..「わかった。」

は..『なのはちゃん、フェイトちゃん、翔君、まいちゃんは現場
指揮』

な..「うん。」

翔..『了解』

は..『ほんなら...機動六課フォワード部隊、出動!!』

こうして、翔たちの初陣が始まった

第43話 STS編「初陣」

翔 side

俺、まい、なのは、ツヴァイ、FW陣はヘリで現場に向かっているな..「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習どおりにやれば大丈夫だからね。」

FW..「はい。」

なのはに言われ、全員が返事をした。しかし、キャラが少し脅えていることに気がついた

翔..「怖いのか、キャラ。」

俺はキャラに話しかけた

キャラ..「い、いえ。」

翔..「キャラ。」

キャラ..「っえ？」

俺はキャラを腕で包み込んだ

翔…「力を恐れるな、力は力だ。だけど、それをどう使うかは、キャロお前しだいだ。勇気を持って、あふれる勇気は必ずお前の力になってくれる。」

キャ…「・・・はい！」

俺の言葉に勇気づけられ、キャロは元気よく返事をした

数分後、敵の数が増えたので、俺達が出る事になった

な…「じゃ、ちょっと出てくるけどみんなも頑張ってズバツとやっつけちゃお！」

FW…「はい」

なのははFWに檄をつけた後、ヘリから飛び降り、バリアジャケットを展開した

翔…「あいつは、展開している時に、襲われるかもしれないって事を考えてないのか？」

俺はなのはの行動を見てあきれた

翔…「ゼロ。」

ゼロ…『S e t u p』

俺はゼロを起動し、バリアジャケットを展開した

まい…「ソフィア。」

ソ…『S e t u p』

まいもソフィアを起動し、バリアジャケットを展開した

翔…「アサルト1、椎名翔。」

まい…「同じく、アサルト2、紫乃宮まい。」

翔／まい…「出るぞ！／行きます！」

俺達はヘリから飛び降り、ガジェットの群れに向かった

翔 s i d e e n d

3人称 s i d e

翔…「ゼロ、約どれくらいいるんだ？」

翔はゼロに聞いた

ゼロ…『約50機つと言ったとこだな。それと、僅かだが天装術

の反応を確認した。』

翔..「奴が本格的に動き出したってわけか。」

ゼロ..『そのようだな。』

翔..「とりあえず、仕事をしないとな。」

そういうと、翔は炎神剣を肩に担ぎ、戦闘モードに入った

翔..「アサルト1、暴れるぜ!!！」

ゼロ..『Lightning move』

翔は一瞬でガジェット?型に接近し

翔..「はあっ!!！」

炎神剣を振るい、3機のガジェットを一閃した。後ろから3機のガジェットが近づいてきたが

翔..「遅い!!！」

翔は魔力弾を放ち、3機を撃ち落した。当たりを見ると、なのは達も一撃でガジェットを落としていつてる

翔..「面倒だ、一気に落としてやるよ!!！」

翔は感情を昂ぶらせ、アバレモードになると、炎神剣を上に掲げ、炎を纏わせた

翔…「ブレイジングストーム!!」

炎神剣を振り下ろし、炎の竜巻を撃ち出し、射線上にいたガジェットを全て破壊した

ガジェットを全て破壊した後、リニアからキャロがエリオを助けるために飛び降り、フリードの力を解放しエリオを助け、二人でガジェット?型を破壊した

列車が止まったと同時に、シャーリーから通信が入った

シャーリー…『物凄いスピードでリニアに近づいてくる反応をキヤッチ、推定ランクはSS+です。』

翔…「なに!? シャーリー、映像を見せてくれ。」

シャーリー…『はい。』

モニターが展開され、映っているアンノウンをみた瞬間、翔は驚いた

翔…「こいつは!?!」

シャーリー…『アンノウン、スターズと接触、交戦に入りました。』

な..「狙いはやっぱり、レリック。八神部隊長、リミッター解除を申請します。」

は..『今やっ取る。』

シャーリー..『ガジェット30機、接近してきます。』

リニア

スバルとティアナはアンノウンと対峙していた

ス..「はあああああ!!」

スバルはアンノウンに攻撃するが、ことごとくよけられている

ティ..「スバル、下がって。」

ティアナは魔力弾を10個生成すると、スバルを下がらせた

ティ..「クロスファイヤー...シュート!!」

ティアナは魔力弾をアンノウンに放った。っが、全て持っている
槍で叩き落されてしまった

ス..「ティア、このままだとまずいよ。」

ティ..「解ってるわよ、そんな事。」

「ふん、人間が私に勝てるわけがないだろ。」

アンノウンは不適に笑った

ティ…「スバル、あんた、フルパワーのアレでアイツのバリアを碎ける？」

ス…「・・・解んない。でも、何とかやってみるよ。」

ティ…「なるべく早くね、あたし1人じゃ、そう長くは持ちそうにないから。」

そういうと、ティアナはアンノウンに向かって行った

「私にかなわないと知りながらも、向かってくるか。人間とはやはり愚かな生物だな。」

アンノウンは槍でティアナを攻撃した

ティ…「つく、はあっ!!」

ティアナはクロスミラーージュでその攻撃を受け止めると、魔力を纏った蹴りを繰り出した

しかし、それはアンノウンの張っているバリアに防がれてしまった

「甘いわ!!」

アンノウンは槍でティアナを突き刺した。だが、突き刺されたテ

イアナは霧のように消えてしまった

「何!？」

ティ…「どうしたの? 私はこっちょ!!」

ティアナは蹴りを放った直後、幻術で自分を映し出し、後ろに回りこんでいたのだ

ティ…「はあああああっ!!」

ティアナはゼロ距離から魔力弾をクロスミラージュから撃ちだしたが、障壁によってまた防がれてしまった

「何度やろうが、無駄だという事がわからないのか。」

その時

ス…「激気研鑽!!」

アンノウンが振り向くと、スバルの手に魔力が集中していた

ス…「鋭鋭刀!!」

スバルはアンノウンに魔力刃を繰り出した

「っふ、無駄だという事がわからな・。」

しかし、スバルの繰り出した魔力刃はバリアを碎き、アンノウンにダメージを与えた

「馬鹿な、私のバリアが。」

ティ…「驚いている暇はないわよ。」

ティアナは2丁の銃口に魔力球体を生成しており、スバルもまた、左手で魔力球体を生成していた

ス…「一撃必倒！ディバイナーバスター！！」

ティ…「ダブルファントムブレイザー！シュート！！」

2人はアンノウンにを挟むように魔力砲を撃ち込んだ

砲撃はアンノウンに当たり、爆煙が当たりを舞った

ス…「やったね、ティア！」

ティ…「ええ。」

2人が喜んでいると、爆煙の中からアンノウンがゆっくりと歩いてきた

ティ…「そんな。」

ス…「あの攻撃で無傷なんて。」

「まさか、私のバリアを破るとは。人間にしてはよくやったと褒めてやろう。だが、これで終わりだ。」

アンノウンは巨大なエネルギー弾を生成した

「喰らえ、彗星弾!!」

エネルギー弾が2人に放たれた、エネルギー弾が2人に当たる瞬間、紅い閃光が2人を助けた

翔..「2人とも、よく頑張ったな。」

ティ..「兄さん!!」

ス..「翔さん!!」

翔..「さて、ここからは俺が相手になってやるよ。」

そう言いながら、翔はアンノウンのほうを向いた

翔..「彗星のブラジラン!!」

ここに英雄の魂を受け継いだものと、巨大な敵との壮絶な戦いが
今始まる

第44話 STS編「翔対彗星のブレドラン」

翔 side

俺は今、彗星のブレドランとにらみ合っている

ブ（彗）…「ほう、私の名前を知っているのか。」

翔…「ああ。それとも、救世主のブラジランと呼んだほうがいいか？」

ブ（彗）…「っ！？まさか、その名まで知ってるとは。貴様、何者だ！？」

翔…「通りすがりの魔道師さ。」

俺はそういい、ティアナとスバルに言った

翔…「ティアナ、スバル、レリックを回収してこの場を離れろ！」

ティ…「だけど、兄さん。」

翔…「ティアナー！！」

ティ…「っ！！」

翔..「俺が負けるとでも思ってるのか？」

ティ..「.....行くわよ、スバル。」

ス..「ティア！？で、でも。」

ティ..「私達がここに居たら、兄さんは安心して戦えないわ。悔しいけど、今の私達は足手まといでしかないわ。」

ティアナにそういわれ、スバルは落ち込んでしまった

ス..「.....うん。」

スバルはレリックの入った箱を持ち、その場を離れようとした

ブ（彗）..「いけません！！」

ブレドランはスバルに襲い掛かった

翔..「させるか！！」

俺はブレドランの攻撃を防ぐと、

翔..「行け！！」

スバル達にそう言った

スバル達が離れた事を確認すると、俺はゼロ距離で砲撃をブレドランに放った

ブ（彗）・・「くうっ!!」

ブレドランは砲撃を喰らい、吹き飛んだ

翔・・「さてつと・・・」

俺は炎神剣を肩に担ぎ

翔・・「派手に行くぜ!!」

ブレドランに接近した

ブ（彗）・・「はぁっ!!」

ブレドランは手からエネルギー弾を俺に向かって放った

翔・・「はぁっ! せい! おらぁっ!」

俺はそれを炎神剣で叩き落としながら進んだ

翔・・「おらぁっ!!」

間合いに入ると、袈裟斬りを繰り出した

ブ（彗）・・「ふん!」

ブレドランは槍でその斬撃を防いだ

翔・・「はぁっ!!」

俺は蹴りを放ちブレドランを蹴り飛ばすと、炎神剣に魔力を纏わせた

翔..「月牙天衝!!」

紅い斬撃をブレドランに放った

ブ..「ぐああ!!」

斬撃を喰らったブレドランは大きく後ろに吹き飛んだ

翔..「こんなもんかよ、かつて地球を救った救世主様の力ってのは。」

俺がそういうと、

ブ（彗）..「彗星弾!!」

巨大なエネルギー弾が俺に向かって放たれた

翔..「はあああああ」

俺は居合いの構えを取り、刀身に魔力を集中させた

翔..「せいやー!!」

剣を横に振るい、エネルギー弾を切り裂いた

翔..「これで、終わりだ。マジ・ゴル・ジー・マジカ!」

呪文を唱え、剣を上に掲げた

翔…「ブレイジングストームスラッシュー！」

剣を振り下ろし、炎の一太刀をブレドランに繰り出し、ブレドランを斬り裂いた

ブ…「ぐあああああ」

翔…「お前の野望もここまでだな。」

俺は斬り裂かれたブレドランにそういった

ブ（彗）…「クツクツクツ。」

翔…「何がおかしいんだ？」

ブ（彗）…「まさか、私が本物のブラジランだとも思ってるのか？残念だがそれは外れた。私はブラジランのオースター時代の記憶を受け継いだコピーなのだからな。」

翔…「何だと！？」

俺はその言葉に驚いた

ブ（彗）…「今回の戦闘は君達が我らの計画の障害になるかの確

認だ。本物も私は今の何十倍も強い！せいぜいあがく事だな。はー
はっはっは。」

翔・・・・・情報をありがとうな。」

俺はそう言い、斬り裂かれたブレドランに砲撃を放ち、完全に消滅させた

翔・・・・・急いだほうが良いかもしれないな。」

俺はへり向かいながらそう呟いた

第45話 STS編「地獄の訓練」

翔 side

ティ..「兄さん、これはやり過ぎですよ!!」

ス..「ティア、助けてー!!」

翔..「がたがた言うな!強くなりたいんだろう!!」

俺は別荘で、ティアナとスバルの訓練をしている。初任務の夜、ティアナとスバルが俺の部屋に来て、『強くしてください!!』つと、言ってきたので、俺はそれを了承し、別荘で2人に稽古をつけている

翔..「ティアナは一旦休憩。スバルは俺との組み手だ。」

ス..「は、はい。」

俺がそういうと、スバルは前に出てきて、構えた

翔..「来い!!」

合図とともにスバルは俺に接近してきた

ス..「うおおおお!!」

スバルはリボルバーナックルで俺に殴りかかってきた

翔..「っふ。っはぁ!!」

俺はそれを左手で受け止めると、すかさず右正拳を繰り出した

マ..『プロテクション』

マッハキヤリバーが障壁を展開して、俺の拳を防いだが

翔..「おおお!!」

俺は一瞬で激気を拳に纏わせ、障壁を砕き、スバルに拳を叩き込んだ

ス..「ああああ。」

俺の拳を受けたスバルは後ろに吹き飛び、倒れた

翔..「どうした、もう終わりか？」

ス..「まだ、まだー。」

スバルは立ち上がり、ウィングロードを展開し、俺に高速で近づいてきた

ス..「はぁあああ!!」

スバルはウィングロードから飛び降り、落下も加わった飛び蹴りを繰り出してきた

翔..「おらあっ!!」

俺はスバルの蹴りに蹴りをぶつけ、受け止めた

ス..「嘘おっ!？」

翔..「はあっ!!」

右足を地面に戻し、左回し蹴りをスバルに繰り出した

ス..「つくう!!」

スバルはリボルバーナックルで蹴りを受け止め、地面に着地した

翔..「いいかスバル、フロントアタッカーに必要なのは一撃の重み。強固な障壁。そして、スピードだ。お前の場合、スピードはまづ合格だ。だが、まだ障壁の強度と一撃の重みが足りない。そこで、お前にはこれを装備して、この人の相手をしてもらう。」

俺はスバルにウルトラマンゼロが使っていた、テクターギアを着させた

ス..「何ですかこれ!？すごく動きにくいんですけど!？」

翔..「それアーマーは装着している物の能力を封じる。攻撃魔法は使えないが、防御魔法は使えるようにしてある。」

俺はそういうと、ゲキチョッパーを呼び出した

翔…「その状態で、この人との組み手だ。この修行は純粹な体術を鍛えるものだ。そして、この人の動きをよく見ておけ、勉強になるし、もしかしたら何かヒントを得られるかもしれないぞ。」

ス…「は、はい。」

そういうと、スバルはゲキチョッパーとの組み手を始めた

翔…「次はティアナのばんだ。」

ティ…「うん。」

翔…「今のお前の強さは大体リミッターをつけたなのは並だ。」

ティ…「・・・私、そんなに強くなってたんだ。」

俺の言葉にティアナは驚いていた

ティ…「でも、この間のアンノウンにはまったく技が通じなかったんだけど。」

翔…「当たり前だ。アイツの強さは俺と同等、もしくはそれ以上だ。」

ティ…「兄さんと同等の相手!？」

翔…「今からやる訓練はある意味地獄だが、これをクリアできた時、お前は今よりもっと強くなってるかもな。」

俺はそう言い、デカレンジャーを呼んだ

」
翔..「この六人の強さはS+だ。この六人と戦って勝って見せろ。」

ティ..「はい!!」

ティアナはデカレンジャーとの戦闘訓練を開始した

翔..「さて、2人がどう成長するのか、楽しみだな。」

な..「やっぱりここにいた。」

俺が2人の訓練を見ていると、なのはがこっちに来た

翔..「なのは。・・・なんでここに居るんだ？部屋の鍵はかけておいた筈だが。」

な..「ディバインバスターでドアを壊して入ってきた。」

翔..「・・・・修理費は自分で出せよ。」

な..「ひどい。」

翔..「自業自得だ。」

な..「うー。それより、なんで2人の指導してるの？一応、教導官は私なんだけど。」

翔..「あの2人はすでに基礎を固めている。応用に入っても大丈夫だと判断したからだ。」

な..「・・・でも」

翔..「基礎も大事だが、それだけじゃだめなんだよ。これから先の戦いは特にな。」

な..「どういう事？」

翔..「そのうち、話すさ。お前も教導だけじゃなく、自分の訓練もしておけよ。後、これはフェイトとはやてにも伝えておけ。」

な..「う、うん。」

そういうと、俺はその場を離れて、飯の準備に入った。余談だが、なのはが別荘にある食材を食べて、ある部分が少し大きくなったのは、食べた一週間後である

第46話 STS編「翔の一日」

翔 side

翔..「はああああ!!」

SGR..「.....」

俺は今、別荘でスーパーゴセイレッドと刃を交えている

翔..「せいっ!!」

炎神剣とゴセイテンソードがぶつかり、火花が散った

翔..「おらあっ!!」

俺は蹴りを繰り出し、SGRを蹴り飛ばした

翔..「月牙天衝!!」

紅い斬撃をSGRに放った。しかし、その斬撃は肩から伸びた翼で防がれてしまった

翔..「あの翼、硬いよな。月牙天衝は一応S+ランク並の威力だったのに、傷一つ付いてない。・・・ちょっとショックだ。」

俺はショックになったが直ぐに回復し、SGRに接近した

翔..「はあっ!!」

炎神剣を振るい袈裟切り、振り上げ、縦一閃等の様々な斬撃を繰り出す、全て防がれてしまう

翔..「にやろお!!」

俺はゼロ距離で魔力弾を放ったが、翼の盾で全て防がれてしまった。翼の盾が元に戻ると、王錫で俺を突き飛ばした

翔..「があっ!!」

地面に着地した俺は、あまりの衝撃に膝をついた

翔..「アクセルテクターと魔力の鎧で、防御は完璧なのに、それを打ち破るとわな。」

俺は立ち上がり、剣を構え、一瞬でSGRに近づいた

翔..「烈火十文字斬り!!」

炎を纏った炎神剣でSGRを十字の斬撃を繰り出した

SGR..「.....」

SGRは翼で斬撃を防御した

翔..「まだ、まだ!!」

俺は魔力を纏った炎神剣で翼に攻撃し

翔…「月牙天衝」

ゼロ距離で、紅い斬撃を放った。S G Rの翼の盾が砕け、無防備になった

翔…「はあっ！！」

S G Rを蹴り飛ばし、炎神剣に魔力を纏わせた

翔…「月牙大天衝！！」

ゼロ…『Lightning Move』

巨大な月牙を放ったと同時に、俺はS G Rの後ろに回り込み炎神剣を背中に当てた

翔…「月牙大天衝！！」

S G Rは二つの巨大な斬撃を喰らい、煙が周りを舞った。煙が晴れると、そこにはゴセイレッドのレンジャーキーがあった

翔…「今の攻撃で何とか倒せるってことか。技の練度を上げた方がいいのかね。」

バリアジャケットを解除し、ゼロの待機状態に戻すと、別荘にある、温泉に向かった

風呂に入り、寝る為に部屋に入ると、まいがいた

翔..「なんだ、来てたのかよ。」

まい..「うん。」

俺がベットに近づくと、まいが俺の手を握り、ベットに引きずり込んだ

翔..「……何の真似だ？」

俺が質問すると

まい..「解ってるくせに。」

翔..「大体は解ってるが。……いいのか？前世とは違うんだぞ。」

まい..「前世でも、今でも〇〇は翔にあげるって決めてたから／＼」

翔..「はあ、どうなっても知らないぞ。っん。」

まい..「っん／＼」

俺の一日はまだ、まだ終わりそうにないな

第47話 STS編「出張任務」

翔 side

翔..「派遣任務？」

俺ははやてに呼ばれ、部隊長室でお茶を飲みながら話していると、はやてがそう言ってきた

は..「うん。聖王教会からの依頼でな、管理外世界に行ったロス・トロギアを六課が回収することになったんよ。」

翔..「ふうん。っで、場所は？」

は..「第97管理外世界『地球』の海鳴市や。」

翔..「.....呪われてるのか、あの町は？」

は..「そんなことは無い、とはい切り切れ自分が無い情けない。」

俺達はため息をついた

翔..「っで、他の連中には言っているのか？」

は..「ツヴァイに伝えるようお願いした。行くのは明日やから、準備しといてな。」

翔..「ああ。」

そう言い、俺は部隊長室をでて、準備に取り掛かった

〵翌日〵

ス..「どんなところなんだろうね、ティア。」

ティ..「魔法が無いってだけで、此処とあまり変わらないわよ。」

エ..「ティアナさんは地球に行った事があるんですか？」

ティ..「3年間住んでたのよ。」

FW達がそんなことを話している一方、隊長陣達は

アリシア..「久しぶりに地球に変えるね。」

フェ..「そうだね、姉さん。アルフ元気かな？」

な..「アリサちゃんとすずかちゃんにも久しぶりに会えるしね。」

翔..「のんびり話してないで、さっさと行くぞ。」

俺はリオを連れて先に転送ポートに向かった

（地球）

翔..「4年ぶりか、あんまり変わらないなここは。・・それにしても、金持ちの考えることは解らん、何で自分のいる街に別荘なんか立てるんだ？」

俺は後ろにある別荘を見てそう呟いた

すると、一台の車がき、アリサとすずかが出てきた

アリサ..「なのは、フェイト、アリシア、翔、まい、星華、雷華、空。」

す..「皆、久しぶり。」

な..「アリサちゃん、すずかちゃん久しぶり。」

フェ..「アリサ、すずか元気だった。」

す..「うん、元気だったよ。」

アリサ..「あたしも元気よ、ってゆうか、翔！あんた、たまにはこっちに帰ってきなさいよ！！」

翔..「しょうがねえだろう、俺はなのは達と違って時間がそんなにないんだよ。」

アリサ..「連絡ぐらいは出来るでしょう！！」

翔..「なんで、用もないのに連絡しなくちゃいけないんだよ。」

す..「まあ、まあ、アリサちゃんも翔君も落ち着いて。」

どなっていると、すずかに止められた

フェ..「皆、紹介するね。私達の友達で幼馴染の・・・」

アリサ..「アリサ・バニングスよ。」

す..「月村すずかです。よろしくね。」

FW..「よろしく願いします。」

な..「それじゃあ、任務にはいろうか。」

す..「なのはちゃん、ちょっと翔君を借りてもいい？見せたいものがあるの。」

な..「でも、」

まい..「いいわよ。」

す..「ありがとう、まいちゃん。じゃあ、行こう翔君。」

翔..「ああ。」

（月村邸）

翔.. 「それで、俺に見せたいものってなんだ？」

す.. 「うん。これなんだ。」

俺はすずかの家に着くと、宝物庫見たいな所に連れてこられ、あの箱を見せてもらった

翔.. 「っ！！（この箱は！！）」

俺はその箱を見て驚いた

翔.. 「すずか、この箱はどこで手に入れた？」

す.. 「解らない、古くから家にあるもので、厳重に保管されてたから。これを見つけたのも、つい最近なんだ。見た瞬間、とんでもないものだってことは解ったんだけど。」

翔.. 「そうか。・・・すずかこの箱、俺が預かってもいいか？」

す.. 「うん。そのつもりだったよ。」

翔.. 「サンキュー。」

俺は箱を別荘に転移させた

翔.. 「別荘に戻ったら、最強の封印術をかけねえとな。」

そんなことを考えていると、

す..「えい。」

すずかが後ろから俺の口をハンカチで塞いだ

翔..「(何!?)」

そして、俺は意識を失った。そして、目が覚めると、ベッドの上に寝ていた

翔..「ここ、どこだ? 確か、俺はすずかに口を塞がれて・・・だめだ思い出せねえ。」

す..「あれ? もう起きちゃったの? もう少し、時間が掛かると思ってたのに。」

俺が記憶をたどっていると、すずかがきた。そして、俺を押し倒した

翔..「す、すずか!?! どうしたんだよ!?!」

す..「この状況なら、私が何をするか大体わかるでしょう?」

翔..「・・・・・・・・っ!! こういうのは、自分の好きな人とやるもんだろう。」

す..「私の好きな人は翔君だよ。だから、何の問題もない。」

そう言うと、すずかの唇が俺のに触れた

す.. 「……んう」

翔.. 「んう。すずか、お前／＼／」

す.. 「私は本気だよ／＼／」

R—18なので、その後は書きません、ってゆうか、昼間からやるか、普通!？

第48話 STS編「武レドラン襲来」

3人称 side

すずかとの行為も終わり、翔達はアリサの別荘に向かっていた

翔..「つたく、いきなり襲いやがって。」

す..「へへ、でも.....でしょう？」

翔..「それは、否定できない。・・・これがもしまい達にばれたら、死ぬかもしれない俺。」

別荘に着き、中に入ると、はやて達が食事の準備をしていた

は..「翔君にすずかちゃん、随分と遅かったやないか、って、何で翔君はそんなに疲れとるん？」

翔..「気にするな。」

翔はそう言い、ソファアに座った。この中でまいだけが何があったのかに気づきすずかに近づいた

まい..「それですずか。どうだった？」

す..「な、何が？」

まいの質問にすずかは少し戸惑った

まい…「とぼけても無駄よ。やったんでしょ、翔と。」

す…「っ!!／＼／＼」

すずかの顔が真っ赤になった

す…「ど、どうして解ったの!?!」

まい…「何となく。」

す…「あ、あの、その。」

まい…「大丈夫、別に怒ってないから。」

す…「え?なんで?」

まい…「私も翔とやったもん。」

す…「・・・何回だった?」

まい…「私は・・・回」

す…「ま、負けた。」

まい…「皆、翔の事が好きだからね。こうなることは予想できてたし。・・・結婚したいんでしょう?」

す…「う、うん。」

まいに言われずかは頷いた

まい…「だったら、ミッドで式を挙げないとね。」

す…「どうして、ミッドなの？」

すずかがまいに聞くと

まい…「ミッドは一夫多妻制度なの。」

す…「それ本当!？」

まい…「ええ。それでね、すずかにお願いがあるの。」

す…「お願い？」

まい…「つそ、実はね、ゴニョ、ゴニョ、ゴニョ。出来る？」

す…「うん。お姉ちゃんの手伝ってもらえば何とか。」

まい…「じゃあ、よろしくね。」

翔…「(ブル)な、なんだ!？今の悪寒は!？」

翔はまいとすずかが考えている計画に身震いをした

その後、夕食となり、そこは戦場が変わった。スバル、雷華、ヴィータ、シグナムの四人が肉の競り合いをしている中、何くわん顔をして、自分の肉を確保しているはやてと空。なのは達は違うテ―

ブルで普通に食事をしている。一方、翔は日本酒を飲みながら食事をしている。

食事の後は銭湯に行くことになり、入口でヴィータがスバルに子供だと言われ怒り、フェイトがエリオと一緒に入ろうと言いだした。等々のハプニングがあった。風呂を上がると、サーチャーに反応が入り、ロストロギアの回収に向かった。ロストロギアの事をFW達に任せ、翔達は後ろで見ていた。FW達はロストロギアを封印し海鳴市での任務は終わった

（アリサの別荘）

す..「なのはちゃん達もう行っちゃうの？」

な..「任務が終わったからね。」

アリサ..「もう少しゆっくりしていきなさいよ。」

フェ..「そう言われても。」

は..「私らには任務があるし。」

翔..「俺はすずか達に賛成だな。FW達は疲れて寝てるし。...それに、嫌な客がきたからな。」

そう言うと、翔は外に出た。そこには、大量のイービとチュパカブラの武レドランがいた

翔..「こんな夜中に何の用だ？」

翔が武レドランに聞いた

武…「貴様たちが持っている、エルレイの箱を渡してもらおうか。」

翔…「やなこった。あれを渡すわけないだろう？あれは、後で俺が責任を持って破壊する予定だから。」

武…「なら、力ずくで奪わせてもらう。行け！イービ共。」

武レドランの合図で、イービ達が襲い掛かってきた

翔…「まい、後方援護を頼む。なのはたちは此処で、すずか達を守ってる。行くぞ、ゼロ!!」

ゼロ…『S e t u p』

翔…「派手に行くぜ!!」

デバイスを起動し、バリアジャケットを展開すると、翔はイービ達に斬り掛かった

翔…「おらっ、おらっ、おらっ……!!」

翔は走りながら炎神剣を振るい、イービ達を斬り倒していく

まい…「はああああ!!」

まいは双銃で、遠くからイービを撃ち抜き、近づいてくる相手には、蹴りを喰らわせて倒していった

翔..「邪魔だ手前等!!」

翔はディーマグナム改に魔力刃を生成し、居合の構えを取った

翔..「時雨蒼燕流、特式12の型左太刀・霧雨!!」

銃剣を振るい、無数の刃を放ち、残りのイービ達を一掃した

翔..「残るはお前だけだ!!」

剣を武レドランに向け、翔はそう言った

武..「まさか、人間が此処までやるとは。」

武レドランは手についている、鉤ヅメを伸ばして、翔に攻撃してきた

翔..「っふ、はっ、よっと。」

翔は炎神剣と銃剣でそれを捌いて行く

まい..「そこ!!」

その隙にまいが魔力弾を武レドランに放った

武..「ぬうつ!!」

武レドランはそれを避けた

翔…「隙だらけだぜ、時雨蒼燕流攻式8の型・篠突く雨!!」

炎神剣に水に変換した魔力を纏わせ鋭い斬撃を喰らわせた

武…「ぐうあああ!!」

武レドランは体から液体のようなものを流しながら吹き飛んだ

翔…「これで、終わりだ。」

翔は剣に魔力を込めた

翔…「炎神剣・天地一閃!!」

そして、一瞬で武レドランに近づくと、Xを書く様に鋭い斬撃を繰り出し、武レドランを斬り裂いた

翔…「まい、後はよろしく。」

まい…「任せて、雷の暴風!!」

まいはランチャーモードのソフィアから、轟雷を纏った砲撃を放ち、武レドランを跡形もなく塵にした

まい…「チェックメイト!」

翔…「それ、俺の台詞。」

第49話 STS編「説明、一夜、そして再開」

翔 side

別荘に戻った俺とまいは、はやて達の質問攻めにあつた

は..「翔君。翔君はあの怪物のこと知っとるん？」

翔..「ああ。」

な..「なら、教えて欲しいの。」

翔..「知ってどうするんだ？ あれは、お前らの適う相手じゃない。

」

俺がそういうと、シグナムとヴィータがにらんできた

シ..「その言い様だと、私達が負けるみたいだな。」

翔..「その通りだ」

ヴィ..「んだとー！」

は..「ヴィータ、少し黙つとき。」

はやてに言われ、ヴィータは静かにした

翔…「あいつはある奴のクローンだが、強さはSS＋並だ。お前らじゃまず相手にならないな。」

まい…「それに、経験の甘い貴方達じゃ、直にやられるのが落ちよ。」

アリシア…「私達はそれなりに任務をこなしてきたよ。」

翔…「その、任務で死にそうになったことはあるか？」

フェ…「え？」

翔…「アイツ等の技に非殺傷なんてものはない。一発でもあたれば、即死。ファイヤースクワットがやっている任務は、犯罪者全員が殺傷設定のデバイスや質量兵器を使ってきた。お前達とは潜ってきた死線とは別次元なんだよ。」

「……………」

俺の言葉を聞き、なのは、フェイト、アリシア、はやて、ヴィータ、シグナムは何も言えなかった

翔…「この中で、アイツ等に対抗できる奴は俺達を抜いて、ティアナぐらいだな。」

シ…「どうして、ランスターは対抗できると思うんだ？」

シグナムが聞いてきた

翔…「アイツを鍛えたのは俺達だぞ？死にそうになったことだつてあるし、アイツは恐怖を乗り越える勇気がある。それは、どんな力にも勝る力なんだよ。」

な…「恐怖を乗り越える勇気。」

翔…「つと言っても、完全に倒せるわけでもない。せいぜい、少し時間を稼げる程度だけだな。」

は…「1つ聞いてええ？あいつは何を狙ってここに来たんや？」

翔「アイツが狙ってきたのはエルレイの匣。すずかの家にあった物だ。」

す…「あの匣!？」

すずかが驚いていた

翔…「あの匣はどんな物でも吸収し封印する事や、エネルギーや物質を吸収し変換した上で再度放出することが出来る。そこら偏にあるロストログアよりも厄介な代物さ。」

フェ…「そんな。」

は…「そんなものが渡れば、……」

まい…「そう、世界は混乱するし、下手をすれば、次元世界全てを飲み込む事も可能よ。」

す…「何で、そんなものが家に。」

翔..「まあ、アレは俺が責任を持って破壊するから安心しな。」

な..「え？管理局で、保管するんじゃないの？」

翔..「悪いが、俺達ファイヤースクワットは管理局の上層部を信用していないんだ。だから、エルレイの匣は渡さない。」

まい..「どんな所にも、光と闇があるのよ。」

翔..「つと、言うわけで話はこれでお仕舞い。」

俺は席を立ち部屋に向かおうとしたが、ある事を思いつき、はやてに話しかけた

翔..「はやて、明日、俺とスバルは帰るの少し遅くなるからな。」

は..「ええけど、何でスバルも？」

翔..「アイツに会わせたい人がいるんだよ。じゃあ、お休み。」

俺はそう言い、部屋に向かった

部屋に戻ると、リオが気持ち良さそうに寝ていた。俺はパジャマに着替え、電気を消そうとした時、誰かがノックをした

翔..「誰だ？」

フェ..「翔、私だけど、入っていい？」

翔..「ああ。」

俺が返事に答えると、フェイトがドアを開けて入ってきた

翔..「どうしたんだ？」

フェ..「ちょっと、翔と話がしたくて。」

翔..「立ち話もなんだ、座れよ。」

俺はソファーに移動し座ると、フェイトも座った

翔..「つで、話ってなんだ？」

フェ..「・・・翔。」

翔..「うん？」

フェ..「そ、その、私をだ、抱いてください。」

翔..「は？」

俺の思考が止まった

翔..「その抱くはどっちの抱くだ？抱きしめるのほうか？それとも、あっちの抱くか？」

フェ..「あっちの抱く／／／」

翔..「…………理由を聞こうか？」

フェ..「翔のことが好きだからじゃ、だめかな。」

翔..「…………本当に俺でいいのか？俺よりいい奴はそこらじゅうにいるんだぞ？」

フェ..「私は翔がいいの。翔以外の人になんて興味がない。」

俺はフェイトの目を見た。その目は嘘偽りのないまっすぐな瞳だった

翔..「解った。だけど、リオがいるしな。」

フェ..「リオの寝ている所と、この部屋に防音の結界を張るから大丈夫だよ。」

翔..「…………用意周到だな」

俺は立ち上がり、フェイトを抱えると、ベッドまで運び、寝させると、覆いかぶった

翔..「最後に確認する、本当に俺でいいんだな？」

フェ..「…………うん。」

フェイトの返事を聞くと、俺はフェイトと唇を重ねた

（此処からはR—18なので読者の想像にお任せします）
y・作者 b

（翌日）

フェ..「~~~~♪」

フェイトの顔はかなり艶々しており、俺は腰が痛かった

は..「翔君どうしたん？」

翔..「朝起きたときにベッドから落ちてな、その時に腰を打ったんだ。」

な..「大丈夫？」

翔..「ああ。さて、スバル。」

俺は朝食を食べているスバルを呼んだ

ス..「翔さん、なんですか？」

翔..「ついて来い、お前に会わせたい人がいる。」

ス..「私にですか？」

翔..「ああ。きっと驚くぞ。」

ス..「?？」

なのは達と別れ、俺はスバルを連れて、ある家に向かった

翔..「此処だ。」

ス..「私の知り合いで、地球に住んでる人はいなんだけどなく。」

俺はベルを鳴らした、暫くすると

「はーい、今行きます。」

女性の声が聞こえた

ス..「この声は!？」

スバルは声の主に気がつき驚いていた

そして

「どちらさまですかー。って、翔君じゃない久しぶりね。」

翔..「ええ、お久しぶりですね、クイントさん。」

ク..「そっちの子は、っ!!まさか、」

クイントさんも驚いていた

ス..「お、お母さん。」

ク..「ス、スバル。」

地球でクイントさんは、二度と会えないと思っていた娘に再会した

第50話 STS編「決意」

スバル side

私は翔さんに連れられ、ある所に向かっていた。翔さんが言うには、私に会わせたい人がいるらしいけど、誰だろう？そうこう考えていると、ある一軒家に着き、翔さんがベルを鳴らした。すると

「はーい、今行きます。」

ドアの奥から、聞き覚えのある声が聞こえた

ス…「この声は!？」

すると、ドアが開き、髪の毛の長い女性、クイント・ナカジマ、私のお母さんが出てきた

お母さん？は翔さんと話、そして、私に気がついた

ク…「ス、スバル？」

ス…「お、お母さん？」

私は信じられなかった、だって死んだと思っていたお母さんが目の前にいるんだもん

ス…「お母さーん。」

私はお母さんに抱きつき、涙を流した。お母さんのほうを見ると、私とおなじで涙を流していた。私達はしばらくの間、涙を流していたその後、私はお母さんといっぱい話をした。お母さんが居なくなつてからのこと、そして、今、起動六課で働いていること

翔..「スバル、そろそろ行くぞ。」

ス..「翔さん、もう少しだけお母さんと居させてください。」

翔..「俺もそうさせてやりたいんだが、無理だ。」

ス..「うゝゝ。」

ク..「スバル、そんな顔しないの。会いたくなったらまたいらっしやい、私はここで待ってるわ。」

ス..「お母さん。・・・うん。」

私は笑顔でお母さんに返事をした

ク..「翔君、今日はありがとう。もう一生スバル達に会えないと思っていたから。」

翔..「構いませんよ。それと、スバル。今日、此処でクイントさんに会った事は誰にも言うなよ。勿論、ゲンヤさんやギンガにもだ。」

ス..「何ですか!？」

翔..「クイントさん達は管理局では既に死んでいる事になってるんだ。もし、これが上層部にばれたら、クイントさん達は再び命を狙われる事になる。それを防ぐためだ。」

ス..「.....解りました。」

私はうなずいて答えた

ク..「それより、翔君。決めてくれたかしら？スバルとギンガ、どっちと結婚してくれるかを。」

ス..「えええ~~~~！？」

お母さんの発言に私は驚いた。け、結婚！？私と翔さんが！？

翔..「クイントさん、前にも言ったはずですよ。今、結婚をする予定は無いって。」

ク..「でも、いつかは結婚するんでしょ？」

翔..「そりゃあ、まあ。」

ク..「だったらいいじゃない。私が言うのもなんだけど、この子もギンガもいい女よ。」

翔..「まあ、考えておきますよ。」

そういうと、翔さんはリビングを出て行った

ク..「.....スバル。」

ス..「何、お母さん？」

ク..「あなた、翔君に惚れてるでしょう？」

ス..「っ!..!..!..!..うん。」

ク..「だったら、もっと積極的にアピールしないと。」

ス..「で、でも、翔さんの周りには私より、きれいな人がいっぱいいるし。それに、..私、普通の人とは違うから。」

私は自分の出世のことで悩んだ

ク..「翔君はあなたとギンガの体のこと知ってるわよ。」

ス..「っ!？」

ク..「私が話したの、貴方達のこと。その時、翔君は何って言ったと思う？彼はこう言ったわ、『生まれ方なんて関係ない、大事なのは心だと、俺は思います。』だって。」

ス..「生まれかたなんて関係ないっか。」

ク..「それにね、スバル。あなたはわかってないかも知れないけど、貴方って、すごくいいプロポジションをしてるのよ。」

ス..「そ、そうかな／＼／＼」

ク..「そうよ。これはね翔君の口癖なんだけど、欲しいものは全

てこの手で掴み取る。待ってるだけじゃ欲しいものは掴めないわ。だから、頑張りなさい。」

ス..「う、うん／＼／」

その後、私はお母さんと解れた

ス..「翔さん。」

翔..「うん？」

帰り道の途中、私は翔さんに話しかけた

ス..「今日はお母さんに会わせてくれてありがとうございます。」

翔..「何、いいってことよ。」

ス..「それと、これから、翔にいつて呼んでもいいですか？」

翔..「構わねえぞ。」

ス..「やったー。」

私は喜び、翔さんの腕に抱きついた

翔..「抱きつくな。」

ス..「その、だめですか？」

私はお母さんに習った涙目＋上目ずかいのコンボを決めた

翔..「っう、好きにしろ。」

翔さんはそれを見て戸惑っていた

ス..「（周りは強敵だらけだけど、絶対に振り向かせてみせる!）」

「

私はそう心に誓い、翔さんと並んで帰った

第51話 STS編「襲撃」

翔 side

クイントさんと別れた俺とスバルは、転送ポートがあるすずかの家に向かっていた

翔..「取り合えず、クイントさんのことはゲンヤさん達には黙って置けよ。機を見て俺から話す。」

ス..「はい。」

翔..「随分とご機嫌だな。」

ス..「えへへへ♪」

スバルは俺の腕に抱きつきながら嬉しそうに笑っている

すずかの家に着くと、ノエルさんが俺達を出迎えてくれた

ノ..「お久しぶりです、椎名様。」

翔..「そうですね。それより、ノエルさん、様付けは辞めてくれ、背中が痒くなって仕方が無い。」

ノ..「解りました。では翔さん、こちらに、お嬢様とアリサ様が

お待ちです。」

翔..「アリサもいるのか？」

俺達は家の奥にある、転送ポートの場所に移動した。部屋に入ると、すずかとアリサが居た

翔..「よう、さっき振りだな。」

す..「そうだね。」

アリサ..「アンタももう少しゆっくりしていけば良いのに。」

翔..「そうしたいのは山々なんだけどな。」

俺は苦笑いで答えた

俺は機械をいじる、転移座標を六課にセットした

翔..「そんじゃあ、俺も帰るぜ。またな。」

俺とスバルがポートに入り、転移しようとした時

す..「待って！」

すずかがストップをかけた

翔..「どうしたんだ、すずか？」

俺はポートからおり、すずかに近づいた

す..「翔君、私も、私も連れて行って!!」

アリサ..「すずか!?!」

翔..「.....だめだ。力を持たない奴を連れてはいけない。」

す..「もしかしたら、私にもリンカーコアがあるかも知れないんだよ。」

翔..「.....」

アリサ..「だったら、私も行くわ。すずか1人を行かせるわけには行かないもの。」

アリサもそう言いだした

翔..「.....解った。だけど、俺達の言う事は必ず聞くことが条件だ。」

す..「うん。」

アリサ..「そのくらいなら問題ないわ。」

すずかとアリサの準備が整うと、俺達は起動六課に転移した

2人の体を調べた所、リンカーコアは無く、魔法は使えないとの事だ。このことを知った二人は落ち込んでいたが、自分達が出来る範囲の事で俺達を支えてくれていた

（別荘）

翔..「.....出来た。」

俺の目の前には太陽と月の形をしたネックレスがある

翔..「後は2人次第だな。」

俺は二つのネックレスを持ち、別荘を出た

翔..「アリサ、すずか。」

俺は食堂で働いている二人を呼んだ

す..「何、翔君？」

アリサ..「この忙しい時に何よ？」

翔..「何？これをお前らに渡そうと思ってな。」

俺はアリサに太陽のネックレスを、すずかに月に形をしたネックレスを渡した

す..「これは？」

翔..「お守りだ。・・・後、明日の朝7時に訓練場に来い。」

アリサ..「どうしてよ？」

翔..「理由はいえない。とにかく、訓練場に来る事いいな？」

そう言い、俺は食堂を後にした

翔 s i d e e n d

3人称 s i d e

翌日の朝、アリサとすずかは、翔に言われたとおり訓練場に来た

す..「一体何なんだろうね？」

アリサ..「さあ？」

2人が訓練場に着くと、そこには誰も居なかった

す..「誰も居ないね。」

アリサ..「そうね。」

2人がそう言うと、何かが通り過ぎ2人は吹き飛ばされた

す・アリサ..「きゃあああ。」

2人は吹き飛ばされたが、何とか立ち上がり、前を見ると

「・・・・・・・・」

黒いマントを羽織り、仮面を着けた何者かがいた

第52話 STS編「勇気を魔法に」

3人称 side

シャーリー…「訓練場にて、SS+の魔力を感知しました。」

は..「まさか、直接ここに乗り込んでくるなんてな。」

はやては指令室で冷静に装っていたが、内心は慌てていた。六課の隊長陣達はリミッターをつけており、どこまで戦えるか解らない

は..「グリフィス君、翔君達に連絡はしたんか？」

グ..「それが、繋がらないんです。」

は..「こんな時に、何をしとるんや。」

はやてが怒っていると

シャーリー..「はやて部隊長、訓練場に生命反応が二つ、これはアリサさんとすずかさんです。」

は..「何やて!?!」

はやては机を叩いて立ち上がった

は..「つく、こうなったら私も出る、グリフィス君、指揮は任せ
たで。」

グ..「はい。」

はやては指令室から出て、急いで訓練場に向かった

〈訓練場〉

「.....」

仮面をつけた戦士はすずかとアリサを見ていた。そして、ゆつくと二人に近づいた

す..「.....（恐怖で体が動かない）」

アリサ..「（逃げなきゃいけないのに、体が動いてくれない。）」

戦士が二人の近くで止まり、二人に触ろうとしたとき

な..「アクセルシューター!!」

桜色の魔力弾が戦士に当たった。そして、二つの金色の閃光がアリサとすずかに近づき、二人を抱えると、戦士と距離を取った

フェ..「アリサ、すずが大丈夫？」

アリシア…「怪我してないよね？」

そこには、六課の隊長陣がそろっていた

す…「なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、はやてちゃん。」

アリサ…「来るのが遅いのよ。こ、怖かったんだから。」

は…「ごめんな、此处に張られた結界を突破するのに時間が掛かってもうたんよ。」

アリシア…「私達がきたから、もう安心だよ。」

「……ようやく来たか。待ちくたびれたぞ。」

戦士を包んでいたマントが無くなり、紫の鎧を纏った仮面の戦士が煙の中を歩いてきた

な…「貴方は何者ですか？」

「闇に生まれ、闇にきす、魔道騎士ウルザード。」

シ…「ここに来た目的はなんだ!!」

ウ…「知れたこと、貴様の命を貰いに来た。」

ウルザードはジャガンシールドからウルサーベルを抜き、切っ先をなのは達に向けた

「・・・・・・・・」

訓練場に風が流れた、そして風が止むと

フェ・アリシア・シ..「はあああああ」

フェイト、アリシア、シグナムがウルザードに飛びかかった

ウ..「ふんっ!!」

ウルザードは剣を振り降ろして出来た衝撃波を3人にぶつけた

フェ..「っう。」

アリシア..「くう！」

シ..「ぬう。」

3人はその衝撃波で前に進むことが出来なかった

ウ..「はあっ!!」

3人が止まっている隙にウルザードは3人に近づき、ウルサーベルで攻撃した

3人はその攻撃をギリギリで避けたが、バリアジャケットが切り裂かれてしまった

フェ..「まさか、殺傷設定!？」

ウ..「俺の武装に非殺傷という、甘いものはない。」

ヴィ..「だったらこれでどうだ!!」

ヴィータは巨大な鉄球を生成し、ウルザードに撃ちつけた

ウ..「はあっ!!」

しかし、その鉄球はたった一撃で斬り裂かれてしまった

ヴィ..「まじかよ。」

な..「ヴィータちゃん下がって。デイバイーン・バスター!!」

ヴィータを下がらせると、なのはは桜色の砲撃を放った

ウルザードはジャガンシールドを前に出し、その砲撃を防いだ

は..「続けて行くで! ツヴァイ!!」

ツ..『はいです。』

は..「クラウ・ソラウス!!」

白銀の砲撃が続けて撃ちだされた。その砲撃が当たり、爆煙が舞った

な..「これで・・・」

ウ…「これが、貴様たちの全力か？」

爆煙が晴れると、無傷のウルザードと無傷のジャガンシールドがあった

フェ…「そ、そんな。」

ウ…「次はこちらの番だ。」

ジャガンシールドの中心が開いた

ウ…「ドーザ・ウル・ザザード！！」

ジャガンシールドの瞳からケルベロスを象った魔力弾が放たれた

「きゃあああああ」

なのは達はバリアを展開したが、簡単に破られてしまった

ヴィ…「コノヤロー！！」

シ…「はああああっ！！」

唯一、魔力弾を防ぎ切ったヴィータとシグナムがウルザードに剣と槌を振り降ろしたが

剣と盾で防がれてしまった

ウ…「遊びは此処までだ。」

二人を弾き飛ばし、ウルザードは剣を掲げた

ウ…「ウル・ウガロ！暗黒魔道斬り！！」

剣に闇の力を纏わせ、二人をX字の斬撃を繰り返した

「あああああ」

二人はX字に斬られ、吹き飛ばされた

す…「そ、そんな。」

アリサ…「なのは達が負けるなんて。」

すずかとアリサはなのは達が負けたことに驚いていた

ウ…「魔法を使うのは俺だけでいい。まずはお前から血まつりだ。」

「

ウルザードは倒れているなのはに近づき、剣を掲げた。そして、剣を振り降ろそうとしたとき

す…「やめてー！！」

すずかの投げた石に当たった

すずかとアリサはなのはの前に立った

な…「すずかちゃん、アリサちゃん。」

す..「なのはちゃん達から離れて。」

まい..「大事な人を守りたい、いちずな気持ちで恐れを超える、それが勇気。まさに、アニメ通りね」

遠くでその状況を見ていたまいが呟いた

まい..「後は、あの子たちがどうこたえるか。」

ウ..「愚か者が、刃向うものに容赦はせん!!」

ウルザードが二人に剣を振るった

その時

『起動に必要な物を感知。システムを起動します。』

二人がつけていたネックレスが輝き、ウルザードを吹き飛ばした

ウ..「ぬおっ!?!」

す..「これは!?!」

アリサ..「な、何なの!?!」

二人はネックレスを取り出した

『名前を付けてください。』

す..「名前?」

『早く!!』

二人は少し黙っていたが

す…「貴方の名前は、ルナジェル!!」

アリサ…「アンタの名前はサンジェル!!」

ルナ…『名前を設定。』

サン…『起動します。』

二人が光に包まれた。そして、光が収まると、バリアジャケット纏い、武器を持った、すずかとアリサがいた

す…「これは。」

ルナ…『貴方のイメージに合わせて作りしました。』

すずかは紫色のチャイナドレスを纏い、左手に弓（形はリボーン
のGのアーチェリー形態変化版）を持っていた

アリサ…「凄い、力がどんどんあふれてくる。」

アリサはシグナムと同じ騎士甲冑を纏い、（色は上着がオレンジ
で服は赤）両刃の大剣を握っていた（形はジオグレイソード）

ウ…「っふ、面白い!!」

ウルザードは盾を前に出した

ウ…「ドーザ・ウル・ザザード!!」

ウルザードは二人に魔力弾を放った

す・アリサ…「っ!!」

二人は横に跳び、魔力弾をかわした

す…「ルナティックアロー!!」

すずかは三日月の形をした魔力矢を撃ちだした

ウ…「ふん。」

ウルザードはそれを盾で防いだ

アリサ…「はああああ!!」

横から、アリサが大剣を振ってきた

ウ…「っふ。」

ウルザードはそれを避けた。っが

アリサ…「まだまだー。」

アリサはその場で左に回転し、もう片方の剣で攻撃してきた

ウ…「ぬお。」

ウルザードはそれを喰らい吹き飛んだ

ウ…「中々やる。」

ウルザードは直ぐに立ち上がり、呪文を唱えようとしたとき

す…「スパイラルアロー!!!」

すずかが螺旋状に回転した矢を放ってきた

ウ…「小癪な!!!」

ウルザードはウルサーベルで矢を叩き落とした

アリサ…「これで、終わりよ。」

ウルザードはすずかに気を取られえ、アリサの接近を許してしま
った

ウ…「しまっ…」

アリサ…「バニッシングブレイザー!!!」

中央にある紋章から炎の砲撃を放ち、ウルザードを包み込んだ

ウ…「おおおおおっ!!!」

ウルザードは砲撃を喰らい、吹き飛んだ

す..「はあ、はあ、・・・」

アリサ..「ふう、ふう・・・」

な..「す、すごい。」

フェ..「私達が手も足も出なかった、あの侵入者を」

は..「たった、二人で倒してもおた。」

なのはたちが驚いていると、ウルザードが煙の中から出てきた

アリシア..「そんな、」

は..「あれを喰らって、まだ動けるんか!？」

なのはたちが立ち上がろうとしたとき

ウ..「・・・っふ、合格だ。」

ウルザードから聞きなれた声が聞こえた

す..「っえ？」

アリサ..「この声って。」

すると、ウルザードの鎧が消え、翔が立っていた

まい..「結構なダメージを喰らったわね、翔」

空からまい、星華、雷華、空が降りてきた

翔..「起動の成功で、気が緩んじまったんだよ。」

星華..「翔、らしくもないですね。」

空..「そう言うな、もし我が翔と同じ立場だったら、そうやっていたであろうからな。」

雷華..「すずかとアリサ強いね。今度、僕と模擬戦しようよ。」

な..「え? 一体どういうこと?」

なのは達は状況を理解できず、ただボーっと立っていた

第53話 STS編

翔 side

六課襲撃の数時間後、俺ははやて達に質問をされていた

は..「答えてもらおうか、翔君。何で、あんなことをしたんや？」

現在、食堂には、俺、まい、星華、雷華、空、隊長陣、FW陣、アリサ、すずかがいる

翔..「本当の恐怖と本当の勇気を知るためだ。」

な..「恐怖と勇気？」

俺の言葉に全員が首を傾げた

翔..「これから、俺達が戦うであろう相手は、俺達より強い。」

まい..「そして、何より私達を本気で殺そうとして来る。」

翔..「だから、知っておいた方が良かったと思ってな。死の恐怖って奴を。」

フェ..「それに、すずかとアリサに何の関係があるの？」

フェイトが鋭い目で俺を睨んできた

翔..「二人にも知って欲しかったんだよ、俺達のいる世界が危険だってことをな。」

フェ..「でも、あそこまでする必要はなかったはずだよ!!」

翔..「甘ったれるな!!」

「っ!!」

俺が放った殺気で全員が黙った

翔..「相手はそんなことを考えていない。自分たちの目的の為に関係のない人間まで殺す。そう言う相手なんだよ。」

「.....」

は..「せやね、私達は少し甘かったんかもしれんな。」

な..「はやてちゃん!？」

は..「翔君が言っていたこともまた事実や。この間のエルレイの匣を狙って来た武レドランは私達もねらったやつやろ？」

アリシア..「うん。」

は..「今回の件でそれが十分に解った。私はそれで充分や。」

翔..「すまないな、はやて。」

は..「ええんよ。それより、聞いてええか？すずかちゃん達のデバイスは何で動いとるん？二人にはリンカーコアが無いはずなんやけど。」

翔..「確かに二人にはリンカーコアは無い。だけど、それ以上のものがある。」

な..「それ以上の物？」

翔..「そう、全ての人間が持っている、無限の力、勇気だ。」

フェ..「勇気？」

翔..「すずかとアリスのデバイスにはその勇気を魔法に変えるシステムを搭載している。使用者の勇気が強ければ強いほど、魔法も強くなる。」

す..「へー。」

アリス..「あんた、とんでもないもの作ったわね。」

すずかとアリスが驚いていた

な..「だったら、普通にすずかちゃんやアリスちゃんに言って鍛えればよかったのに。」

なのはが正論を言ってきた

翔…「知っている奴を鍛えようとすれば、情が入って本気で鍛えられないんだよ。だから、姿を変えてすずかとアリサを試したんだよ。本当の勇気を得られかをな。」

す…「本当の勇気？」

翔…「二人は俺に恐怖を持っていた、だけど、なのはに止めを刺そうとしたとき、二人は何を思った？」

アリサ…「え〜と、なのはたちを守りたいって思ったわ。」

翔…「その真っ直ぐな気持ちが恐怖を克服した。それが、二人の勇気だ。」

す…「私達の力。」

翔…「正確には、人間全員が持っているがな。まあ、戦いの基礎はなのはに教えてもらえ。」

す・アリサ…「うん／解ったわ」

午後の訓練ですずかとアリサはなのはに基礎を教えてもらい、軽い模擬戦をしていた

くそして夜く

翔…「疲れた。」

ゼロ…『寝ないでデバイスを作っていたからな、当然だろうな。』

翔…「とにかく、システムが起動して良かったよ。」

ゼロ…『もし、起動していなかったら、どうするつもりだったんだ？』

翔…「寸止めしてたさ。」

俺はベッドに寝ころがり、寝ようとした時、

す…「翔君、入るね。」

すずかとアリサが部屋に入ってきた

翔…「何だ、こんな時間に。俺は疲れているんだよ。」

アリサ…「すずかに聞いたんだけど、あんた、すずかとやったんだって？」

翔…「つぶ。」

俺は拭いてしまった

す…「ごめんね、言っちゃった。」

すずかが誤ってきた

翔…「まあ、やったが。それがどうかしたのか？」

アリサ..「そ、その、私もしてもらいたいな／＼／」

アリサが顔を紅くしていった

翔..「何!？」

す..「勿論、私も抱いてもらうよ♪」

すずかが笑顔で言った

翔..「俺に拒否権は？」

す・アリサ..「無いよ／わよ」

翌日、俺は腰を痛めて、一日中ベッドで過ごした

第54話 STS編 ホテル・アグスタ1 碎ける盾

ジェイル side

どこかの研究所の研究室で一人の男がある映像を見ていた

ジェイル…「やっぱり変だな。ガジェットを起動させた覚えは無いし、それにこの怪物は一体？」

彼はジェイル・スカリエッティ、管理局には時空犯罪者として知られているが彼は何もやってはいない。上層部が起こした罪を彼に擦り付けられたのだ。ジェイルはリニアトレイン事件の映像を見ていた。すると、ディスプレイが開き、女性が話しかけてきた

「ドクター、この間のリニアトレインの事件の時に出てきた怪物が違う世界で確認されたとの報告が届きました。リニアと同様、機動六課に出向中のファイヤースクワットの一人が倒したと思われる」

ジェイル…「ありがとう、ウーノ。すまないね、こんな事を娘の君に頼ませてしまって」

ウーノ…「気にしないで下さい。親を手伝うのは娘として当然です。きっと、他の皆もそう思っていますよ。」

ジェイル…「……そうか。それと、例の物は見つかったのか

い？」

ウーノ…「はい、明日行われるオークションで出品されるとのことです」

ジェイル…「そうか……」

それを聞いたジェイルは、手を顎に置き、考え出した

ジェイル…「……よし、明日のオークションに私も行こう」

ウーノ…「そ、それは危険すぎます。貴方は指名手配犯なんですよ！」

ジェイル…「大丈夫、うまく変装していくつもりだから。それに護衛としてトーレに着いてきてもらおうつもりだから」

ウーノ…「ですが」

ジェイル…「それに、もしかしたら彼に会えるかもしれないからね」

ウーノ…「彼？」

ジェイル…「そう、その怪物を倒したファイヤースクワットの隊員に。見た所、彼は見かけで人を判断する人とは思えないから、君たちの事も頼めるかもしれない」

ウーノ…「………解りました。ですが、どうかお氣をつけて」

ジェイル s i d e e n d

3人称 s i d e

アリサとすずかの騒動？の数日後、翔達はへりに乗ってある場所に向かっている

はやて..「今日の任務はホテルアグスタで行われるオークションの警備。現地にはシグナム、ヴィータ副隊長の二人が既に警備に入ってる。それと、もしこの間の未確認の怪物が出てきたら、直ぐに隊長陣に知らせること、ええな。」

FW..「はい!!..」

はやて..「それと、アリサちゃんとすずかちゃんにも警備に着いて貰うで」

すずか..「うん、いいよ」

アリサ..「しょうがないわね」

アリサとすずかははやての頼みに返事をした

キヤロ…「シャル先生、その箱は何ですか？」

キヤロはシャルに質問をした

シャル…「これ？これは、隊長達と翔君の仕事着よ」

翔…「待て、そんなの俺聞いてないぞ！？」

翔はシャルの方を向いて言った

はやて…「翔君には私らをエスコートしてもらいたいんよ」

翔…「……………解ったよ。でも、今度は先に言えよ」

翔は洩々エスコートを了承した。因みに、まい達は緊急時にそなえ、六課で待機している

翔…「はあ、こういう服はあまり好きじゃないんだがな」

翔はヘリを降りて、シャルから渡された服に着替え、ヘリの前でなのは達を待っていた

ヴァイス…「でも、似合ってますよ、旦那」

翔..「その名で呼ぶな。それで、あれからどうなんだ？」

ヴァイス..「.....今のところは順調です。旦那の治療のおかげですよ」

翔..「.....そうか」

ヴァイス..「あの時は本当にありがとうございます」

翔..「気にするな。こっちもギリギリだったからな」

翔とヴァイスが昔話をしていると

なのは..「翔君、お待たせ」

着替えを終えた、なのは、フェイト、はやてがヘリから降りてきた

翔..「3人共、似合ってるぞ」

翔は3人の服を見、褒めた

なのは..「えへへ♪」

フェ..「ふふふ♪」

は..「あはは♪」

4人は受付で、証明書を見せ、中に入ると二手に分かれ警備に入
った

その頃、警備中のティアナはスバルと念話で話していた

スバル…「(でも今日は・・・、八神部隊長の守護騎士全員集合かあ・・・)」

ティアナ…「(そうねえ・・・。てかあんた、結構詳しいわよね。八神部隊長とか、副隊長達のこと)」

スバル…「(うん・・・。父さんやギン姉から聞いたんだけど、八神部隊長の使ってるデバイスが魔導書型で、夜天の書っていうこと。副隊長達とシャマル先生、ザフィーラが八神部隊長の所有する特別戦力だったこと。で、それにリイン曹長を合わせて6人で無敵の戦力ってこと。まあ、八神部隊長達の詳しい出自とか、能力の詳細は特秘事項だから、私も詳しくは知らないけど・・・)」

ティアナ…「(まあ、能力の事なら兄さんも同じことだけどね)」

スバル…「(ティアは翔にいの能力の詳細知らないの?)」

スバルがティアナに質問した

ティアナ…「(少しは知ってるわ。でも、兄さんはあまりそう言うことは話さないから)」

スバル…「(ふっふん。・・・いつか私達も翔にみたいになれるかな?)」

ティアナ…「(解らないわよそんなの。でも、頑張ればなれるん

じゃないかしら」

その時、シャルからガジェットが現われたとの連絡が入り、ティアナとスバルは急いで合流した

とある森

ジェイル…「ふむ、やはりあれは私が開発したガジェットではないな。いやー、態々研究所から出てきたかいが会ったよ」

トーレ…「何のんきなことを言ってるんですか、ドクター」

ジェイルの隣にいたトーレは呆れていた

トーレ…「それで、どうするんですか？」

ジェイル…「一応、現状待機と行こう」

トーレ…「解りました」

場所は戻り、ホテル・アグスタ

スバル…「おおおおおっ!!」

スバル達はホテルに近づいてきたガジェットの掃討をしていた

エリオ…「はあああああっ!!」

ティアナ…「クロスファイヤー・・・シュートっ!!」

キャロ…「フリード、ブラストレイっ!!」

スバル達の攻撃でホテル周辺のガジェットは全て壊された

スバル…「やったね、ティア」

ティアナ…「最後まで油断しないの」

その時

「やはり、ガジェットでは相手にはならないか」

遠くから誰かが歩いてきた

ティアナ…「貴方は!？」

ティアナは驚いていた、そこにはリニアトレインの時、自分たちに襲い掛かってきた怪物に瓜二つだったからである

スバル…「何で!？あの時、翔にいが倒したはずなのに」

ティアナ…「違うわ、姿は似てるけど、どこかが違う」

「っふ、私の名は血祭りの武レドラン」

エリオ…「血祭りの武レドラン」

キャロ…「名前からして怖いです」

武レドラン…「さて、私はその会場に用がある、道を開けてくれるのなら、今日の所は見逃してやろう」

ティアナ…「ふざけないで!!」

ティアナは銃を武レドランに向けた。そして、引き金を引き魔力弾を放った

武レドラン…「ふんっ!!」

武レドランは持っていた大刀でその魔力弾を両断し、振り降ろして出来た衝撃波でティアナ達を吹き飛ばした

武レドラン…「自ら命を捨てるとは、つくづく人間は解らん」

武レドランは大刀を上に掲げ

武レドラン…「ふんっ!!」

振り降ろすと、斬撃をティアナ達に飛ばした

しかし、ティアナ達の前に誰かが現れ、その斬撃を代わりに受けた

ティアナ…「兄さん!!」

ティアナ達の前にいたのはバリアジャケットを纏った翔であった
しかし、ティアナの言葉に翔は何も言わなかった

ティアナ…「・・・兄さん？」

不思議に思ったティアナが再び翔に話しかけたとき、翔のアクセ
ルテクターが碎け、翔は膝をついた

ティアナ…「兄さん!!」

スバル…「翔にい!!」

エリオ・キャロ…「翔さん!!」

翔の纏っていた最強の盾が壊れた瞬間であった

第54話 STS編 ホテル・アグスタ1 碎ける盾（後書き）

紅.. 「54話でした」

翔.. 「ずいぶん時間が掛かったな」

紅.. 「話の組み立て方に納得がいかなくてな、何度も書き直したんだよ」

翔.. 「っで、納得のいく文になったのか？」

紅.. 「・・・・・・多分」

翔.. 「多分かよ!?!」

第55話 STS編「ホテルアグスタ2」

3人称 side

ティアナ…「兄さん!!」

ティアナ達は倒れた翔の所に駆け寄った

エリオ…「翔さん、大丈夫ですか!」

キャロ…「待っててください、今、治療を」

翔…「大丈夫だ」

しかし、翔は何とか立ち上がった

武レドラン…「ほう、私の一太刀をまともに受けたのに立ち上がるとは」

翔…「アクセルテクターのおかげさ。テクターが斬撃のダメージを軽減してくれたんだ」

武レドラン…「……だが、二度目は無いぞ」

血祭りの武レドランは剣を前に突きだした

翔…「…………ゼロ、モードファイター。それと、俺のジャケットを展開してくれ」

ゼロ…『…………了解』

翔は左胸、そして背中に龍のマークが入った紅い半そでのジャケットを展開し、手甲型になったゼロを両手、両足に装着した（手甲の形は無限のフロンティのアレディが装着しているもの）

武レドラン…「剣に拳で挑むつもりか」

翔…「ああ。お前の弱点はさっきの一撃で解ったからな」

翔は左手を前に出し、右手を腰に位置に落とした

武レドラン…「…………ならば、それを証明してみせろ!!」

血祭りの武レドランは剣を振り被り、降ろそうとしたが、途中で何かに阻まれた

武レドラン…「っ!?!何だと!?!」

血祭りの武レドランの剣は、翔の左手甲に止められていた

翔…「お前の最大の武器はその剣を振り抜く速さ、恐らく抜刀での勝負なら俺より上だろうな。なら、どうするか? 答えは簡単だ、剣を振り抜かせなければいい。此処からは、俺のターンだ!!」

翔は右手に炎熱に変換した魔力を纏わせ

翔..「炎龍波!!」

血祭りの武レドランを殴り、吹き飛ばした

武レドラン..「があっ!」

翔..「まだだぜ」

翔は雷速瞬動で後ろに回り込み

翔..「雷装」

体に電気を纏わせ

翔..「瞬雷撃!!」

後ろからひじ打ちを繰り出した

武レドラン..「ぐうおっ!!」

血祭りの武レドランは吹っ飛び、地面に膝をついた

翔..「さて、そろそろ本気で行くか!!」

ゼロ..『装甲展開』

両手、両足に装着している手甲の一部が開いた

ゼロ..『魔力集束、及び圧縮開始』

翔の手、脚に周囲から魔力が集まり、圧縮された

スバル…「ティア、アレって・・・」

ティアナ…「集束魔法。・・・兄さん、アレをやる気なんだ」

離れた場所から見ていたスバル達は、翔の行動に驚いていた

エリオ…「アレってなんですか？」

ティアナ…「集束魔法は本来、砲撃に使う技法なんですけど、兄さんはそれを更に圧縮して、手、脚に纏わせて放つ。私が知ってる中でも、最強の拳技よ」

翔…「行くぜ、血祭りの武レドラン！」

翔は瞬動で武レドランの頭上に移動し

翔…「飛龍！！」

飛び回し蹴りを放った

武レドラン…「ぬうつ！」

翔の飛び回し蹴りを血祭りの武レドランは大剣を盾に使い、防いだ
だが、少し後ろに飛ばされてしまった

武レドラン…「（防御したのにこの威力、まともに受けられまず

い)」

翔…「考え事をしている余裕があるのか!!」

翔は武レドランの懐に入り

翔…「双龍掌!!」

掌底を腹に攻撃し、更に内部に魔力を打ち込んだ

武レドラン…「があっ!!」

魔力を打ち込まれたことにより、武レドランの呼吸を乱れた

翔…「(今だ!ゼロ、両足の魔力を右拳に集中、更に電熱変換!)

」

ゼロ…「(了解)」

翔は脚に纏っていた魔力を全て右拳に集中させ、更にその魔力を
炎熱と電気に変換した

翔…「一閃必墜!紅蓮爆雷拳!!」

炎と雷が混ざった魔力の拳が血祭りの武レドランに当たり、更に
翔の魔力が武レドランを撃ち抜いた

翔…「これが俺の、アブソリュートブレイクフィストだ」

翔は背を武レドランに見せ、そう呟いた

武レドラン…「はあ、はあ、はあ、かはっ!!」

武レドランは膝をついてあら呼吸をした

翔…「とっさに剣で防いだか。だが、これで終わりだ」

翔は再び魔力を集束させ、拳に纏わせた。その時、森から何かが飛んできた

翔…「はあっ!」

翔は飛んできた何かに拳を放ち、破壊すると、目の前にいた血祭りの武レドランが消えていた。辺りを見回し、探すと、少し離れた場所に血祭りの武レドランともう一人、体が機械で出来た怪物がいた

翔…「……お前は」

ブレドRAN…「私はブレドRAN。これ以上、自分自身を失うわけにはいかない。此处は引かせてもらう。また、会おう。紅き闘神よ」

そう言うと、ブレドRANは血祭りの武レドランを連れて、その場から消えた

翔…「……………っち、仕留めそこなったか。でも、あのダメー
ジじゃ暫くは動けないだろう」

翔はその場を離れ、ティアナ達の所に向かった

森の奥

翔と血祭りの武レドランの戦いを見ていたジェイルは大いに興奮していた

ジェイル…「素晴らしい、本来、集束魔法は砲撃専用だったが、あんな使い方をした人は始めて見た。うーん、彼の体を調査してみたい」

トーレ…「落ち着いてください、ドクター」

ジェイル…「私は落ち着いているよ、トーレ。それにしても、彼があの時、君、チンク、クアットロと戦った少年か。久しぶりにみた感想はどうだい？」

トーレ…「あの時より確実に強くなってますね。正直、勝てる気がしません」

ジェイル…「そうか。……さて、彼と対面と行こうじゃないか」

ジェイルは翔と話をするために、翔達の所に向かった

第56話 STS編「ホテルアグスタ3」

翔 side

血祭りの武レドランとの戦闘後、俺達はなのは達と合流して、現場検証を行っている

翔..「久しぶりだな、ユーノ。元気そうで安心したぜ」

ユーノ..「まあ、あのハラ黒艦長の支援要請が無ければもっと元気なんだけどね」

今、俺は久しぶりにユーノと話をしている

翔..「ははは」

俺は苦笑いをした

ユーノ..「そう言う翔は忙しそうだね。噂は聞いてるよ、ファイヤースクワットで大活躍してるんだって？」

翔..「それでもねえよ、先輩達に比べれば俺なんてひよっこもいいところだ」

ユーノ…「そうかな？翔の戦闘能力と判断力はかなりの物だと思うよ。今日、久しぶりに翔の戦闘を見て改めてそう思ったし。だけど、あの腕の装甲変わってるね」

翔…「あれか、あれは魔力を解放するときと集束をするときに装甲の一部がスライドするのは、俺の体にかかる負担を軽くするためなんだよ。魔力を解放するにしろ、集束するにせよ、体に負担がかかるからな、それを無くすために、余分な魔力を外に出す仕組みなんだよ」

ユーノ…「へ」

翔…「それより、ゼロ。テクターの修理は可能か？」

俺はゼロに聞いた

ゼロ…『無理だな。あれを修理するために必要な材料はアレを作るために使ってるからな』

翔…「そう言えばそうだったな。……じゃあ、壊れたテクターをアレの装甲強化に使うか。二つのプレシヤスの装甲なら簡単には壊れないからな」

ゼロ…『それが一番だな』

ユーノ…「何の話？」

翔…「ああ？新しい……」

「スクライア先生」

俺がユーノに言おうとしたとき、一人の女性が俺達の所に来た

ユーノ…「ドゥーエさん」

翔…「うん？知り合いなのか？」

ユーノ…「うん、地上本部で働いてる人で、よく書庫の方にくるんだ」

ドゥーエ…「初めまして、ドゥーエ・リヒニティです」

翔…「椎名翔だ、所属はファイヤースクワットだが、今は六課に出張中だ」

ドゥーエ…「よろしくお願いします。それより、ユーノさんそろそろ戻らないと」

ユーノ…「そうだね。じゃあ、翔またね」

翔…「ああ。今度無限書庫に行くからな、その時また話そうぜ」

俺とユーノは握手をし、ユーノはドゥーエさんと一緒に戻って行った。その時

ドゥーエ…「第3駐車場であなたと話したい人がいます。行ってくれませんか？」

ドゥーエさんが俺に小声で言った
二人が遠くに行ったのを確認すると、俺は第3駐車場に向かった

翔…「……ここか。どこにいる？出てこい」

俺が叫ぶと、結界が張られた

翔…「結界？罨だったのか！」

「嫌、罨ではないよ。君と話するのに邪魔されたくないから、結界を張らせてもらっただけだよ」

すると、近くの柱から、白衣を着た男とショートカットの女性が出てきた

翔…「お前は、ジェイル・スカリエッティ！？」

ジェイル…「初めまして、椎名翔。私の名前を知っているとは光栄だね」

翔…「次元犯罪者の名前を忘れる奴はファイヤースクワットにはいねえよ」

ジェイル…「成程」

翔…「それで、俺に何の用だ？」

ジェイル…「何、君に少し興味が湧いてね。他の次元犯罪者は直ぐに捕まえたのに、何故私の事は直ぐに捕まえないのか、それを聞きたくてね」

翔..「そのことか。ならひとつ聞く、お前本当に犯罪者なのか？」

ジェイル..「どういことだい？」

翔..「俺達は犯人を捕まえるのに、まず犯人の犯罪歴を調べ、それから逮捕にかかる。だが、お前の犯罪歴には不明な点が多くてな」

ジェイル..「不明な点？」

翔..「プロジェクトFの発案、戦闘機人の発案は確実にお前がやったことだろう。だが、他の犯罪については、書類を調べた所、改ざんされた形跡があった、上層部のな」

ジェイル..「.....」

翔..「だから、俺達ファイヤースクワットは真実を知るまで、お前の逮捕を伸ばしてるのさ。...それに一つ解ったこともあったしな」

ジェイル..「解ったこと？」

俺はスカリエッティの隣にいる女性を見て言った

翔..「8年前、ゼスト隊を壊滅させたのが、お前等だってことがな」

ジェイル..「8年前.....、ああ、あの時か。あの時は本当にすまないと思っている。私も気が乗らなかったのだが、上層部の命令でね。娘が人質に取られたから、聞く以外方法が無かったんだ

よ」

翔..「娘？」

俺は首を傾げた

ジェイル..「私の隣にいる子を含めて私には12人の娘がいるんだ。彼女たちは孤児でね、更に体が弱く、病気になりやすい体質だったんだ。・・・私はそんな彼女たちを引き取り、病気を治すために機人化させてしまった」

翔..「・・・・・・・・（どう思う、ゼロ？）」

ゼロ..『（嘘を言ってはいない。俺に装備されているうそ発見器に反応が無いからな）』

俺はSPDライセンスを取り出し、スカリエッティがやったと思われる犯罪のデータを表示させた

翔..「もう一度聞く。ジェイル・スカリエッティ、お前はこれをやってはいないんだな」

ジェイル..「ああ」

スカリエッティは真剣な目で俺を見た

翔..「そうか」

俺はデータを戻し、ボスに連絡を取った

翔…「ボス、俺です。スカリエッティと接触し、データを見せ確認を取りました。奴はプロジェクトF、戦闘機人のこと以外はやっていないそうです」

勇…『そうか。やはり、上層部の奴らか』

翔…「ええ。それで、スカリエッティの処罰はどうしますか？」

勇…『それについての問題はすでに3提督に話してある。そして、裏付けが取れたからな、スカリエッティには本日付を持って、ファイヤースクワット専属の技術顧問になってもらう。一年はお前達と同じで六課に出張してもらおう』

翔…「ロジャー」

俺はボスとの通信を切った

翔…「聞いての通りだ。お前は今日から俺達ファイヤースクワットの仲間だ」

ジェイル…「い、いいのかい？私は罪を・・・」

翔…「それを言うなら、俺達は全員が罪びとだ。俺達は生きる為に生き物の命を奪っている。お前はそれに一つの罪が加わったに過ぎない。それと、安心しろ。俺達ファイヤースクワットは絶対にお前を一人にさせない。仲間だからな」

俺がそう言うと、スカリエッティは膝を突き、涙を流した。その後、ジェイルをなのはたちの所に連れて行った。案の定、捕まえよ

うとしたが、事情を説明し、納得させた。フェイトに関しては納得していなかったが。後で・・・で許してくれと言い、納得させた

ジェイル・・・「素晴らしい!!」

ジェイルがどこぞの会長のように雄叫びを上げている。まあ、俺の別荘を見ればそう思うか

ジェイル・・・「翔、此処は非常に素晴らしいよ! 僕が今まで見たことの無いものがいっぱいだ!! ガジェットとは違うロボ! 喋る車、戦闘機! 空に浮かぶ島! 全てが素晴らしい!! 分解してもいいかい!!」

翔・・・「誰がさせるか!!」

俺はハリセンでジェイルの頭を叩いた

翔・・・「まったく」

ジェイル・・・「ほ、本気で叩かなくてもいいじゃないか。うん? 翔、これは何だい?」

ジェイルはデバイスルームにある、一振りの刀と手甲、そして他の設計図を見て聞いた

翔・・・「第5世代のデバイスだ。AMF等の魔力を無効化するシステムに対応するためのデバイスだ。もう少しで完成する」

ジェイル・・・「・・・・これは凄い。このシステムならAMFは効かないね」

ジェイルは設計図を見て言った

翔..「まだ、試験機だけだな。その刀と手甲は俺専用調整している。後は完成させて、データを取り完璧に仕上げるだけだ」

ジェイル..「少し、データを見てもいいかい？」

翔..「構わないぜ。でも、その刀と手甲はいじるなよ」

ジェイル..「解ってるよ」

そう言い、俺はデバイスルームから出て、寝室に向かった。俺が中に入ると

はやて..「遅いで、翔君」

なのは..「そうだよ」

フェイト..「うううう」

フェイト以外なのはとはやてがいた

翔..「なんでお前等がいるんだ？」

はやて..「向け崖はゆるさへんで!!」

なのは..「そうなの!」

フェイト..「ごめん、翔。二人に言っちゃった」

翔..「.....はあ」

俺はため息をついた

翔..「二人とも解ってるのか、これからすること？」

はやて..「勿論!!」

なのは..「その.....は翔君って決めていたから」

翔..「.....（明日は絶対に腰痛だな）」

俺はドアを閉めて、3人をおいしく頂いた

第57話

翔 side

翔..「まったく、此奴らは限度ってもんしらねえのかね？」

現在ベッドには生まれた状態のなのは、フェイト、はやてが幸せそうに寝ている。俺は3人に布団をかぶせ、シャワーを浴びて着替えると、デバイスルームに向かった

翔..「.....何だこれは？」

俺がデバイスルームに入ると、大量のリポビタミンDが机の上にあ
り、ジェイルが簡易ベッドで寝ていた

翔..「こいつ、どんだけ遅くまでデータを見ていたんだ？」

俺はジェイルを見ながらそう呟いた

翔..「.....片付けはジェイル自身にやらせますか。さて、気
を取り直してこの二つを仕上げるか」

俺はパソコンの電源を入れ、新世代型デバイスの作業に取り掛か
った

翔..「.....出来た」

作業の80%はすでに終わっていたので約1時間半で完成した

翔..「後は、これをゼロにインストールしてっと...終了！ゼロ、後は頼む」

ゼロ..『解った、剣の基本モードを変更...完了。手甲の配置...完了。全システム以上無し、...終わったぞ』

翔..「ご苦労さん。さっそく、データを取るか」

ゼロ..『模擬戦の相手は誰にするんだ？』

翔..「シグナムが丁度いいんじゃない？」

俺がゼロと会話をしていると

フェイト..「その模擬戦相手は私に任せてくれない？」

翔..「うん？フェイト、起きたのか？」

いつの間にかフェイトがデバイスルームに来ていた

フェイト..「ついさっきね。それより、答えを聞かせてよ」

翔..「そう言えば、最近フェイトと模擬戦してないもんな。...
...いいだろう、正しソニックフォームは禁止な、目のやり場に困る」

フェイト..「?...っ！わ、解った／／／」

フェイトは首を傾げたが、自分の恰好を理解し了承した

翔 s i d e e n d

3人称 s i d e

舞台は変わり、現在六課の訓練所前

シグナム…「椎名と久しぶりに剣を交えたかったのに・・・」

ヴィータ…「バトルマニアめ」

シグナムの発言に呆れるヴィータ

まい…「それにしても、完成したんだあれ」

星華…「随分と時間が掛かりましたがね」

雷華…「どんなのになったんだろう」

空…「まあ、翔の作るものだから性能はいいはずだな」

まい達はすでに知っていたのであまり驚いていない。まあ、雷華は目を輝かせているが

ジェイル..「ふっ、ふっ、ふっ、データは全て取らせてもらうよ翔」

シャーリー..「新世代のデバイス・・・早く解析してみたいです」

ジェイル..「・・・君とは気が合いそうだ」

シャーリー..「そうですね」

ジェイルとシャーリーはがっちりと握手をした

はやて..「なあ、あの二人が怖いと思うんは私だけかな？」

なのは..「大丈夫だよ、はやてちゃん。私達もだから」

なのはの言葉にFW達が頷いた

訓練スペース

翔..「じゃあ、始めるか」

フェイト..「うん」

翔..「ゼロ」

フェイト..「バルディッシュ」

翔・フェイト…「セットアップ！」

翔とフェイトは同時にデバイスを起動させた

翔のバリアジャケットはアクセルテクターが無くなったことで大きく変わった

現在、翔が来ている服はゴッドイーターで出てくるF制式上衣と下衣のレッド正し後ろのマークは仮面ライダー龍騎に出てくる龍のマーク。両腕、両足にはスパロボのアレディが着けている轟魔。両手にはForceでスバルが左手に付けている『ソードブレイカー』改め『ゼロブレイカー』ただし性能は攻撃、防御等を上げる万能型、色は赤

フェイト…「服、変わったね。それに装備も」

翔…「テクターが壊れちゃったからな。ゼロも片手で触れるようにした」

現在のゼロの形状はGNソード？であり、刀身の色は赤。コアは柄の上（青い装甲がある所に埋め込まれており特殊なクリアパーツで外側を覆っている）

フェイト…「その刀身は魔力なの？」

翔…「いや、金属で出来てる。刀身にはAMF等を無力化するための措置が施してある。色はまあ、気分」

翔の言葉を聞いてフェイトがこけた

フェイト…「き、気分で決めたんだ」

翔…「まあ、とにかく始めようぜ」

フェイト…「うん」

翔とフェイトはそれぞれの獲物を構えた。そして、ビルの破片が落ちたのを合図に模擬戦を開始した

フェイト…「はあああああっ！」

フェイトはバルディッシュをハーケンモードにし、翔に斬り掛かっていた

翔…「よっ、はっ、ほいっ」と

一方翔は、ゼロでフェイトとの攻撃を防いでいた。フェイトは一旦、翔との距離を取った

フェイト…「（何で翔は攻めてこないんだろう？）」

フェイトは翔が攻めてこないことに疑問を感じていた

翔…「……………」

すると、翔は届きもしないのに剣を数回振った

翔…「……そろそろ行くぜ、フェイト」

フェイト…「え？」

フェイトが声を上げた瞬間、翔はフェイトの懐に入った

翔…「はあっ！！」

そして、剣を横に振り攻撃した

BD…『p r o t e c t i o n』

咄嗟にバルディッシュが障壁を張り、フェイトを守った。フェイトは急いで翔との距離を取った

フェイト…「ありがとう、バルディッシュ」

BD…『n o p r o b l e m』

翔…「よそ見はいけないぜ？」

翔はいつの間にかフェイトの後ろの移動しており、剣を振り降ろした

BD…『S o n i c m o v e』

フェイトはソニックムーブを使い、翔との距離を取った

フェイト…「はあ、はあ、ふー、危なかった」

翔…「奇襲は失敗か。まあ、声を掛けた時点で奇襲じゃねえな」

フェイト…「・・・どうして、攻めてこなかったの？」

フェイトが翔に聞いた

翔…「何、ゼロの微調整をしてたのさ。それが終わるまでは防御に徹していたそれだけさ」

戦闘中に微調整ってお前はキラ・ヤマトか！？by作者

翔…「うん？今、変な声が聞こえたような？」

フェイト…「はああああ」

翔が気を許していた時、フェイトはバルディッシュをザンバーに変え、翔に斬り掛かった

翔…「おっと」

翔は左手の手甲『ゼロブレイカー』で防いだ

フェイト…「つく。か、硬い」

翔…「まあ、そう言う風に作ったからな。っふん！」

翔は腕を振り、フェイトを弾き飛ばした

フアイト…「プラズマランサー・・・ファイア!!」

弾き飛ばされたフエイトは直ぐに体勢を立てなおすと、魔力弾を複数形成し、翔に放った

翔…「はあっ！」

翔はそれを、剣で全て叩きおとし、居合の構えを取ろうとしたが

フエイト…「トライデント・スマッシャー!!」

それよりも早く、フエイトは翔に雷の砲撃を放った

翔…「はあああああ・・・」

翔は直ぐに左手に魔力を集中させ

翔…「咆哮弾!!」

虎の形をした魔力弾を放ち、フエイトの砲撃を防ぎ、相殺した

翔…「おおおお」

フエイト…「はああああ」

翔と、フエイトは高速で移動しながら剣と魔力刃を何度もぶつけさせた

翔…「（そろそろ決着をつけるか）」

翔はフェイトと距離を取り

翔…「マジ・ゴル・ジー・マジカ!!」

呪文を唱えた

フェイト…「バルディツシュ」

BD…『Yes Sir』

フェイト…「撃ち抜け雷神!!」

BD…『Jet Zamber』

フェイトは魔力刃を伸ばし、翔に放った

翔…「2連・ブレイジングストームスラッシュ!!」

翔は最初の一太刀でフェイトの魔力刃を砕き、そして二太刀目でフェイトを攻撃した

フェイト…「つく!・・・きゃああああああ」

フェイトはシールドで防御したが、防ぎきれず炎の一太刀を喰らってしまった

翔…「おっと」

翔は直ぐにフェイトに近づき、フェイトを受け止めた

翔…「悪い少し力加減を間違えた。怪我してねえか？」

フェイト…「う、うん。大丈夫だよ」

翔…「そうか。それにしても、随分と強くなったなフェイト、驚いたぞ。速さにも磨きがかかったしな。まあ、一撃の威力が低いのは相変わらずだが」

フェイト…「っう」

翔…「さて、ルームに戻って取ったデータを見るとしますか」

そう言いながら、翔はフェイトを抱えたまま、なのは達の所に戻った。着いたとき、ジェイルとシャーリーがいないのでどこに行ったのかと聞いたら『早速解析を始めよう』っと言い、六課に入って行ったそうだ

第58話

翔 side

フェイトとの模擬戦が終わった後、俺は別荘に戻って稼働データを眺めていた

翔..「稼働率56%、物理エネルギー変換率は46%か」

ゼロ..『予想以上だな』

翔..「ああ。これぐらいなら微調整だけで済みそうだ」

俺とゼロが話をしていると

ティ..「兄さん」

ティアナが整備室に入ってきた

翔..「ティアナ、どうした？」

ティ..「クロスミラージュの調整をお願いしてもいい？」

翔..「構わないが、調子が悪いのか？」

ティ..「ちょっと」

翔…「ふむ・・・、ティアナ、調整のついでにクロスミラージュについてるリミッターを解除してもいいか？」

ティ…「リミッターついていたんだ」

ティアナが驚いていた

翔…「リミッターって言っても、形態の一つを封印してただけさ」

俺はそう言い、パネルを操作してクロスミラージュのリミッターを解除し、ティアナに渡した

翔…「起動して、バスターモードって言うてみる」

ティ…「う、うん」

ティアナはクロスミラージュを起動し『バスターモード』と言った。すると、左手に持っている銃の後部が変化し、何かを入れるスペースが出来た

ティ…「兄さん、これは？」

翔…「その部分に右手の銃を入れ、グリップが水平になるようにしてみる」

ティ…「う、うん」

ティアナは俺の指示に従い、右手の銃を入れ、グリップを曲げた

翔…「それが、封印していたモード『バスターモード』だ。二つの銃に内蔵されている機関を連結させることにより、魔力の集束、形成を普段の倍にあげてくれる。更に使用者の力量が高ければ、砲撃をノーチャージで撃てる」

ティ…「兄さんは頭がどうなってるのか知りたい」

翔…「至って普通なんだがな」

ティ…「そう言えば、聞きたいことがあったんだ。兄さんやまいさん、星華さん、雷華さん、空、私のデバイスにはAMFを無効化する能力があるって言ってたけど、どういう原理で無効化してるの？」

翔…「ああ、そのことか。・・・正確には無効化してるって訳じゃないんだよ。俺達のデバイスには魔力を物理エネルギーに変換するシステムを搭載してるんだ。一応リミッターをつけてるから、違法魔道士に向けて使っても問題は無い」

ティ…「ふうん」

そう言うのと、ティアナは画面に映っていたものに気が付いた

ティ…「兄さん、これは何？」

翔…「これか？これはゼロの砲撃形態だ。まだ、完成してないけどな」

ティ…「……見た目からして、凄そう」

翔…「(凄いんだけどな実際)」

そんな話をしていると、

ス…「ティア」

スバルが整備室に入ってきた

ティ…「スバル、あんたどうやって此处に入ったの？」

ス…「普通に入ったよ」

翔…「ふぁゝ、俺は眠いから部屋に戻るわ。二人はゆっくりして
いけよ」

そう言い、俺は整備室を出て、寝室に行くと、速攻で寝た

それから暫くして

「スバル、あんた本当にやるの？」

「ティア、こんなチャンス滅多にないんだよ？ならやるべきでしょ」

翔..「うるせえな」

目が覚めてしまい、俺は起き上がった

翔..「俺の睡眠を妨げるのは誰.....」

俺は最後まで言えなかった。何故なら、目の前には下着姿のスバルとティアナがいたからである

翔..「.....何をやってるんだ、お前等は？」

ス・ティ..「え」と、夜這い？」

スバルとティアナは同時にそう言った

翔..「取りあえず、服を着ろ」

ス..「やだ」

ティ..「いやです」

そう言い、二人は俺を押し倒した

翔..「お前等、これがどういう意味か解ってるのか？」

ス・ティ..「勿論」

翔..「つか、お前等はまだ18歳になってねえだろうが、こういうのは18歳になってから.....」

ス・ティ…「そんなの関係ない！」

つと、言い、二人は俺を喰らった。まあ、途中から俺が喰らってたけどな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7684u/>

魔法少女リリカルなのは一戦士の魂を受け継ぐ者一

2011年11月24日08時50分発行